

投映法の心理療法的バッテリーに関する研究

ーロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の統合的活用ー

高橋 昇

[目次]

第1章 臨床心理アセスメントと心理療法ー本研究の問題と目的	4
1. はじめに	4
2. 投映法のテストバッテリー	5
3. ロールシャッハ法と風景構成法の心理療法的活用	7
4. 目的	10
第2章 ロールシャッハ法についての工夫ー思考・言語カテゴリーの発展的活用	13
1. 解離性障害者へのアプローチ	13
1) 解離とロールシャッハ法	13
2) 思考・言語カテゴリーによる接近	15
2. 境界性パーソナリティー障害者へのアプローチ	24
1) 境界性パーソナリティー障害と思考・言語カテゴリー	24
2) 事例の呈示	25
3) 4事例のロールシャッハ反応の全体的特徴	26
4) 思考・言語カテゴリーにおける特徴	26
5) 事例による個別的検討	30
6) 総括	30
3. 境界性パーソナリティー障害者への臨床的適用	33
1) 事例の呈示	33
2) 面接経過	34
3) ロールシャッハ法による分析	36
4) 考察	43
第3章 風景構成法の実践的活用ー「穴」のある風景構成法(LMT-Hole)の創案	45
1. 「穴」のある風景構成法創案のきっかけ	45
2. 「穴」に内包されるもの	46
3. 「穴」のある風景構成法の創案と試行	49
1) 健常群への施行	50
2) 臨床群への施行	53

4. 表現された「穴」Item の意義	55
1) 想像性の刺激	55
2) 無意識への通路	56
3) 保護的空間	57
4) 上下方向へのベクトル	57
5) 穴の大きさ	57
6) 葛藤の存在	58
7) 穴が描けない場合	58
5. まとめ	58
第4章 「穴」のある風景構成法からの心理療法的理解	60
1. 遮断された過去への理解	60
1) 事例の概要	60
2) 面接経過	64
3) 心理療法の経過と LMT-Hole	67
2. 内的世界への期待と探索意欲	70
1) 事例の概要	70
2) 面接経過	71
3) LMT-Hole の概要	74
4) 「穴」描写の変化	78
3. 複数の描画法実施と「穴」の是非	82
1) 事例の概要	82
2) 面接経過	83
3) 心理療法の経過から	89
4) 描画によるバッテリーの意味	90
5) 「穴」を付加すること、しないことの意義	92
第5章 ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の バッテリーに関する臨床的適用	94
1. 経時的視点とテストバッテリー	94
1) 事例の概要	94
2) 面接経過	95
3) 考察	107
2. 両技法の連関と心の物語	113
1) 事例の概要	113

2) 面接経過と投映法	114
3) 考察	119
3. 変化の乏しい事例をめぐるバッテリーの在り方	132
1) 事例の概要	132
2) 面接経過と描画	133
3) 描画の変化と常同性	140
4) ロ・法と描画法のバッテリー	143
第6章 心理療法的バッテリーの総合的検討	150
1. 心理療法的バッテリーの意義	150
1) かかわりのためのアセスメント	150
2) 経時的なアセスメント	150
3) セラピストの逆転移と工夫	151
2. ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の導入	153
1) 導入の時と場合	153
2) 両技法の導入	154
3. ロ・法と LMT-Hole の関連と相補性	155
1) 刺激特徴の相違	155
2) 対称性と相補性	157
第7章 総括と今後の課題	162
1. 総括	162
2. 今後の課題	164
文献	167
付記	179

第1章 心理アセスメントと心理療法—本研究の問題と目的

1. はじめに

ロールシャッハ法（以下ロ・法と略）は Rorschach が編み出した優れた心理検査法であることはいうまでもない。現在に至っても自然科学的な観点からは数々の疑義が唱えられつつ、しかし臨床的な道具として有益であるとの実感がある以上、そして他にそれに匹敵するような心理検査がない以上、私たち心理臨床家は好んで使用したくなる。単に認知機能の検査にとどまらず、人間の奥底にある闇を照らし、この人がなぜその人であるのかという哲学的な問いを立ててしまうような力に魅了されてしまうところがこの技法にはある。そしてまた、ロ・法によって照らし出されたクライアントの姿は、心理臨床家が心理的な援助をしていく上で役に立つと感じられるのである。

原点に立ち返ってみると、ロ・法などの投映法は私たち心理臨床家が持っている数少ない武器の一つである。私たちは医師のように薬剤を処方することもできないし、看護師のように処置もせず、PSW のように具体的な活動をすることも少ない。病院とクリニックで働き、自分の立場を正々堂々とアピールすることはなかなか難しいことが多いという場に筆者は長年所属していた。それゆえに自分の主張を述べられる武器はとても貴重である。心理療法の実践は周囲に支えられなければ成り立たないことが多い。クライアントとの間で心理療法をやっている、主治医が止めてくれと言われればすぐにそれは終わりを告げることもある。いろいろな状況で周囲の場は有形無形の影響を与えるものである。現場では数多くの問題が起こっており、そこでは心理アセスメントが重要な武器として機能することがあることは間違いない。

筆者が以前勤務していた心療内科のクリニックに、他の病院から紹介されてきた1人のクライアントの紹介状にロ・法の所見がつけられていたことがある。主治医はその所見がありがたいので、紹介してきた病院からローデータを取り寄せて筆者に解釈をしてほしいと依頼された。心理療法も同時に依頼されたが、心理検査の結果から治療方針までの一連の流れにおいて、筆者の意見を重んじてもらえたのは当然のことであった。それゆえに、有効な武器を有効に使用することが心理臨床家として生き残るための一助となる。これは実践的な現場での考え方であって、アカデミックとはいえないが、そのような実践的立場からの研究はクライアントからみれば非常に重要である。クライアントは常に実践の場に存在するのであり、研究対象としてあるのではないからである。

今までの多種の心理検査法は、あらかじめ対象者の内側にあるものが決定されていると考えて、それをいかに引き出すか、どのように明確に分類するかについて腐心してきた。これがエヴィデンスの問題である。決定された一定のものが確定的に存在するという確信がなければ、それは意味がない。心にももちろんそのような側面があるだろう。しかしそれだけですべてというのはいかにも浅薄である。どの生物にもあるような単純な行動パターンから、高度な思考や、内的な世界が多層的に我々の脳裏に広がっているのは誰しも認めるところであろう。しかし、それが常に同じ状態で存在し、同じように表れるわけではない。心が一定の測定サイズからはみ出すということが、ナラティブな心理療法に繋がっ

ている部分があると考えられる。心理検査に内面がいかに関与されるかは検査者と対象者の関係によるところも大きい。

投映法の中でも、描画による心理検査はもう少し柔軟に考えられている。なぜならば、描画は心理検査としての発展と共に、絵画療法的側面からの歴史があるからである(Rubin, 2001)。描画を治療に導入したのは Jung が最初であるといわれるが、芸術的な活動は人の心を癒し、心を活性化させる働きがあることは疑いがない。

近年では心理療法に対する需要は増加するばかりであり、学校での不登校やいじめなど、問題を抱えた生徒の増加から取り入れられたスクールカウンセラー制度は定着し、それは一般にも知られるようになった。背景には家庭環境の問題を抱える子どもも多くみられ、児童虐待のケースはうなぎ上りで一筋縄ではいかないことも多々ある。また経済情勢の悪さは勤労者を圧迫し、リストラと雇用情勢の悪さ、勤務条件の悪化などうつ病や自殺を引き起す要因となっている。

政治、経済、社会情勢の混乱は直近の東北大震災を加えて、日本の枠組全体をも揺さぶっている。最近相次ぐ天災の数々もそれらに対する警鐘かと思われるほどである。それらの被害者が出ると「心のケア」が叫ばれるようになり、カウンセリングや臨床心理士の記事が新聞を飾るものの、とても暗い気持ちで紙面を眺めるのは筆者1人ではなかろう。東北大震災の支援もどこで収束するのか、まだ先が見えない状況である。

これらの問題に対するまことに密やかでつつましい支持を申し出るのが心理臨床家の役目であり、仕事でもある。マスコミから生じる宣伝効果もあるのか、最近ではクライアントが自らカウンセリングを希望したり、家族や周囲の人から勧められたりして病院や心療内科のクリニックに受診されることも増えてきた。社会から期待される仕事としての責任も感じ、筆者は1人のカウンセラーとして、心理療法技法の熟練と洗練をより深く目指す必要があると思っている。

そして心の問題を抱えて受診するクライアントに症状の除去や問題の軽減を目的として心理療法的にかかわる際に、まず必要なのは臨床心理学的なアセスメントをすることであるが、心理療法と心理アセスメントとは一般臨床検査のように明確に分離されるものではないということが本論の出発点である。きちんとした病態の把握や人格の理解、見立てを持ち、先の見通しをある程度持てることが、クライアントをうまく抱えることや、解決は困難な道かもしれないが、その道を照らしてくれる縁となり、このことが心理療法的な価値を持っており、両者は密接不可分であると考えられるものである。

2. 投映法のテストバッテリー

心理アセスメントを行う場合に、テストバッテリーとしていくつかの種類の心理検査を組み合わせることは通常よく行われることである。心理テストにはそれぞれ測定する側面に相違があり、クライアントの全体像やあるいは目的とする人格像を描くのに何が適当かを検査者が判断しなくてはならない。質問紙法や知能検査なども他の検査とのバッテリーが問題となり有効でもあるが、心理療法とさまざまな関連を持って心の深層の理解にまで達するためには、圧倒的に投映法が有利である。臨床実践の中でも目的に合わせてさまざまな投映法が使用され、研修会などでもテストバッテリーの使用について事例を

元に議論されることは多い。しかし、意外にそれについての研究は少ない。

杉山（2007）は抑うつ心理臨床に向けて、ロ・法、TAT、SCT などの投映法と各種質問紙法の比較をし、それぞれの特徴と抑うつを判断するための利点や留意点を考察し、うつ心理臨床のテストバッテリーは「重症度を簡便でかなり確実に測定できる質問紙法の実施を確保した上で被検者の負担も考慮してパーソナリティ傾向や病理水順の所見が得られるロ・法、または対人関係への所見が得られる TAT などの投影法を組み合わせる」ことが効果的であると述べている。

一方で相違のあるものを比べるのではなく、似たものを比較した研究もある。加藤ら（2008）は大学生を対象として、共通した構造を持つコラージュ技法、風景構成法、ブロック技法の 3 技法の比較をし、体験過程を比較検討すると「子ども時代への回帰」、「創作意欲・満足感」において有意な差が認められたという。増井・上別府（2010）は「治療的検査」としてバウムテスト、HTP、家族画、風景構成法、スクリブルとスキグル、箱庭療法を挙げ、その特徴と使用法について概説している。

積極的に描画をテストバッテリーとして用いているのが、杉浦・金丸（2012）であり、星と波描画テスト（SWT）、ワルテック描画テスト（WZT）、バウムテスト（BAUM）の 3 つを使い、この組み合わせが心理療法的に効果があるとした Av'e-Lallemant に基づく「投映描画法テストバッテリー」を紹介している。

ロ・法を対象としたものでは、佐々木（2009）のロ・法とハンドテストのバッテリーについての研究がある。ロ・法とハンドテストは共に投映法であるが、「投影次元」という概念を提起し、ここで「体験調整次元」を反映するロ・法と「現実適応次元」を反映するハンドテストは相性の良いテストバッテリーであり、治療効果を有効にアセスメントできるとしたものである。ロ・法はかならずしも治療効果のみを反映するものではないということに着目している研究であり、投映法に反映されるものについての提起が興味深い。

技法そのものを扱っている研究としては、弘田ら（1990）のロ・法と風景構成法を比較しているものがある。これは大学生を対象としてロ・法と風景構成法を実施し、両者に対応があるのは「領域」では dr、「決定因」では M、「反応内容」では H %、Front View（正面を向いた顔）、cloth（衣服、装飾）、その他 RC（カード回転）、organization disharmony などであり、この対応関係は「予想したよりも少ない」と述べている。彼らは最初に「ロ・法と風景構成法で測られる自我機能は違う性質」のものであり「表現されるものが、その根とする体験領域が異なっている」かもしれないと述べている。

臨床事例におけるロ・法と風景構成法の関連を扱ったものでは高桑（2005）の研究がある。風景構成法で「羅列型」の構成を示した者がロ・法では内的生産性の低さ、心的エネルギーの低さ、組織化活動の乏しさを示すが、妄想型統合失調症者の事例においてもみられる可能性があるというものである。池畑（2001）の研究もロ・法と風景構成法の関係を考えようとするものであり、基礎的な研究である。

馬場（1984）は境界例について構造が明確な検査とあいまいな検査では非常に違った結果を示すとして、SCT とロ・法をテストバッテリーとして組むことが彼らを理解する良い方法であると述べている。近年では発達障害を抱えるクライアントが増加するに伴って、彼らを理解する上で知能検査を土台として投映法などを組み合わせることも考えられているよう。いずれにしてもテストバッテリーがどのように組み合わせられ、どのようなクライエ

ントにどのように有効なのか、そしてそれらはどのような関係にあるのかについて言及している研究は少ない。数々の研修会などではテストバッテリーを組んで実施した事例について検討されるが、それは事例をより深く知るためのものであり、実践の中で検討されてきたのであろう。筆者はさまざまな病態水準のクライアントに対するテストバッテリーは、まだ考慮の余地があると考えている。加えて、テストバッテリーというのはクライアントの横断的な切り口で、多面的に把握するのが目的であると考えられる。ある時点でのクライアントのあり方を多面的にとらえ、一つの検査ではみえてこないありさまを理解するのである。だが、人間はその時々で一定の恒常性を保ちながらも常に変化する存在であり、「動的平衡」(福岡, 2009)を保って、外面は変わらないように見えながらも中身は同一性を保ちながら変転し続けている。ここでは動きと動きに要する“時間”という軸が必要であり、変わらない変化の上に変わる変化が重ねられるのである。クライアントも時間軸に沿って変化する存在であり、心理療法自体が時間軸に沿って変わる変化を背負っていく。テストバッテリーも縦断的な視点を意識しながら、これに沿って行くのが自然であろう。そこでは心理検査自体が心理療法やセラピストとの転移関係に影響されるので、純粋なアセスメントとはいいいくくなる面が生じてくるので、むしろそれも抱え込んで心理療法の中で生かしていくということもあり得る。

加えて、従来心理検査自体は必ずしも心理療法と一体化しているものではなく、医師などからの依頼によって診断や予後判定のために行われたり、治療の進展を測ったり、社会復帰や退院などの目安にしたり、あるいは年金受給の判定のためなど、さまざまな用途で使用されている。より心理療法に寄り添ったあり方を探っていくことが必要であると考えられる。

3. ロールシャッハ法と風景構成法の心理療法的活用

ロ・法は 1921 年に Rorschach が発表してから世界各地に広まり、現在でも認知的側面、人格や精神病理の理解、治療の予後の予測、あるいは心理療法の効果測定などの面で活躍している。馬場(1984)ら精神分析的立場の研究者は検査者－対象者関係が検査に影響するとし、心理療法での転移、逆転移に影響を与えるので心理検査と心理療法は別の担当者にすべきであるという立場をとっている。一方では秋谷(1984, 1988)は Menninger を引用して、ロ・法を行うこと自体がすでに治療であり心理療法の第一歩であるといい、相対する見解を述べている。

その視点からの研究は多くはないが、ロ・法の使用について、河合(1969)は人の意見を受けつけなかったクライアントがロールシャッハ反応から自分の性格について内省的に述べた事例があったと報告し、ロ・法が治療的に使用できる可能性を示している。村瀬(1970)は心理療法を継続していたクライアントがロールシャッハ反応を自ら解釈した事例を挙げ、その解釈は十分な実感を伴った自己の体験に密着したもので、本人の内容に生き生きと関係づけられており、独自の妥当性を持つとしている。つまりロ・法によって自己洞察の進展が進むことがあるということである。

井上(1984)は子どもを対象に、カードについて「どのように見えますか?」「どのように感じられますか?」と教示し、知覚の形象像よりもその人が体験した意味性、印象性を

浮き彫りにし、好きカード、嫌いカードについて詳しく聞くことで、対象者が自らの知覚過程に目を向け、自らの体験をたどり言語化していく過程になるとしている。そして引き続いてイメージカードの選択を行わせながら面接する方法を提唱している。松瀬(1990)もロ・法の実施が「クライアントが抱えている課題に直面させてゆく契機となった」と述べている。

Finn (2007) は Therapeutic Assessment という名称を用いて、ロ・法を夫婦合同で実施することでセラピーの役に立てたり、ロ・法ではなく、独自のカードを作成してその状況を TAT 的に語らせ、治療的に生かしていくなどの手法を用いている。投映法を積極的に治療手段として考えているといえる。家族へのロ・法の使い方として、高橋 (2012) はクライアントのみではなく、家族にもロ・法を個別に実施し、その後に合同で反応を出してもらう過程を通じて家族力動を理解し、その後の心理療法を展開していくコンセンサスロールシャッハの技法について考察している。

このようにロ・法は心理検査としての用い方のみではなく、心理療法的な使用を目指すものがある。中井 (1996) は、心理検査と治療について「両者を区別するものはむしろその場に臨む者同士の心構えや場の構造如何であろう」と述べており、厳密に区別できるものではないことが示唆されている。ロ・法はもともと検査刺激自体が曖昧なものであり、多様性を内包している。構造と実施法や解釈が決定されて動かせないものではなく、Rorschach の草案以来 90 年以上経た今でも、大きな可能性を秘めているといえる。

一方で、風景構成法 (以下 LMT と略) は中井 (1969) によって発案された我が国独自の描画法であり、もともとは河合隼雄がスイスから持ち込んだ箱庭療法にヒントを得て、箱庭に導入可能かどうかを診断するための検査的手法であった。しかしその技法が単に心理検査的側面のみでなく、心理療法的価値が高いことが知られるようになった。創案者の中井は、ロ・法があればほど発展したのは、創始者の Rorschach が夭逝したために後の者が自由に研究、発展させられたのではないかと述べ、自らはあまりその後論文を発表していない。だがその目論見が功を奏したのか、山中、皆藤をはじめ、多くの研究者によって実践、研究されて発展してきた。皆藤 (1994) は、LMT に関しての広範な研究を行い、基礎研究から心理療法の中での使用までまとめる中で LMT の臨床的価値を確認している。高石 (1996) は自我発達の観点から風景の構成型について考えており、構成についての発達の段階を検討している。佐々木 (2006) は LMT の研究を臨床的な研究と非臨床的な研究に分けて詳細に研究の外観を述べている。

この技法の特徴は、心理検査としての側面と治療技法としての側面を併せ持つことである。方法としては検査者、あるいはセラピストが A 4 版の画用紙にサインペンで枠取りをし、描き手、あるいはクライアントに川、山、田んぼ、道、家、木、人、花、動物、石、付け加えたいもの、の順で Item を描いてもらい、その後に色鉛筆かクレパスなどで彩色してもらう。さらに描かれた絵について両者で話し合うというものである。

課題画であるということで、他の描画テストと同じように統計的な調査や再テストしての変化を見ることを可能にし、バラエティーに富む Item と彩色はさまざまな自己表現を可能にして、他の描画テストの追従を許さないといえよう。そして箱庭療法がかなりの場所と費用を要し、対象者が子ども中心であるのに対して、LMT は費用もさほどかからずに簡単に使用することが可能であり、成人に使用しても違和感のないものであることが特

徴的である。そのために使用しやすいこと、Item や色彩などの情報量の多さは臨床的にも魅力的であると考えられる。

また、一般的に心理療法を行う場合、その経過は病態水準や目的、環境要因などに影響されるとはいえ、ある程度の期間にわたって継続されることが多い。最初に診断や見立てをしていても、心理療法の過程ではクライアントとの相互作用の中で転移、逆転移感情も働き、セラピストが迷ったりうまくいっていないと感じさせられることもままある。ロ・法は繰り返しの実施には向かないが、LMT は適度の再施行が可能なので、再検査のために用いることは有用であるが、真骨頂はやはりそれ自体が心理療法として機能することであり、この絵画を介してのやりとりが言語と非言語的なコミュニケーションの場を生成し、クライアントの心の変化や成長を促していく原動力となりうることで LMT の最大の利点であると考えられる。

そして、ロ・法と LMT は中井（1984）によれば「相互補完的」なものであり、ロ・法は「投影的」で、LMT は「構成的」な技法であるという。ロ・法は相似なものから相互排除的に一つを選ぶというものであり、記号学的にはパラディグマティック¹⁾な過程である。LMT は素白の空間より出発し、「構成の過程は対称性の相の下に『距離』を本質的要素のひとつとして相衣相待的に選択する」というシンタグマティック²⁾な過程であるという。投映はすぐれて過去を志向し、構成はすぐれて未来を指示する。これは車の両輪であり、これらの相違は、中井によれば妄想型と破瓜型の統合失調者の存在様式についての顕著な相違と関連を持っており、重要な視点を我々に投げかけるものである。さらに中井は統合失調症圏の科学者、Newton や Einstein は世界をシンタグマティックな相の下にみようとしており、Linné や Humbolt は世界をパラディグマティックなもの集合としてとらえようとしている躁うつ病圏の科学者であるという。この人間に対する見方は、Jung がパーソナリティの在り方を「外向性」と「内向性」に分け、外向性の Freud と内向性の Adler、あるいは Jung 自身がお互いに理解し合えないとしたような人間存在のベクトルの本質的な相違を思い起こさせるものがある。

しかし、実際には両者が入り交じって種々のパーソナリティ像を形成しており、投映的な技法と構成的な技法によって表現される世界も異なったものになるであろう。そこで、これらは補完的に心理療法的に適用できると考えられるのである。

（注 1）Saussure（1949）は rapport associatif（連合関係）と名付けていたが、Hjelmslev が後に paradigmatic とした（加賀野井，2004）。

（注 2）Saussure（1949）は syntagme の形容詞として syntagmatic（連辞関係）と名付けたが、これは同時に名詞として「統合関係、統合論」を意味する（小林，1972）。この原語 syntagme はギリシャ語 *suntássō*〈to put together in order〉「整頓する」からきているという。

さらに加賀野井（2004）によれば、Saussure による言語体系は図 1-1 のようになる。

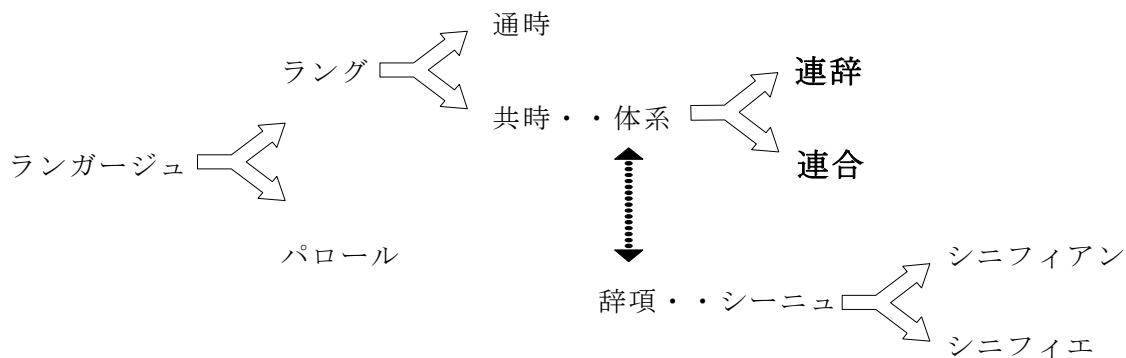


図 1 - 1 . Saussure 理論の図式化

一方で、これらの技法の活用法は臨床家の依って立つ立場の相違によって異なることは当然である。筆者は折衷派であり、精神分析の考え方や用語を理解できる範囲で借用しながら分析心理学的に心理療法を行っている。描画法は Jung 派が得意とするところであり、ロ・法は名大法に依っていて、これは精神力動論の考えに大きな影響を受けている技法でもある。筆者は転移分析をしていない点で精神分析的ではなく、この部分は描画の中に表現され、言語化されない治療関係のやりとりの中で動いていくと考えている。境界例など激しい転移感情が表面化する際には、言語的に正面から向き合うこともある。統合失調症などの病態水準が重いレベルでは、セラピストが何もせずに傍らに存在すること自体に意味のある場合もあり、こうした折りには治療的媒介や解釈は無用となる。

筆者は本論において臨床例を多く挙げているが、これらの事例は病態水準の幅が広い。臨床家のかかわりは、技法より先にクライアントが存在するのであり、個々のクライアントに応じた技法を考えていかなければならない。クライアントの幅の広さは、筆者の臨床現場らしさを示しており、それらの人たちに応じた投映法の活用法を考えていくことが重要であると考えられるものである。折衷派は結局中途半端であるとの想いがよぎるが、中途半端さを徹底するというのが今の私の立場であり、本論はそのような視点から書かれることになるだろう。

4. 本研究の目的

これまでに述べてきたような考え方から、筆者は心理アセスメントについて「心理療法的バッテリー」という観点から本論を進めていきたい。それについて以下に沿って述べていく。まず、ロ・法と LMT を心理療法的に適用するための工夫を考えていく。ロ・法において名大式技法では「思考・言語カテゴリー」という独自のカテゴリーを持っており、植元 (1974) によってまとめられている。このカテゴリーは大カテゴリーが 13 種、下位カテゴリーであるスコアが 86 個あり、その量の多さが煩雑であり、元来その中の一部を対象者の特徴として事例ごとに個別に扱うものであった。そこでこのカテゴリーが持っている対人関係、思考過程、コミュニケーション様式のあり方などをすくい上げる特徴を活

用し、カテゴリー全体を統合して実践的に心理療法的に使用していく。

第2章において解離性障害者、境界性パーソナリティ障害者に適用し、思考・言語カテゴリーを用いての表れ方を探り、クライアントの理解を深めるとともに、心理療法的な適用法を明らかにする。

次に第3章においては、LMT に対しての工夫として「穴」という Item を附加した「穴のある風景構成法（LMT-Hole）」を創案し、そこに描かれた「穴」の意義を考え、より深いクライアントの理解に繋がる Item であることを明らかにして心理療法の進展との関連を探る。ここでは健常短大生、神経症者及び境界例などの臨床事例の結果を概観し、比較しながらこの Item がどのような意味と広がりを持っているのかを探っていく。そして臨床実践の中での適用を考えていく。

第4章では、うつ病と摂食障害の事例において、心理療法の中での LMT-Hole の意義と、心理療法とどのようにかかわってくるのかを述べていく。一方では LMT の持つコミュニケーション賦活力に関して、自由画とのバッテリーが功を奏したMRの事例を挙げていく。

続いて第5章では口・法と LMT-Hole 両技法の臨床的活用について述べていく。両技法は同じ投映法の範疇にあるが、人格の違う側面に光を当てるものであり、投映的な口・法と構成的な LMT は補完的な技法であると考え、これらをテストバッテリーとして心理療法の中で使用することがより有用であることを示していく。ここでは両技法と時間との関連、対象者の生み出したものは“心の物語”を形作り、それをセラピストが理解し、抱えていくことの重要性を考える。臨床事例として子どもに対する虐待を行っていた母親、解離性同一性障害の女性事例を検討していく。さらに男性の慢性化した精神科クライアントを呈示する。この事例の口・法と LMT-Hole は表現の差があり、加えて相互スクリブル法を媒介として活用し、描画法のコラボレーションについての意義を探っていく。そして3種の技法を含めた心理療法的かかわりを通して、それらの心理療法的価値を述べていく。

それらの結果から、従来のテストバッテリーというあり方のみでなく、それぞれの技法についての工夫や、時間軸、転移関係を包含した心理検査やバッテリーのあり方を射程に入れたものを投映法の「心理療法的バッテリー」と呼び、それが心理療法に有用な概念であることを明らかにしていく。この骨子について図示すると下記のようなになる。

第2章 ロールシャッハ法についての工夫

ー思考・言語カテゴリーの発展的活用

名大式技法における「思考・言語カテゴリー」の独自性は、第1に従来指摘されてきた逸脱言語表現を13のカテゴリーに分類し、さらにこれをサブカテゴリー（スコア）によって詳細に区分している点にある。したがって、従来は一括されてきたそのさまざまな内容を区別して、まとまったカテゴリーの中のサインとしてとらえることができる。

第2に、今までの方法ではとらえることが困難であった反応態度、コミュニケーションスタイルまでを含めた、反応にまつわる全心理過程に着目しており、広く“ロールシャッハ状況”全体を視野に入れた言動を拾い上げるという特徴をもつ。

第3に、思考障害の表れのレベルが比較的軽いものから重いものまでを順序づけており、さまざまな病理水準における思考の特徴を把握することができる（名古屋ロールシャッハ研究会、1990）。このように本カテゴリーは、多くの臨床対象について、その人格構造上の病理を把握する体系となる可能性をもつものといえる。しかし、その多くのカテゴリーの中で個々の事例に応じた特徴を明確化するために、カテゴリーの中でも際だった部分を中心に上げていく形で用いられたこと、カテゴリーが多く煩雑なために、臨床的に使用しにくい側面があったことなどから、あまり発展してこなかった側面がある。それを有効に用いることが心理療法的にも重要な視点を見いだすことになるだろう。

そこで解離性障害者と境界性パーソナリティ障害者へのアプローチをとおして、本カテゴリーを臨床的に適用する工夫を考えていきたい。

1. 解離性障害者へのアプローチ

1) 解離とロールシャッハ法

解離は健常な人から統合失調者までを含む幅広い層にまたがって存在する防衛機制であるが、そのレベルはさまざまである。健常なレベルでは白昼夢のようなものも含み、その場からは一時意識が離れるが、すぐに現実世界に戻ってくることもできる。しかし病的なレベルになれば健忘によって記憶が途絶してしまうレベルもある。リストカットをして一瞬の間に意識が途切れていることもある。もっと記憶の消失が長いものは解離性健忘を起こして遁走を起こすこともあり、全生活史を忘れてしまう事例もある。近年では心的外傷や児童虐待の増加などもクローズアップされており、「解離」は重要な概念になってきた。以前は医原性ではないかと疑われたこともある解離性同一性障害の診断は今や定着しつつある。かつて多重人格性障害と名付けられていた解離性同一性障害は、さまざまな人格が表れてそれぞれ独立した別人の姿を見せるので、かかわる側を非常に驚かせ、戸惑わせたものであった。これらにより Freud の「抑圧」、「転換」理論によって忘れられていた Janet (1974) の「解離」の概念は注目を浴びることになった。それは記憶のメカニズムの問題とともに、自我の構造はどうなっているのか、抑圧、否認、分裂などの防衛機制との相違はどこにあるのか、種々の疑問を私たちに投げかけた。

渡邊(2007)によれば、そもそもフランス語の「dissociation」という言葉はドイツ語の

「Spaltung」や「Abspaltung」という言葉とほぼ等しいので、「解離」と「分裂」は同じ用語であるという。江口(2007)は Janet が「dissociation」と「désagrégation」の2つの用語を使い分けていて「désagrégation」はもっと広い意味があり、既成の自我が機能しない事態を示すという。さらに斎藤(2004)は「我々のシンプルな人格についての理解には何か根本的な欠陥があるのではないか」と述べて注意を喚起している。岡野(2007)は Freud の唱えた自我構造は考え直す必要があり、人間の心は超自我、自我、エスの三層構造のような仕組みでは表されず、もっと複雑な「モジュール的」なものだという。このモデルは Freud の図のように意識、無意識に分かれているだけでなく、縦に長いいくつかの意識が別々に心を形成しており、それぞれのモジュールが意識、無意識を形成している可能性もあるとしている。Freud や Jung の考え方に慣れた私たちにきわめて大きな考え方の変更を迫るものである。

そして解離は記憶との関連が重要であるが、中井(2004)は Sullivan の「セルフ」の概念を拡大して、意識のスクリーンの容量を超えないように制御しているシステムと、必要に応じて適切な記憶を引き出すシステムを仮定しても良いと述べている。それらがきちんとコントロールされている時、あるいはそれができている人は投映法にも適当な反応を産出することができるのだろう。しかし解離性障害はそれがうまく作動しなくなってしまう。記憶を途絶させるのは一義的には危機回避という側面があろうが、コントロールを超えて継続的、反復的に生じると社会生活に支障を生じ、記憶ごと他の人格になってしまえば、人格の統一性が失われてしまう。このようなクライアントを前にした時、私たちは彼らとどうかかわっていくかを迷いながら考え、おそろおそろ近づき、試行錯誤しながら心理療法を行っているのが一般の心理臨床家の実情ではなかろうか。

一方で解離には相当レベルの差があり、逆にいえば解離のあり方を考えることが、その人のあり方や病態水準を理解し、心理療法的にかかわるための大事な情報を内包していると考えられる。このような謎の多い、また言語レベルでは捉えにくい解離性障害のあり方について、意識から無意識レベルまでを把握しようとする投映法などの心理アセスメントからのアプローチを考えるのはむしろ自然であろう。

解離性障害に対するロ・法について、Leaner(2003)はさまざまな研究を概観し、結論として①著者達の関心は特定の患者群の人格傾向を研究して、ロールシャッハ指標を同定すること、②解離を用いる患者は多くの多様な運動反応を示す、③特に交代人格を呈する患者を査定するのは方法論的な問題がある、④ Armstrong と Lowenstein(1990)だけが被検者と検査者の体験をより記述的、現象学的に描写しようとしたとしている。菊池(2004)は解離性同一性障害女性の人格統合のプロセスを再検査を通して追っている。青木は解離性同一性障害者の交代対人格の変容(2003)、心的外傷による解離(2005)、全生活史健忘患者(2009)、偽解離性同一性障害者の特徴(2010)など、解離を巡る問題を多面的に探っている。上芝(1995)は多重人格のロ・法について述べ、自験例が Wagner や Young らの鑑別指標との類似点を挙げながらも、さまざまな様相が存在し、種々の特徴を示すのでロ・法だけから多重人格を判別、診断することは難しいとしている。解離性障害自体幅が広いものであり、解離性同一性障害においては検査を受ける主体がその人の全人格ではないこともあるので、結果は同一になりにくいという特殊性もあろう。いずれにしても鑑別診断や判断が難しい病態であるといえる。

Putnam(1997)は解離性障害の心理検査は「病的解離を探知し記録する主戦場である」とし、「検査過程を大事にする」という。先のLeaner(2003)は、「解離は構造にではなく、その過程に表れる」と述べており、ならばロ・法における反応形成過程に目を向けることが重要となろう。名古屋大学式技法はロ・法について「思考・言語カテゴリー」(森田ら, 2010)という、コミュニケーションスタイルや対人関係の在り方、思考様式などを把握するためのカテゴリーを持っており、この“過程”について注目することが重要ならば、「思考過程」や人と人との間に生起することを問題にしている本カテゴリーからの視点は、心理療法に有用な手がかりと適用法を見いだせると考えられる。これは前記の「被検者と検査者の体験をより記述的、現象学的に描写」する立場に近いともいえる。よって本カテゴリーによる解離性障害者の分析を通して、彼らへの理解と接近法を考える。

2) 思考・言語カテゴリーによる接近

解離性障害圏のクライアント4名にロ・法を施行し、名大式技法の「思考・言語カテゴリー」を中心に分析を行い、そこから心理療法的な接近について考えていく。事例はそれぞれDSM-IVにおいて①解離性健忘(事例A子、B子)、②解離性遁走(事例C男)、③解離性同一性障害(事例D子)と診断されている。それぞれ異なったレベルの解離を持っており、同じ解離という防衛を持っているが、パーソナリティや病態水準には相違がみられる。それらの共通点と相違点から有用な接近法を検討していきたい。

I. 事例の概要

①事例A子 < 30代女性・混乱して倒れて意識消失・解離性健忘 >

A子は3人きょうだいで両親は共に優しい人であった。彼女は幼少期活発で明るく、友人が多くて成績も良かったという。短大を卒業して就職し、20代半ばで結婚してすぐに子どもができる。数年経って次女出産を機に専業主婦となる。この頃から夫の仕事が忙しくなり、寂しい思いをすることが多くなる。30代後半に入った時、家に泥棒が入ったことを発見してから強い恐怖を覚えるようになり、めまいがしたり、目をつぶると死ぬのではないかという不安を感じるようになる。心療内科に受診するが、きょうだいの身边にトラブルもあって不安が増す。希死念慮を抱くようになり、頭にもやもやがかかったり、「頭が切れて」倒れてしまう。精神科病院に入院するが、軽快せず2回目の入院となる。

②事例B子 < 30代女性・子どもへの虐待・解離性健忘 >

B子は3人姉妹の次女として生まれる。父親は厳しくうるさい人、母親は優秀な姉と妹をかわいがり、彼女は父母に認められたいと思っていたが、取り立てて取り柄もないので「真ん中の悲哀」を感じていたという。真面目でおとなしい子どもであったが、小学校の低学年では不登校と拒食の既往がある。中学ではいじめに遭い、一番友人に裏切られてつらい思いをしたという。高卒後は専門学校に通い、卒業後しばらくして夫とつきあい始めたが、それが父親にわかって反対され、取り乱した時に混乱して記憶をなくした。

結婚後、夫は仕事が忙しくて家のことはかまわず、義父母との関係が悪くなっていったが、相談に乗ってくれなくなってしまった。彼女はパートで働きながら子どもを育てるもの

の、次男が生まれた頃から当時 3 歳の長男に対して育てにくさを感じ、子どもが泣くと腹が立つので叩くようになる。そのうち手を上げただけで子どもが泣くほどになり、我慢していると物に当たり、壁や机を叩いてしまう。手でガラスを割り、気がついたら出血を水で流して手当していたり、パニックを起こして記憶が途絶するようになり、家族に連れられて心療内科に受診する。

③事例 C 男 < 40 代男性・仕事に出かけて 1 週間遁走・解離性遁走 >

C 男は 3 人きょうだいで、両親との 5 人家族で育つ。幼少期は活発な子どもであった。高校卒業後は公務員となり、20 代後半で結婚して、子どもも 2 人もうける。30 代後半から次第に責任のある仕事を任されるようになるが、がんばってこなしてきた。40 代になると管理重圧になってくるが、それをあまり感じずに仕事を休むこともなく、順調に適応している。ある日、仕事から帰って来なくなり、心配した妻が仕事先に連絡するものの朝から出勤していないことがわかる。捜索願が出され、その後 1 週間して帰宅する。C 男はどこで何をしていたのか覚えておらず、受診を勧められて心療内科のクリニックに受診する。心理療法経過中に 1 週間のことが徐々に想起され、その間はホテルに泊まり歩き、なじみの飲食店なども訪れていたことがわかってくる。

④事例 D 子 < 30 代女性・失声で来院、後に他人格の存在・解離性同一性障害 >

D 子の父は 2 人の子を連れての再婚であり、彼女は 3 人きょうだいの末子として生まれた。母は D 子につらく当たり、心理的虐待に近い養育を受けたりしたという。父は彼女に優しくしたが、母には逆らわなかったため、彼女を守ってくれる存在ではなかった。彼女は小、中学校ではおとなしい性格で、暇があると漫画の本を読んだり電卓を叩いたりしてしたが、高校では活発になり、むしろ姉御肌の性格になった。

短大卒業後は就職し、仕事を転々とするが、仕事先で知り合った最初の夫と 20 代前半で結婚し 3 人の子どもをもうける。その後夫の暴力に耐えかねて子どもを手放して離婚する。身体的に不調になり病院に受診もしたことがある。日常生活においても朝から晩まで動き放しだったり、家の模様替えを頻繁にするなど、常に家のことをしないと気がすまない強迫的な傾向があった。その後再婚して夫との間に子どもをもうけ、常勤職で働き始める。しだいに仕事が大変になってきたおりに、上司に「誰でもできる仕事なのに」と言われ、次の日にまったく声が出なくなって心療内科のクリニックに来院する。心理療法開始後 1 年ほどたって、D 子は自分が多重人格であることを告白し、その統合が課題となる。

Ⅱ. 4 事例のロールシャッハ特徴

4 事例の形式分析のスコアが表 2-1 である。総反応数は 17 ～ 20 個で初発反応時間は速くて反応性は高い。知的な興味の範囲も問題ないといえよう。F % は低めで、形態以外の刺激に反応しやすいが、事例 D 子のみは F % = 80% で F 型といえる。運動反応は事例 B 子と事例 C 男は比較的多く、事例 C 男は特に多いが、事例 D 子は非常に少ない。外的統制に関しては FC : CF + C とともに全体に数が少ない。しかしこれは後述するように、D 子を除いて、情緒的刺激には敏感であるが、反応の中に色彩を盛り込むことができない結果であ

る。M : FM はそれぞれ数が違うが、1 個だけ FM が多く出現していて、衝動性を内包している。D 子は FM が 0 個で、ほとんど出ていない。P 反応は 4 事例とも 3 ～ 4 個で常識的な見方や考え方はできる。4 事例とも A%は高く、未成熟さを各々持っているようである。Content Range はやはり D 子のみ 7 で少なく、興味や関心の範囲も彼女のみ乏しい。

これを見ると事例 D 子のみは様相が違うことが分かる。ロ・法施行時期は他 3 名は初診からすぐであるが、D 子のみは 1 年ほど経過している。これは彼女の最初の主訴が失声のためにロ・法は実施できず、声が戻り、彼女の中に交代人格が存在することがわかった時点で行っているので、実施時期の条件が他の 3 名とは違っている。むしろもっと反応が豊かになっていてもいいのにそうではなく、人格の固さが目立つ結果である。

表 2－1．形式分析スコア

	A	B	C	D
Total Response	19	17	20	20
Time / ach	7"	7.6"	5.8"	5.6"
Time / c	6.8"	7.8"	6.2"	10"
Av. Time	6.9"	7.7"	6.0"	7.8"
F %	36.8%	5.9%	35%	80%
F +%	85.7%	100%	71.4%	75.0%
W : M	11:2	9:6	16:3	8:1
M : FM	2:3	6:7	3:4	1:0
M : Σ C	2:4.5	6:1	3:3	1:2.5
F C : CF+C	3:2	1:0	1:2	2:1
VII・IX・X/R%	42.1%	17.6%	20.0%	45.0%
A%	57.9%	47.6%	55.0%	65.0%
P	4	3	3	3
Content. Range	9	9	12	6

次に思考・言語カテゴリーの結果を見てみよう。4 事例のスコアが表 2-2 である。カテゴリーは全部で 13 種あるが、そのうちの 1、2、3、4、5、6、8、10 にスコアがチェックされ、スコアの数値は A 子＝29、B 子＝22、C 男＝32、D 子＝7 となっている。事例 D 子のみ数が際だって少なく、あとの事例は 20 個以上チェックされていることがわかる。

表 2－2．思考・言語カテゴリーのスコア (* : 大カテゴリー番号)

*	Category	A	B	C	D
1)	CONSTRUCTIVE ATTITUDE				
	contrast remark			2	
	color description			1	
2)	ABSTRACTION AND CARD IMPRESSION				
	direct affective response	3	1	4	

3)	DEFENSIVE ATTITUDE				
	question for instruction	1	1		
	question sentence	1			
	additional response	1			
	modified response	1			
	object critic			3	
	self critic			1	
4)	OBSESSIVE&CIRCUMSTANTIAL RESPONSE				
	exactness limitation			1	
5)	FABULIZATION RESPONSE				
	definiteness	3	8	4	4
	affective elaboration	5	2	3	1
	overelaboration		1	3	
	overdefiniteness		4	2	1
	affect ambivalency		1	1	
6)	ASSOCIATIVE DEBILITATION AND LABILE BEWUSSTSEINSLAGE"				
	incapacity of explanation	2			
	apathy in decision			1	
	ARBITRARY THINKING				
8)	arbitrary combination	2	2		
	arbitrary linkage	1			1
	overspecification			1	
10)	PERSONAL RESPONSE AND EGO-BOUNDARY DISTURBANCE				
	personal experience	7	2	5	
	utilization for illustration	1			
Total		29	22	32	7

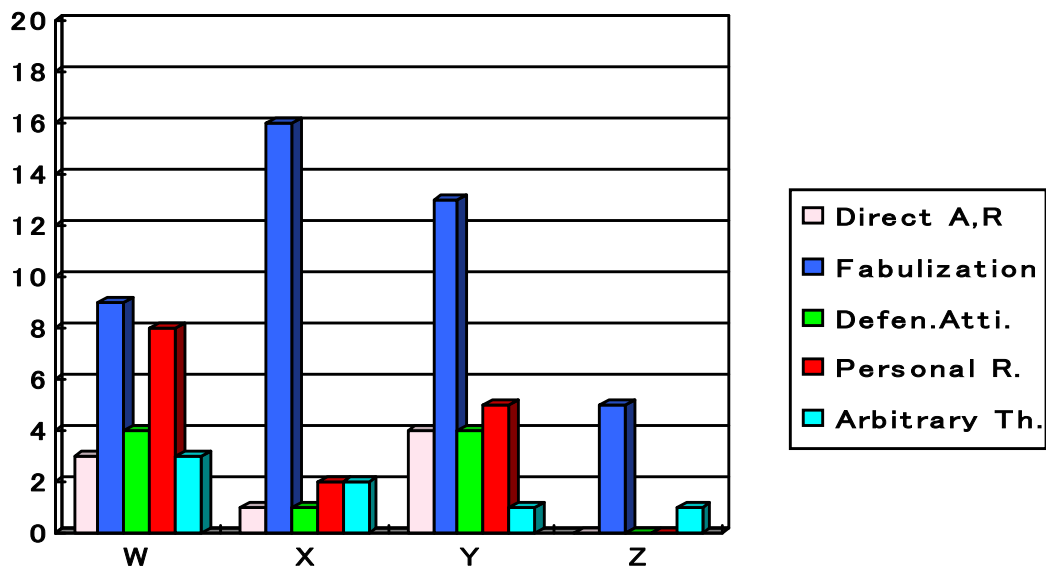


図 2-1. 思考・言語カテゴリー総数

図 2-1 に総数を示したが、この中で 4 事例共にスコアされたのは、FABULIZATION RESPONSE と ARBITRARY THINKING の 2 つである。FABULIZATION RESPONSE は個人的な感情を容易に表出しやすい人格を表すと考えられる。彼らは知性化や想像性は豊かだが、作話傾向が強くなり、自分独自の感情的世界に入り込む恐れがある。さらに ARBITRARY THINKING も重なり、恣意的に思いこみで判断する傾向がそれらを強化すると考えられよう。

次に A 子、B 子、C の 3 事例にみられたのが、ABSTRACTION AND CARD IMPRESSION の direct affective response、DEFENSIVE ATTITUDE、PERSONAL RESPONSE AND EGO-BOUNDARY DISTURBANCE の中の personal experience である。DEFENSIVE ATTITUDE では神経症的な防衛が働いていることを示している。この 3 領域の数値の高さは筆者ら(高橋ら, 1995)が挙げた境界性パーソナリティ障害の特徴と一致する。DSM-IV-TR では境界性パーソナリティ障害の診断基準の中には「一過性のストレス関連性の妄想様観念または重篤な解離性症状」があり、解離も症状に入れられているのである。岡野(2012)は解離性同一性障害、境界性パーソナリティ障害はかなり診断が重なるといわれるものの、何かがその差異なのかを指摘している。興味深い点であるが、ロ・法上での両者の差異については別の論を起さなければならない。だが、もともとヒステリー、解離性障害、境界性パーソナリティ障害は近縁の位置にあるのは間違いない。

そして、彼らは反応から逸脱して直接的にポジティブな感情を表出したり、反応を自分に関連づけている。これはカードとの体験的距離が非常に近くなっていることを示している。感情領域は活発に活動しており、特に direct affective response は反応を産出せずに直接的に「きれいな色」、「今までの黒と赤の世界と比べると心が和みます」などという

ものであり、きわめて外的情緒刺激に影響されやすいことがわかる。これが D 子を除く 3 事例に色彩反応が少なくなっている理由であり、思考・言語カテゴリーにそのありさまがみてとれるといえよう。

Ⅲ．事例別の特徴

個別にみていくと、表 2-3（事例 A 子）、表 2-4（事例 C 男）などが例として挙げられる。ポジティブな感情が多くてネガティブなものは少なく、躁的な防衛が働いているが、それが現実の中でうまく機能しなくなった時に解離を起こすと推測される。事例 B 子の場合には緊張感や攻撃性の高い反応があり、作話の内容がネガティブなものや葛藤が含まれているものが多い。現実場面でこの緊張感、攻撃性を誘発する事件が起きた時に行動化し、解離が出現して意識を消失すると考えることができる。次に、**direct affective response** と **personal experience** の高さは事例 A、事例 C 男において極めて特徴的であり、感情の投射が過多で自己顕示的である。2 人とも症状は一過的で早期に収まっている。

ゆえに事例 A 子、B 子、C 男においては内的に豊かで、時に過剰な情緒発現がみられ、自我の脆弱さによって負荷感情に耐えられなくなると逃避的に「解離」という病理的な防衛を使うことが伺われた。一方事例 D 子においてはそれらの感情は抑圧されており、人格そのものが **rigid** であり、逃避的な行動や状況に適応する行動を取る時には交代人格を使用した折りに人格が分割されて存在すると考えることができる。その中身については明らかになっておらず、交代人格それぞれについてロ・法を実施してみなければならないことだろう。だが、この点において解離症状の質も相違があると考えられ、思考・言語カテゴリー上は、カテゴリーの数が多いか極端に少ない形でその相違が明確になったと考えられる。

表 2-3．事例 A 子 カードⅧ

T	P	Response	Inquiry	Score
12"	ハ	きれいな色、今度は何かな、これは ①木、クリスマスツリーに何か飾ろうかなみたいな。カエルが飾ろうとしてる -29"-	①これがクリスマスツリー(D5)。カエルの親子が、親子じゃなくても良いけど、カエルさんがクリスマスツリーを飾りつけようとしてる。(ツリー?)木の、この感じが。(カエル?)カエルはこの辺が、よく掴まえたんで・・カエルです。やっぱり手の格好がカエル <Add>下が花にも見える。 (似てるのは?)赤とオレンジのきれいなお花が咲いてる。上にクリスマスツリーが飾ってある。	direct affective response D1+1+5 M'a- A・Orn Porn・Dch personal experience arbitrary linkage <Add> D2 C Fl Pnat affective elaboration

表 2-4. 事例 C 男 カードⅧ

T	P	Response	Inquiry	Score
3"	ハ	①カラフルですね。 今までのカードがずっと黒っぽかったの で、非常に明るい印象を受けます。形よりも色からですね。 非常にオレンジがあったかい。今までの黒と赤の世界と比べると、心が和みます。 森の中を見てるようで心が安らぎます -55"-	①(森の中?)ええ、まず色と、今まで黒と赤しかなかった。このカードで、これだけの色が明るさを増している。すると、こういう(D6)線の感じが森を思い出させた。 (どこまで?) 森として全体が明るいと思ってます。特にオレンジは(D2)非常に気持ちの良い色だと思ってます。ここも(D3)暗いとは思っていません。非常に楽しいし、明るい	W C Nat Pnat color description direct affective response

これと比べて、子どもへの虐待を行った事例 B 子（表 2-5）は FABULIZATION が極めて高く、直接的な感情表現を抑制する傾向がみられた。彼女は子どもへの愛憎と家族への葛藤が内向して解離を引き起こしていて、治療期間も 5 年あまりに及び、この点において単純に逃避的に解離を起こす A 子、C 男とは違いをみせた。

一方で事例 D 子（表 2-6）はかなり異質である。感情領域が賦活された反応は乏しく、形式分析でも固い人格を表している。解離性同一性障害のプロトコール（Lerner, 2003）よりはヒステリーの転換タイプのものに近縁と考えた方がよい。スコアは definiteness が 4 個と一番多く、これは知的な限定付けをするスコアであって、知的防衛のために感情領域は表現されていない。むしろ本カテゴリーに示されないことが特徴であり、無意識内容は抑圧、否認されているのであろう。

交代人格については岡野(2007) のモジュラー型自己構造を考えると、抑圧されたものの内部に人格が分割されて存在すると考えることができる。つまり見えない内部で分割されているということになる。その中身については明らかになっておらず、確かめるためには交代人格それぞれについてロ・法を実施してみなければならない。だが、むやみに交代人格を確定させないように、実際そうしてはいない。しかしこの点において解離症状の質も相違があると考えられ、思考・言語カテゴリー上は、チェックされるカテゴリーの数が多いか、極端に少ない形でその相違を示している。

表 2-5. 事例 B 子 カード I

T	P	Response	Inquiry	Score
17"	ハ	どのように見えたか 言うんですか？（何 に見えるか） ①羽のはえた天使、 天使が大人になった みたい。太陽に向っ て飛んでるように見 えます	①これが天使、天使の体で手をこ うやって上げてる。全体が羽です。 (他に似ている?) ありません	question for instruction Wse Ma+ H/ Rel Drel question for instruction
42"	ハ	②あとは悪魔の顔？ 黒いです -58"-	②全体が顔、目が 4 つ耳があるよ うに見える。正面、顔全体（悪魔 らしさ？）耳の辺り、三角の目	Ws(se) FC'+ Hd/ Athr question for instruction

表 2-6. 事例 D 子 カード I

T	P	Response	Inquiry	Score
6"	ハ	①コウモリ	①全体的にこの羽がコウモリに見 える。（どこ？）こういう感じで	W F+ A P N
20"	ハ	②鬼、かな -28"-	②これが角で、目でキバに見えて （どこ？）全部が	Wse F+ Hd/ Athr Hh definiteness(real)

IV. 解離のレベルから心の物語へ

図 2-2 は斎藤（2004）による解離のレベルの相違についての解離の度合いによる分類であるが、知覚－記憶－行動－人格の順でしだいに人格の深層まで達する解離という防衛のレベルが示されている。それによると事例 A 子、B 子は「記憶」の段階まで、事例 C 男は「行動」のレベルまで、事例 D 子は「人格」のレベルまでに達していることになる。今回の 4 事例では上層部における解離の事例では、ロ・法が感情的に豊かで統制が時に利きにくいプロトコールを示し、人格にまで解離が至ると逆に思考・言語カテゴリーのスコアが乏しくなるという結果を示した。これは 1 節で述べた研究者の多重人格者の結果とは相違がみられる。ヒステリーの転換タイプでは内的なものが抑圧されて表面化しないことがあるが、事例 D 子もそのような傾向をみせ、交代人格として子ども人格や攻撃性が高い人格、自由奔放な人格などを形成していたが、ロ・法には表面化していない。彼女の症状がひどかったのは、前夫との性的虐待を含む苦しい時期であり、ロ・法施行時には家庭内が落ち着いていたことも彼女の安定のために良かったのだろう。

しかし、同じ解離性同一性障害と診断されてもロ・法の結果は同様ではないということであり、病態水準は同レベルであっても、心の物語は固有なものであると考えられる。思考・言語カテゴリーによってコミュニケーションや思考過程のあり方を分析することで、彼らの抱えている精神的課題や精神病理を明らかにすることができ、精神的な問題を抱えた人たちに適切な対処や処遇を施す一助となると考えられる。

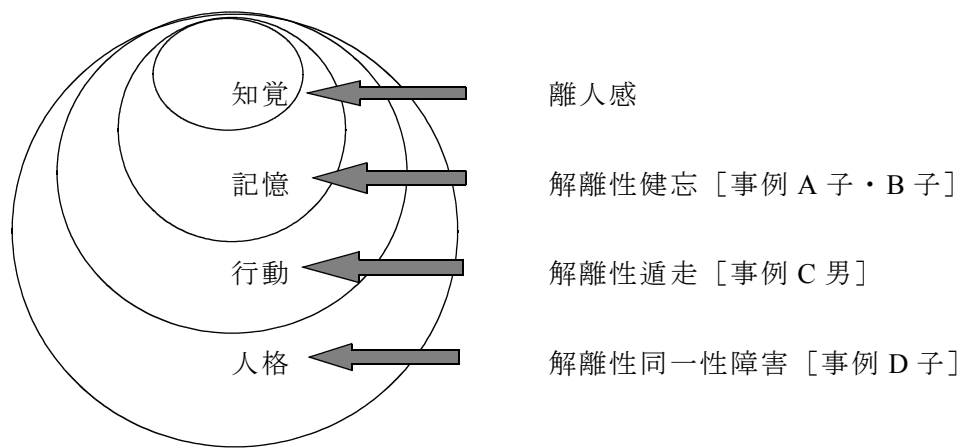


図 2－2．解離の度合いによる心のモデル（斎藤，2004 より）

V．心の物語と心理療法へのベクトル

前節で思考・言語カテゴリーから見た 4 事例の特徴を比較してきたが、それらの特徴は心理療法的なかかわりとどのような関連があるのかを考えていきたい。4 事例の中では A 子、B 子、C 男、D 子のうち 3 事例は類似する部分が多かったが、D 子のみは著しい相違がみられた。前三者は一時的な記憶の障害を来すものであったが、D 子のみは人格の部分までの問題を抱えていた。

ロ・法には一言でいえばクライアントの生き方が表れている。そしてそれは投映が多く働く部分に表現されやすいだろう。今回の事例では A 子、B 子、C 男が恣意的な思考様式を持ち、作話的な傾向によって自分の内的な物語を語っている。それを把握することは心理療法のために重要な示唆となる。生の物語が把握できるとしたら、その物語に沿って旅を続けることが心理療法の道行きになろう。その物語は各人固有のものであり、それぞれ相違があるのは当然だが、非常に対照的な B 子と D 子について第 5 章 1、2 において詳しく検討していきたい。

2. 境界性パーソナリティー障害者へのアプローチ

1) 境界性パーソナリティー障害と思考・言語カテゴリー

近年人格構造上の病理に対する注目の高まりとともに、ロ・法によるその診断や病理に関する検討が数多く試みられている。こうした研究における一つの代表的な観点として、ロ・法上に表れる思考の障害への着目が挙げられる。その先駆的な研究は、Rapaport (1945～1946) によって行われた。

Rapaport は、ロ・法上に表れる思考の障害とそれに伴う特異な言語表現を、逸脱言語表現 (deviant verbalization) と名づけた。そしてこの現象が、自閉的思考、つまり欲動に支配された思考 (一次過程思考) によりもたらされるものであると述べている。また彼は統合失調症のなかに前統合失調症という領域を設け、そのロ・法上の特徴を指摘した。この前統合失調症のうち、観念過剰を特徴とする一群は、最近の研究による境界例の特徴ときわめて類似していることが指摘されている (馬場ほか, 1983)。さらに Rapaport は、前統合失調症の特性として、構造化された検査においては現実的、客観的な思考が比較的保たれているのに対して、構造の曖昧なロ・法上では、反応産出のあり方が豊富であるか、収縮がみられるかといった、著しい偏りがあることに着目している。

こうした逸脱言語表現に関する研究はその後、特に境界例について大きく発展してきた。そして、境界例を統合失調症との連続としてではなく、特定の人格障害としてとらえ、その思考過程の特徴を検討する研究がなされてきた。Exner (1978) は、境界例に関して統合失調症のような重篤な思考障害はないが、自己の特異性に依拠して現実を歪曲してとらえやすいとしている。また、認知の障害を伴う混交反応や作話結合反応よりも、奇妙な言語表現や不釣合な結合反応が多いと指摘した。

Singer & Larson (1981) は統合失調症では注意力や認知の焦点化に問題がみられるのに対して、境界例では推論や理由づけのような思考機能に問題を呈するという。そのために知覚は適正であるものの、奇妙で非現実的な明細化を行いやすい。また馬場ら (1983) は、ロ法と精神療法での知見から、境界例の総合的な分析を行っている。

そのなかでは、まず Kemberg (1976) の理論を修正し、内的対象関係の分裂に加えて、二次過程の優勢な領域と一次過程の優勢な領域との分裂があることを論じている。この視点から境界例では、二次過程の領域が感情に彩られて客観性を失い、一次過程思考を呈しやすく、過剰な情緒的意味づけのある作話反応が多いと述べている。また、個々の認知は適切だが、奇妙な結合を行うことにより作話結合反応も顕著にみられるとしている。

Rapaport 以来の研究をまとめると、境界例の逸脱言語表現については、その出現が統合失調症より量的に豊富であり、特に作話結合反応が多いこと、しかし混交、混乱、自閉論理、支離滅裂などの著しい思考障害はほとんど出現しないこと (馬場ほか, 1983) という、共通の特徴を見いだすことができる。

しかしここで、境界例に多いとされる作話反応のなかには、情緒的な明細化や内容的な限定づけなど、かなり多様な内容が含まれている。したがって、個々の事例を検討する際には、その自我障害の程度に応じて示された作話のバリエーションを理解することが必要であろう。それに対しては、共通の視点による客観的な理解の枠組が必要であると考えられる。

思考・言語カテゴリーは、そのような観点からの要請に応じられる可能性がある。

人格障害者は対人関係や行動上の問題を多く持ち、境界性人格障害者は投映性同一視や分裂などの未分化な防衛を持ち、対人関係や情動は不安定で行動化が激しい事例が多々ある。コミュニケーションの在り方も独特のものがああり、これらの特徴を明らかにするためには思考・言語カテゴリーが非常に有用である。そこで本節では、本カテゴリーを用いて境界例の思考過程やコミュニケーション・スタイルの特徴を検討していく。そこでは、境界例に共通の特徴を明らかにするとともに、個別に事例を検討して各事例の特性を把握し、個人間の相違についても明確化する。さらにそれらの検討を通して、本カテゴリーが境界例の臨床的理解において有効な指標になり、心理療法への橋渡しになることを示していく。

2) 事例の呈示

実際の事例の検討によってカテゴリーの適用を考えていきたい。DSM-III-R にもとづいて境界性パーソナリティ障害と診断された4事例を取り上げてロ・法を施行し、名大式技法によって分析を行っていく。

①事例 E 子： 20 代前半 女性

幼少時はものおじしない子で、物語の主人公に憧れて、それになりきったりすることを好んでいた。「夜中に歩いていると、骸骨がいたので一緒に遊んだ」と作文に書いたことがあった。大学時代には、身長や体重にコンプレックスをもち始めたが、アルバイトでの過労から休学し、2年生で中退した。その後にイライラを訴えて、「あらゆるものを壊したい。何も考えられない」というようになり、自ら精神科に受診して入院となる。

②事例 F 子： 20 代前半 女性

未熟児で生まれ、おとなしい子どもだった。高校時代には、絵や詩を好んで書いていた。大学に入学したが、将来の役に立つような資格がとれないことに気づいて後悔し、目標が持てなくなる。就職した後、劇団に入って役を演じることで生き生きとして「自分を平気で表現できるようになった」と語っている。20代になると職場で同僚のなかに入り込めないように感じ、他から取り残されたと感じる体験をし、気分が落ち込んで退職する。抑うつ的になり、自殺念慮も抱くようになって精神科に受診する。

③事例 G 子： 20 代前半 女性

幼児期は活発で、成績の良い子どもであった。高校時代に級友に太っていることをからかわれたことから、拒食と過食をくり返すようになる。63kg あった体重が、大学時代には 39kg まで減少したことがあった。大学卒業後、母が急死すると内閉的になって自室に閉じこもったりした。その後、過度の飲酒傾向、無気力、抑うつ感が高まり、何もせずにブラブラして過ごし、手首を切るなどの自殺企図を数回している。父親とのケンカから、短期間精神科に入院となった。

④事例 H 子： 20 代前半 女性

彼女は学童期から優等生であった。高校在学中より家族の病気が相次いだため、さまざま

まな犠牲を強いられた。その後に不眠、倦怠感から成績の落ち込みがみられ、不登校状態となって受診する。興味の対象が変化しやすく、熱中している時には費用や時間を厭わずに夢中になるが、ふとしたことから興味がなくなり、その際には、抑うつ的になりやすい。興味対象の変化が激しく、職業的にも将来の方向性が定まりにくい。自殺企図があって短期間精神科に入院をしている。

3) 4 事例のロールシャッハ反応の全体的特徴

表 2-7 は主なロールシャッハ指標についてのスコアである。総反応数は 21 ～ 37 といずれも平均以上の生産性が示されている他、知的な興味・関心の広さ、情緒的な反応性の高さなどが、共通した特徴として指摘できる。現実検討力については、事例 G が $F+\% = 54.5\%$ とやや低い、他の 3 名は 75 ～ 91 % という結果であった。衝動統制については、事例 F において衝動性が高いが、他の 3 名 $M=FM$ か $M>FM$ で統制が保たれていた。外的な統制についても事例 F が $FC:CF+C=2:3$ でやや統制が悪いものの、あとは統制がとれているか、過剰な抑制が効いているという数値である。個々の事例における特徴は後述する。

表 2 - 7 . 4 事例の形式分析指標

事例 スコア	E	F	G	H
T/ach	5.2"	12.6"	8"	4"
T/c	10 "	16.2"	13"	5.4"
Av.	7.6"	14.4"	10.5"	4.7"
Total Time	1058"	776"	664"	631"
Total Response	37	26	21	30
VIII・IX・X/R	35.1%	19.2%	61.9%	26.7"
W:D:d:Dd	35:51:0:14	62:38:0:0	45:50:0:5	60:40:0:0
F%	35.1%	30.8%	52.4%	40%
F+%	76.9%	75%	54.5%	91.6%
W:M	13:13	16:3	10:5	18:4
M:FM	13: 6	3:7	5:2	4:4
M:ΣC	13: 4	3:4.5	5:3	4:2.5
FC:CF+C	5 :1	2:3	6:0	5:0
P	4	4	5	5
A %	54.1%	73.1%	41%	43.3%
H+A : Hd+Ad	24:11	23:1	14:2	19:1
Content Range	14	13	11	9

4) 思考・言語カテゴリーにおける特徴

思考・言語カテゴリーでチェックされたものの総数は 30 ～ 36 であった。表 2-8 に各事例における思考・言語カテゴリーの出現数および主な反応例を示した。紙面の都合上、カテゴリーについては本研究に関連するもののみを示す。13 カテゴリーのうち、4 例に共通

してみられたものは、Defensive Attitude、Fabulization Response、Arbitrary Thinking の 3 カテゴリーであった。これらは、頻度の上でも高い割合（チェック総数のうち 67～86 %）を占めていた。

表 2－8． 4 事例における思考・言語カテゴリーの出現数

No.	カテゴリー	事例			
		E	F	G	H
1)	Constrictive attitude	1	1	0	1
	card description	1	1		
	color description				1
2)	Abstraction and Card impression	0	0	1	0
	direct affective response			1	
3)	Defensive attitude	8	7	2	13
	apology(object-critic)	3	2	1	12
	question for instruction	2	1		1
	additional response	1			
	modified response	1	4	1	
	changed response	1			
4)	Obsessive and Circumstantial response	2	1	0	6
	exactness limitation		1		2
	hesitation in decision	2			
	detail description				4
5)	Fabulization response	9	17	18	11
	affective elaboration	1	6	3	
	definiteness		3	4	6
	affect ambivalency	2	1	2	1
	content-symbol combination				1
	over definiteness	2	5	3	
	overelaboration	3	2	3	
	overspecification tendency	1		3	3
6)	Associative debilitation and				
	“Labile Bewusstseinslage”	1	3	2	0
	incapacity of explanation	1		2	
	vagueness		1		
	forgotton		2		
7)	Repetition	2	0	0	0
	repetition tendenncy	2			
8)	Arbitrary thinking	3	6	4	4
	arbitrary combination		3		1

	rationalization		1		
	arbitrary descrimination	3			
	arbitrary response		1		
	arbitrary linkage		1	2	3
	overspecification			2	
9)	Autistic thinking	0	0	1	0
	contamination tendency			1	
10)	Personal response and				
	Ego-boundary disturbance	3	0	4	1
	personal experiense	3		2	1
	utilization for illustration			1	
	personal belief			1	
13)	Inapropriate behavior	1	0	0	0

① **Defensive Attitude** : 「対人的緊張とそれにもとづく防衛的態度」「自己不全感の表現」を意味しており、病理群では神経症者に多いとされている(植元, 1974 : : 以下、各カテゴリーの心理学的意味についての説明・引用は同論文による)。スコアとしては apology (object-critic) が 4 例を通じてみられ、また 3 例に question for instruction・modified response がみられた。

② **Fabulization Response** : 「プロットの性質を基に、反応内容の種類・性質・付属する感情などを指摘、限定づけ」するものである。想像力の豊かさを示しているが、「過度の場合にはプロットを離れて作語的に反応を修飾」するあり方までをも含んでいる。今回の対象事例において最も出現頻度が高く、スコア別にみると、4 例すべてに affect ambivalency がチェックされ、また 3 例に共通して affective elaboration・definiteness・overdefiniteness・overelaboration および overspecification tendency がみられた。後三者は、想像力の豊かさをこえた恣意的な傾向を示すものである。

③ **Arbitrary Thinking** : 「思考の恣意性、あるいは過度の自由性」を意味しており、「病理として表れる際には妄想型をとりやすい」とされている。サブカテゴリーでは arbitrary linkage が 3 例にみられた他は事例間に共通したものはなかった。

④ **その他** : 4 例中 3 例にみられたカテゴリーとして、Constrictive Attitude、Obsessive and Circumstantial Response、Associative Debilitation and “Labile Bewusstseinslage”、Personal Response and Ego Boundary disturbance が挙げられるが、前述の 3 カテゴリーに比して出現頻度は少ない。また、特定のスコアに集中する傾向もほとんどみられず、Personal Response and Ego Boundary disturbance のスコアの一つである personal experience が 3 例にチェックされた。

以上をまとめると、全体として想像力の豊かさ、華やかさを印象づけられるプロトコルとなっているが、神経症的防衛から精神病水準の病理まで多彩な指標が混在する、という特徴が指摘できる。

本研究における結果をみると、4 事例共通の特徴として、境界例において思考・言語カテゴリーにチェックされたものの総数はかなり多いといえる。そのなかで今回対象とした事例において最も多くの割合を占めたのは、**Fabulization Response** である。これは作話傾向の強さが示唆されているということであり、馬場ら（1983）その他の研究者の結果とも一致する境界例の大きな特徴である。内的表象がかなり外界に投射されやすく、想像力は活発だが、しばしば現実から逸脱して、「思い込み」の世界に入りこんでしまうといえる。このなかでは、**affective elaboration** など、自我コントロールが機能しているものがある一方で、**overspecification tendency** のように反応の貫が落ちているものもある。情緒的刺激に揺り動かされ、自我と内界世界との攻防が活発に行われており、さまざまなレベルでの投射が働いていると考えられる。

それと関連して、**Arbitrary Thinking** がどの事例にも認められ、前述の **Fabulization Response** の多さと連続性をもっている。「思い込み」の強さから、恣意的な思考をし、現実吟味力が低下してしまうといえる。さらに **Personal Response** が事例 F を除く 3 例にみられ、個人的な体験を語るという意的で自己中心性の強いあり方を示している。これはわれわれ（堀内ほか、1991）が、自己愛性人格障害者についてとらえた特徴と共通している。現実場面では、対人関係が不安定になったり、事実を曲解したり、自己中心的で人の言うことが素直に聞けないというような形で表れていると考えられる。

たとえば事例 G は「仰向けになって死んでるクマ、周りは雪が降ってる（クマは北海道なので雪）」（IV）と反応している。この場合は、抑うつ的な気分や「北海道なので雪」というところに恣意的な思考様式が表れており、基本的な知覚は崩さず、しかし現実には明確に見えない「雪」も取り込んで反応するところが特徴的である。内界にあるものが統制されずに溢れ出てきてしまい、現実を歪曲させて自分なりの内的な話を作ってしまう。このように作られた話は、きわめて個人的なものになる。

反応に表れた個人的な体験という意味では、事例 E が「気の狂った悪魔が泣き笑いしている（ものすごい自虐行為をした後で笑い出す人いますよね、私もそうなんです）」（IX）などと言及し、彼女自身と反応が同一視されていることがあげられる。

スコアのなかで多いものとして、**Affect Ambivalency** がある。情緒的にポジティブなものもネガティブな内容の反応も多いのだが、**ambivalent** な感情があり、相反する感情が揺れ動いているところが彼らの情緒的な不安定性をよく表している。

Fabulization Response について頻度の高いカテゴリーは、**Defensive Attitude** である。この項目は「対人的緊張とそれにもとづく防衛的態度による」とされ、自己不全感と対人不安の表れであるが、神経症レベルの項目に止まっており、神経症的な防衛の存在を表している。

この中で、どの事例にも共通してみられるのは **apology(object-critic)** である。たとえば事例 H が、カード II で「ガの一種」という反応を出した後、「色は赤くない方が良いけど」と述べているのに相当する。自己不全感の責任を他に転嫁するというあり方であり、これも境界例の他罰的な側面をよく表しているといえよう。事例 G については、このカテゴリーが一番低率になっている。彼女の F + % の低さ、**Fabulization Response** が他の 3 例に比べて多いこと、さらに **Autistic Thinking** が 1 個産出されていることを考え合わせると、病態水準としては他の 3 例より重いと考えられ、こうした重度の病態を示唆する項目は、数

は少なくとも注意が必要と考えられる。

本研究の4事例は、「分裂+投影または投影性同一視がほぼ全体を覆って」おり、「妄想性特性が強い」とされる、馬場ら（1983）が「結合型」と名づけた人格障害の特徴にほぼ一致するといえる。

以上述べてきたように、今回の結果では *Fabulization Response*、*Arbitrary Thinking*、*Defensive Attitude* の多さが特徴としてあげられた。これより重い病態を示唆する項目はほとんどなく、そうしたところからは彼らの自我が揺れ動き、危ういながらも一定のレベルを維持しているといえる。作話傾向と恣意的な思考が強く、神経症水準の防衛も機能しているということであり、この3種のカテゴリーの組み合わせが、このタイプの境界例の特徴を表していると考えられる。その意味では、従来のサインアプローチに加えて、彼らの特徴が思考・言語カテゴリーによって把握できる。彼らの思考様式や言語表現には、通常のカテゴリーではチェックされないところでの特徴が表れていることが伺われる。

5) 事例による個別的検討

①事例 E 子

個別にみていくと、事例 E 子は鏡映反応（Exner, 1978）が5個あり、「片方が実体、片方が影」（I）（*arbitrary discrimination*）と左右を区別している。他にも「双子」という反応がみられ、恣意的で自己中心的な傾向と考えられる。この左右の区別は分裂の機制を示していると考えられよう。さらに彼女は *Inquiry* で、「ドッペルゲンガーみたい。私はドッペルゲンガーを見たことがある。疲れてうちに帰ったら流しに立ってた」（IV）（*arbitrary discrimination*、*personal experience*）と述べている。生育歴の中でも「夜中に骸骨と遊んで楽しかった」などのエピソードも特異である。このことから、無意識の解離が強く伺われ、自我分裂が彼女の大きな防衛であることが示唆されている。

また、カード I から *overdefiniteness* がチェックされ、恣意的な思考様式は情緒的な刺激が加わるとすぐに発動されることがわかる。内容的にも「狂犬っていうか、霊みたいなのが襲う人を見つけてニタッと笑っている」という反応であり、強いサディスティックな情動を含んでいる。この *overdefiniteness* と *overelaboration* は近縁なカテゴリーだが、カード I からカード X まで全般的にチェックされることから、このような恣意的な思考様式と被加虐的な情動に自我が汚染されている事がみてとれる。これに加えて、*hesitation in decision* や *question for instruction* など、反応を巡る葛藤が伺われ、感情が揺れ動いていることが示され、実際の対人関係も不安定な人であることが推測される。

②事例 F 子

彼女は、最初から「ガ（やっぱりこのガの気持ち悪さが出てる）」（I）（*affective elaboration*）と反応するが、この「やっぱり」という言葉は、普段の面接中にはまったくみられなかったにもかかわらず、ロールシャッハ状況のなかで41回も出てきた言葉であり、反応に先立って自分の「思い込み」があり、そのように「やっぱり」見えたということを確認した言葉といえる。強い恣意的な思考と同時に、「違うかと思ったが違ってはいなかった」という意味で、自分で自分を納得させるような心理機制も働いているであろう。そして、他の3

事例でみられた Personal Response and Ego Boundary Disturbance は出現しておらず、他の事例で理由付けをする基盤が自分の経験や知識に依存しているのに、事例 F 子では、繰り返す言葉で納得させているように思われる。他の 3 事例は子どもの頃優秀であったことと関係があるのかもしれない。後述するように、自己愛性人格障害でも personal experience は頻出するカテゴリーであり、病的な自己愛によって自分を保とうとする傾向があると考えられるが、彼女はそのような自己愛が乏しいのかもしれない。

また、「虫が火に染まって死んでいく 小鳥みたい」(Ⅲ) (overelaboration、modified response)、「羽を生やした変なネズミ、暗い泥沼みたいなところからビーッと出て来る」(Ⅵ) (arbitrary combination)、「カニか何かがガスかヘドロみたいなのを出してる」(Ⅸ) (arbitrary linkage) など知覚の修飾の仕方が独特で、抑うつ気分や嫌悪感を投射しており、その内容はグロテスクである。それだけこのようなネガティブな情動が強いといえる。実際の臨床像も、かなり抑うつ感や行動抑制が強い事例であった。

③事例 G 子

彼女の場合、「話題の映画のグレムリン、笑ってる」(Ⅰ) (affective elaboration、definiteness)をはじめ、「童話が好きだから、コウモリは夜と洞窟と月というイメージ、オスでかわいそう」(Ⅴ) (affective elaboration、personal belief)、「イソップ童話に出てくるキツネ」(Ⅵ) (overspesification tendency)、「鏡の国のアリス」(Ⅶ) (overspesification)、「ナルニア物語、小学校の頃に読んだ」(Ⅸ) (overspesification、personal experience) など、やはり作話傾向が強く、カードⅠ～Ⅹまで全体を覆っている。内容としては「車内で乗客がケンカして血が流れてる」(Ⅱ)、「大きな熊が死んでいる」(Ⅳ) など、攻撃性が感じられるものもあるが、作話の題材は自分が好きな童話や映画から取っているものが多い。自己愛的で退行的な傾向が強く、幼児的なファンタジーの世界に逃避するところがあるのだろう。Personal Response and Ego-Boundary Disturbance は 4 個チェックされていて一番多く、自己愛性障害の事例と近縁であることが推測される。逃避的なところは、現実場面でアルコールに依存し、逃避する傾向となって表れていると考えられる。薬物への依存は、DSM-III-R の診断項目に入っている境界性人格障害の特徴でもある。

さらに、事例 G 子は 4 事例の中でも Fabulization Response が 18 個チェックされ、最多となっている。この中で overelaboration は 3 個あり、これはカードにないものまで取り入れて反応を作るというスコアであり、たとえば先の「コウモリは夜と洞窟と月というイメージ」(Ⅴ) という反応では、コウモリのイメージによって「周りは夜」とされ、背景が夜になってしまうという具合である。内的世界のイメージによって外界が彩られて見えるという様相が明確にみとれる。

④事例 H 子

事例 H 子の場合も Fabulization Response が 11 個出されていて数が多いのだが、内容的には「人間の骨盤」がカードⅠの第一反応からみられ、全体で 7 個の解剖反応が一番目立つ特徴である。そのうち「人間の肺と気管と気管支と骨盤、肝臓、すい臓があって、その両脇にトカゲが 2 匹ついてる」(Ⅷ) (arbitrary linkage、detail description) というところで恣意的な思考様式が明確に表れている。生育歴のなかでは、彼の弟が 10 年来重度の身体障

害を抱えており、父親も身体を悪くしていたので、彼はその世話のために精神的な疲労感が強く、「病んだ身体」への関心は必然的に高くなったと考えられる。そのため恣意的思考の方向は、多く身体に向いているのであろう。

それに加えて、apology(object-critic)が12個と頻出しており、「果物(本当は丸い方が良い)」(Ⅱ)などのようにカードを批判するスコアが出現し、防衛的で批判的な態度が伺われる。一方では Obsessive and Circumstantial Response も6個あって、4事例の中では一番多く、exactness limitation や detail description のように、正確さや細かい部分にこだわるという強迫的な傾向が加わっていて、いわゆる“屁理屈”の多い人格であることがわかる。

6) 総括

本研究での境界性人格障害の特徴をみると、臨床場面で口法を使用する対象は人格や対人関係の問題を多かれ少なかれもっている人たちであり、思考様式とコミュニケーションの取り方について理解することの重要性は明らかである。思考・言語カテゴリーは、各病態における特徴をそれらの観点からとらえることができるものといえる。境界性人格障害の人たちは現実吟味力がさほど落ちていないといわれる病態であり、形式分析の数値上はさほど偏ってみえない部分もあるのだが、本カテゴリーは非常に境界性人格障害らしい存在様式を明らかにしてくれる。

我々が心理療法を行っていく場合には、言語的なかわりのなかで表面化してきた自我防衛や対人関係の問題を分析していくことになるだろう。したがって自我防衛や恣意的思考のあり方、空想の世界、対人関係の持ち方など、その詳細やニュアンスを知ることがその後の治療に有効になるのである。この4事例の中でも、恣意的な思考様式は共通しながらも、その自我防衛戦略はそれぞれ独自であることが伺われた。

また個別の事例検討でもみてきたように、大カテゴリーのなかでは同種の病態レベルであっても、それぞれの抱えている問題や生活歴によって、スコアには違いがみられ、それぞれの作話内容の構成も異なっている。つまり、個々の事例が抱えているファンタジーや内的な空想世界には相違があるといえる。さらにその相違を明らかにしようとするれば、それは通常の個別事例検討になっていくだろう。その意味では、本カテゴリーは形式分析と個別の事例分析との橋渡しを担うことになる。

今後これをさらに発展、活用させるためには、カテゴリー自体の整理、統合も必要である。本カテゴリーは臨床的適用上、スコアリングが繁雑であり、熟練しないと使用しづらい。また個々のカテゴリーは、どの病態においても出現するものと、1個だけでも重い病態を示唆する重要なサインである場合もあり、出現数のみでは同列に論じられない。そして、それも含めて、数量的な検討が今までなされてこなかったことなどが問題点としてあげられる。そこで課題として、さまざまな病態水準の事例に適用するなかで、カテゴリーを使用しやすくすること、個々のスコアの重みづけを勘案すること、数量的比較の可能性などの検討が肝要であると考ええる。これにより、より臨床的で心理療法的に直結する工夫ができるのではないかと考える。

3. 境界性パーソナリティ障害者への臨床的適用

ロ・法を境界性パーソナリティ障害者に施行し、「思考・言語カテゴリー」によって明らかにされた特徴は、他の病態のクライアントにも意義あるものであり、筆者は他の研究者たちと共同で、自己愛性人格障害者、外来統合失調者、一般大学生などを対象として研究を積み重ねてきた（堀内他，1991、高橋他，1992、城野他，1993、星野他，1995、森田他，1996、長野他，1997、中原他，1998）。それらを通して、従来の形式分析では捉えきれない各々の対象者の特徴が明確になった。

その途上にあって必要なのは、一つは対象者の幅を広げて対象者の数を増やすことであり、今一つは臨床場面での有効性を確かめることである。後者の観点から筆者たちは発表を行い（中原他，1998、高橋他，1998）、重要な示唆が得られた。

また一方、前節では4名の境界例の検討を通して、同じ病態水準でも生活歴や個人のパーソナリティの違いによって小カテゴリー（スコア）の様相における相違をみてきた。臨床的適用を高めるためにはそれらの特徴を明らかにし、その意味についての検討が必要である。

そこで、境界例の1事例を取り上げて、そこに表れたスコアの意味について検討したい。スコアを詳細に検討することにより、事例の特徴が生き生きと記述することが可能になると考えられる。さらに本カテゴリーによる事例理解が心理療法を行っていく上でも有用であることを検証するために、スコア上にみられた特徴が心理療法場面にどのように反映され、生かしていくかを考える。

そこで、DSM-IVによって境界性パーソナリティ障害と診断された1事例にロ・法を施行し、名大法に基づいて分析する。それと同時に心理療法も継続して行い、心理療法上の特徴と思考・言語カテゴリーに表れた特徴との照合を試みる。前節で述べたように、同じ病態水準でもスコアには違いがみられることがわかったので。特にスコアを中心に持ち上げて分析し、心理療法への適用を考えていく。

1) 事例の呈示 I子 女性 20代後半

家族は祖父、母親、同胞が2人でI子を含めて5人である。父親はI子が幼児期に離婚し、彼女には記憶がほとんどない。祖父は気骨のある努力の人で、I子は尊敬している。I子が頼ってきた母親は年齢より若く見え、「黙ってなさい」というのが口癖で、肝心な時には家にいない人であったという。

幼少時のI子はおとなしくて、何でも人にあげてしまう子どもであった。中学時代には優秀な成績を修めるが、この頃から金縛りにあうようになる。専門学校を卒業後は医療関係の仕事に就く。男性と付き合い始めるが、皮膚病がひどくなり、会うのが嫌になって別れるものの、症状はさらに悪化する。その後3年間勤務するが対人関係がうまくいかなくなり、抑うつ感がひどくなって情諸的にも不安定になる。霊的な力を持っている人と知り合ったのがきっかけで、一時的に幻聴が出現する。精神的に混乱し、精神科の病院に5回の入退院を繰り返す。そして20代終わりに、当時の主治医と関係が悪くなったこと、自立のために1人暮らしをしようと転居したことをきっかけに、精神科病院に来院し、主治医からの依頼により週1回50分の面接を開始する。

2) 面接経過

#1.

初めて会った I 子は中肉、中背で顔色が悪く、皮膚が荒れている。抑うつ的で生気の無い表情をしている。前の病院でもカウンセリングを受けた経験があり、来院理由を問うと饒舌に話し始める。それによると「周りに取り残されちゃう感じがする」とのこと、人に何か少し言われても気になってひどく落ち込むという。専門学校を出る時に特にひどくなり、学生の頃から交際していた男性がいて、結婚の話も出ていたにもかかわらず、結婚すると自分のために迷惑がかかると思って断ったことがあるという。

話が多岐にわたり、焦点が絞れない印象を受けたので、「あなたが解決したいことは？」と尋ねると、「たくさんありすぎる」と言う。「最初は皮膚病で家にこもって結婚も断ってしまった。父が小さい時からいなかったためか、男の人はすごく恥ずかしい」とのこと。生活歴なども自発的に語るが、多弁で自我の統合不全を感じさせる。Th は焦点を絞れず、面接のオリエンテーションをして終了する。

#2.

20 分ほど遅刻して来院し、鍵を落として探していたので遅くなったというので、Th は定期的にきちんと来院しないタイプの人という印象を持つ。話を聴いているとしだいに話題が過去の生活歴の方に移っていく。Th は話を整理して治療方針をはっきりさせる必要があると考え、病態のアセスメントと目標の明確化のために心理検査の実施を提案する。

#3.

面接時間にロ・法を実施する。導入はスムーズである。

#4.

ロ・法の結果を伝え、「情緒的には豊かな人だが、時に感情に流されることがあり、悲観的なものの見方をしたり思い込みが強いところがあるようだが」と話すと、肯定して「小学校の時に、車の転落事故で川に落ちた人はさぞかし冷たいだろうなと思ったら泣けてきた」と思い出を語る。悲観的に考えたり、思い込みが強いことについても自ら認めている。自立することと男性とうまく付き合えないことも彼女の改善したい問題であるということ、これらを対人関係の問題として、カウンセリングの目的とすることを治療契約のために話し合う。

#5.

遅刻や欠席が多く、朝起きられないので、午前の面接を午後にしてほしいと要望する。治療構造が守れない I 子であり、遅刻すると面接の時間も短くなってしまうので、充分話せない不全感も感じる Th である。それを話題にして「時間は今のままで、頑張ってきちんと通って来ることが大切」と話すと、「なるべく遅れないようにします」と言う。

#6.

先週は来院せず、理由を問うと「全く忘れていた」と答える。その後、この間に起こった出来事に言及し、現在妻子ある男性と交際していて、それを止めようと思って電話したが、連絡が取れずにパニックになり、行きずりの男性と知り合ったという。その人に事情を話すと「相手の男性が責任をとるべきだ」と言われ、結局その男性と一晚過ごしたという。「人間不信がすごくある」とも語り、人間不信なのになぜ初めて会った人と一晚過ごしたのか聞くと、「逆に何でも話せた。賭でそういう人を信じてみようと思った」と答え

る。Th は行動化と判断し、ロ・法の結果からも枠組みを提示する必要があると考えて、「先週来院しなかったのも同じだが、問題が生じるとそこから逃避してしまうようで、そのような行動には賛成できない。それについて自分の内側を見つめてみる必要があると思う」と伝える。

#7.

調子が悪く、朝起きられない日が多いとのこと。昼間何をしているのか聞くと、「覚えていない」と答える。新たに知り合った男性と性関係を持ち、「男の人はそういうことをするものかと思ったので」と言う。面接時間の変更希望もあるが、今のままでと伝えると、「甘えてしまうので今のままの方が良いか」と納得している。

#8.

彼女が「行動することに警戒したり、怖がったりしてしまう」と話すので、聞くと「小さい時からしっかりしているといわれて、仕事してた時もしっかりしてる振りをしていた」という。その後しだいに皮膚病やきょうだい話になっていく。Th はそれに注意を向けようとして、「行動が怖くなるという話は？話題が流れていってわからなくなるが」と指摘すると、「ああ、すいません。話すことがいっぱいあって、その頃の苦しいことが一杯あって、出てきちゃう。止めていただかないと。誰にも言えなかったので」と返してくる。自分では統制できないようで、Th の方はどこかに焦点付けをしていかないと、I 子自身も感情を吐き出し、垂れ流すだけになってしまうという危惧を感じる。

#9.

1 回面接を休み、その理由について聞いてみると「2 カ月ぐらい面接を断った方が良いかと思う。人との約束が守れない」とのことである。きちんと来院できないことを気にしているようなので、行動の問題について考えるのが面接の場であり、負い目に感じる必要はないことを伝える。話題がまた移っていくので、Th が「どうもまた話がそれるが」と割って入ると、「すいません。思い出すと出てきて」と応じるので、「そうなることについて考えると良い」との指摘をする。「過去の話が多くなるので、今の現実的なことがよくわからない感じ」と伝えると、「そういうことを考える時間が少ないのかもしれない」と返してくる。

結婚に対する両価的な気持ちと、母親に頼ってきたが、肝心な時には不在だったことに対する気持ちが交錯する彼女である。

#10.

I 子が早く来院しているので Th が「今日は早く来ましたね」と言うと、「ちょっと涼しくなったのと今朝早く起きたので」と答える。調子は悪くて弟とケンカしたと報告し、弟がわがままをいうので、言い合いになったとのことである。母親に「あなたが甘やかしたから弟があんなふうになった。私たちを守るために父と離婚したというけど、父の面倒がみれなくて子どもの面倒がみれるわけがない」と批判したという。その後、交際している男性ともケンカし、I 子の中で怒りが問題になってきているが、Th は言語化せず、話題は過去の思い出に繋がっていく。

次の週は調子が悪くなったとのことで来院せず、それ以後面接には来なくなってしまう。主治医の診察に何回か来院し、消化器の治療で有名な病院に行くとのことで転院する。

3) ロールシャッハ法による分析

①ロ・法の概要

事例Ⅰ子のロ・法の概要を表 2-9 ～表 2-12 に示す。

表 2-9. ロ・法プロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I.				
9"	ハ	①チョウ、黒いチョウか、ガにも見えるけど、羽を広げたところ	①羽でここが真ん中の部分、思い出すと気持ち悪い。(ガ?) ガは大嫌い。母はチョウが近づいてくるとすごく怖がる	W FMi/FC'+ A P Adis overelaboration personal experience
	ハ	②この真ん中のところカブト虫、すべて見えたもの?	②(カブト虫?) カブト虫も真ん中だと思うけど、どうしても人に見えてしまう	D1 F+ A N modified response question for instruction
	ハ	③動物か人か、4つしがみついている。ちょっと怖いけど、宗教でやってるけど、自分が周りの人を支配する -1'40"-	③<先に③を話す>新興宗教みたいな支配しようという人。(どこ?) 最初キツネに見えた。テレビの見過ぎか動物霊か、私も独占欲が強い。自分の中にもこんなものがある	W Ma(FM)+ H/A Rel/Dcl/Drel/Daut apathy in decision personal experience
II.				
4"	ハ	①中国の人が両手を合わせてる。何かヒザのここがちょっと気持ち悪い。血が出る。こちらの人の表情笑ってる	①中国の人がヒザを突き合わせて。ロケットは真ん中のところで、噴射してる。(中国人?) 以前、知り合いの人の薬飲んで、体質が合わなくて大変な目にあった。(血?) これが内臓に見えた。見学で病院に行ったら手術が多かった	WB Mp/Fmp+ H/ Bl Atf Bf Hha loose association affective elaboration definiteness(era) arbitrary discrimination personal experience
	ハ	②ロケットが発射していく -1'35"-	②ロケットで噴射してる。スペースシャトルとかそういうの	Ds5+4 Fma+ Tr/ Sc Hhat definiteness (position) fablized combination
III.				
10"	ハ	①人が向かい合って	①顔見合わせて首。高慢な感じに	D1+1B Mp+ H/Cg P

		る。これが、ハイヒール。お尻をつきだした格好	見えます。私のほうが綺麗なのよっていう	Hcmpt overdefiniteness
	ハ	②仮面ライダーみたいな。昔テレビで見た。部分的でも良いんですか？	②虫の触覚の、トンボとか肥大した顔に見える。これが目、顔のその部分。仮面ライダーというよりトンボ	D6 F+ Hd/ Pch question for instruction modified response personal experience
	ハ	③これがチョウネクタイ	③思い出したことで良いですか？（似てたのは？）これ結び目でこうなってる	D4 F+ Orn N question for instruction
	ハ	④こうやって手を広げてる -1'33"-	④こう手を広げてる。（何？）虫か仮面ライダーみたいな	D5+5+6 FMi+ Hd/ Pch apathy in decision
IV.	10"	ハ ①大きな巨人みたいな、ウルトラマンの怪獣。大都市があって、踏みつぶしてる	①大魔人みたいなのが踏みつぶしてるみたい（？）これが足です。これが尻尾、顔で上から見下ろしてるみたい。薬飲んできたから眠たくて	W M'a FV+ H/ Athr HH Daut definiteness /self critic utilization for illustration
	ハ	②これが木の幹で、ツリーみたいな感じ -1'25"-	②これ木があって、これが緑だったらわかるんですけど、木とか葉っぱ。クリスマスツリーのよう	W F+ Bot Pch object critic
V .	9"	ハ ①私ガとかチョウとか嫌いなんですけど、ガとかチョウに見える。小さい時から母も嫌ってた	①今見てもガには見えない。斜め向きのコウモリ。仲間に入りたいんだらうけど入り方を知らない	W M'+ A Agl Adef overelaboration
	ハ	②コウモリにも見えます。人の気持ちをを持ったコウモリが寂しそうに背中を向けて	②ガというよりもチョウ。飛んでるチョウ。アゲハチョウの黒くなったようなのがうちによく来た	W FMa FC'+ A P Adis personal experience affect ambivalency overelaboration

		-1'32"-		
VI.				
30"	ハ	① 反対にしても良いですか？ アジの開きみたい。この間もスーパーでアジの開きを見た	① これが尻尾。味醂干しのようなのがあったからそのイメージで。よく家で作ってもらってた。もともと肉類は好きじゃない。魚類食べて育ったから	W F+ Fd Por question for instruction personal experience
	ハ	② 水族館で見た。ちょっと色が黒いから、もっと綺麗な色だったけど、エイ	② 尻尾でそのままヒラヒラって、よく水族館好きで行く。自由で良いなど。もっと広い海で泳げたら良いなどと思う	W FMa+ A Pch object critic overelaboration personal experience
		-1'20"-		
VII				
8"	ハ	① 中国人に見えるけど、漢方に関係してる。中国って良いイメージがないけど、中国の舞踏	① ここで切れる。2人の中国人が向き合わせでこういうポーズを取ってる。あと中国人の特有の髪形。手もこう、ここウエストで着物を着てる	WB Ma+ H Cg Rec Prec definiteness personal experience
		-1'20"-		
VIII.				
10"	ハ	① 前の病院でもやったけど、この色を見ると安心する。水彩画？葉祥明の絵が好きだった。動物が2匹いる。色彩画を使った絵を描きたい	① ここから気分が良くなったんだけど、これがモルモットか何か。あんまり怖くは見えない。これが足で、顔、身体があって足をこうついで。何か見えるというよりホッとした	D1+1 FMp FC+ A P Prec direct affective response personal experience
		-1'30"-		
IX.				
50"	ハ	形じゃなくても良いですか？この線が綺麗だなんて思ったし、この色を見るとホッとする		direct affective response question for instruction
	ハ	① ひらべったいピンクがかった花ビンに	① 下が花ビンのツボ。緑があって、お花がガーベラかな。黄色いよう	WA FC+ Orn Flo Pnat Porn

		葉っぱとお花	な、ここの色が気にいった (D12)。 水色が好きで、部屋も水色に統一 してる	personal experience
	ハ	②反対に見たらチュ ーリップが4本。小 さい時おじいちゃん が作ってくれたカブ の葉っぱみたい -1'45"-	②ここ4つあって、これが葉っぱ で (D3+3)、ピーターラビットの 宣伝によく出てくる。スーパーで 出てるようなカブを赤くして葉っ ぱをつけたようなイメージ	D2+3+3 FC+ Fd Porn changed response personal experience
X.		前は朝鮮半島の地図 って言った。今見て もそうは思わない		denial
57"	ハ	①部分的に見ると、 これが貝殻。ブルー は好き	①綺麗な両方巻き貝。海に行って 来た時も貝採ってきたけど、綺麗 なものが好き。確かいわさきちひ ろさんの絵も同じような絵があっ た。(貝殻?) 昔お母さんが水彩 でも習いに行ったらと言ったこと があったから	D1+1 F- A Pnat personal experience loose association
	ハ	②トトロの何かが向 かい合ってる。(?) うちに住みついでる 虫みたいなかわい いのが向かい合ってる。 いろんな色があると 綺麗	②よく見たけど、虫歯菌とかそう いうものが向かい合ってる	D3+3 FMp- A/ Pch direct affective response personal experience
	ハ	③カニに見える	③甲羅があって、足が2本出てる	D4+4 F+ A Adef
	ハ	④新緑の葉っぱ5月 くらいの	④ほんとに綺麗な色彩、ここが 虫食い。微妙に綺麗	D11+11 FC- Bot Pnat Agl definiteness arbitrary linkage affect ambivalency
	ハ	⑤これが水着みたい。 母と海外へ行こうと 言って風呂場に海	⑤水色のビキニ、ストラップがあ って	D10 FC+ Rec Cg Prec Msex personal experience

	絵が貼ってある。もう少し太って水着が着たい -3'45"-	
--	----------------------------------	--

表 2 - 1 0 . 形式分析のスコア

Total Response	24	Content Range	12
Tur%	8.3%	W : M	11 : 6
A	41.7%	M : FM	6 : 7
H	29.2%	Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ/R	33.3%
M : Σ C	2 : 2.5	F%	29.2%
H+A : Hd+Ad	15 : 2	F+%	71.4%
FC : CF+C	5 : 0	R+%	79.2%
		P	4

表 2 - 1 1 . 感情カテゴリーのスコア

Anxiety	22.6%	Dependency	12.9%
Bodily Preoccupation	3.2%	Positive feeling	12.9%
Hostility	12.9%	Miscellaneous	3.2%
		Neutral	8.3%

表 2 - 1 2 . 思考・言語カテゴリーのスコア

No.	Major Category	score	数
2)	Abstraction And Card Impression	direct affective response	4
3)	Defensive Attitude	question for instruction modified response changed response self critic object critic denial	5 2 1 1 2 1
5)	Fabulization Response	affective elaboration definiteness affective ambivalency overdefiniteness overelaboration	1 5 2 1 4
6)	Associative Debilitation And "Labile Bewusstseinslage"	apathy in decision	2
8)	Arbitrary Thinking	arbitrary discrimination arbitrary linkage	1 1
9)	Autistic Thinking	viewpoint fusion fabulized combination	1 1
10)	Personal Response And Ego Boundary Disturbance	personal experience utilization for illustration	14 1
12)	Association Looseness	loose association	2

②ロールシャッハ反応の特徴

反応数は 24 個と平均的、content Range=12 で知的興味や関心も適度に持っている人である。M 反応は 6 個あって、共感性や対人的関心も持っている。F + % = 71.4 % で、若干現実吟味力の問題が感じられること、M : F M = 6 : 7 で、内的統制力が不十分であることが伺われる。一方、外的な統制は F C : C F + C = 5 : 0 で、統制過剰といえる。

感情カテゴリーでは、Neutral=4.2% と情緒的には豊かで多彩な感情が投映されており、中でも Positive Feeling=41.9% が一番高く、特にカラーカードに対して退行的で肯定的な感情が多く示されていることが特徴である。

思考・言語カテゴリーから見た I 子の特徴（4 個以上のスコア）は以下の通りであり（表 2-12 参照）、それについて詳しく検討を加えたい。

i) direct affective response

反応ではなく、「この色を見ると安心します」（Ⅷ）など、カードに対する情緒的印象を述べたもので、直接的に感情が溢れてしまっており、外的な統制がうまくいっていないことが示されている。形式分析では、外的統制はむしろ過剰と解釈されるが、情緒的な刺激をうまく反応に統合することができないために、形式分析での決定因からは外れてしまっ

ている。その部分を本カテゴリーは拾い上げており、反応として形成される以前の段階での特徴がみてとれる。

ii) question for instruction

自己不全感を示すと共に、質問という形で Th に対する関心を表現したり、その指示を得ようとする対人希求的なものでもあり、対人的関心の高さがうかがえる。I 子の場合、「形じゃなくても良いですか？」(IX)、「前のことって良いですか？」(X)などがみられる。「前のこと」というのはテスト状況からはずれる内容であり、彼女自身どこまで話しても良いのかわからないということでもある。枠組が I 子にとって不明瞭であり、Th に質問して依存することでそれを明確にしてもらいたいという意味がある。

iii) definiteness

「中国人の初老の人」(II)のように、反応を限定付けするものであり、知的、情緒的な要因によって生じ、森田ら(1996)、長野他(1997)でも述べたように、知性化とコミュニケーションへの意欲と考えられる。知覚をより豊かに、正確に伝える意欲を示しており、正常人にも多く出現するスコアである。しかしこれは許容範囲があり、あまりにも限定付けが激しいものは恣意的な思考様式に繋がっていくだろう。

iv) overelaboration

これはv)と共に、筆者たちの研究(高橋他, 1995)で述べた境界例の特徴と共通しており、反応内容が「人の気持ちを持ったコウモリ。何か寂しそうに背中を向けてる」(V)のように作話的になる。情緒的には豊かだが、恣意的な思考様式のために修飾過多になっているといえる。そしてこの作話的な物語はI子なりの心情が表現されており、内的な世界がよくみてとれる。

v) personal experience

I子の場合、personal experienceが非常に多い。例えば「アジの開き(VI)」の反応に続けて、「元々肉類は好きじゃない。魚類食べて育ちましたから」と、個人的な経験について語る。個人的な関係付けの形で恣意的思考が表出され、カードとの客観的な距離が失われて、自己愛的な傾向も感じられる。また「(ガ)小さい時から母も嫌ってた(V)」というような、このスコアでの母親に対する言及も多く、母子密着感が感じられる。

vi) loose association

主語が不明確になったり、反応から離れた言辞がみられ、連想弛緩が起こっている。「中国人」(II)の反応から、「中国っていうと共産主義」などがこれに当たる。外的情緒刺激によって統制が崩れやすく、自我境界が曖昧になる傾向がある。このスコアは病態が重いことの証左であり、2個という少ない出現数でも注目すべきである。

これらチェックされたものの多くは、筆者たちの研究(高橋ら, 1995)で指摘した境界例の特徴と重なっているが、加えて特徴的なのは、personal experienceが多いこと、loose

association がみられることの 2 点である。過去の経験に対するこだわりが強く、時に連想弛緩を起こして病態水準が落ち込む可能性があると考えられる。これらが I 子の病理を理解する上で重要な点であろう。

4) 考察

I. スコア特徴の心理面接上での表れ

次に前述述ベスコアの特徴と心理療法での関連を検討していく。スコア特徴が実際の面接場面では以下のように表れていると考えられる。

①感情過多、恣意的思考 (personal experience・overelaboration)

感情的な発言や過去の体験への言及が多く、I 子がしゃべるのを面接者が途中で口を挟まなければ、ずっとしゃべり続ける傾向があった。また恣意的な思考は、男性との付き合いが苦手だとしながら、初対面の人と「賭でその人を信じてみようと思った」と言って一晩一緒に過ごしたりするような考え方に表れていると考えられる。

これらのスコアは筆者たち（長野ら，1997）が従来の本カテゴリーの一部を再編成して新たに提起した Fablization / Arbitrary Thinking のカテゴリーの中に含まれるものである。

②対人的意識の強さ、面接者への依存 (definiteness・question for instruction)

I 子是对人的意識が強く、異性への関心も高い。また一見治療意欲や問題意識を持っている。definiteness は Communicative Elaboration（長野ら，1997）の一つとして対人的意識やコミュニケーションへの意欲の表れと考えられる。question for instruction にみられる自己不安全感は、面接で「取り残された感じ」「1 人になると寂しくてどうしようもない」など、空虚感や抑うつ感と共に語られているところと一致する。また面接中に「話題が変わってしまう」と面接者が指摘すると、「話を止めていただかないと」と述べているのは、面接者への依存と関係していよう。

③統制の悪さと自我境界の曖昧さ (personal experience・overelaboration・direct affective response・loose association)

面接中に話が切れにくく、話しているうちに話題が変わっていった了解しづらい。また面接時間に遅れたり休むことが多い。日常生活においては異性関係がルーズになりがちであった。これらからは行動や情緒統制の悪さや自我境界の曖昧さが伺われ、上記のスコアの、恣意的で個人的な情緒の色合いの強い在り方が示されているといえる。

一方、生育歴の中では幻聴の既往があったり、包丁を振り回すなどの行動も示されているが、それらは強い情緒刺激が加えられたり、状態像が悪化している時であろうから、面接している時期に表れていなかったのは自然なことであろう。だが loose association のスコアは病態の重さを示しており、治療者が留意すべき点である。

II. 思考・言語カテゴリーと心理療法

このように思考・言語カテゴリーの小カテゴリーには、事例の個別の特徴が明確に示されている。これは彼女の病理を示すと共に、治療のための重要な視点を提供する。形式分

析で基本的な特徴を把握したうえで、本カテゴリーの詳細な検討により、心理療法の中で扱うべき問題を明らかにできるといえる。

Th は、心理療法の中で主訴が明確でない彼女に対してこれらを理解しやすく伝え、治療目標の明確化を図った。そして治療の枠組みを作り、行動化を面接の中に取りこんでいくことに努めた。境界例の治療においては、心理療法中に生じてくる here and now の出来事を取り上げることが肝要であるといわれるが（牛島，1991）、まさにそれがロ・法の結果に表れている。佐伯（1984）は、ロ・法と精神療法を照合し、「テスト的退行が治療的退行の様相を予見して」と述べているが、本事例では面接の中で即時的に予見が明らかになり、客観的なテスト所見として伝えることで、I 子にも受け入れやすくなったと考えられる。しかし心理療法は中断に終わっており、枠組や逸脱行動の方に Th の注意が向きすぎて、過去に囚われる彼女の存在（personal experience）を受容できず、Th への依存を引き受けられなかったこと、ネガティブな感情を取り上げなかったことが原因と考えられる。

一方、definiteness や question for instruction など、対人的コミュニケーションへの意欲が伺われ、I 子は神経症水準の防衛機制も示していた。従来、逸脱言語表現として取り上げられていたネガティブな側面のみでなく、健康な部分も包括する思考・言語カテゴリーの適用によって、クライアントのポジティブな側面への働きかけの可能性を探ることができることも臨床的な有用性といえよう。

ゆえに、このような形で「思考・言語カテゴリー」を用いることが、検査結果を心理療法の中で有効な手段になると考えられる。むしろ、元来面接のやりとりの最中に生じていたコミュニケーションのあり方や思考過程、対人関係のあり方などが、カテゴリーによって、より明確な形で整理されたという側面もあり、ロ・法と言語のやりとりはここで重なっている。つまりロ・法と言語的な面接は、まったく別のものではないことが改めて確認される。

第3章 風景構成法の実践的活用

－「穴」のある風景構成法(LMT-Hole)の創案

1. 「穴」のある風景構成法創案のきっかけ

LMT は 1969 年に中井久夫によって発案された我が国独自の描画法であり、もともとは河合隼雄がスイスから持ち込んだ箱庭療法にヒントを得て、箱庭に導入可能かどうかを診断するための検査の手法であった。しかしその技法が単に心理検査の側面のみでなく、心理療法的価値が高いことが知られるようになった。創始者の中井はロ・法があれほど発展したのは、創始者の Rorschach が夭逝したために後の研究者が自由に研究、発展させられたのではないかと述べ、自らはその後論文を多くは発表していない。だがその目論見が功を奏したのか、山中、皆藤をはじめ、多くの研究者によって実践、研究されて発展してきた。皆藤(1994)は、LMT に関しての広範な研究を行い、基礎研究から心理療法の中での使用までまとめる中で LMT の臨床的価値を確認している。高石(1996)は自我発達の観点から風景の構成型について考えており、構成についての発達の段階を検討している。佐々木(2006)は LMT の研究を臨床的な研究と非臨床的な研究に分けて、その全体像を詳細に概説している。

この技法の特徴は、心理検査としての側面と治療技法としての側面を併せ持つことである。方法としては検査者、あるいはセラピストが A 4 版の画用紙にサインペンで枠取りをし、描き手、あるいはクライアントに川、山、田んぼ、道、家、木、人、花、動物、石、付け加えたいものの順で Item を描いてもらい、その後色鉛筆やクレパスなどで彩色してもらう。さらに描かれた絵について両者で話し合うというものである。

課題画であるということで、他の描画テストと同じように統計的な調査や再テストしての変化を見ることを可能にし、バラエティーに富む Item と彩色はさまざまな自己表現を可能にして、他の描画テストの追随を許さないといえよう。そして箱庭療法がかなりの場所と費用を要し、対象者が子ども中心であるのに対して、LMT は費用もさほどかからずに簡単に使用することが可能であり、成人に使用しても違和感のないものであることが特徴的である。そのために LMT が使用しやすく、Item や色彩などの情報量の多さは臨床的にも魅力的であると考えられる。

また、一般的に心理療法を行う場合、その経過は病態水準や目的、環境要因などに影響されるとはいえ、ある程度の期間にわたって継続されることが多い。最初に診断や見立てをしていても、心理療法の過程ではクライアントとの相互作用の中で転移、逆転移も働き、セラピストが迷ったりうまくいっていないと感じさせられることもままある。ロ・法は繰り返しの実施には向かないが、LMT は適度の再施行が可能なので、心理療法の中で LMT を用いることは有用であると思われるが、その真骨頂はやはりそれ自体が心理療法として機能することであり、この絵画を介してのやりとりが言語と非言語的なコミュニケーションの場を生成し、クライアントの心の変化や成長を促していく原動力となりうることで最大の利点であると考えられる。

筆者は比較的病態水準の軽いクライアントに LMT を差し向けるうちに、構成はそんな

に崩れておらず、おだやかな風景を描き、多少未熟ではあるがこの程度ならば健常人の描く絵としても十分通用するものを描く人が割合多いと感じるようになった。そんな絵を描く人でも実際には症状を持ち、投薬を受け、カウンセリングを受けているのだった。筆者が十分 LMT を使いこなせていないのか、クライアントをよく理解できていないのか、描画上に表れないように防衛がうまく働いているのか、あるいはもともと必要のないことをしているためにクライアントが自分自身を十分投射していないのか、いずれにしても筆者はそれらのズレを感じていた（後から考えれば筆者自身の未熟さの故でもあったろう）。

そんなおり、ある 30 代の男性のクライアントに LMT を描いてもらっていたところ、「花」の Item を教示した際に、小さな黒く塗りつぶした丸を描いた。何だろうと思って Inquiry の時に「それは何ですか？」と聞いたところ、クライアントは「穴です」と答えた。「花」と「穴」を聞き間違えたのであった。その場はそれですませたが、そのようなことは初めてであり、筆者はなぜ間違えたのか考えるようになった。Freud の錯誤行為についての論述も思い浮かんだが、そのクライアントに関してはたまたま心理検査を実施するために 1 回だけしか会っておらず、その後も話す機会がないままだったので、その時に特に錯誤行為に及ぶ必然性がないように思われた。そしてそのクライアントは「穴」を描くことで何かメッセージを発していたのではないかと、それは「穴」の奥に存在する無意識の領域からのメッセージとして何か意味があるのではないかと考えるようになった。筆者自身が「穴」という物から連想することも多々あり、何かが投射されそうな予感もあって興味を引かれ、その意味や臨床的な適用について検討することにした。

2. 「穴」に内包されるもの

「穴」という Item は、無意識や異界への通路としてさまざまな物語や昔話などにもよく出てくるものである。中国では地下に死者の国「黄泉」があると考えられていたし、日本でも「地獄」は地下に、そして「天国」は天上にあるとイメージすることが多い。やまだ（2010）は「古事記」においても「黄泉の国」は地下世界のようなのだという。そして海上他界は沖縄のニライカナイのように、祖霊が行く海の彼方であり、洞窟の穴などから海底につながる地下他界のイメージも含んでいると述べている。天照大神は天の岩戸に隠れたが、これも「洞窟」という穴であり、そこに隠れることによって世界を暗闇に変えるほどの力を持つのである。

洞窟は古来からの遺跡が見つかる場所でもあり、アルタミラやラスコーの洞窟は誰でも知っているだろう。ラスコーの洞窟遺跡が見つかったのは 17 歳の少年の飼い犬ロボが穴に落ちたことからであった。穴の中には宝物が隠されていたのである。フランスにあるガビュー洞窟はラスコーと同時代のものだというのが、これはある家屋の地下室の拡張工事のうちに、トンネルに通じる入り口を発見したというからおもしろい。それを紹介している Williams（2012）は、シャーマンの儀礼では穴を通して靈魂の世界に至ることが多いという。たとえば、ハドソン湾のイヌイットは“地中へと降りる道”を説明し、海中に行くシャーマンは“まるでチューブを伝い落ちていくように滑り降りていく”と語る。アメリカ北西海岸のベラ・クーラ族は、そうした穴が“戸口と炉辺の間にある”と信じている。カナダのアルゴンキン族は、地層をくぐり抜けて旅をし、“地球のお腹（内部）へ通じる穴

は靈魂に至る道である”と考えており、アマゾン川上流のコニボ族は“木の根を伝って地下に降りる”と語る。世界の多くの地域で似たような物語がある。

キリスト教の世界では、Jung (1968) が神秘的な場所として、中世の教会大聖堂の下にはクリプト (crypt) と呼ばれる地下室があったと語る。中世の頃にはあらゆるキリスト教会にあった密儀が行われる場所で、プロヴァンス語では“隠れ場 (le musset)”と呼ばれていた。このクリプトの概念はキリスト教世界観 (Weltanschauung) より下に位置するものであり、キリスト教信仰よりも古い何ものか、シャルトルの下にある大聖堂の下にある異教徒の井戸や、ヘビの住む古代の洞窟のようなものにわれわれを導いていくという。

著名なルイス・キャロルの童話「不思議の国のアリス (もともになった物語は『地下の国のアリス』 Alice's Adventures under Ground)」では、アリスが時計を持ったウサギを追いかけて穴に入り、異次元の世界を体験する。日本にも物語があり、昔話「おむすびころりん」では、転げたおむすびが穴の中に落ちるが、その下には異界が待っている。川端康成の小説「雪国」では「国境の長いトンネルを越えると雪国であった。夜の底が白くなった」との有名な出だしで、トンネルによって現実の世界から“夜の底が白くなる”異次元への導入を図り、そこで非現実な世界での女性とのかかわり、Jung 的にいえばアニマとのかかわりを豊かに描いていると考えられよう。やまだ (2010) はこの「雪国」の冒頭について、「『この世からあの世への移動』を表す日本語として過不足ない基本構文でできている」と述べている。

さらに同じ川端康成の「伊豆の踊子」でも、初頭の主人公と踊り子がかかわる場面では、やはりトンネルを抜けた所から物語が始まっており、「トンネル出口から白塗りのさくに片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた」と書いて別世界への導入を図っている。トンネルという穴が別世界への通路として機能していることは間違いない。

穴やトンネルの奥には日常的、常識的な世界とは対称的で非常識的な世界が広がっているとみなされ、意識下のファンタジーの世界がある。ジュール・ベルヌのSF「地底旅行」では、地底に降りて行くと大海があって古代の恐竜が跋扈する世界が広がっている。「地下室からのふしぎな旅」(柏葉幸子, 2006) では地下室は他の世界と繋がっている。かつてアメリカのテレビ映画であったアーウィン・アレンの「タイムトンネル」は、現在と過去や未来との時空をつなぐトンネルの物語であった。

またディズニーランドでは、すべての人が物語の最初から経験できるようにと、ウォルト・ディズニーの強い要望で入り口が1ヶ所しか作られていない。ワールドバザールのあるメインストリートは、彼が幼少期に過ごしたマーセリーンの町並みを模したものであり、東京ディズニーランドの天井は3千枚の雨よけのガラスで覆われ、奇しくもファンタジーの国に繋がる“トンネル”となった。ウォルトの幼少期への郷愁の世界と、このトンネルを通して、人々は「日常性を完全に遮断した空想の世界」(能登路, 1990) へと誘われ、ディズニーランドは「地上で一番幸せな場所」を提供する巨大な装置となっている。ここでは大人も退行して、ミッキーマウスの耳をつけることが許される。

河合 (1982) は昔話の主人公が森の中に迷い込んだり、深い穴に落ちたするのは「退行現象の記述」であり、それによって物語が始まることが多いとしている。また「火男の話」では穴を埋めようとして3日分の柴を中に入れるが、これは無意識へのエネルギーの注入であるとしている。また河合 (1976) は地下室の夢は無意識への通路であるとしているが、

地下室への路は階段であり、一種のトンネルの様相を呈している。Jung(1972)もまた夢の中で穴を見ており、牧場の地面に開いた「暗い長方形の石を並べたかつて見たことのない穴」を降りていくと、王様の玉座があり頭のとっぺんに目が一つある“人喰い”を見つけて汗びっしょりになって起きたのであった。Jung が3歳から4歳までの間に見たこの夢について、河合（1976）は父とその影ともいえる地底の王に出会い、生涯をかけてこの両者に架かる橋を見いだす努力を払い続けねばならなかったと述べている。

宮澤賢治の「銀河鉄道の夜」では、同級生のジョバンニとカムパネルラが銀河鉄道に乗って銀河を旅していくが、天の川に石炭袋（コールサック）を見つけ、“大きな真っ暗な孔”をジョバンニが、「僕はもうあんな大きな（やみ）の中だってこわくない・・・どこまでもどこまでもぼくたち一緒に進んで行こう」と言ったとたんにカムパネルラは見えなくなり、ジョバンニは目を覚ましてカムパネルラが川に落ちて死んだことを知る。ここでは大きな孔は冥府への入り口として描かれていることがわかる。

ここに出てくるコールサックは、星雲が光を吸収することによってできる暗い孔である。宇宙空間において、超新星がつぶれてできた“ブラッホール”はすべての物質や光を吸い込む“黒い穴”であり、はくちょう座 X-1(CygX-1)がそれであると考えられていて、時空が歪む異次元の世界が実際に存在する。また“ワームホール”は時空のトンネルであり、「マウス」と呼ばれる出入り口から別世界にくぐり抜けることができるが、これは“エキゾチックな物質”が支えるという(Thorn, 1997)。それがファンタジーなどではなくて、現実存在する可能性があるということが興味深い。

このように無意識的な世界は、穴やトンネルなどの通路によって繋がれており、物語ではここに入り込んだり、落ち込んだりすることで意味のある冒険をすることになっている。これには危険も伴うが、大きく成長する機会にもなる。また「落とし穴」にもなって危険な心の闇に落ち込むことになったり、「ゴミの穴」にもなって、いらぬ物を捨てる場所にもなる。「穴」というところから連想されること、あるいは意味することは一定の深さと広がりを持っていると推測された。

ただ、そのようなものであるとすると、無意識のカオスに近づき、あるいはその境界を突破するようなことには危険が伴うことも推測されよう。それには注意をし、クライアントに描いてもらう際には、何のために描いてもらうのかを十分考えなければならない。中井（1996）によれば、統合失調症者に風景構成法が可能で箱庭が難しく危険なのは、相当部分砂を掘ることによるものであり、それは砂の持つ「崩壊感覚」によるものであるとしている。そして箱庭は「土から（砂を掘って水へ）」の方向であり、LMTは「混沌から水へ、水から土へ」という方向を持つという。箱庭が危険な部分を LMT が安全なものにしているということになるが、ここで穴という Item はさらに地面を掘り、その先は水でもなくてさらに深いものを目指す可能性があるので、その点には十分な注意が必要であろう。

穴は元来両義的な意味を内包するものであり、欠損としての意味と、隠れはいるが価値のあるものだという正反対の意味も含まれている。たとえばチームスポーツのメンバーで「あそこは穴だ」といわれれば、そのポジションにいる人は下手でチームの弱点であるということになる。逆に観光地などで「あそこは穴場だ」といえば、多くの人に知られていないが、行ってみる価値のある良い場所であると判断される。「穴場」、「穴株」、「穴場」などは良い意味であるが、少しトリッキーな意味合いが込められているかもしれない。い

ずれにしても、穴は中身が空なのでさまざまなものが入れられ、投映を引き受ける場所になるのだろう。

編集工学を提唱する松岡（2007）は『『工事中』という建築現場の看板を見るのが好き』と述べ、それは中がどうなっているのかと思うからであり、「人が思考する概念も常に工事中」なのだという。工事現場の壁に穴が開けられていたら、誰もが覗きたくするような衝動に駆られるのも了解できるところである。実際に工事現場の壁には「中が見えるように窓をつけている」とテレビ取材で語っていた建設会社の人がいた。内側が見えないと壁を壊して見る人がいるからだそうである。穴の向こう側には何か興味深いものがあるのかもしれないというファンタジーをかき立てるのであろう。

さらに松岡（2009）は、日本文化の“ウツ”という言葉に注目している。これは「空」「虚」という漢字が当てられているように、本来何もないという意味なのだが、「竹取物語」の話ではウツロな竹の中にかぐや姫が育れ、ウツロな桃から桃太郎が誕生したのだという。ウツロなものはただの欠損ではなく、“ウツ”から“ウツツ”に移行し、“ウツツ”は「現」なので無から有が生じることになる。すると穴もただの「空」ではなく、豊穡な何かを生み出す場になることがあると考えられる。実際に量子物理学の世界では、極小のサイズにおいて不確定性原理に従えば、素粒子は「どこからともなく現れる、つまり無から有を生じる」（Gribbin, 1989）のであり、「空」は豊穡な世界を内包していることがわかる。

3. 「穴」のある風景構成法の創案と試行

前述のような考えから、筆者は LMT に「穴」の項目を付け加えようと考えた。まず、山中(1984)のいうように、LMT の項目呈示順序はロールヤッハカードの呈示順序のように完成されてしまっていて、10 個の Item が遠景群から中景群、近景群と並び、途中で何かを挿入することは難しいと考えられた。また「穴」というのは基本的に単独で存在することができず、「何かに空いた穴」になるという性質上、Item が呈示されていない状況では「穴」を描く場所も限定されてしまうことから、「穴」の Item は項目の最後で付加項目の前に付け加えることにした。

そして筆者が非常勤で勤めていた短大で、講義を受けていた受講生に対して「穴」の Item を付け加えて LMT を施行した。これを「穴のある風景構成法」と呼ぶ（以下 LMT-Hole と略）。また自分の受け持っているクライアントに同様の方法で LMT-Hole を施行した。

そして、主に神経症群と健常短大生の比較をしてみたのが以下の結果である。その結果「穴」には非常にさまざまなバリエーションがあり、種々の味が感じられるものであった。

この順序は後に「一番最後に穴というのは危険ではないか」との山中(2003)指摘を受け、「石、岩」の項目の前に呈示するようにしている。確かに穴が無意識への通路になり得るとすれば、不用意に穴を開けるだけでは心理的に負担をかけたり、自我の統合を乱す恐れもあると考えられる。

1) 健常群への施行

まず、健常群の結果を以下に示し、健常短大生がどのような表現を示すかみていきたい。短大生に集団実施をした結果が表 3-1 である。

健常群の結果（短大生 全員女性 98 名に実施 集団実施・無彩色）

描かれた穴の内容は以下の通りである。

表 3-1 . 健常群が描いた穴の種類

トンネル	20	説明なし	6
すみか	19	落とし穴	5
掘った穴	14	宗教的な穴	4
洞窟	12	防空壕	1
偶然、自然の穴	8	その他	4
隠れ家	6	合計	99

(数字は人数、1 名は 2 種類描画)

①トンネルの Item (図 3-1、3-2)

この中で一番多い「トンネル」は、図 3-1 にあるように「車が通るトンネル」などのように、他の世界との通路として描かれる。図 3-2 も同様に、「町に行くためのトンネル」が山に開けられている。隣町ではその位置づけはも今一つはっきりしない印象があるものの、「海へ抜けるトンネル」などもあり、広い大洋への憧れが感じられるようなものもある。風景の中にある穴の代表的なものが“トンネル”なのかもしれない。ある場所と別の場所を繋ぐトンネルは世界の疎通性を良くし、コミュニケーションさせるものともいえ、新しい世界へ風穴を開ける役割を持っている可能性がある。現実的にもトンネルは自動車や電車を通して、世界を繋ぐ役割を持つ。

図 3-2 で興味深いのは、トンネルの他に「イヌの掘った穴」も描かれており、“彼女にプレゼントする骨が隠してあったもの”と意味づけられていて、ユーモアを込めた愛情表現の Item となり、大事なものが隠されている穴もあるということである。



図 3-1 . トンネル (健常群 1)

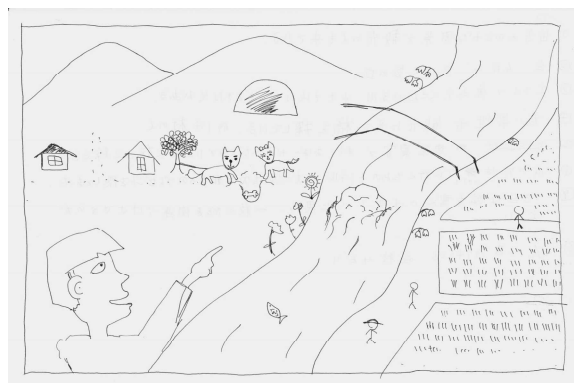


図 3-2 . トンネル (健常群 2)

②すみかの Item (図 3-3 ～図 3-4)

次に頻度が高いのが「すみか」である。図 3-3 は右手前の木に穴が開いており、「木に開いた穴。リスが住みついている」とのことである。この他小鳥などの小動物のすみかになっていたり、「熊のすみか」などのように大きな動物の場合もある。LMT にはもともと「家」の Item があり、家族や居場所、愛情欲求などの場所として、またその窓やドアなどはコミュニケーションの在り方を示すものとしての役割があるが、動物のすみかにはもう少しほほえましい“与える愛情”や、退行的な安心感などが感じられる。動物的な衝動性の収まる場所でもあるのだろうか。動物だけでなく「子どもたちの秘密の隠れ家」(図 3-4) もある。子どもの頃の秘密の場所昔は納屋だったり空き地の草むらだったりしたものであり、心が熟成される場所であったが、現代では失われてしまった。絵の中にノスタルジーを感じるとともに、秘密の場所がやはり必要なのかと考えさせられる。



図 3-3. リスのすみか

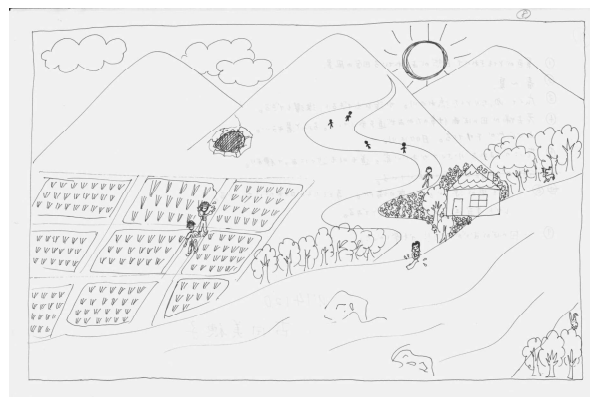


図 3-4. 隠れ家

③その他の Item (図 3-5 ～図 3-11)

「掘られた穴」は「ゴミ入れの穴」(図 3-5) だったりする。これは「後で肥やしになる」とのこと、ゴミなどのいらないものも溜めておくとも有用なものに変容するのは心の問題としても考えても興味深い。これは古い民家のような家の横に描かれているが、茶道では茶室の横に「塵穴」という小さなゴミ箱が作られる。これは来客直前にゴミがあった時に捨てる場所であるが、実際にはここに剪定した青葉と塵箸を入れて来客を迎える準備ができたことを知らせるのだという。安西(1995)は「少しの塵芥も我慢ならぬ粘着気質や、強迫神経症的心理の象徴」と述べているが、塵穴を見た来客が心をきれいに払って場に臨むという意味合いもある。“臭いくさいものには蓋をする”ということわざのように汚いものを見えないようにだけするのか、場をきれいにしておくのかも人によって相違があるのだろう。

そして「土地開発のための工事の穴」(図 3-6) もあり、自分の心を発見したり、開拓するための工事なのかとも思わせる。工事中のフェンスが立っており、穴に落ちないように危険防止の注意も促しているようである。「井戸」(図 3-7) などは意識下からのエネルギーを補給する意味があるのかもしれない。井戸の水は命の水となるかもしれない。また井戸は、先に述べたキリスト教概念にある“異教徒の井戸”(Jung, 1968) のようなものもあるのかもしれない。

何の穴なのかの説明がない者が6名と多いのは、集団実施であり、質問に対して個人的に記載するという方法のために書かないままになっていたからと考えられる。

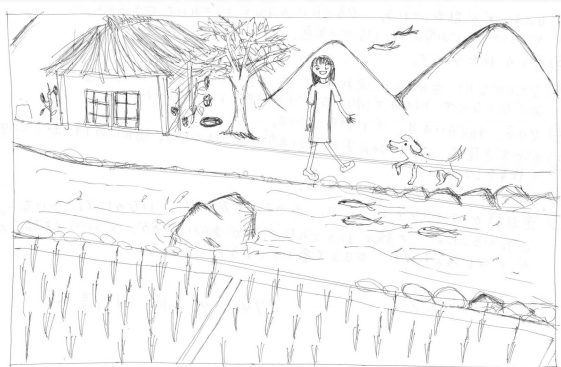


図3-5. ゴミの穴

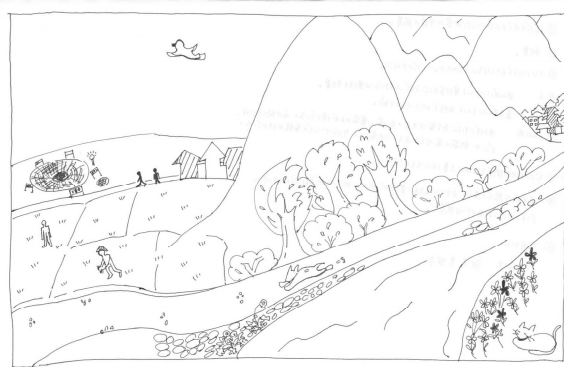


図3-6. 工事の穴

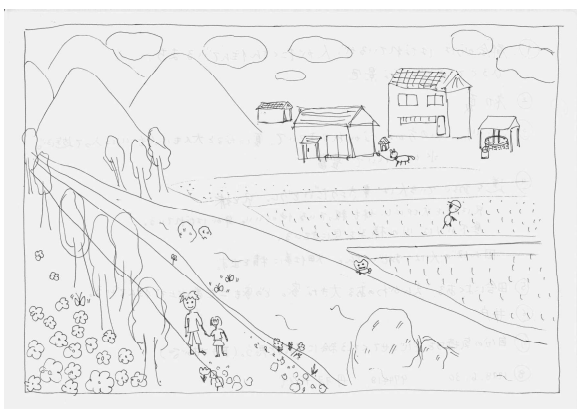


図3-7. 井戸



図3-8. 不思議な穴

また不思議な穴もあり、「たまたまできた穴を不思議そうに見ている少年」（図3-8）がいる。心の奥の不思議さに興味を持ってのぞき込んでいるのであろうか。前述したように穴の中には何があるのか、見えなくてわからないものに興味を持つ姿がみてとれる。

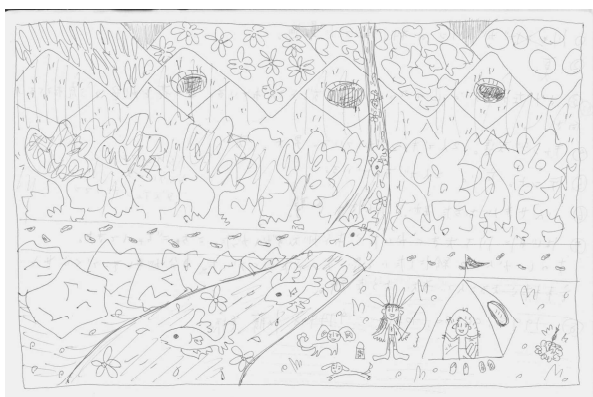


図3-9. 隕石の落ちた穴

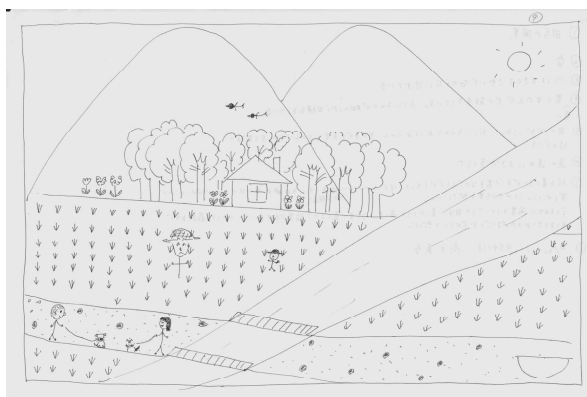


図3-10. 落とし穴

珍しい穴もあり、「隕石が落ちた跡で田んぼを直撃した」（図 3-9）というものがあつた。画面上部に 3 個開けられた穴は目立ち、隕石の後は外傷的な印象も受けるが、「楽しく描いた。自分がそこで暮らせと言われたら喜んで住むような所」という。人はインディアンのような格好をしており、全体がファンタスティックな場所になっていて、非日常的なことが起こる冒険的な場所として表されており、この穴は非日常性を演出している。

一方で危険な穴もあり、「道の途中に大きな落とし穴」（図 3-10）というのはどこか道のりに危険なものがあることを知らせているのかもしれない。

それとは逆に守るための穴もあり、「中に入った人はいないが、守り神が洞窟に奉られている」（図 3-11）というのもあって、穴が村全体を守っている。他にも神様が祭られていて「あまり人が近寄らないが、守り神が供えてあって週に一度この村に住んでる人全員でお掃除などに行く」というような、畏敬の念を持たれて存在するものもあつた。現実世界が見えない世界に通じているとともに、それは現実世界を包んでいることもあると考えられる。実際に宗教的な世界観では、そのような形のないものに支えられて現実世界での有用な対処に役立つことがあるのだろう。



図 3-11. 守り神

2) 臨床群への施行

次に表 3-2 は神経症レベルから高レベルの境界例に属する臨床群に対して個別に実施した結果である。

（年齢 20 代～ 30 代 30 名に実施 対象者は神経症レベルから高レベルの境界例）

臨床群では居場所や安全感を感じさせるような穴が比較的少なく、葛藤や不安を内包しているものが多い。「描けない」というのはやはり臨床群に特徴であり、想像力が必要とされたり、不安喚起的な要素があるために拒否しやすい可能性があると考えられる。

また、人数が少ないことと心理療法を行う際や途中で実施しているために単純には比較できないが、それぞれに意味が感じられる。たとえば図 3-12 は対人不安の高い女性の事例である。この穴はトンネルであり、「車が行き来できる広くないトンネル。向こう側は隣町でトンネルはまっすぐで近いけど、道から行っても同じところへ着く。トンネルが怖いからみんな大回りをしていく」と語り、深層に踏み込む不安を語っているようである。心理療法の途中で語られているのであり、筆者は早期に問題に直面するよりも、今は遠回

りするぐらいが良いのかと感じたものである。

図 3-13 のトンネルは不適應を来した女性で、「山の向こうに行けるトンネル。中は行ったことがないからわからない」と、これも今後の行く末の不明さを語っているようである。図 3-12 では道が穴まで通じているのに、これは道が通じておらず、他の世界へはまだ遠くて道筋がついていないのかと感じさせられた。

図 3-14 は不安神経症の女性で、「子どもが作ったような落とし穴。遊びながら庭に掘った」と言う。穏やかな風景だが、犬も人もどことなく穴に注目しているように見える。図 3-15 は母親との葛藤を抱えて来院した男性事例である。「家に穴が開くのは変なので、道に開いた穴って感じで描いた。水たまりのような車がガタって入るぐらいの穴」と説明し、過干渉な母親との葛藤は“家に穴”が開いているようなものと暗示している。

表 3－2．臨床群が描いた穴の種類

トンネル	5
偶然、自然の穴	4
洞窟	3
落とし穴	3
掘った穴	3
描けない	3
すみか	1
防空壕	1
隠れ家	1
炭坑の跡	1
工事中の穴	1
先に進めない穴	1
水たまり	1
井戸	1
地獄に通じる穴	1
合計	30

()内人数



図 3－1 2．トンネル(臨床群 1)



図 3－1 3．トンネル(臨床群 2)



図 3 - 1 4 . 落とし穴

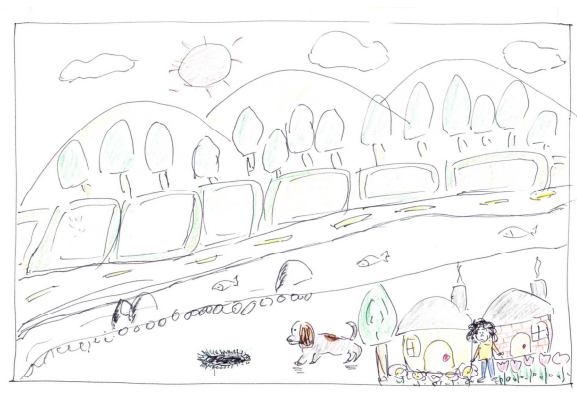


図 3 - 1 5 . 道に掘れた穴

中には「先に進めない穴」とか「地獄に通じる穴」など注意を要するものがあり、その意味を考えることはもちろん、穴の Item を付け加えず、通常の方法で実施することは考慮すべきである。精神病圏のクライアントに対しては、描画のみならず、ロ・法や心理検査そのものも実施しない方が良い場合もあるので、穴 Item だけの問題でもない。

4. 表現された「穴」Item の意義

健常群と臨床群の結果から、「穴」Item からその意義やそこから読み取れるものについて考えていきたい。実際に施行した時にどのようなものが表れるのか、どのような意味があるのかについて考えていきたい。

1) 想像性の刺激

穴は他の Item より強い情緒刺激を与え、想像性を刺激する。「穴を描いて」と教示すると、「えっ？」という言葉が聞かれることが多くあり、臨床群では個別に施行しているが、集団で実施した健常群でも同様にみられた。インパクトのある Item であると考えられる。風景の中で穴というのは通常は考えられないものであり、他の Item が直接の名称を呈示するのに比べると、教示を聞いた後で想像力を働かせる余地が高いと考えられる。健常群、臨床群ともに 10 数種類の異なったものが描かれた。

これはたとえば、「山」は「山」しか描きようがないのと比較して相違が大きい。現法の中では「動物」は比較的多種類考えられるものである。年齢が低くなれば恐竜や非現実的な動物も描かれる。それ故にこそ、普通は見られないような物が現れた場合には注意が必要なのである。たとえば、「マンモス」とか「ドラゴン」などが描かれれば、読み手としてはなぜその動物なのかということを考えざるを得ない。山中（1984）は動物が人間より大きく描かれた場合にはエネルギー総量が大きいと述べているが、衝動性の高さとともに種類の広がり具合にも関係しているのであろう。「花」なども多種あるが、もともとポジティブな Item になりやすいので含まれる情緒は良いものが多くなろう。例外としてパーソナリティ障害の事例で、「花から硬い石が落ちてくる」というようなものもあった。

一方で「穴」という Item は通常の風景の中には見当たらない想起しにくいものであり、

「風景の絵を描いて下さい」という教示のみで描くとしたら、穴を描く人は稀であろう。何に開いた穴なのか、たとえ「トンネル」であったにしても、穴からトンネルを連想して、トンネルを穴の一種と判断して、どのように位置づけて描くかという内的な作業が必要であり、「穴を描いて」という教示から連想されるものは多岐にわたる。よって投映されるものも多様なものになる。

だが、穴も「風景」という枠組みから外れることはできないので、それに立脚している限りはひどく崩れることは少ないようである。かつて統合失調症のクライアントが、穴の教示をした時に、「女の子の穴・・・」と小さい声で言うので、聞き直すと「え、いや」と言って水たまりの穴を描いたことが一度だけあった。女性器の連想があったことは間違いないが、いかにも風景には不釣り合いであり、抑制された。

もしどこか外を歩いている時に、道ばたや脇に何かそこそこの大きさの穴が空いていたら、何の穴なのか、中に何かあるのだろうかどと誰しも立ち止まってみたくなるのではなかろうか。穴はそうした想像性を刺激する Item であると考えられる。つまりシンタグマティックな LMT にあって、パラディグマティックな投映が多く働くといえる。

2) 無意識への通路

穴の中は暗い。光と闇の二項対立、意識と無意識の対比のもとでは、穴は隠された見えない部分を担うことは間違いない。地下への穴やトンネルは、象徴的に意識から無意識への通路であり、異界への橋渡しと考えられる場合があると考えられる。“橋渡し”は実際に LMT において川に「橋」を架けることがよくみられ、寺沢（2010）はその意義や、言語までを含めた幅広い橋渡し機能について述べている。実際に後述する第5章2の事例において、最初の LMT-Hole では川に「橋」が架けられていなかったが、心理療法の終了間際には橋が架けられていた。分断された内的世界の統合には架橋が必要である。山中（1996）は画用紙の縁に描かれた枠の外側から内側に向かって橋を架けた事例を紹介しており、この架橋の叫びは強い印象を与えずにはおかない。この「橋」と「穴」は中間点という意味では類似点があるが、橋の両側は違和感のない世界であるが、穴の場合では片方が見えない世界であったり、わからない世界であったりする。やまだ（2010）は橋の上は「どこでもない世界」とであるというが、「穴」には雰囲気性ともいうべきものがあり、暗かったり、薄気味悪かったり、外は暑くても中は涼しかったり、安心感があったり、ある種の気分性が反映されることも多い。「底なしの穴」や「落とし穴」は無意識への不安やある種の被害感、場合によってはいたずら心などが感じられるが、「井戸」などのようにエネルギーを得る命の水のような場合、あるいは田んぼに引く水を通す通路もあって生産性をサポートするようなこともある。

これが昔話や各種の物語では異次元の世界に没入してさまざまなストーリーが織りなされるが、LMT では表現される世界は一枚の紙の上であり、表舞台が中心になっているので、異次元が展開される舞台がないのが普通である。違う世界があることを示唆するか、あるいは心理療法の中で言語的に不足分を補って展開される可能性があると考えられる。一方ではこれは不安喚起的にもなるので、クライアントの抱えている不安や問題の大きさが伺われ、心理療法を行う際のめやすになるのではないかと考えられると同時に、不安が高くなることについての注意も必要であろう。

3) 保護的空間

「動物のすみか」や「隠れ家」など、「家」とは別種の保護空間が表現される。動物が何かをしているのはロ・法のスコアでいえば FM であり、より未分化な活動性や衝動性を表わして、「すみか」はそれらをより穏やかな形で抱え、より保護者的な立場から愛情備給を表わしているのかもしれない。「クマのすみか」などは、クマという動物は力強くどう猛であるが、すみかにいるクマは休んでいて冬眠なども連想され、あまり恐ろしくは感じられない。またライオンやドラゴンなどのもっと恐ろしげな動物のすみかという例はなかった。

「隠れ家」は家とは違う秘密の空間であり、本来居るべき場所である家の裏にある一時的な居場所である。他の大人から隠れる場所であり、日常な場所から離れることで現実が行き詰まった時に安息の時間を与えてくれる場所でもある。逃避的な場でもあろう。子どもたちが集うことで社会的な関係を育む場所でもあり、退行的だがポジティブな感情を感じることができる。元来「穴」の語源について考えてみれば、穴は土室^{けつ}の入り口の形であり、古く黄土地帯では一般的な住居形式であったという（新訂字訓，2005）。穴を住居として雨露をしのぎ、外敵から身を守って安心できる場所としたのは、古来から世界中にある方策である。すみかや隠れ家はより退行的な安全基地であり、母親の子宮を思わせる場所でもあるといえよう。

そのゆえか、臨床群では「すみか」や「隠れ家」など保護的空間を表現するものは少ない（合計 2 名）。健常例では全体の 25 % あったのと比較すると、臨床事例の場合にはそのようなゆとりがないことを推測させる。逆に考えれば、そのような場所が必要であることがうかがえる。何かあった時に逃避できる心理的空間は心のゆとりであり、臨床群にはそうした余裕が少ないと考えられる。

4) 上下方向へのベクトル

穴の示す世界は内界の闇を示すこともあれば、宗教的な世界を表すこともある。地獄にも天国にも通じる可能性があるのかと思われる。「神様が祭られている」という穴は見えない力に守られている印象を受けるが、「化け物が封じ込まれている」というものもあり、ネガティブなものから自分を守る意味もあることがわかる。「地獄に通じる穴」ではやはり下方に恐ろしい世界が予想されている。人が住んでいる場所を起点に上と下の方向を指し示し、上下の相反するベクトルが示されるのかもしれない。

第 3 章 2 でも述べたように、天国は上にあり地獄は下にあるという共通の認識は世界で広くみられるものであり、心の上下方向へのベクトルを示し、穴の Item によって、心象風景のなかに別種の力が働くありさまが描かれることがあると考えられる。

5) 穴の大きさ

臨床群はサイズが大きいものが比較的多く、さらに奥が深いものは自我の弱さも考慮して心理療法を実施することが肝要と思われた。「工事中の穴」などにしても、大きな穴は危険な印象を受けるものである。無意識への直接的な接触は危険もあると考えられる。しかしまた一方では、臨床事例への施行は心理療法の中で行われているものであり、工事中ということ自体“心の工事”をしている反映である可能性も高い。逆に考えると、危ない

穴に見えているものも、セラピスト・クライアント関係の中で表出されているという点に注意することが重要である。

いずれにしても穴が風景の中の欠損である場合、それが大きいほど、何がそうさせているのか考えることが重要であろう。自我関与が大きい場合には、意識的な意味合いが強いこともあるし、自我関与の度合いが少ないのに大きい穴が描かれた場合には、無意識的な問題に注意する必要がある。穴が自分にとって遠い存在である場合には、小さく描かれたり、「ただあった穴」とか「へこんだ穴」などと表現されることがある。

6) 葛藤の存在

「工事中」「わからない」「先に進めない穴」など、心理的な葛藤が感じられるものがある。内的な問題、課題などと関連する可能性があるだろう。臨床事例ではその時々での心理療法的な問題と関連があるのでないかと推測される。また「わからない」などは、前述したようにロ・法と同じような反応生成過程を考えると、連想の貧困さや現実にある物と穴という教示のマッチングがうまくできないこともあるのかもしれない。それらの意味については事例ごとに考える必要があるだろう。

7) 穴が描けない場合

穴が描けない人や、あまり自我関与していないように見えるものもあり、想像性の問題や内界との接触が乏しいとか、否認や抑圧が働いていることも考えられる。本論では統合失調症の事例などには触れないが、彼らは小さい穴を隅っこに描いたり、道の窪みやゴミの穴だったりすることが意外に多く、無意識を閉じている印象を受けることがある。「描けない」という人は、それ自体は自我防衛であるかもしれないが、不用意に自分をさらけ出すより良い場合があるだろう。そして、描けない Item があるのは穴に限ったことではないので、その場合にはそれぞれに意味を考える必要がある。

5. まとめ

穴の Item を LMT に付け加えて描いてもらうことで、前述してきたようなさまざまな意味合いが伺われ、クライアントについてのセラピストの認識が広がり、話題を膨らませることが心理療法にも有用になると考えられる。もちろんその場合には何の穴かだけではなく、その位置や大きさ、風景の中での意味合い、人との関係など多くの要因が考慮される必要がある。「落とし穴」があっても画面の隅の方に小さく描かれているものと、人が歩いている道の先に大きく描かれているものとは自ずから意味が異なるし、ただ道に「窪みがあるだけの穴」と「川から水田に水を引くための水路」では自我関与にも相違があると思われる。

臨床群では「地獄に通じる底なし穴」などの危険性が感じられるものもあり、注意が必要であるが、ここで挙げた臨床群はすべて筆者が個人心理療法を行っているクライアントであり、個別に治療的な枠があることで深い内的世界が表出されやすくなっている可能性がある。健常群で「すみか」や「隠れ家」などが多いのは、遊び心があったり、家とは違った居場所、内的な場所を抱えていることが推測される。「宗教的な穴」は健常群のみ

にみられ、ヌミノースなものとの繋がりがあるのかもしれない。健全な宗教性というものを心の世界で持っていることは大事であり、心が病んでくるとそうしたもののから遠ざかってしまう可能性も考えられよう。

石上（2008）は社会・文化環境論の立場から「窪地」を「ある程度閉鎖性をもった、人に安らぎを与えてくれる物理的・意味論的空間」と捉え、石上（2009）では、宮崎アニメを分析して窪地が①子宮、②生命、③聖域、④シェルター、⑤休息、⑥暖かさ、⑦ふるさと・基地、⑧一体化、⑨自己回帰、⑩秘密、などの意味空間として使用されていると述べている。この窪地に関する意味合いは LMT-Hole に表現される「穴」の意味とずいぶん重なっており、納得できるものがある。ただ、ここでは「窪地」がポジティブなものであるという意味合いが強く、健常な心理を考えればそのような結論に傾くのもうなずけるが、臨床的には無意識の深淵に対する危うさや、時には精神病理的な問題を含んでいることを忘れてはならないだろう。

しかし上述してきたように、全体として「穴」という Item は多種多様なイメージを賦活させ投映を引き受けることがわかり、これを付加することが心理アセスメントや心理療法に有効に働く可能性があると考えられる。

第4章 「穴」のある風景構成法からの心理療法的理解

前章において健常群から臨床群までの LMT-Hole を概観してきた。LMT 自体が優れた心理検査法であり、心理療法としての価値も高いものであるが、「穴」の Item はそれに付加価値を加える可能性があることが示唆された。LMT-Hole を臨床的に使用するにあたって、どのような意義と適用が可能なのかを実際の臨床例をもとに述べていきたい。

1. 遮断された過去への理解

言語による心理療法が可能なクライアントでは、言語面接による心理療法が適用であることはいうまでもない。しかし、そのようなクライアントでも投映法という媒介を導入することで、方向や指針が明確になったり、洞察を助けたり、より内省しやすくしたりすることができると考えられる。言語とは違う媒体、意識によって明確に統制されていない描画のイメージは、言語とは違う無意識層からのメッセージをもたらすであろう。その情報からのクライアント理解によって、かかわる側もずいぶん安心してかかわることができ、そのことがセラピストの器を大きくしてクライアントを包み込みやすくすることがあると考えられる。この器はクライアントのみでなく、夫婦関係の問題としては配偶者も含めた家族に対する器としても働くことがあろう。それにより家族がクライアントの器として本来の役割を果たすようになることが期待される。

そして、穴の Item が無意識への入り口を表すと想定すれば、それは言語より深い面との接点でもあり、心理療法の進展と深い関係が出てくる。ここでは無意識への通路として穴の Item が考えられ、これが遮断された過去への理解に役立ったこと、「より大きな器」としての投映法の使い方を例証する事例を挙げて検討していくことにしたい。

1) 事例の概要 J 子 女性 20 代後半

J 子の幼少期には両親が離婚して、彼女は母親に引き取られて生活していた。ところが小学校低学年の時に父親が彼女を連れ出して家に連れて帰り、1 年程は父親と一緒に暮らしたことがある。父親は暴力的な人であり、そのころ父親と同居していた女性も J 子に食事を与えなかったりしたようである。彼女は誰かと一緒に食事をするのがなく、1 人でいるのが好きな子どもであったが、死にたいぐらい寂しかったこともあったという。母親に連れ戻されて一緒に暮らすようになるが、ひどい貧乏暮らしだったために J 子は人にもよくいじめられたとのことで、小学校の時の記憶が断片的にしかないという。

中学校になると記憶ははっきりしていて出来事は覚えているものの、今度は母親と暮らし始めた男性にも暴力を振るわれるようになって嫌な思いをする。高校卒業後に専門学校に入学、その後は夫が自営する会社に入職して後に結婚に至る。

その頃上司であった夫にはよく怒られ、怒られた時によく嘔吐していた。仕事がしだいに忙しくなると、20 代前半には内臓を悪くして 3 カ月間入院したこともあった。結婚後は夫が仕事で外泊することが増えてくると、J 子は入眠困難、頭痛、悲哀感、身体が震えるなどの症状が悪化して心療内科のクリニックに受診する。主治医から心理療法の依頼があり、筆者が担当して隔週での心理療法を始める。

2) 面接経過

X年3月よりX+2年12月まで46回の面接を実施して終了とする。

【第Ⅰ期】調整期（#1～7）

中肉中背で清楚な服装のJ子は硬い表情で訥々と話す人であった。夜寝られず、緊迫した雰囲気になると吐いてしまい、それは夫との間で生じてくる雰囲気であった。夫は「やさしいということがわからない」という人であり、夜遅くまで仕事をしていて、家に帰っても仕事の話ばかりしており、仕事の売上げが悪い時は文句を言われ、体調が悪くなくても仕事を休ませてくれず、家に帰っても寝るまで叱られるとのことであった。仕事でかかわっているうちに何となく結婚してしまったと振り返り、離婚することも考えたことがあったが、なかなか踏み切れないと語る。J子の言うことを聞いてくれない夫であり、体調が悪くなるのは夫とかかわっている時のことが多かった。

J子の発症には夫との関係の問題がかなり影響していると考えられたので、Thは治療契約の話とともに、もし夫が来院してくれるようだったら会ってお話したいと伝えた。当時Thのいるクリニックでは大人の心理療法を担当できるのはThだけなので、家族へのかかわりを他の担当者に任せることはできなかったし、家族調整ができたらしようということも考えたのである。

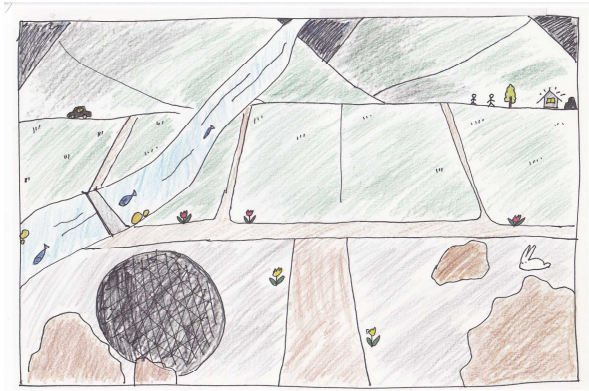
次回夫が来院したので、彼女の病気についての考えを聞いてみると、「病院に通わせないかんと思いました」と語る。J子の体調が悪いとの認識はあり、何とかした方が良いとは思っているようであったが、原因については意識していなかった。Thは体調の悪さが心理的なことが原因で起こっているようであることを話し、家庭での雰囲気が大切であり、①家で仕事の話しをしない、②怒らない、③リラックスできる機会を作ることを夫に頼んだ。もちろんそれでうまくいくわけではないが、外面的には夫の姿勢は協力的に思えた。

5回目にも夫が来院したが、「J子はこの前来た時よりも明るくなった」と話し、父親から暴力を振るわれて育ったので「優しいということがわからない」と戸惑っている。夫が長期の出張をすると、J子は見捨てられた感じがして寂しくなることをThから伝えると納得している。

#6では、彼女は小さい頃から窮地に立つと嘔吐していたと話し、母親に授業参観に来てほしいと言えなかったり、先生から給食費の滞納を注意されたり、別れた父が訪れても吐いていたという。兄にもいじめられたことがあり、当時母親の同居人にも殴られたが、思い出しても何の感情もわいてこないというので、「つらいことを感じないようにしてきたのではないかと思う」と伝える。夫は「J子が悪いのは生い立ちのせいで、自分のせいではない」と言い、自分との関連を否定する。

【第Ⅱ期】過去への接触（#8～27）

今回の症状の直接のきっかけは夫との問題であり、それは続いているものの、そのような問題はJ子の幼少期の家族徒の問題を背景としていることは明らかであり、その頃のこととはあまり記憶にないというJ子だが、描画では無意識までを含めたありようがどうか、LMT-Holeを通して眺めてみたいと考えて、8回目を実施する。



4 - 1 . LMT-Hole ①

< LMT-Hole ①実施 >

この絵は夜で、家と車に電気がついている。季節は夏の終わり頃。川は上部が空に抜けており、家と人は小さく、穴は画面手前に開いている。工事中で途中のままになっていて、大きくて（直径 10 メートル以上）底が見えず、落ちると危ないような穴という。

穴の位置は左下の原初的な場所であり、描かれ方も風景にそぐわない印象を与える。「底が見えない穴」は彼女の過去であると共に、無意識的な不安も強く感じられ、危うい問題が露呈されていた。この「途中の工事」を続けていく事が心理療法の課題と考えられた。この絵は 8 回目のセッションで描かれているので、面接の影響も含まれていて、すでにこのような仕事が面接で行われているということでもあろう。昔母親を追っかけて行った記憶があり、橋の色は覚えているが、思い出そうとすると嫌な気持ちになるという。Th は「思い出したくないことを無理に思い出す必要はないが、少しずつ繋がっていくと良いかもしれない」と伝える。この穴について、「何か昔の体験が影響しているかもしれませんね」と Th が言うと、それに応じて彼女は過去の出来事を思い出したり、過去のことを知っている伯父に聞いたりするようになる。

次に彼女は、小学校以前に人に預けられていたのを伯父から聞いたりしたこと、両親が離婚した時にタクシーで母が行ってしまうのを追いかけていたのを思い出して、嫌な気持ちになったこと、小学生の時母親が入院して病院から登校していたことを忘れていたのを思い出している。父親に預けられた時にご飯を食べさせてもらえなかったのと、叩かれたことがあったことを語る。Th は「ムリしなくても良いが少しずつ繋がっていくと良いですね」と伝える。

まだ嘔吐はあるが、J 子は「何が寂しいのかわかってきた。誰かが離れていくのが寂しい。Th に『夫が研修に行くのに妻がみんな寂しいわけではない』と言われて気がついた。テレビでお父さんが子どもと仲が良いのを見るとうらやましいなと思うが、前はそんなことを思うと母に悪いと思っていた」と語る。Th が「ご主人に怒られてる時はどうしてますか？」と聞くと、「黙ってます」と答えるので、「お父さんと似てる？」と聞くと、似ているという。夫は結婚直後「オレがほんとに怒ったら、家庭も仕事も捨ててしまうから怒らせないようにしろ」と脅していたそうで、父親との関係を反復していると思われたので、Th が「今のご主人はお父さんと似ているので、あなたは夫として選んだかもしれませんね」と指摘すると、「そう考えてみたことはなかったが、そう言われると納得できる」

と肯定する。

#10 では自発的に夢を報告する。

＜夢 1＞何人かとエレベーターに乗って上に行く。落ちて途中で眼がさめる。男の人が何回も出てきて懐かしかった。相手は顔がわからないが、恋人か結婚している。

＜夢 2＞男性と一緒にいて、私はすごく幸せで、その人はやさしくて夫とはまったく違う。起きてからも懐かしい感じが残っている。

夢 1 の「エレベーターに乗って上に行く」のは、受付から面接室に行く時と同じであり、Th は面接場面と類似していることを J 子に指摘する。夢 1 では無意識的な不安を感じるものの、夢 2 の良い男性イメージはとても大事な気がする」と話すと、J 子は「それを聞いてよかった」と言う。落ちて行く途中で目が覚めるのであり、内界の不安定さや危険性も内包していると思われたが、「やさしい男の人」は内的に良い男性イメージを持っていることがわかり、それは Th イメージでもあると推測された。

次の回では夫とのあつれきが語られ、以前は体調が悪くて病院に行きたくても会社のことを全部やれなどと言われて“ショックだった”が、今は“嫌だ”と感じるようになったという。そして夫に「お前はレベルが低い」、「お前を捨てる」と言われていたが、Th と話してから受け止め方が変わり、「捨てる」という言葉を真に受けなくなったという。Th は J 子が夫に捨てられる恐れを感じなくなり、成長してきたが故に、逆に夫との関係が悪化する可能性があることを考慮し、関係の調節を図るために夫に来院を促す。

#13 に来院した夫と J 子に Th は心理検査を実施して夫婦関係に介入する。

バウムテストと TEG を行う。

＜J 子バウム①、②＞（2 枚目は別の木を描いて下さいと教示）

樹幹が葉で覆われている割には描線がとぎれていて、寂しい孤独感が伝わってくる。枝がぎごちなく描かれて傷つきやすく、自己不全感の高さを感じられる。2 枚目では刈り取られた枝も心的外傷か自由な成長を阻害されている印象を与える。

＜夫バウム①、②＞

描線が荒れており、描かれた場所が上の方に浮いていて現実にはしっかりと足をつけていないよう。根本の部分は隠されているように見え、発達早期の問題が感じられる。②では木が 2 本描かれていて、母親か J 子などの他者への依存とともに、2 本の間の描線の荒れた描き方は、夫婦間か二者間の葛藤の存在を感じさせる。

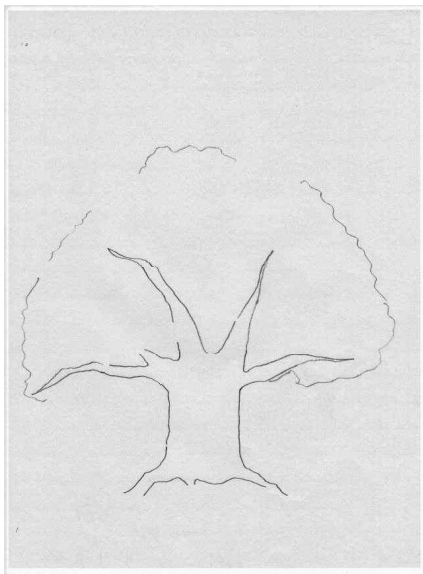


図 4 - 2 . J 子バウム①

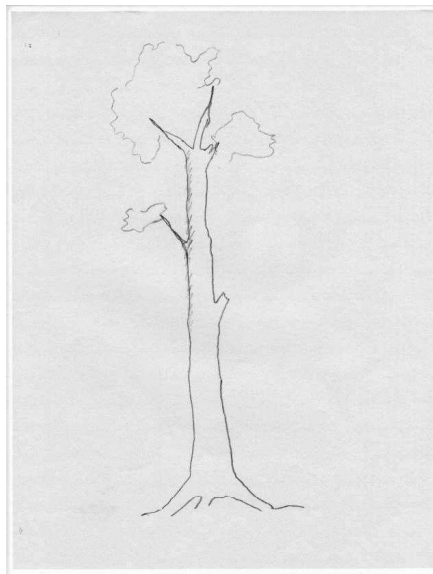


図 4 - 3 . J 子バウム②

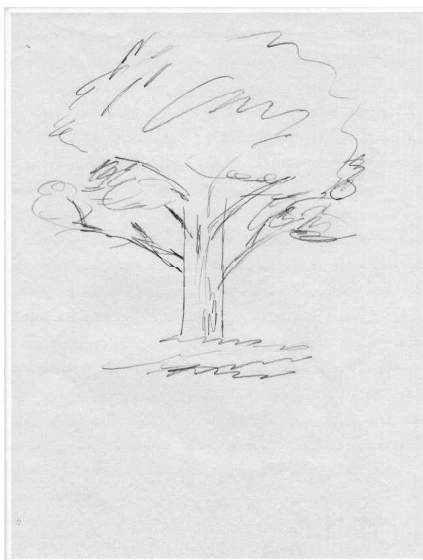


図 4 - 4 . 夫バウム①

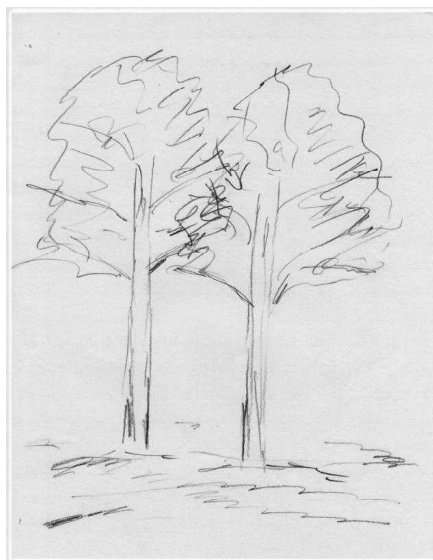


図 4 - 5 . 夫バウム②

#14 で結果について説明< TEG : J 子→ 忍の一字タイプ、夫→ 孤高の人タイプ>
(J 子 : 6/10/9/5/15 Q=27 夫 : 20/11/16/13/3 Q=9)

Th が結果の説明をすると、夫は自分の性格傾向について納得するので、加えてもともと相性が良い夫婦だが、妻の葛藤が溜まってきて身体症状を出すようになってしまった。改善されてくると妻の FC の増加が夫の CP の強さとぶつかるようになる可能性があるの
で、CP の減少と NP の増加が重要かと伝える。

#15 で彼女は「夫が外国に出張に行っていたのでショッピングに行ってきた。夫がいな
い方が楽で好きなことができた。自分のために時間を使うのが楽しいと思った」と語る。
J 子は小さい頃から母親がおらず、学校の行事にも親が来たことはなく、何でも 1 人でや
るのが当たり前だと思って人には何も言わず、言えないというのが身にしみていたことな

どを思い出して語る。そして母と暮らすようになってからは、経済的困窮ののために習い事などができなかったのも、これからでも絵を習ったり、スポーツもやりたいと希望する J 子であり、「小さい頃から楽しいと思ったことがなかったが、初めて楽しいと思う」とうれしそうである。

夫もまた暴力を振り、震えが出て吐いたら「またトラウマか！そんなものは誰にでもある。殴られると震えが来るのか！」と言って殴るまねをして近寄ってきたという。その後も夫は攻撃的になることがあるので、Th は夫が暴力的になる時には J 子が家を出るように指示しており、そうすると夫も抑制が利くようになってくる。J 子と夫の父親はいずれも子どもに暴力を振るう人であり、夫も「愛情表現の仕方がわからない」と言いながら、少しずつ自分の問題にも目を向けるようになる。#21 では夫が母の愛情を受けられなかったことを認め、愛情の出し方がわからないことを冷静に話し合えたという。

夫は中 1 の時に両親が離婚し、母親と暮らし始める。きょうだいは多く、母親は怖い人であつたらしい。Th は「夫は母親の愛情を独占したいと思っていてかなわず、両価的な気持ちが J 子に向かっているよう」という解釈を伝える。#22 では「母が迎えに来た時に私は痩せすぎていて胃の具合も悪く、病院に受診したと伯父から聞いた。怒られた時、父は真冬に夜中も家に入れてくれなくて、隣のおばちゃんが入れてくれた。蹴飛ばされて膝に怪我をして、血が止まらずに病院に行った」と忘れていた過去を思い出して語った。

#27 にはまた思い出したことを語り、「橋と海が見えるところで暮らした覚えがある。父が女の人の親戚の家に 2 ヶ月ぐらい預けていたらしい。市場と商店街がある。この頃よく断片的に思い出す。父母が別れる時、歩道橋から母が行くのを追いかけていくのを思い出した。思い出すと嫌な感じがした。覚えてないけど引っかかっている。まだまだ思い出していないことがたくさんあると思う」と語る。

LMT-Hole で「穴」の奥を覗く不安を語っていた J 子が、面接においてしだいに過去の嫌な思い出や実際に現実の父親の問題とかかわっていくようになる。

【第Ⅲ期】関係の改善と現実へ（# 28 ～ 48）

この頃になると、J 子は「夫が『自分もおかしい』と言うようになった。もう何ヶ月もケンカしていない。」と語り、関係が改善してきて夫も内省的になってくる。楽しい生活が送れるようになったとのことで、薬がなくても眠れるようになり、仕事も順調にしているとこのことで「接客は苦手だけど、前よりはましになった」と笑顔で話す J 子である。

#32 では「夫はキレると興奮して自分が言ったことでエスカレートしていく。全然歯止めが効かなくなるけど、ある程度たつと収まるので、前みたいに別れるの何のという話にはならない」と夫のことを冷静にみている J 子である。それとともに、父親のことは気にならなくなってくる。#33 では、夫が過去について語ってくれたという。夫は兄弟だけで何年か暮らしたことがあり、貧しくて惨めでつらい思いを経験している。小学校低学年で父親とは別れ、小さい時に親が何もしてくれなかったことや、父母や兄にも叩かれて育ったことに不満を持っていて、結婚前には一度暴れて家具を壊し、母親を骨折させたという。義母も J 子が離婚すると、自分が息子の面倒をみないといけなかったので絶対嫌だと言っていることである。

夫は「怒り出すと止まらないのが嫌」と自分についての内省的になり、怒りが激しくな

ると J 子は Th のアドバイスに従って外に出るようにしていて、夫は朝になると反省している。夫の家族はきょうだいが多く、母親の方にイライラさせられたようである。一方では今でも 2 日おきくらいに母親に電話してる夫であり、「何話してるんだろうと思う」と J 子が言うので、Th は「ご主人はお母さんに甘えたい気持ちがあるのではないか」と指摘する。彼女自身は責任ある仕事を任されるようになり、大変ながらも充実感も感じているようである。

#36 では「休みがなくてきつい。病院に来るのがストレス解消」と言う J 子であり、Th は心のゆとりも出てきたように感じ、心のありかを訪ねてみたくなって次の回で LMT-Hole を実施する。

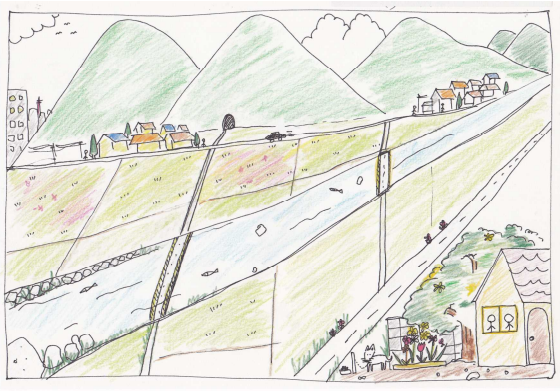


図 4 - 6 . LMT-Hole ②

< LMT-Hole ② >

図 2 は天気がよくて春のちょっと暑い日でどこからでも町に行ける田舎の風景である。家の庭には花がいっぱい咲いていて、小さいけれど感じの良い家。40 歳前後の仲の良い夫婦と子どもの住む家。トンネルはあまり大きくない山にあるトンネルで、都会に行く、いつも通るぐらいのトンネル。

LMT-Hole ①より構成もよくなっており、色彩も豊かになっている。Th としては安心できる結果であった。「穴」は「都会に行く、いつも通るぐらい」のものであり、面接で話し合っている心の問題が通常行き来するような、自我が容認しやすいものになってきたことが伺われた。

さらに次の回、彼女は妊娠したことを報告する。「夫も喜んでくれた。あの冷酷な夫が『座っとけ』と言ってくれたり、まだすごくちっちゃいのにお腹に話しかけてる」と語る。J 子は素直にうれしいと思い、夫は喜んでいて一方で不安があり、「どう育てたら良いのか Th に聞いてくるように」と言ったという。

#40 では、夫婦で子どもの話をするようになってきて、夫は怒らなくなり、子どもが生まれたら「コップの水が埋まるような気がする」と語り、自分が優しくなれるという期待を持っているらしい。

#42 には夫と義母が話しをしていると、夫が小さい頃から母親に何もしてもらってないと言ったことで大ゲンカになり、「子どもが生まれてもお母さんには抱かせない。二度と家に来るな」と母親を追い返したとのことである。Th はそれを聞いて、「いささか乱暴で

はあるが、ご主人も精神的に自立してきたように感じる」とJ子に伝える。

#43 では 3 回目の LMT-Hole を実施する。

< LMT-Hole ③ >

構成はさほど LMT-Hole ②と変化がないように見える。「川が大き過ぎたので山が切れてしまった」という。家は大きくなっており、自宅で夫婦と 4 歳の子どもが 1 人いる。家への関心が高くなり、生まれてくる子どもの問題も含めて、身近になっているようである。川が大きいのには心的エネルギーが増加してきているのか。Th が「以前と比べて楽しい良い感情が増しているよう」と感想を伝えると、彼女も「前よりイライラしなくなった。最初は夜を描いていたと思う」と振り返っている。

この後の面接では、夫婦そろって子どもを迎え入れる準備をし、夫は 1 日も休まずに毎日子どもに話しかけていて、「愛がある家庭に育てたい」と言っていたという。J 子は昔の夫のことを考えると驚くほどであると話す。そして出産間近になり、面接は#46 で終了とした。

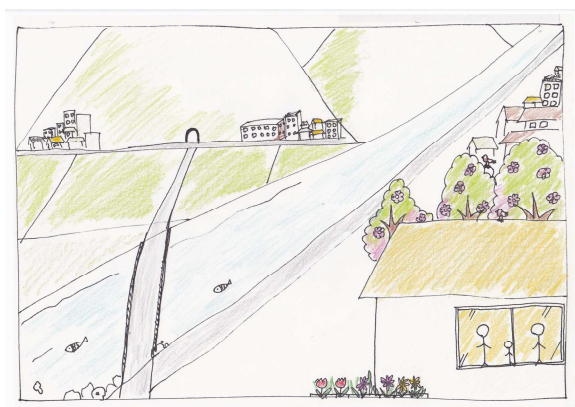


図 4 - 7 . LMT-Hole ③

3) 心理療法の経過と LMT-Hole

I. かかわりと投映法導入

来院当初、J 子の症状の直接の原因として考えられるのは、夫の暴力的な言動であったことは疑いがない。J 子は夫がそうした態度に出てくると震え上がってしまい、不眠や嘔吐、情緒的に不安定になってしまうのであった。第 I 期では、Th はその調整のために具体的に指示しており、J 子には夫を怒らせないような対処をするようにアドバイスしている。また夫にも来院してもらい、J 子の緊張を軽減させるようなかかわりを求めて伝えている。そのようなケースワーク様のかかわりを通して夫婦の枠組みを調整し、もう少し内的な問題に取り組むための準備をした。

その上で LMT-Hole を導入し、J 子の内的な問題の査定とともに、それに取り組むことを促すための技法として実施した。この LMT-Hole ①では、夜で山も見えないくらい大きく、世界は暗く障害が大きい印象を与える。前の方にある大きな石と大きな穴はそのことを語っている。遠く小さな家には明かりがついており、50 歳の夫と 40 歳の妻という夫婦には 10 歳の子どもが 1 人いて仲が良いという。微かながら希望を感じさせるものである。川は天に突き抜けていて、衝動のコントロールの問題を感じさせ、田んぼは大きくて

「稲刈りが終わって緑の草が・・・生えないですね・・・」と言う。生産性を高く望みすぎて追いついていけず、まだその時期ではないのかもしれない。Th は「夜になりかけのちょっと寂しい風景」に彼女の暗い気分を感じた。「穴」は「工事をしている途中の穴で、途中で終わってしまってそのままになってる」というもので、彼女が忘れて思い出せない体験に注意を向けた。彼女はしだいに自らの内的な問題に目を向けていく。

内的な成長の過程で、夫からよく言われる「捨てるぞ」という脅しも気にならなくなるが、Th はその変化に夫がついていけないという印象を感じ、また夫の暴力的言動が増えるのを危惧して、夫を呼んで心理検査を実施した。

こうした場合、夫にとって Th はクライアントの味方であると思われがちであるし、実際夫の行動を改めてもらいたいという意図があること、治療の主な対象は J 子なので、そんなに頻繁に夫と継続的な面接をするつもりがないことを考え合わせると、心理検査のような媒介を持ち込むことで客観的な結果を基に判断していることが伝わると考えられる。実際の経験上も「Th がこう思っている」と言うより、「検査上このような結果が出ています」と伝えた方が説得力があり、納得しやすいことが多い。また夫にだけテストすることはまた被害観が出てくる危惧があるので、夫婦同席して一緒に実施している。

そして検査結果を伝え、J 子が心にわだかまりが溜まってしまうと身体症状を起こすことを説明した。バウムテストでは J 子の寂しさ、夫の気持ちの荒れなどについて話し、TEG の説明をすると、夫は自分の CP の高さを認めるので、交流分析でいう「厳しい親」の部分を下げて「養育的な親」の部分を上げてもらおうと良いことを伝えた。

J 子は自分のあり方を振り返るようになるが、寂しく愛情を注がれずに育ってきた夫の家庭環境の問題にも目を向けて夫とその話をするようになり、夫の洞察を促すことに繋がっていく。

LMT-Hole ②は比較的状态象が改善されてからのものである。彼女が精神的に余裕が出てきた頃で、話しが一段落した後で画用紙を差し向けたものである。LMT-Hole ①とは大きく違い、「田んぼにレンゲソウが生えているのどかな町の風景」であり、40 歳前後の夫婦と子ども二人が仲良く暮らしている家を描く。家はまだ半分隠れているが、ずいぶん身近になって大きくなっている。「春でお花がいっぱい咲いている」とのことで、Th はこれだけ変化があったことにうれしい感情が湧き、安心感が持てている。J 子の説明を喜んで聞き、それを味わって終了する。ちょうど次の面接で彼女が妊娠したことを聞いてまた Th は驚かされる。以前には性的にも身勝手なところがある夫との性交渉は少なかったし、彼女は子どもができることを欲していたが、「子どもなんてとても育てられない」という夫とは大きな溝があったからである。しかしこの時夫は「子育てに自信がないのでどうしたら良いか面接の時に Th に聞いてくれ」と言っており、積極的に父親になる準備をするほどに成長していたといえる。

この間、彼女の父親が連絡してくるようになって嫌な思いもさせられ、何をするかわからない父親に不安も持つが、冷静に眺められるようになって怖さも克服していく。

LMT-Hole ③は終了間近に描いてもらったものである。LMT-Hole ②よりも全体的にあっさりとした感じを与えるが、「のどかな春の風景」であり、LMT-Hole ②で山の陰に隠れていたビル群が表の方に出てきている。彼女の中の都会的で社会的な部分が顔を出してきたのであろう。「家」は前回よりもかなり大きくなり、「自分の家」であるという。夫婦と

4歳の子どもがおり、子どもも顔を登場させている。現実的な家族像を描けるようになり、それが心の中でも大きくなっていると考えられる。絵を見ながら、「前は寂しい絵を描いていたと思う」と言うので、「気持ちが寂しかったり暗かったりするとそうなるのでしょうか」とThが伝えると、「そうですね」と答えていた。加えて、「前に木の絵を描いた時は、夫も私も枯れた木を描いてました」と述べた。

LMT-Holeを見ながらの話し合いは、今までのJ子のあり方を振り返ってみることに役立ったと考えられる。彼女は以前に自分が描いた絵もある程度記憶しており、それ以後の自らのあり方も振り返っているのであった。同時にこの絵は出産後の家族の姿をも表しており、絵を通して自分の過去から未来までを概観しているといえる。それは自我同一性の確認ともいえるかもしれない。そしてそれまでの面接の中では、小さい時からのNegJtiveな記憶を繋げて受容していく過程が進み、父親との距離を取ることと並行して夫との従属的な関係が変化していった経過があった。それらをふまえて、ThはLMT-Hole③が心理療法の終わりを告げているように思われ、終了しても良いと判断をした。

このように心理療法的に適用できることがLMTの本領であるが、この時にLMTが構成する内的な世界をThが抱きながらかかわっていくことが重要であり、言語による面接はLMT-Holeと並行して進んでいき、両者は絡み合っただ動いていくことを強調したい。そしてThはLMT-Holeを導入することで、心理療法の現在位置と方向を計ることができたのである。

II. クライエントにとっての「穴」Item

ThはLMTに「穴」のItemを付け加えて実施しているが、その意味について考えたい。J子が描いたLMT-Holeは、No,1は「夜」であり、「工事をしている途中で終わってそのままになっている。落ちると危ない深い穴で、直径は10メートル以上」である。

LMT-Hole②は「あんまり大きくない向う町に抜けるトンネル。都会に行くトンネル」になっている。ここでの穴は、風景の中でも違和感のない「トンネル」になり、向こうの町へ抜ける危なげのないものを描いている。

LMT-Hole③では「遠くにあるから見た目にちっちゃいトンネル」で、向こう側にはこっちと同じようなちっちゃい町があって、山を越えずに向こうに行ける」と言う。

この変化は表4-1のようになっている。

表4-1. 穴の変化と内的な意味

関連	変化	内的な意味
(1) 穴との距離	近景→ 遠景	無意識の世界との距離の変化
(2) 穴の大きさ	大 → 小	不安や無意識への危険の軽減
(3) 穴の方向	垂直→ 水平	落下から水平方向へ
(4) 繋がり	なし→ あり	底が見えない繋がらない穴→ トンネルによる外界への繋がり

穴の位置も左上に移動してき、位置が遠くなって意識の中心から周辺へ移って行く。穴のサイズは心理療法の経過と共に小さくなって、縦に落ちていくような「工事中の穴」

から、「トンネル」という水平に横に繋がり、他の世界や他者との繋がりを示すものに変化している。初期には大きな不安として前面に出てきて無意識へ転落していきそうな危なげな様相を呈しているといえよう。夢 1、2 においても階段やエレベーターに上って落とされる夢を見ていて、上昇と落下への方向は軸を一にしていることがわかる。それが回数を重ねることで不安は退き、自我に統合される形で処理されているといえよう。この統合度は風景全体から受ける印象でも明らかであろう。

それと共に、人間と家がしだいに近いものとなり、サイズも大きくなっている。1 枚目では 50 歳代の夫婦が、2 枚目では 40 歳前後、3 枚目では「自分と同じくらいの歳」になっている。穴のような不安な空間よりも「安心できる器としての家」の方が重要になり、人も彼女自らを表すようになっていく。

最初の「工事中の穴」は、彼女の内面の工事をする必要があることを示唆しており、Th にもその覚悟を促すようなものであった。「工事中の穴」の垂直方向から「トンネル」の水平方向への転換は、Th に安心感を与えると同時に、内的な統合が進んだことを推測させる。このように「穴」の Item は、クライアントの内界の重要な在り方を示し、心理療法を行う上でも有用な視点を提供すると考えられる。

全経過を通して J 子とのかかわりのあり方を一言で述べると、“深い穴をこわごわのぞき込み、闇に振り回されていた自分を発見してそこから自由になった”という心の物語を語っているといえる。迫害的な父親の呪縛は暴力的な夫との関係で繰り返されていた。それはテーマは違うものの、現実負けそうになったサーカス団員が夢体験をすることで現実に立ち向かえるようになった Ende (1984) の「サーカス物語」を連想させるものがある。夢分析の中でも無意識の底へトンネルや階段を降りて下って行くことがあり、箱庭療法などにおいても穴を掘ることや、そこに何かを埋めたりすることがある。同じように「穴」の Item は、心理療法の道行きにおいて内的な成長を育む物語への通路として機能すると考えることができる。

2. 内的世界への期待と探索意欲

前節では過去のネガティブな体験と穴の問題を考えてきたが、それは必ずしも否定的なものばかりではなく、上昇的志向を目指すものもあると考えられる。内的な世界への探索意欲や期待を持ち、それが表現されることはクライアントにとってもセラピストにとっても有意義である。そのような観点から事例を挙げていきたい。

1) 事例の概要 K 子 女性 20 代前半

K 子は 2 人きょうだいの長女で妹がおり、両親と祖母の 5 人家族である。両親は彼女が幼い頃から不仲でケンカが絶えず、父親の暴力もあった。K 子は母親の笑顔を見たことがなく、やさしい祖母に救われていたという。彼女は表面上は波風を立てずに良い子にしていたが、家庭で嫌な思いをすることが多かったようである。

高校では友だち関係がうまくいかなくなって不登校になり、カウンセリングを受けたが、結局高校は中退し、自殺念慮も持っていたことがある。姉妹仲は良かったが、当時妹もう

つ病のようになっていて、妹が落ち込んでいるのを見て自分がしっかりしなければいけないと思ったという。大学検定を受けて他県の大学に入学し、1人暮らしをしていたが、しだいに精神的に不安定になって拒食やリストカットをするようになり、実家に戻って心療内科クリニックに受診する。主治医より心理療法の依頼が出されて Th がかわることになる。

2) 面接経過

K 子との心理療法は 2 回にわたって 3 年近くのインターバルを挟み、足かけ 6 年に及んでいるが、心理療法において起こってきたことと LMT-Hole との関連に注意しながら経過を述べていきたい。

【第Ⅰ期】転移性軽快（#1～16）

母親と一緒に初めて来院した K 子は神経質そうな印象を与え、暗い表情だが、目鼻立ちが整った女性であった。詩が趣味であるとのことで、書いたものを持ってきて Th に見せる。前医療機関では突き放されるようなことを言われたので落ち込んだと話し、それもあるか Th との面接を肯定的に受け止め、食事や精神的なコントロールがうまくいかず、気分が落ち込んでいることを訴える。深酒をしてかなり太ったり、極端にダイエットして痩せたりしたとのことである。

彼女には話したいことが多くあって途切れることがなかったが、Th は病態水準も気になり、#5 で LMT-Hole ①を描いてもらう。描かれた風景は春から夏にかけて緑が生い茂る山があり、家は子どもが好きなのだが、「家よりも穴に惹かれる」と述べ、穴は「一見入るのが怖い感じがするんだけど、何か吸い寄せられるような光があり、入ったら楽しいことが待ってる」と述べている。今の家族や心の状況から新しい光が待っている穴の世界への投入を望んでおり、まさしく心理療法へ Involve していく彼女の在り方が示されていると思われた。

その後症状はしだいに改善し、以前より母親と話すようになったといい、それまでは別々に食事を摂っていたが、父親がいる時に一緒に食事をするようになる。初診から 4 ヶ月後には投薬が不必要になる。自然の食欲や満腹感を感じるようになり、K 子は「肩の重い荷物が落ちた感じがする」と言う。

母親とは昔の話しをして、高校受験は無理やり行きたくないところを受けさせられたので泣きながら行ったという話しをすると、母親は知らなかったことを詫びたという。

また彼女は面接に「ずっと通いたい」と述べ、ポジティブで依存的な感情を Th に向けており、転移性の軽快と考えられた。#15 の面接では、発病した高校の時からのことを書いてると楽しいので書き始めたとのことである。Th は彼女の活動性が上がってきていることを感じた。

【第Ⅱ期】父母との対決（#17～46）

面接で父母とのあつれきを語り、もめたことが原因で何回かのリストカットも生じる。#22 で K 子は「母とは毎日ぶつかる。母は小さい時に完璧を求められたので、それを私

に求めたのか。私たちの前では人間でも女でもなく、母であってほしいと思う」と母性を求めており、母親には文句が言えるようになってきて、よく話し合うようになってくる。過去に辛い思いをさせたことを父親に謝ってもらいたいと望んでおり、それを直接父親に言うが、折り合いはつかない。父母を試している K 子であり、Th が「ご両親にとっても試練ですね」と言う「はい」と笑っている。諍いも起こるものの、そのメッセージを父親も理解するようになり、K 子のことを気にしてよく話を聞いてくれるようになってくる。

Th は彼女の中に内的変化が生じていると感じて、#27 で LMT-Hole ②を描いてもらう。Inquiry では「家は友だちか誰かの家」で、まだ家庭が自分のものになっていないことが伺われ、画面でも家は半分に切れて描かれている。穴は彼女と妹にしか見えない穴で、「まだ入っていないが、いつかはきっと入って行く穴」と語っている。心の世界の道に踏み出すと、希望が持てる世界であることへの願望が感じられる。

この時に最初に描いた LMT-Hole ①を彼女に見せて感想を聞くと、「描いたのは思い出すけど、きつかったなと思う。この時の自分はかわいそうで目を背けたい。今普通にしているのが当たり前ではないので」と振り返り、今まだ道の途中であることを語る。K 子は「朝は朝ご飯が楽しみ。昼は夜ご飯が楽しみ。それだけで幸せという基本を忘れていない」と言うようになり、摂食の問題は改善され、2 ヶ月後の面接では父親に抱擁されて安心できたという。

さらに数ヶ月後には、彼女は幼い時に性的なイタズラをされた経験を母親に話すと、母もまったく同じ体験をしていたことをがわかって共感し合っている。新しい恋人もでき、クリニックにも連れて来る K 子である。

そして心理療法終了の希望が彼女の方から出され、今までの感想を問うと、「すごくいっぱいありすぎる。良くなってきた時に Th が『荷物を下ろしたような感じですね』と言われ、面接を終わってドアを出た時に涙が出るくらいうれしかった」と語り、面接は終了とする。

この時に LMT-Hole ③を実施する。Inquiry では、家について「お父さんはお母さんのことをすごく愛してて、家族の時間を大事にする。お母さんは自分の趣味をいっぱい持ってて、子どもたちが好き。私が今後作っていく家族はそうしたい。言いたいことを言って発散できる家族だと良いな」と語っている。ここでは「穴が一番困った。で、山に洞窟があるようにしようかなと。ちょっと非現実的なところで、先に希望がある。黄色は希望の光」と話し、「山」という障害物は画面に入りきれず、まだまだ大きい、その山に「洞窟」の形で、文字通り「風穴」を開けていこうとする姿がみてとれると Th には思われた。これは「非現実的なところもある」と自分で認め、意欲的な一方、先行きの不安はありながら彼女の意思を尊重しての終了となった。

【第Ⅲ期】対象喪失と和解（#47～72）

交際していた男性とうまくいかなくなり、K 子は感情的に不安定になってクリニックに再来し、前回の終了から 4 ヶ月後に心理療法の再開を希望する。Th は「前回の面接は両親の問題を中心に話が進み、付き合い始めた男性とはあなたが彼のカウンセラーのように接していたが、対等に付き合っ地が出てくるとぶつかるようになったよう」と伝え、面

接を再開することとする。Th は彼女が Th を取り入れてカウンセラーのように振る舞っていたことの破綻があると考えていた。

K 子が交際していた男性は対人関係において未熟な部分があり、彼女が友だちと遊びに行っても怒る人だったが、じきに別れることになってモーニングワークが課題となっていく。数ヶ月後には、『次々に人が死んで、気がついたら家に私の写真があって、自分の葬式をしていて悲しくなる』という夢を報告する。気持ちは落ち込むが面接を支えているという。別れた彼にしがみつきたくなるような気持ちを抑えつつ、耐えていく K 子である。知らない男の人の葬式の夢を見て、涙が止まらないこともあり、彼氏がいなくなったという「現実をみたのかもしれない」と言うので「人生の岐路かもしれないが、とても重要と思う」と Th は返している。

この後も別れた男性と話し合うなどのかかわりを持ち、彼が優しいと甘え過ぎてしまうなどの言動も伺われ、さまざまに気持ちは乱れるものの、しだいに落ち着いてくる K 子であり、#60 では LMT-Hole ④を描く。

Inquiry では「大きな丸い山があり、陰しいというよりはやさしい緩やかなイメージの山」で、穴については「たいした穴じゃなくて、子どもたちが掘った穴」であるという。描いた感想を問うと、「絵を描くことによって何か表れてるのかと思って、前回とイメージ的に変わらないかと、でも穴は変わった。前は難しいなと思って非現実的な穴を想像してたけど、今回は現実的」だと言う。"子どもたちが掘った" というのは、つまり彼女と妹が自分たちで作業したということであり、内的な作業の結果であると考えられよう。実際に「家族と笑顔で接することができる。特に父がすごく変わった。家事をするようになったり、『ありがとう』とか『ごめん』と言うようになった。感謝することがいっぱいあって、生かされているってことが少しずつ感じられるようになった」と語っている。

#65 には、夢 1 を報告する。

<夢 1> 『妹の友達が 5 ～ 6 人おり、自分と彼らとで母をぼこぼこにする。外は小雨、何か取りに行ったら鍵がかかっている。『お母さん開けて!』と言う。母は恐そうにチェーン越しに私を見てる』という夢である。母親を攻撃するが、そのために距離が開いてしまうような夢であった。

母親は良い加減な面があり、K 子がそれを指摘するとケンカになるが、以前のようにするのは嫌だと感じている K 子が、「私はもううちからいなくなる。最後は私も腹を据えてやるからお母さんも覚悟して」と母親に言い、握手して終わるということがあった。彼女は「理想の母親像を押し付けていたことに気がついた」と語り、母親と距離がとれるようになる。

K 子は「何か大きなものから守られているような気がする。カウンセリングも病気だからじゃなくて、自分を高めていく上で必要だなと思う」と言うようになり、海外に行って専門的な資格を取得し、日本での仕事に繋げていくという方針が固まる。そして海外に出て行くことを区切りとして、心理療法は終了となる。

彼女はその後海外に渡航し、2 年半後専門的な技術を身につけて帰国した。ところが実家に帰宅すると、父親と意見が食い違い、自分の気持ちが弱くなったこと、受け入れてもらえなくなり、新しい仕事もきつくて心身ともに疲れたとクリニックに来院する。数回面

接すると気持ちを持ち直すようになり、LMT-Hole ⑤を描いてくれる。

Inquiry では「人を描く時、私と彼を描こうと思った。将来結婚したら田舎に住みたいと思っていたので、好きなネコと彼の好きなウサギ。赤ちゃん連れて散歩に行く」と言うので、どんな家庭にしたいと思うか聞いてみると「毎日一緒にいて、寝てご飯を食べて、帰ってくる場所が一緒に健康ならいいことない。ちっちゃいことでも笑いに変えられる家族」と明るい将来像を描いている。新しい彼氏を海外在住中に見つけており、その彼との将来像であった。その後実家を離れて、K 子は男性の元に旅立っていく。

以後来院はなかったが、5 年後に Th のところに一通の手紙が届き、「私は Th のおかげで命を救われました。こんな私でも幸せになれたことを報告したくて手紙を書きました」との内容で、ご主人と幼い子どもと一緒にほほえむ彼女の写真が添えられていた。Th にとっては至福の時であった。

3) LMT-Hole の概要

LMT-Hole は全過程で計 5 回行っている。順番に概要を述べていきたい。

(1) LMT-Hole ①

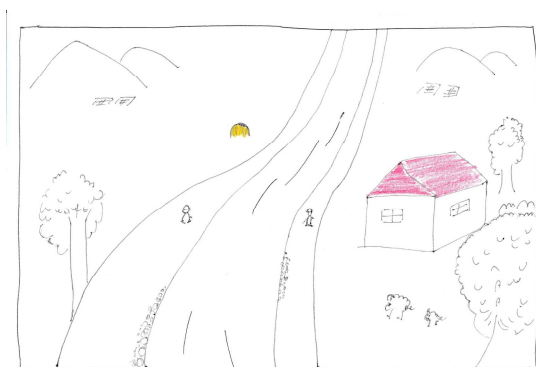


図 4 - 8 . LMT-Hole ①

〈Add〉 右下の大木 〈穴と屋根のみ彩色〉

(説明) 何も考えずに描いていた。川って難しいよねと思いながら描いた。急に穴って言われて穴ってないよねと思って、穴って他の世界にいける穴とか、奥次元の世界に行けたらおもしろいなと思って、穴を主役にしようと思ったけどうまくいなくて、他は線で描いて、穴だけ中を塗ったんですけど、色をつけて良いよと言われてよかったなと思って。

人、この人 1 人だけ描いた時にすごく寂しくなったので、2 人描いて 2 人で穴に行こうって言うってところを描こうかなと思って。この人〈右〉行けないかな。今思ったんですけど、川があるので。でも泳げば行けるし。

(男女?) 帽子をかぶせたら男の子、2 人とも。幼稚園か小学校低学年

(穴) 一見入るのが怖い感じがするんだけど何か吸い寄せられるような光、入ったら楽しいことが待ってる。

(大きさ) 大人からすると大きくもなく小さくもなく、子どもの目線から見ると大きい。

(高さ) 穴の入り口は大人の人が手を伸ばしてやっと届くぐらいで、入ると広い。

(深さ) 他の世界が広がってる。子どもにしか入れない子どもの世界。

(季節) 春から夏にかけて

(山) みどりが生い茂っているような山登りにみんなが行くような。

(川) 子どもが水遊びできる浅さで、山に繋がっていて魚釣りもできる。穏やかな感じ。

(家) 家族みんながいて、子どもは家のことは好きだけど家よりも穴に惹かれるような家です。(ここの子ども?) 一応お友だち同士。

(家族) 父と母と祖母とがいて、あとこの子のきょうだい2人で6人家族。

(どんな家族?) 父も母も働き者で、祖母も元気なんだけど一見仲がよくてもぎごちないのをこの子が感じ始めてる。とにかくこの子は外の世界に行きたがってて、穴に行く。

(描いて?) おもしろくて楽しかったです。自分で作った世界だけど、この子のことは心配になってしまってた。だけど羊がいるから良いかなと。

(2) LMT-Hole ②



図4-9. LMT-Hole ②

<Add> (穴の前の道、川の中の石を大きく)

(説明) ちょっと、山塗って良いですか? 夏で私と妹が遊んでます。

架空のなんで、これが私と妹の家で、楽しい、のどかな川があって緑がある場所。

(どんな家?) 質素なんですけど楽しいうち。

(川?) 夏に川遊びができる気持ちがよくてきれいな川。山から下りてきてるよう。

(山?) 大きななだらかなどっしりした山登りができるような山。

(田?) 稲刈りが秋だから田植えした後。祖母が見てて、私と妹はそこへ行こうとしてる。ああ、犬まで花の色を塗ってしまった。間違えました(笑い)。

(穴) 最初にトンネルにしようかと思ったけど、この穴は私と妹しか見えない。黄色は希望の光。まだ入ってないけどきつといつかは入る。

(大きさ) 大人でも立って通れるぐらい。幅は大人の人が両手広げたぐらい。

(奥は) 違う世界が待ってる。すごく楽しくていろんなきれいなものがあるって良いんだけど、なぜか2人はこっちの世界が良いと思う。

(木は大きい) 木はすごく好きなので妹も緑は好き。トトロに出てくる木に憧れるので、ここに寝そべって読書したい。ここに<左上>家を描きたくなる。自然には叶わないと思う

ので。

(今回描いて) 楽しく安心。夢中になったし、こっちの世界に入って楽しかった。

(3) LMT-Hole ③



図 4 - 1 0 . LMT-Hole ③

<Add>水の流れ

(説明) 何か描いてるうちに木を描いたら夏になったので、子どもを描く時に麦わら帽子を描いて自然に夏。木は緑の方が良いので緑にしたら田んぼも緑にしました。

花はピンクが好きなので、ピンクが一杯。あとちょっと違うのも入れようと思って。家は赤い屋根というイメージがあるので、ほんとは赤い屋根の家には住みたくないけど。

穴っていうのが一番困った。前は困らなかったけど、今回は困った。それで山に洞窟があるようにしようかなと。前に黄色に塗ったのは「この先に希望がある」と。今回も夢のある、ちょっと非現実的なところで、先に希望がある。

(穴の大きさ) 小学生ぐらいの人が子どもが屈んで入れるくらい。人2人だと窮屈。ここは入り口で奥は宇宙のような世界。ドラエもんの漫画のような、きれいな世界でちょっと非現実的な世界。

(川) おだやかに流れてる。川遊びができる水がきれいで透き通っている川。

(山) 絵があれなんですけど、もっと壮大なイメージ。

(田) 夏なので、緑がばーっとあっておいしいお米が育ちそうな感じ。

(人) 男の子、小学生ぐらいのきょうだい(何してる?) わーいって遊んでるところ。

(家族) お父さんと母さんと4人、と犬です。

(どんな?) お父さんはサラリーマンで、何かお母さんのことをすごく愛してて、家族の時間を大事にするお父さん。お母さんは働いてても午前だけ。自分の趣味をいっぱい持っていて、子どもたちが好きだし、料理が上手なお母さん。(理想?) はい、私の理想ですかね。私が今後作っていく家族はそうしたいなと。家に帰って言いたいことを言って発散できると良いなと。

(4) LMT-Hole ④

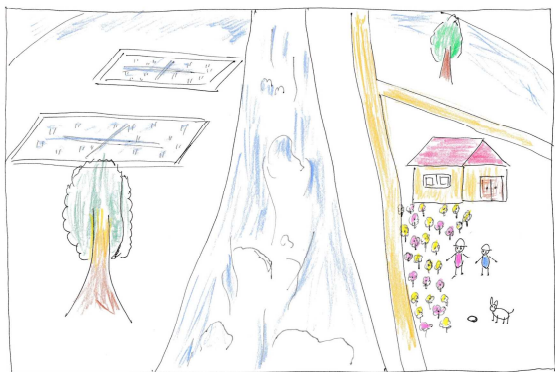


図 4 - 1 1 . LMT-Hole ④

〈Add〉川の流れ

(説明) 前も同じことと言ったと思うけど、私と妹と飼い犬。実際は飼ってないけど遊んでて穏やかな風景。(?) ピンクが私でブルーが妹。

(田) おいしそうなお米が育ちそう。

(山) 大きな丸い、やさしい緩やかなイメージの山。

(川) 夏の小川っていうか、川遊びができる S 峡の川のようなおだやかな川。

(家) 屋根が赤で、大きくもなくちっちゃくもなく家族 4 人で暮らすくらいの家。

(穴) これはなかなかたいした穴じゃなくて、子どもたちが掘った穴です。(大きさ) このぐらい〈一抱え〉(深さ) 浅い、水たまり程度。

(今回?) 私はこういう絵を描いたけど、前回とイメージ的に変わらないかと、でも穴は変わったと思う。(?) 前は難しいなと思って非現実的な穴を想像してたけど、今回現実的なね。(不安が?) 不安は全然ないけど、不思議ですごいなと思いながら。でも道も明らかに違います。

(山は、お父さんが丸く穏やかになったのかな?) ああ、それはありますね。自分からお風呂掃除したり、随分変わりましたね

(穴も現実的で小さくて、落ち込まなくて良いね) はい、そうですね！

〈彼氏と別れてしがみついていた話し〉

(LMT-Hole で人を 2 人描いたので、1 人は彼氏と思っていたのに、出てきてないですね) 難しいですね。付き合うことになると思ってると、しがみついてる時の違いは何なのか。 (我慢して連絡しなかったのに、今は向こうから連絡があるという信頼感がある) 何でそういうことが思い描けるのかが不思議。

(5) LMT-Hole ⑤



図 4 - 1 2 . LMT-Hole ⑤

〈山〉良いですか・・・はみ出しすぎました。

〈人〉描きました。1人ですか？もっと描いて良いですか？〈Add〉乳母車。

(説明) 夏ですかね。途中までは何も考えずに描いてた。人を描く時、私と彼を描こうと思って、将来結婚したら田舎に住みたいと思っていたので、好きなネコと彼の好きなウサギ、赤ちゃん連れて散歩に行く。(将来像?) はい、私の望む未来像。

(どんな家庭にしたい?) 毎日一緒にいて寝てご飯を食べて。昼間別でも帰ってくる場所が一緒に、健康ならいいことない。ちっちゃいことでも笑いに变えて。

(田) 田植えが終わって、緑が生い茂って生き生きしてる。おいしいお米が取れそうと 2人で話してる。

(山) 穏やかな丘。いつも山を見て「今日もありがとう」と言ってる。

(川) 穏やかな川。川遊びができるきれいで澄んだ川。スイカ冷やしたりお魚もいる。

(流れ) 山の方から。今気がついたけど飛び出て変、ちょっと大きすぎた。

(穴) 山に自然にできてる。大きくなってんだけど人が入れる穴で、たまに散歩に行って、座って本を読んだりお弁当食べたりできる。

(奥) 10人弱入れるような、掘ってる感じで、雨風しのげる感じ。

(描いて) 楽しかったですね。近い将来を信じておいしいもの食べて、2人で感動したり、2人でどこに行こうと話してるのがあるがたい。

4) 「穴」描写の変化

次に「穴」の Item が K 子にとってどのような意味を持ち、心理療法過程とともに変化していったかについて考えていく。

LMT-Hole ①では「急に穴って言われて穴ってないよねと思って、穴って他の世界に行く穴とか、奥次元の世界に行けたらおもしろいなと思って、穴を主役にしようと思ったけどうまくいなくて、他は線で描いて、穴だけ中を塗ったんですけど、色をつけて良いよと言われてよかった」と述べている。ここでは異次元に入っていく穴のイメージを持っており、心理療法に入っていく準備をしているようなニュアンスが強くなるものである。

家の屋根と穴のみ彩色をしており、家族の問題(屋根は知的に考えているということか)と、内的世界への関心と意欲が感じられる。「一見入るのが怖い感じがするんだけど何か

吸い寄せられるような光、入ったら楽しいことが待ってる」と語り、「家よりも穴に惹かれる」と新しい世界への不安と期待がみてとれよう。ここに心理療法がうまくいくことへの見通しと期待が持てることが感じられる。クライアントはそれぞれに違い、セラピストとの相性も含んでいて、病態が同じなら同じように進むとは限らない。一回性の出会いの中で相手と十全に組み、一緒にある程度の道程を歩いて行けるのかどうか、このことの確認が「穴」の Item にはよく表れていると考えられる。

LMT-Hole ②では、穴について「最初にトンネルにしようかと思ったけど、この穴は私と妹しか見えない。黄色は希望の光。まだ入ってないけどきつといつかは入るんですよ。

（大きさ）大人でも立って通れるぐらい。幅は大人の人が両手広げたぐらい。

（奥は）違う世界が待ってる。そんなんで良いんですか？（どんな）楽しくてすごく楽しくていろんなきれいなものがあって良いんだけど、なぜか2人はこっちの世界が良いと思うんです」という。

K 子の妹も抑うつ的で不適応感を抱えていたが、彼女もまたカウンセリングを受けるようになる。妹も小さい頃から家庭の中で同じような体験をしていて、K 子とは仲間のような存在である。姉の K 子が妹をかばうことが多く、彼女と妹しか「穴が見えない」というのはよくわかることである。「穴には入ってないけどいつかは入る。違う世界で楽しくすごく楽しい」と彼女は言う。心理療法に入るのは不安があったが、この穴は All Good の世界である。そこに入るには田んぼを通る必要がある。「田んぼ」現実的で生産的な場所であり、現実というのは All Good ではあり得ない。穴は目標になり、実際に動きとしても家族との調整を通して、あるいはアルバイトを探すなどの現実的な行動をして行く時期である。加えて、穴の中のすばらしい世界より“こっちの世界”、つまり現実の世界に生きていくべきということが語られている。このように穴についてのやりとりを通して、希望を持ちながら現実的に動いていくことへの現状と、今後についての見通しが象徴的に語られていると考えられる。

LMT-Hole ③では次のように話される。「穴ってというのが一番困った。前は困らなかったけど、今回は困って山に洞窟があるようにしようかと思った。以前に黄色に塗ったのは“この先に希望がある”ということ。今回も夢のある、ちょっと非現実的なところで、先に希望がある」とのことである。ここでは穴の場所や意味が定まらなくなっている。

そして「小学生ぐらいの人が子どもが屈んで入れるくらいで、2人だと窮屈。奥は宇宙のような世界。ドラエもんの漫画のようなきれいな世界で、ちょっと非現実的な世界」とあるという。ここでは温かい家族や優しい山がそびえており、言語的にはポジティブな言辞が多いのだが、画面は川で二分され、右側のきょうだいは左側の穴には行くことができない。右側の大きな家に関心があり、つまり家族の問題が大きく、それは展開してきているのだが、家族との温かい幸せな関係が近づいてきたともいえ、非現実的な世界とは距離がある状況だとも考えられよう。穴の世界はぼつんと孤独な雰囲気も感じられる。内的な深い世界とは少し距離がある状態であり、実際に彼女にとって現実世界の中で動いていくことの重要性が感じられるともいえる。心理療法というものは、内的な世界に分け入って、意識の深い部分を扱っていくことになるが、一方では現実の世界も動いていてそのかわることも重要なことであり、心の注視点が現実世界と内的な世界を揺れ動き、その時々

る里程碑になることがある。

LMT-Hole ④では「これはたいした穴じゃなくて、子どもたちが掘った穴」で「水たまり程度」であるという。今回描いた絵について「絵を描くことによって何か表れてるのか」と思って私はこういう絵を描いたけど、前回とイメージ的に変わらないかと思った。でも穴は変わったと思います。前は難しいなと思って非現実的な穴を想像してたけど、今回現実的」と述べている。非現実的な穴から現実的な穴への変化は、そろそろ無意識への通路が必要ではなくなった証といえる。「水たまり程度」の浅い穴になり、「子どもたちが掘った」という自我が関与するものとなって、以前より「難しくない」自我にとって安全なものになっていることが窺われる。Th は「穴も現実的で小さくて、落ち込まなくて良いね」と伝え、彼女が「はい、そうですね！」と応える場面は、私がそのことを意識して確認し、彼女も半ば無意識的にそのことを了解している会話である。

LMT-Hole ⑤では「山に自然にできてる。大きくなってるけど、人が入れる穴。たまに散歩に行って、座って本を読んだりお弁当食べたりできる。奥の方は 10 人弱入れるような、雨風しのげる感じ」という。

ここでは面接も終了場面近く、穴が散歩の休憩場所になっている。この穴は人為的に作ったものでもなくなり、「自然にできた穴」である。現実世界の中に取り込まれている形の穴になっていて、自我に取り込まれているといえよう。河合（1967）は影が自我に取り込まれていくことの重要性を述べ、心理療法は「心像の世界内部の分化と統合」を目指すことを説いているが、そのような統合の在り方が、穴を「安全な休める場所」とすることに感じられる。心理療法もこのような段階では終了を考えても良いと思われる。「穴」の Item はその判断に有効な指標となる。

もちろん、それですべてがよく、すべてが終わるわけではない。この絵では川が画面を分断しており、川は天に向かっていて、その統合の問題は残されている。ただ彼女は「今気がついたけど飛び出て変、ちょっと大きすぎた」と川について語っており、それではよくないと意識し始めているところがある。これが今後の課題であり、見通しを持って今後を決定し、無意識の流れをコントロールすることは重要であろう。

以上 5 回の LMT-Hole において、描かれた「穴」の Item は次のように変化している。

- ①吸い寄せられるような異次元に入っていく光の穴
- ②中はすごく楽しく、私と妹しか見えない希望の光の穴
- ③困った。洞窟、ちょっと非現実的。中は宇宙のような世界
- ④子どもたちが掘った水たまりほどの現実的な穴
- ⑤自然にできた散歩で休憩する穴

①において、無意識への通路である「穴」へ吸い寄せられるのは、これからの内的な仕事に向かって、K 子は積極的に入っていこうとしていることがわかる。彼女の傍らには常に妹がおり、妹もまた途中から心理療法を受けることになる仲間である。ここに彼女は希望を見だし、穴の位置も上方に向かって画面上部に描かれている。実施時期も面接 5 回目であり、陽性の転移感情のもとでの積極性といえるかもしれない。

無意識への旅の内容は言語的に語られる部分もあり、また LMT-Hole の中に表現される

こともある。言語面でもより外向的な面が強くなること、たとえば実際にアルバイトを探すなどということもあれば、過去のさまざまな心的外傷体験や嫌な思い出を探索することもある。①～⑤へという経緯から、内的な世界への旅を体験して、また現実に戻ってきた流れを読みとることができよう。ゆえに、LMT-Hole の流れは心理療法の経過を表現していると考えられる。

そして心理療法の中では、暴力的で一方的な父親と、外的な世界では専門的な職業を持った、やり手ではあるが子どもに共感することの少ない母親との葛藤を抱えていた K 子が、意識の底に分け入ってコンプレックスを整理し、現実的な父母との対決を通して理解を得て和解し、自立への道を歩き始めた道程がみてとれる。LMT-Hole では人が 2 人描かれていて“2”のテーマが感じられ、それが子どもが増えて“3”になっていく。

後藤（1984）は LMT が「象徴の果てしない変容を続ける心の発展過程に、一つの里程碑を残しながら進む」というが、クライアントとセラピストの間にあり、内的な世界を映し出すことで心理療法を支える「コンテナ」としての役割もあると考えられる。「穴」の Item はその時々の無意識への距離や Involvement を表していると考えられ、現実とファンタジーの世界とを行きつ戻りつするクライアントの心の居場所を照らすライトの役割をするのではないかと思われる。

3. 複数の描画法実施と「穴」の是非

LMT の基本的技法に「穴」の項目はない。筆者が取り入れたのは、そこに意味があると考えたからであり、無意識的な領域との接点をそこに見て探索的に考えること、過去の外傷をそこにみること、あるいは創造的な象徴としてとらえることで心理療法中に生起していることを知ったり、そこに価値を与えることである種の中心点を見だし、焦点づけるものであった。

しかし、そのような意味を見いだせない場合や、むしろ導入を慎重にした方が良い事例もある。次に挙げるのは言語的接近が困難な中等度の精神発達遅滞（MR）の事例である。そのようなクライアントには言語に頼らない技法を試みることは容易に考えられることであり、芸術療法はまさにそのために生まれてきた技法である。どのようなクライアントでも自分なりの表現があり、相手に自分を理解してもらいたいと願っている。描画を通して理解のためのコミュニケーションを図ることはその意味で心理療法的である。コミュニケーション手段としての描画は描かれること自体が有意義であり、セラピストにメッセージが伝わるならば意義があるといえる。「穴」の Item は“あなたの中にある見えない暗闇は何か、それは探求すべきか？”と問うことであったが、ここでは人に伝える道具としての表現が大事であり、内界探索的なものは必要性が薄い。

ここで自由に描画を作成してもらうことは、内界がより自由に解放されることでもあるが、一方では関心に偏りがあればそのメッセージが限局されることもあり、セラピストからはクライアントの全体像が見えにくいということも生じる。一方で LMT はその名の通り、「構成」ということが最初から考えられていて、統合機能を測ることももちろんであるが、提示された項目と全体の 1 枚の絵の中に、絵画的なメッセージの限界の中で、ある種の全体像が表明されていると考えられる。しかし、同じ項目を描画内容として繰り返すことになる LMT は毎回実施することはできない。

そこで、意識的に両技法を組み合わせることで、クライアントの自由な表現を尊重しながら全体の心理療法の流れを把握し、心の変化をとらえていけると考えられる。またその理解がより深いクライアントとのコミュニケーションに繋がっていくことになろう。このコミュニケーションメッセージとしての視点は、描画療法における重要な点であることを指摘しながら、「穴」Item 導入を慎重にした事例を挙げたい。

1) 事例の概要 L 子 女性 30 代後半

L 子は生後すぐにダウン症と診断を受け、未熟児でしばらくの期間入院した。両親と 3 人のきょうだいがいた。3 歳時より言語訓練を受けるようになり、母親は仕事を辞めて彼女の世話をするようになった。養護学校に通い、決められたことは守る子だったという。小 1 よりずっと日記を書いており、同じことを繰り返し書いていた。母親は周りに迷惑をかけないように L 子を厳しくしつけた。IQ は当時 40 台であり、高卒後は施設に入ったが、母親が体調を崩したのをきっかけに、20 代半ばには収容施設に入った。入所時は 2、3 日泣いており、入所後は自分の気の進まないことには頑固に自分の意志を通すところと、他者への依存心が強い部分が併存していたとのことである。

当時より手を洗う時間が人より長かったが、人より動作することが遅くてもペースを崩

さなかった。入所 2 年目には嫌なことがあると腹痛を訴え、トイレに入って出てこなかったり、トイレットペーパーを盗る行為を示すようになる。融通がきかず、他者とのトラブルも増加する。その後外に出たがらず、帰省にも抵抗が出てくる。しだいに問題行動が目につくようになって居室でじっとしていたり、同じ服をずっと着ているようになる。さらに数年の内には入浴が 1 週間に 1 回になり、衣服のたたみやしわ伸ばしにこだわってベッドで何時間も行うので、食事の時間に間に合わず 1 日 1、2 食になる。そして夜型の生活になり、就寝が夜中の 2 時、3 時になってくる。他の施設に移ると、「職員が怒りに来るので怖い」「窓から髪の毛の長い人が見える」と言ったり、「食堂に切断された人がいて血を流して死んでいたのが怖かった」と泣いたりする。

入浴もできず、無理にさせようとするるとよけい動かなくなる。就寝が朝 4 時から 5 時、トイレに 2～3 時間入っており、水を流しっぱなしにしてトイレットペーパーを流しては捨てる。そのような行動が改善されず、家族と施設職員に連れられて来院し、適応障害、精神運動興奮と診断されて、主治医より心理療法の依頼がなされ、筆者がかかわることになる。隔週で 1 回 30 分の面接を行う。

2) 面接経過

【第 I 期】 導入期 (#1～6)

初回は施設の職員、お母さんと同席で面接する。もう 15 年施設に入所しているが、不適応がひどくなってきたという。L 子は自分からはまったくしゃべらず、Th と顔を合わせようとせずにじっと下を向いており、話しかけても言うことがはっきりしない。後半一言二言口を開くと「X さんが事故で亡くなった」とか「Y さんが叩いた」と語り、ほとんどコミュニケーションが取れない状態であった。Th は職員とお母さんに「強迫症状は彼女を守っている部分もあるので、無理にとろうとせずに段階的に少しずつと考えてほしい」と伝え、L 子とは継続的に面接をするという治療契約をする。

次回から面接を始めるが、1 人では部屋には入れず、職員と同席で話をする。Th が「この間来たこと覚えてますか？」と L 子に聞くと、「忘れちゃった」と答える。「あなたの名前は？」には X、「名前は？」の質問には「L 子」と答えるので、「今日一緒にいる人（施設職員）は誰ですか？」と加えると、「わかんない」とのことである。さらに、「施設ではどんなことしてますか？」と聞くと「お洗濯」、「テレビ見たりしますか？」には「してない」と言う。

話しかけには応えるが、返事は一語文で訥々としており、要領を得ない答えも多い。毎回職員が連れて来院するので、職員に部屋を出てもらおうとすると L 子が嫌がるので同席で面接をする。3 回目には話す人はいないというので、「人と話すのは好きじゃないですか？」と聞くと、「あんまり好きじゃない」と答えている。また何か聞くと、「わかんない」とか「忘れた」と答えることが多い。#6 の入室時には 1 人でと誘ってみると 1 人で入室するので、ここから先の面接は一対一となるものの、内容は一問一答形式になり、あいまいな質問には「わかんない」と答えて会話は途切れがちになってしまう。

Th は彼女の強迫症状や幻覚なども気になっており、病態水準の把握もある程度なされる必要があると考え、LMT に誘ってみると素直に応じてくれるが、最初絵と字を間違えて「川」の字だけ描いているので、「絵を描いて下さい」と言うと、それからは絵と字の

両方を描いている。図 4-13 は最初の LMT ①である。



図 4 - 1 3 . LMT ①

彼女は田んぼは描けず、川と道は融合して山以外の Item はその中に埋没してしまう。付加物としてバナナやコックさん、ロウソクなどを描いており、どれも興味を引くものではあったが、聞いてみても答えが返ってこないの、彼女にとってどのような意味があるのかわからなかった。各 Item は丁寧に描いており、知的な障害はあるにしても、もともとは几帳面な人であることが伺われた。しかし Th は何よりも山に登らなければ川の中に呑み込まれてしまうようなありさまに衝撃を受け、無意識のエネルギーに翻弄され、溺れてしまっていると感じたので、「穴」の Item は提示せずに終わっている。ここでは山だけが地上に出ており、道であるべき場所が川になっている。いわば山以外は水面下の穴の中の世界ともいえ、灯りを灯すべきロウソクも同じ場所にある。このような水中の世界からいかに脱出していくかが L 子の課題であると考えられた。

【第Ⅱ期】関係安定期（#7～20）

#7 で Th が「何か困ることは？」と聞くと「ある」と答えるが、「何が？」と聞くと「ない」と答えている。やはり言語による会話では無理があり、一方的に問いに答える形になってしまうので、Th は継続的に実施することもふまえて自由画を導入しようと考えた。

Th が「何でも好きな絵を描いてみてください」と色鉛筆、サインペン、画用紙を差し出すと、彼女は人とパンを描き、「コックさんの絵」「パンの絵」と字もつけ加えた。コックさんはどのような意味があるのか、聞いても不明であったが、これ以降毎回登場し、彼女にとって大事なイメージであることが伺われる。

最初の自由画が図 4-14 であり、L 子はこの絵を一所懸命に描いており、食べ物とそれを作る人の 2 つの項目は、ある種のたくましさや生きる意欲を Th に感じさせた。ここから L 子は毎回自由画を描くようになる。

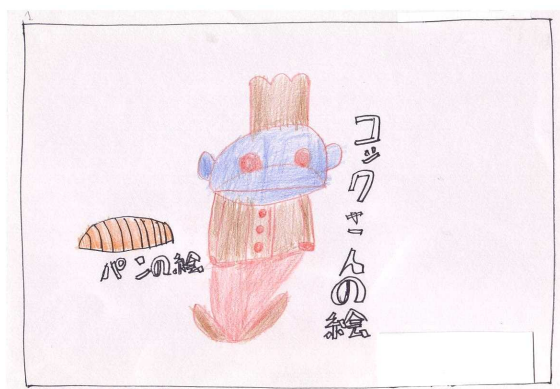


図 4-14. 自由画①

しかし、次回の自由画（図 4-15）ではさまざまな項目が描かれるものの、「タヌキ」を除いては真っ黒に塗られてしまい、自己表現することへのためらいや、表現されたものがネガティブなものになってしまう大変さを感じさせられる。「おうち」は LMT ①でも見られたが、小さく描かれていて家庭が遠いことを感じさせられる。実際に L 子は「家と施設とどっちが好き？」と聞かれると、「施設」と答えている。

そのような表現をしながら、面接室にはスムーズに 1 人でついて来るようになり、職員からの話では生活の流れが他の人と同じようになってきて、週 1 回だったお風呂も毎日入るようになってきたなどの変化がみられるようになる。自分で家に電話していて母親からの電話も楽しみにするようになる。Th が「いろいろできるようになった？」と聞くと、「はい」と答え、トイレに入って出て来ないこともあったので、「トイレは長かった？」と問うと返事がないので、「出られなかったのかな？」と問い直すと肯定する。「きつかったですか？」と問うと頷き、「今は気持ちが楽になった？」と返すと「はい」と応じる。

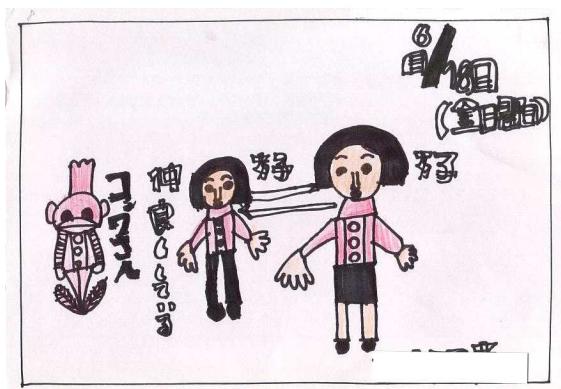


図 4-15. 自由画②

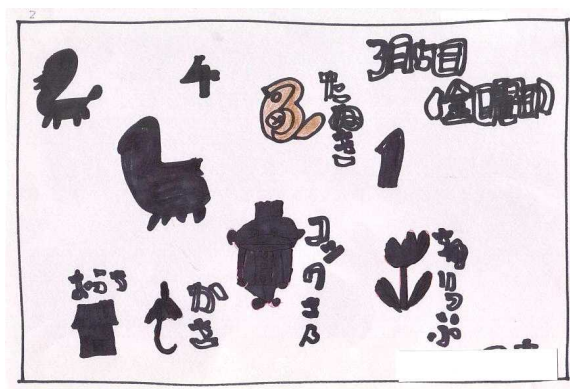


図 4-16. 家族画

施設でのできごとを聞きながら、自由画を描いてもらうという面接を続けていたが、家族に対する気持ちの変化も気になったので、面接開始から 3 ヶ月経ったころ、KFD を実施したのが図 4-16 である。ここでは家族は「女子」が 2 人描かれており、＝で結んで「仲良くしている」と書かれている。彼女には妹が 1 人いるが、たぶん母親と彼女を示し

ているのではないだろうか。いずれにしても、家族に対するポジティブな印象を表したものであることは間違いない。ここでもコックさんは顔を出している。そしてこのころ彼女は Th の名前を覚えてくれる。施設では、朝食後にトイレに入って出たら昼ご飯の時間になっていたり、夜間のトイレ流しが2時間かかったり、部屋の電気をつけたり消したりするなどの行動は残っている。

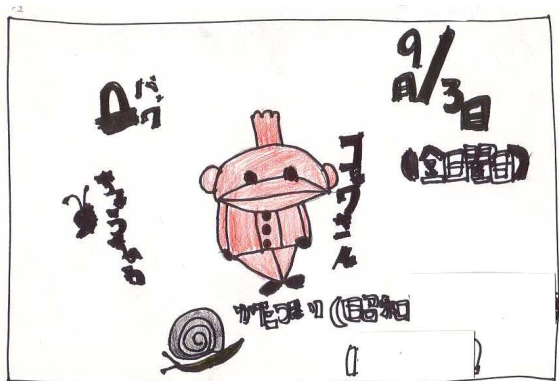


図 4-17. 自由画②

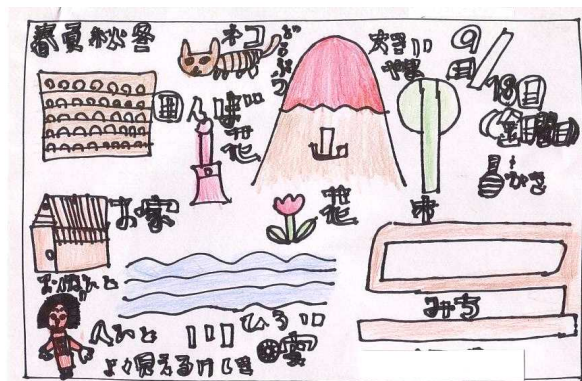


図 4-18. LMT-Hole ②

次の自由画、図 4-17 ではコックさんが大きく描かれ、その下にカタツムリが添えられていて、ゆっくり歩んでいる姿が Th には印象的であった。さらに3ヶ月経つと来院した母親から「言葉のやりとりが良くなり、できなくなっていたことがまたできるようになってきた感じがします」との言葉が聞かれた。Th との関係もずいぶん安定してきていると感じられた。彼女の内的な世界のありようがどうなのか、Th のメッセージにどのように応えてくれるのかを考え、再び LMT-Hole ②を描いてもらうことにした。そして今度は「穴」の Item も付け加えて、あの洪水の中にいるような世界が、今はどう変化しているのかを彼女に問うた（図 4-18）。

L 子は Item を描くごとに字も書いており、Inquiry をした時にその答えとして「大きい山」とか、「良く見える景色」、「広い川」などを書き足している。Item はばらばらに並んでおり、構成は良いとはいえないが、言われた通りに順番に並べるような常同的な描き方ではなく、彼女なりに配置を考えており、時間をかけて丁寧に描いている。家は人より大きくなって大事な Item になってきている。穴は画面中央下部に描かれ、どのような穴なのか定かではないが、マンホールのような縞がつけられている。川と道も区別がつけられ、客観的に対象化してものを見られるようになってきたと思われた。水中世界から彼女は脱出してきたと思われ、穴がもしマンホールならば、水の上には蓋がかぶされ、このような穴はすでに危険ではないと考えられた。

【第Ⅲ期】交流拡大期（#21～39）

#21 に「好きな季節は？」と聞くと「冬」と答えるので、その理由を問うと首をかしげて笑っている。施設に入所した時には泣いていたと聞いていたので、「施設に入った時は寂しくなかった？」と聞くと「わかんない・・・」と言う L 子である。

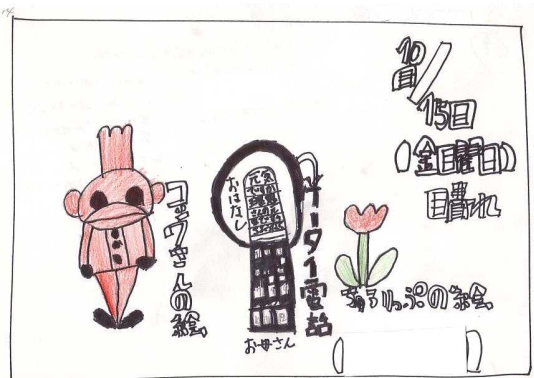


図 4 - 1 9 . 自由画③

自由画では、いつもはじめにコックさんを描くが、今回（図 4-19）は携帯電話を最初に描き、「元気ですか？」と画面に書いている。「誰と話したいの？」と聞くと「お母さん」と言って絵に書き添えている。母親への肯定的関心と交流への意欲が感じられるものであった。面接での会話でもよく笑顔が見られるようになる。自由画ではよく携帯電話を描くようになり、誰と電話をしたいか聞くと「お母さん」と言う。

#26 では「こだわりはほとんどなくなった」という職員からの情報が入る。正月の外泊は家族が集まって買い物に行って良い正月を過ごしたという。L 子が今までになく良い状態であったと母親から報告がある。

正月明けの自由画（図 4-20）には字が多く書いてある。「病気にならないように元気でいてください」というのは母親への手紙であるに違いない。「クリニックに来てます」と書かれているのは Th に対してもポジティブな感情を抱いていることを感じさせるものである。自由画を描いている時にサインペンのキャップを逆さにつけるので、それを指摘すると大笑いするなどの豊かな感情表現もみられる。

Th はこのような豊かさを感じつつ、#33 の面接で LMT-Hole ③を施行した（図 4-21）。

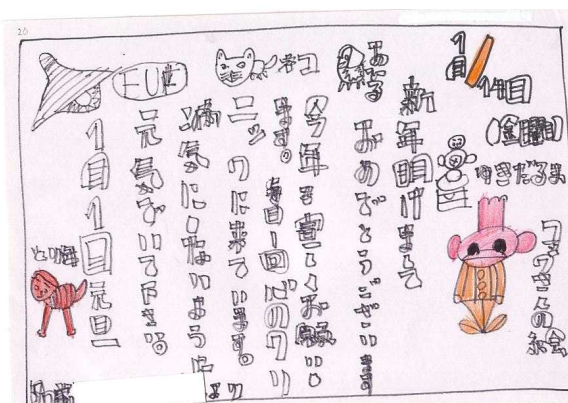


図 4 - 2 0 . 自由画④

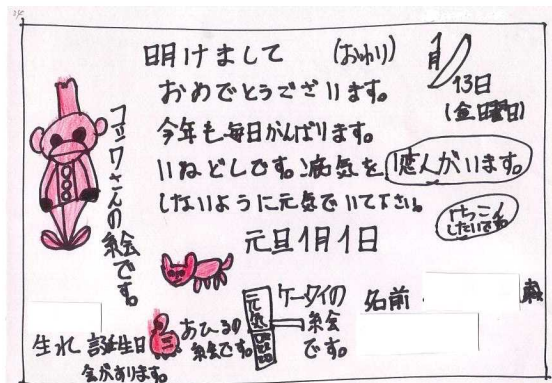


図 4 - 2 1 . LMT-Hole ③

描線の重なりがなくなり、情緒的にすっきりしてきた印象を受ける。描いている最中にも笑いが出ている。「立っている女」が矢印で家に入っていくように描かれており、家庭が非常に親和的になっている。穴は左上に「ちいさいあな」と書かれており、意識から遠いように思われる。その横に「ライオン」が描かれ、危険なものも描かれている。

【第Ⅳ期】終了期(#40～46)

Th が退職することになったことを伝えて、面接は 3 ヶ月後で終了とすることを L 子とも確認する。年が明けて「今年やりたいことは何ですか?」と聞くと、「結婚したい」と言うので、Th は少々驚きながら「どういう人が良い?」と聞くと「優しい人」と答える。今そのような人がいるという。この時に描いた自由画が図 4-22 である。



3/10日 (金曜日)

春 夏 秋 冬 4季

田んぼ

山

お家

あひる

おもしろかたです。さようなら

图 4-23. LMT-Hole ④

最終回になり、LMT-Hole ④を描いてもらったのが図 4-23 である。この LMT-Hole ④の彩色は、田んぼや山が赤色で、川なども緑色になっていて自然ではないが、「赤くしてみたかった」と書かれ、彼女なりの思い入れもあったようである。構成は今までと同じくばらばらである。道四角く描かれており、携帯電話の形のようにも見える。穴は小さく添えられているが、彼女のすぐ横にある。「おもしろかったです。さようなら」と書き添えているのは、間違いなく Th へのお別れのメッセージであった。

3) 心理療法の経過から

L 子はもともと MR という障害を抱えており、施設に長く入所しているうちに不適応を生じ、強迫症状や妄想的な言動を表してきた人である。孤立するうちにしだいに症状が強くなったのであり、いわば家族から疎遠になったことを契機に発症し、対人的な距離をとるようになって、心の方向が内側に向いてしまった事例である。描画はセラピストとのクライアントの間に立ち、「橋渡し」(寺沢, 2010) をするものとなる。それを通して彼女は人との交流の世界に回帰してきた。彼女はいわば「穴」の世界から戻ってきたのであり、それは症状に翻弄されて溺れているような状態であり、穴は危険な形ですでに存在していたともいえる。

Th とのかかわりでは、心を開いていく中で描画により自由に心の表現をすることができ、他者とのコミュニケーションと主体の回復が図られたと考えられる。

第Ⅰ期においては、最初彼女は緊張が高くて Th と一対一で向かい合うことができず、徐々に安心感が生まれてくる。初めて 1 人で入室できた時に LMT ①を実施してみると、山を除いた項目がすべて川の中に描かれているありさまが印象的であった。知的な問題もあるので、構成がばらばらになっていることは当然かもしれないが、「おうち」が小さく描かれていて、彼女にとっての家庭の遠さを感じられた。この時に、「人」とは別に「コックさん」が描かれており、彼女にとっての大事なイメージであることが伺われ、これは自由画でほぼ毎回描かれることになる。

LMT-Hole ①(図 4-13) では川と道が一緒になり、描いた Item 全体が川の中に沈んでいるように、見受けられた。図 4-15 では画面が真っ黒に塗られてしまったが、しだいに表現は自由になり、図 4-17 ではカタツムリが描かれ、Bachelard (1969) が「貝殻の不動の中に閉じこもりながらその存在の旋律を準備」しているというように、エネルギーのある内的な準備を整えつつあることの表れかと思われた。

LMT-Hole ②(図 4-18) は項目はばらばらだが、それぞれ明確に分化しており、道と川ははっきりと分かれている。また「お家」は人と比較してサイズが大きくなっている。

第Ⅲ期になると表情が豊かになって肯定的な感情がみられ、図 4-19 では自由画で携帯電話が描かれて、その下には「お母さん」と書かれている。この後にも携帯電話はよく表れ、対人的かかわりへの欲求、「描きたかった」という表現への欲求も感じ取れるものである。交流を求めているのは母親に対してであるとともに、Th に向けてのメッセージとも考えられよう。図 4-20 は自由画の中でかなり字が多く、いつも日記を書いていた L 子の得意な表現でもあることがみてとれる。彼女は言葉では決してこのように長いフレーズを語ることができず、単語がほとんどなのである。また「クリニックに来ています」と書かれていて、肯定的な感情転移も感じられる。

LMT-Hole ③(図 4-21) では風船やバナナなど教示にない項目をいくつか描き、ポジティブな感情が感じられる。一方では動物が「ライオン」になり、衝動的な動きも感じられる。家は「小さい」のだが、「立っている女」が家に入るように矢印が描かれていて、彼女が家に回帰するありさまを表している。

第Ⅳ期には L 子が「よく笑う」などの情報もあり、かなり情緒的なエネルギーの増加が感じられる。強迫的な症状や幻視などの訴えもなくなり、施設内での適応も良い。図 4-22 を見ると、ここでもかなり多くの字を書き、言語表現での困難さを筆記で補ってい

る側面が伺われる。そこには「恋人がいます」「けっこんしたいです」と書かれている。面接の最後の段階であり、相手が誰であるか確認できず、Th への恋愛性転移の可能性も感じられたが、そのような気持ちを人に向けること自体は、Th にはむしろほほえましく、そのような力がL子にも確かにあると思われた。自由画では同じItemが繰り返し描かれ、常同的な面も感じられたが、これは「豊かな常同性」（高橋，2006）であると考えられるだろう。知的な問題があるのは当然であるが、それは情緒的な豊かさを減じるものではなく、彼女の中での豊穡さが感じられるものである。

また「コックさん」は昔覚えた絵描き歌なのかもしれない。ひょっとしたら母親から習い覚えたのかもしれないが、L子の自己像であり、「私はここにいる」という存在証明（raison d'être）として重要であると考えられる。

LMT-Hole ④（図 4-23）では「大きい川」「高い山」など、Th が質疑段階で聞くことなどを先に描いている。「おもしろかったです。さようなら」というのはThに向けたメッセージであり、その前にも自由画で図 4-22に見られるように、「病気をしないように元気でいて下さい」などのメッセージをThに投げかけている。このように他者に対してコミュニケーションしようとする意欲を持てるようになったことは、孤独で不安の強い病的な世界から立ち直った姿であることは間違いない。

4）描画によるバッテリーの意味

L子は知的な問題により、十分な言語的接近は困難であった。彼女は描画にはチャンネルが合って毎回積極的に絵を描いており、その表現が彼女の自己表現を助け、他者に開放された自己を回復するのに有用であったと考えられる。

自由画で描かれた項目の出現頻度が表 4-2 である。もっとも頻度が高い「コックさん」は毎回出現するようになり、これにさまざまな項目が付け足されるように描かれていった。これはなぜ描きたいのか、何と結びついているのか聞いてもわからなかったが、印象的で特徴的である。一所懸命描いている姿に、次の回から「好きな絵を描いてみて」と促すと毎回描いてくれるようになったものである。私には「コックさん」がさまざまな表現を引き出してくれているように感じられた。またThは「コックさん」が「刻苦さん」でもあるのかと連想した。つまり彼女は厳しい状況を生きているということであり、セルフイメージであると考えられよう。

LMTではThから伝える項目を描いてもらう訳だが、ここでは他者の期待に応える姿があり、自由画では彼女が伝えるメッセージが色濃く感じられる。それは図 4-16の「きょうだい」の紹介であり、「携帯電話」や言語によるメッセージである。東田（2010）は文字ボードで会話することで、外部からは見えないすばらしい内的世界を表現した自閉症児であるが、L子もまた書き記すことで見えない心の世界を開示してくれた。このような自由さは大事なものである。一方でLMTはその点からすれば、非常に不自由な構造を持っている。「コックさん」はLMTに最初に登場した後は1回も描かれず、場所を自由画に譲っている。より現実的な「人」が自我を表現していると考えられよう。描き方は未熟ながらも、紙いっぱいさまざまなものを描き、それなりのエネルギーやポジティブな感情が感じられるものが多い。道はLMT①では川と一緒にしまっているが、LMT-Hole②では分割され、LMT-Hole③では一まとまりになり、LMT-Hole④になると一つの塊になっ

て、こじんまりとまとまっている。田んぼは最後の LMT ④では「赤くしてみたかった」と赤い色に塗っているが、生産的なエネルギーに色を添えてみたのだろうか。

河合(1984)は LMT について、治療者が画題を順番に伝えることが「ものすごいコミュニケーション」であるというが、このコミュニケーションは必ずセラピストから発せられるものである。同じ描画でも自由画はクライアントから発せられるメッセージという意味合いが強く、見ている Th の方は「またコックさんが描きたいんだ」とか「携帯電話が出てきたのはなぜか」などの疑問がかき立てられる。このように描画という媒体自体は似ていても、主体の違うメッセージをやり取りしていることがわかる。そして自由画の方が描き手のより意識的なメッセージが強いものが表面化する。

また、常同性と感じられる部分は、自由画で同じ項目を何回も描いているところであり、下記のように同じ項目が出現している。LMT ではそれはないのだが、このようなものも携帯電話に表れる対人的な希求性、コックさんの自己像、チューリップやチョウチョにみられる感受性やポジティブな感情（チョウチョは自由な精神、プシケとも考えられる）、アヒルやカタツムリのゆっくりとした生の歩みなどと考えると、そこに意味が見いだせる。

これも自由画の特徴として繰り返し行われるという状況設定においてはじめて表れてくる事象であるといえる。

表 4－2．自由画項目の出現頻度

チョウチョ	10
チューリップ	8
コックさん	11
ペアの女の子	1
カタツムリ	6
携帯電話	7
自画像	8
アヒル	10

(注：数字は描かれた回数)

つまり、同じ描画という媒体ではあるが、その主体やメッセージ性、構造には相違があり、それぞれの示しているものもまた相違があると考えられる。LMT ではセラピスト側の問いかけに応えるコミュニケーションが図られ、ある程度決められた構造の中での反応を受け取ることになる。その中では知的な応答性も含まれるので、構成が難しいということも明確になり、構造がある程度明確であることは他者との比較もしやすいので、心理検査としての側面も合わせ持つことになる。一方自由画では、より自由度が高くなる分意識的なメッセージ性が強くなり、彼女の場合には「字」を書くことによってそれがより鮮明になっている。無意識的なメッセージも含まれるが、より here and now なもの、より部分的な内的世界を提示するものになりやすいと考えられる。

これら双方をみていくことによって、①クライアントの描画の中での内的世界の全体像とより部分的でより直接的なメッセージを受け取ること、②より客観的な世界の理解と、心理療法としてのコミュニケーションを図ること、③同じ描画（LMT-Hole）を施行する

ことで経過をとらえることが可能になる。

5)「穴」を付加すること、しないことの意義

筆者は付加項目として、穴を加えた技法について述べてきているが、今回の LMT ①では付け加えていない。この時には山の存在感の大きさと、水の中に溺れてしまっているような構図が気になり、山のような障害の大きさと、この水から脱することが彼女にとって必要であると考えて、Item を提示しなかったのである。前述したように、彼女の描画はすでに無意識の世界に呑み込まれたありさまを提示していて、水面下の穴の底の世界であるとも考えられたからである。穴の Item は石の前で最後の方に呈示されるので、ほぼ全体が描かれた様子を見て付加するかどうか判断することができる。

当然のことであるが、自我の統制が利かなくなる可能性がある場合には、不用意に心の奥に侵入するのは危険なことである。穴の Item が無意識との通路になる可能性がある以上、下手に現実と繋げてしまうことは避けなければいけない。彼女自身の症状を鑑みても、精神病様の幻覚など重い症状もあったのである。日本神話においてイザナミノミコトを慕って黄泉の国まで会いに行ったイザナギノミコトが、恐ろしい死後の妻の姿を見て逃げて帰ってきたように、不用意に闇の世界に足を踏み入れることには危険が伴う。図 4-15 の項目の黒塗りは、水中の LMT とともに闇の世界の一端を表すのか、あるいはそれへの抵抗なのかもしれない。

LMT を創出した中井（1969）は、LMT が箱庭療法よりも安全であることを述べているが、穴は他の Item とは違った次元の深層部分を刺激することを意識しておかなければならない。もっとも他の Item にしても、恐ろしい動物や氾濫した川を描いたり、風景全体が崩れてしまうことなどもあり、急性期の統合失調症者などのことも考えれば、絶対的に安全ということはある得ない。そのような場合には、描画自体しない方が良いこともあるのも当然である。

2 回目以降の LMT-Hole では穴を付加して呈示しており、いずれも小さい穴が描かれ、LMT-Hole ③では実際そう描かれていたので、Th は彼女が危険な無意識に翻弄される懸念を感じずに絵画療法を続けられた。LMT-Hole ②の穴に描かれた縞がマンホールのものならば、風景全体は地上にあるということであり、水中から浮かび上がってきたことになる。

ここでは穴の大きさや適切な距離が取れるかどうか気になるところであり、危険なものを遠ざける、危険でないものにするということのなかに自我の健全な防衛が感じられる。ゆえに、2 枚目以降の LMT-Hole は L 子がある程度の自我統制をしている指標として考えることができる。LMT-Hole ④において穴が女の子の近くに描かれているのは、面接終了時の不安が示されているのかもしれない。いずれにしても、自我機能が健全に働きながら対人的な関心を持ち、家族に対する愛情を表明することは、適応的な対人的交流をもたらすであろうし、暖かい他者との交流は、孤立から生まれる精神症状を減衰するのに役に立ったと考えられよう。

結論として、穴の Item は付加しないこともあり得る独自の項目として位置づけることができる（原法においても「山」や「川」など、省略すると LMT が成り立たないような Item もあれば、「花」など、なくても大きく構造を変化させないものもある）。かかわる側にクライアントの内的な危うさについての注意を促し、無意識との距離を測り、どこまで深

めていくかについての配慮を考えていくために有用であり、それをふまえての適用が必要とされるだろう。

第5章 ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の

バッテリーに関する臨床的適用

1. 経時的視点とテストバッテリー

前章までロ・法と LMT-Hole についてそれぞれ述べてきたが、臨床現場でテストが使用される場合には、さまざまなテストバッテリーを組んで実践されることが多い。本章ではロ・法と LMT-Hole についてのバッテリーを考えていきたい。

LMT を考案した中井(1996)は、すでに存在するものから形象を読みとっていくロ・法などのようなものは狭義の「投影法」と呼び、何もない空間に造形する LMT は「構成法」として区別しており、刺激が外から与えられるロ・法と、内側から表現される LMT は相補的な関係にあると述べている。従来意識されることが少なかったかもしれないが、臨床ではこのことを考慮に入れることが、クライアントをより理解できると考える。テスターや心理療法家が投映法を用いることがクライアントに影響を与え、それを心理療法的に生かしていくことが、個々のクライアントにとっても有益であり、各技法の特徴を生かすことがより心理療法に有用である。

先に第2章において述べた解離性同一性障害のロ・法では、彼らの特徴が明らかになったものの、それなりの広がりがあることが示唆された。そして心理療法の中での投映法施行が本論での主軸になるので、もう一度事例 B 子を取り上げ、心理療法の経過とともにロ・法と LMT-Hole の関連を考えていく。さらに次節において D 子の事例を挙げるが、両者は同じ範疇の診断分類に属しながらも対称的ともいえる内的世界を抱えており、両技法に表現されたものにも大きな相違がある。そのような観点から、ロ・法と LMT-Hole を併用することが有意義と考えられる事例として述べていきたい。

1) 事例の概要 B 子 女性 30代前半

B 子は3人姉妹の次女として生まれる。父親は厳しくうるさい人、母親は優秀な姉と妹をかわいがり、彼女は父母に認められたいと思っていたが、取り立てて取り柄もないので「真ん中の悲哀」を感じていたという。真面目でおとなしい子どもでもあったが、小学校の低学年では不登校と拒食の既往がある。中学ではいじめに遭い、一番信頼していた友人に裏切られてつらい思いをしたという。高卒後は専門学校に通い、卒業後しばらくして夫とつきあい始めたが、それが父親にわかって反対され、取り乱した時に混乱して記憶をなくしたことがあった。

結婚後、夫は仕事が忙しくて家のことはかまわず、義父母との関係が悪くなっていったが、相談に乗ってくれなくなってしまった。彼女はパートで働きながら子どもを育てるものの、次男が生まれた頃から長男（当時3歳）に対して育てにくさを感じ、子どもが泣くと腹が立つので叩くようになる。そのうち手を上げただけで子どもが泣くほどになり、我慢していると物に当たり、壁や机を叩いてしまう。手でガラスを割り、気がついたら出血を水で流して手当していたことがある。パニックを起こして記憶がなくなったりすることがあり、家族に連れられて心療内科に受診し、筆者が心理療法を担当する。面接は合計 91

回で 5 年半に及び、症状は消失して終了となった。

2) 面接経過

【第 I 期】軽快期（#1 ～ 32）

やせぎすで硬い表情の B 子であり、話していると涙がこぼれ落ちることが多い。家族への不満や子どもに暴力をふるってしまうことへの罪悪感が強い。Th の面接枠などの制約で、隔週の面接を行う。パニックになって感情が爆発するので、家族中が巻き込まれて対処に困っている。周りや子どもとの対処の仕方を指示し、外枠を作りながら彼女とかかわっていく。面接 2 回目にロ・法①を施行する。しだいに落ち着き、「毎日が楽しい」と言うようになる。

#1 では、「夫と義母のことが結婚当初からいろいろあった。長男を叩いたりつき飛ばしたりした。この間も子どもを保育所に送るのに言うことを聞いてくれなくてガラスを割り、パニックになると痛くてもわからない」と述べて、解離があることを感じさせた。「クリニックを出たら話したことを忘れてしまう」と言うので、病態水準も気になり、#2 でロ・法を施行する（表 5-1）。

表 5-1. ロ・法①のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I.				
35"	△	①羽のはえた天使とか天使が大人になった。太陽に向って飛んでる	①これが天使っていうか、天使の体で手を上げてる	question for instruction Wse Ma+ H/ Rel Drel overelaboration
42"	△	②悪魔の顔？黒い -58"-	②全体が顔、目が 4 つ耳がある感じ。顔全体	Ws (se) FC'+ Hd/ Athr definiteness (reality)
II.				
7"	△	①小さいニホンザルがお相撲を取ってる。足にケガをして血が流れてる	① 1 匹ずつお猿さんなんだけど、手を組み合いっこしてる(ケガ?) ぶつかってケガをして血が流れてる。(血?)何か跳ねてる	WB Ma'+ A Rec HH overdefiniteness
35"	△	②久しぶりに会った人と両手を合わせてる	②赤い部分が顔。向かい合って久しぶり。手を合わせてる	D7+7+3+3B Mp+ H Ps overdefiniteness
56"	△	③子犬が 2 匹鼻こすり合わせてる -1'12"-	③この黒い部分、子犬の肩から上。子犬が耳を倒して鼻をこすり合わせてる	D1+1B FMp+ Ad Ps definiteness
III.				
10"	△	①上から子どもが産み落とされた。まだへその緒がついてる	①これがへその緒。赤ちゃんが丸まって産み落とされたところ(らしさ?) 丸まっている。自分も 2 人産	D2 Mp- H Bch overdefiniteness personal experience

28"	△	②チョウが飛んでる	んだ。生まれた瞬間丸まった ②赤いのはチョウ (?)羽が。よく チョウチョと言われたら描くよう な、モンシロチョウとか	D4 FMa+ A Acnph
43"	△	③女の人に向かい合 ってる	③お尻を突き出して向かい合っ てる。頭の感じも女の人っぽい	D1+1B Mp+ H • Cg P N definiteness (sex)
55"	△	④もう一つあった。 小鳥が死んで落ちて 来てるよう -1'08"-	④最初の赤ちゃんと同じ。今度は、 撃ち落とされてるみたいで、意識 がない小鳥が落ちてきてる	D2 FMa- A Death Agl overdefiniteness
IV. 4"	△	①マンモスを正面か ら見たような感じ。	①ここが耳で、ここの部分が鼻(D1)。 両方が牙(D4+4)大きな感じ	W F+ Ad/ Hh definiteness (size, position)
28"	△	②大きな男の人。巨 人が、巨人を自分が 下から見上げてる -51"-	②人間より動物に近い。マンモス でいったら耳の部分が手、牙の部 分が大きな足	W FV+ H Daut definiteness (size) personal belief
V. 6"	△	①チョウチョという よりもガが羽を休め てる -21"-	①ここがガの触角。大きな羽をた たむっていうか、半分閉じかかっ て枯れ葉に似た感じ	W FMi+ A P Agl affective elaboration
VI. 7"	△	①よくトラとかの毛 皮みたいなキツネバ ージョン -34"-	①この部分が顔(D7)。結局お腹か ら裂かれて開かれてる手足。毛並 みがよさそう	W FY+ Aob P Hsm affective elaboration
VII. 4"	△	①妖精が 2 人向き合 ってる -27"-	①妖精の顔。下は見えないんです けど、顔。かわいらしい感じ	D2+2B M'p+ Hd/ Pch affective elaboration definiteness (reality,position)
VIII. 8"	△	①タヌキより小さめ の動物が岩に苔の生 えたところを登ろう としてる。あとはき	①真ん中の部分が岩、緑の部分が 苔がついてる。両サイドが獣で、 上に向かって登ろうとしてる	WB FMa+ A • Nat (p) Pst definiteness (size) arbitrary belief

		れいな色彩 -43"-		direct affective response
IX. 8"	ハ	①タツノオトシゴが藻とかそんなのに絡絡まって出られないんだけど、笑ってる -54"-	①オレンジのがタツノオトシゴに見えた。藻みたいなのがお腹まで見えてるけど、足の部分が見えないので絡まっているように見えた。藻の色に似てた	D1+1+3+3 FMp+ A・ Bot Del affect ambivalency personal experience arbitrary combination
X. 6"	ハ	①海の中にいるようなカニとか海草とか小さな熱帯魚が餌に群がってる -60"-	① (D1+1) イソギンチャクとかで、緑、黄色、オレンジは熱帯魚。黒いのはカニ、赤いのは餌。水色なので、透明感があるような感じ	A FMa CF- A Fd Bot Por arbitrary combination

#3 ではロ・法の結果を伝える。

①知的生産性はますます良好、②共感性有、③現実吟味力有、④ポジティブな感情とネガティブな感情の葛藤有、⑥抑制が強く心の中に溜まってしまうことなどをわかりやすく伝えて話し合う。B 子は「心に溜まってきたものは家族の問題」であり、「先週死にたいと思ってクリニックに来たが、今は何となくポカンと穴があいたような状態」と、現在の空虚感を語る。

次の回では「心理テストの話聞いて、ポカンとしてるのがこの部屋を出た時にハッとわかった。子どもの運動会の姿を夫にも伝えたいと思ってたことに気づいて夫に言ったらポカンというのがなくなった。うれしくなって涙が出た」と語る。結果についての話し合いで、彼女は意識水準が下がって注意が行き届いてなかったことに気がつく。

しかし、#5 では夫が来院して「いつも女房の顔色をうかがい、腫れ物に触るような感じ」と言う。子どもの教育方針でぶつかるってもめてしまうので、Th は病気を治すことが第一にすべきであり、子どもには一致して当たり、段階を追っていくことが必要であると伝える。夫、義母、姉も来院して義母から長男を預かるという申し出があるが、B 子が拒絶、Th は子どもへの対処を示しながらかわっていく。

ロ・法での「へその緒のある子が産み落とされた (D2)」 「意識がない小鳥が撃ち落とされて落ちて来ている (D2)」 (カードⅡ) という反応は、明らかに子どもとの問題を示唆している。産み落とされた子どもをどう育てていくか、撃ち落とされた小鳥をどう救っていくかが彼女の課題であり、また B 子自身の姿でもあると Th は考えた。

しだいに荒ぶれた気分も静まってきて、「Th の言われる通り、私が落ち着くと子どもも落ち着く。保育所にも無理やり連れて行っていたが、今は『まあいいや』と思うようになり、自分のパニックは 15 分くらいで収まる」と語る。

さらに 2 ヶ月後にはパートで働き始め、疲れ気味ながらも何とかこなしている。雑誌に B 子の投稿した感想文が載り、子どもと一緒に死のうとしたが、立ち直ってきたと書いたも

のが職場の人にも読まれ、彼女のことを理解してもらえる体験となった。

#28 では自発的に夢を報告する。

＜夢 1＞『若い変質者が上がり込んできて家族を 1 人ずつ殺そうとする。私が盾になって、夫が子ども 2 人を抱えて逃げ回る。自分が殺されそうになって起きる』
まだ不安を抱えているもの、得体の知れないものから夫と協力して子どもを守る夢であり、Th には家族の繋がりが感じられた。職場での研修発表会がうまくいき、久しぶりに人前で楽しく、大笑いしたと報告する B 子であり、「毎日がすごく楽しい」と言う。

【第Ⅱ期】揺り戻し期（#33 ～ 55）

状態像が落ち着いてきたので、#33 でロ・法②を施行する。また子どもへの暴力が出たりもする。自らの過去を振り返り、いじめられたことを想起したり、子育て中の感情が思い出せないと話す。また父母、姉妹とのあつれきも語り、関係が改善されてくる。

気分も収まってきて子どもにも冷静に振る舞うことができるようになってきたので、Th はどのくらい改善しているのか、今後の課題についてはどうなのか、ロ・法を実施したいと思って彼女に勧めた。通常の面接で神経症のレベルのクライアントが改善されてきたら、あまりロ・法を実施しようという気にならないことも多い。クライアントの中で何が進行しており、見通しはどうか、Th は比較的明確につかめるからである。彼女の場合には確信を持てず、これで終わりではないという印象があったので試みたのである。

その結果がロ・法②（表 5-2）である。

表 5-2. ロ・法②のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I.				
5"	ハ	①鳥、大きな鳥に見えます	①このあたりが翼（他に？）この、ここが天使の翼で、ここに 2 人の天使が寄り添ってる（鳥？）ぱっと見てここが翼にで、大きな鳥に見えた	W F+ A N deniteness (size)
15"	ハ ◎	②あと、天使が 2 人で寄り添って飛んでる感じ -34"-	②（天使？）この手と頭。（らしさ？）鳥に見えたっていうのと同じで空を飛んでるように見えた。人間の形して羽がついてるって思ったら天使かな	WB Ma+ H/ Dcl
II.				
4"	ハ	①えーと、赤い帽子をかぶったサルが 2 匹で手を合わせて座	①これが赤い帽子に見えて、全体がおサルさんに見えて手を合わせてる。（らしさ？）全体、丸くて小さな日本ザル	WB FMp FC + A Ps overdefiniteness
31"	◎ ハ	ってる感じ ②あと、あの自分の	②おサルさんと一緒。体操座り。	WB Ma+ H Rec P

		息子 2 人が遊んでる 感じ -43"-	しゃがんで 2 人で手を合わせて。 子どもの背中丸みに似た感じ	Dch Prec utilization for illustration
III.				
11"	△	①うーんと、タキシード着て肩から下の感じで、蝶ネクタイしてる	①ここからが肩。ここが首と肩がある感じ。蝶ネクタイでここがタキシードの襟に見える	D3+4 F- Hd Cg Porn arbitrary combination
27"	△	②カエルに見える。 赤いリボンして -40"-	②ここが顔で、これがカエルの手。全体が背中で、何かカエルなんだけど、赤いリボンつけて歩いている（背中にリボン？）はい	D3+4 FMi FC- Ad N arbitrary combination
IV.				
9"	△	①トラとか猛獣の剥製じゃなくて、下によく敷いたりするジュータンとかあんなふうに	①この真ん中が毛並みの境、ラインに見えて、このあたりが顔。開いた感じに見えた。全体が毛羽立っているというか、ふさふさというイメージ	W FT+ Ab P Ps
42"	▽ △	②特別、どんな動物かってわけじゃないけど、全体動物に見える -60"-	②このあたり角っていう感じで。このあたりが鼻に見えてイヌとかあいった顔が出てる感じのものに見えて。何となく色の加減か、毛並みに見える。あと全体の輪郭とか毛羽だって見える	W FT+ A Hh
V.				
2"	△	①チョウチョに見えます、大っきな。 -23"-	①この部分がチョウの羽にここが頭なんですけど。チョウチョって逆のような感じだけど、ここにも続きがある<左右上に羽の続き>	W F+ A P N definiteness(size) ・ arbitrary combination
VI.				
14"	△	①キツネとか、オオカミとか、手足を広げてべたっと寝てるような -37"-	①このあたりが動物のオオカミとかキツネ。鼻先、ピッピとなつたのがヒゲ（どこまで？）全体なんですけど、特にここの顔で動物。キツネとかオオカミという感じ	W FMi+ A N
VII.				

3"	△	①女の子が2人向き合ってる	①この顔。髪の毛を結びあげてる感じ（どこ？）肩のラインで、ここがスカートの感じ	WB Mp+ H N
22"	△	②ウサギにも見えません	②この部分が全体、頭があって体、これが耳	D1+1 F+ A N
33"	△	③自分の子どもが向き合って話してる -49"-	③ここが顔で、髪が子どもは短いんだけど楽しくて上に上った感じで、このあたりが足、ここが肩	WB Mp+ H Pch
VIII.				
12"	△	①鮮やかな色の花が咲いてるような	①ここが花で斜面に花が咲いてて、こっちが上の方。土とかに見えて、ここに大きな花が咲いてる。（どこ？）このあたりが斜面、草というか。こういうところが花びら、。（土？）ここが一番高いところで、自分が花の目線から見ると、上に向かって（？）この色が少し土らしくて、この色が緑、草に見える	D1+1+5 FC FMa- A Orn Porn definiteness (size) • affective elaboration
26"	△	②きれいな森の中を動物がゆったりと歩いている。暖かい感じがする -50"-	②全体が森、森の一部が見えてて、これが花で、花の周りに2匹の動物がうろうろしてる。（動物？）このあたりが顔。小動物、これが手足に見えて丸みがあって、全体が毛っぽく見える。（？）線がぼやけた暖かい感じ	WB FC • FMi • FT+ A nat (P) Pnat affective elaboration
IX.				
7"	△	①何かこう花のつぼみが今咲き始めた感じ。大きな明るい花	①ここが葉っぱ。ここが花、丸く花がつぼみに見えて、これが少し、1枚ずつ花の力で離れ始めてるよう。（明るい？）この色がこう、オレンジ色なんですけど全体黄色とか、太陽みたいな暖かい色	Ds7 FC+ Fl Pnat definiteness (size) affective elaboration
32"	△	②まん丸い風船がちょっとなら膨らんで回りを包んでたものが少しずつとれ始めた、ほどけるって言うか	②この部分が風船で、あとが絵じゃないけど何か柔らかいもので包まれていたのが風船の力でほどけている。（？）包んでるんだけど、風船が膨らんで開いたところから風船が見えだしている。（らし	Ds7 Fma • FC- Toy Mi overdefiniteness

		-64"-	さ?) このあたりが丸いのと、透明感がある。弾力があるように見える。中に入っているものが液体とかじゃなくて、透明なもの。大きくなる力を持ってるように見え たんで、風船かなと	
X. 5"	ハ	<p>①子どもが好きな色で自由に絵を描いた感じ。好きな色をたくさん使って。</p> <p>花とか花火とか水たまりとか、あとお友達の絵とか、それが水だから青とかじゃなくて、水の形、水なんだけど、青とか黄色使ったり、お友達の顔も赤とか線で描いたり、好きなものを好きな色で描く。とても楽しい絵</p> <p>-1'34"-</p>	<p>①全体で(?) 子どもが描いた絵にすごく似てて、水たまりを描いてるうちに花火を描きたくなっちゃったみたい。赤い絵の具が使いたくて、その絵の具の水をビチャビチャなるのを楽しんだような。赤い色を塗りたいという感じ。大好きな黄色で大好きな友達を描きたかったみたい。手足がちょっと出てて、実際に表現できないけど、これはお友達だよって思ってるような</p>	<p>WA CF- H Rec Art A e v H h a t P r e c overelaboration</p>

表 5-3. ロ・法①・②の形式分析スコア

	1 回 目	2 回 目
Total Response	17	18
Time / ach	7.6"	6.6"
Time / c	7.8"	7.8"
Av. Time	7.7"	7.2"
F %	5.9%	22.2%
F+%	100%	75%
W+%	76.5%	66.7%
W : M	9:6	12:4
M : F M	6:7	4:4
M : Σ C	6:1	4:4
F C : CF+C	2:0	6:1
VIII・IX・X/R %	17.6%	27.8%
A %	47.6%	50%
P	2 (2)	2 (2)
Content Range	9	7

次回 B 子にロ・法結果を伝える。表 5-3 からは内的な統制が若干良くなり、情緒的な反応性が増加している。生産性や興味、関心の範囲は広がっておらず、固い部分も多い。生のプロトコールではかなり言語量が増えており、ポジティブな気分も高いものの、防衛的な側面を感じさせる。彼女には、①前回、不安・緊張・葛藤が強かったのが落ち着いてきており、ネガティブな感情が減少した、②反応性が高く、情緒的にも豊か、③ポジティブな感情が高い、④子どもへの気持ちが葛藤から肯定的に変化、⑤「楽しい」気持ちが現実根ざしていくことが課題かなど、わかりやすい言葉に翻訳し、彼女の意見を聞きながら話し合う。

全体的にゆったりした反応が多くなり、「きれいな森の中を動物がゆったり歩いている」（カードⅧ）とか、「花のつぼみが今咲き始めた」（カードⅨ）「まん丸い風船がちょっずつ膨らんで回りを包んでいたものが少しずつほどける」（カードⅨ）などの反応が目を書く。1 回目で「羽の生えた天使が太陽に向かって飛んでる」（カードⅠ）という、太陽に向かって飛び、太陽の熱で燃えて落ちたというイカロスを思わせる反応がなくなった。そして「天使が 2 人寄り添って飛んでいる」（カードⅠ）と、同じカードで違う意味づけがされているのが印象的であった。強迫的に 1 人で頑張らねばと思って空回りしていた B 子が、夫とか Th とともに、2 人で寄り添うようになったのである。Th は彼女が周囲の雑音に耳を塞げるようになったと感じたが、2~4 月にかけて仕事が忙しくなるので、それが現実的にできるのか試されるところと彼女に伝える。

年度が変わり、彼女は仕事を引き受けすぎてうまく対処できないと動揺したり、地域の行事でイラついて、子どもに「私に話しかけないで！」と声を荒げたとの体験を語る。

また過去のことを振り返り、「中学の頃親しくしてた友達に急に無視されたり、中 2 の時にいじめに遭っていた」という。しだいに B 子は過去を振り返るようになり、子ども

には「自分のしたいことをさせても良いかと思う。気持ちがおだやかにゆったり流れている」と言うようになり、ロ・法でみられたゆったり感を実際にも味わうようになっている。そして保育の場である職場で子どもたちと遊んでいると、職員に「初めて楽しそうに遊んでいるのを見た」と言われたという。そして子育てについて姉にアドバイスするようになり、以前は姉から言われていたのに、立場が逆転して姉夫婦と4人で子育てについて話す。子どもの頃からコンプレックスを感じていた姉との関係が好転している。

#43 で彼女が「自分の中で整理ができています」と述べるので、Th は確かめてみたい気持ちになって LMT-Hole ①に導入する。同時に隔週の面接から1ヶ月に一度の面接に切り替えたいとの希望があり、Th は了承する。



図 5 - 1 . LMT-Hole ①

〔LMT-Hole ①〕

（説明）5月ぐらいでちょうど気持ちの良い季節、自分の家の近所で今住んでいる自分の家と実家の家の近くのイメージ。父がトラックでこれから田んぼに行くイメージ。川は実際そんなに大きくないけど、すごく澄んだ、浅くて川遊びができそうな。家は山際に建ってて表側は明るいけど裏は日が当たらない感じなので、できるだけ家の壁や屋根を明るい色にした。

穴は結構大きな洞窟的な穴。入ると静かでひんやり。でも暗いので危険かなと。奥もそんなに深くもなく、暑い時に入ると涼がとれるかなという感じ。周りに岩がいっぱいあって、行くには陰しい感じ。人は3~4才ぐらいの子どもで、花を見たり川辺で遊んだり、穏やかに遊んでる。犬は心配で迎えに来てる。

田んぼは水が張って田植えをしたばかり、今から大きくなるぞと水をいっぱい張って。山は大きな山で青々とした明るい感じで、ちょっと山を描く時悩んだ。（なぜ？）大きく描きたかった。家は玄関から入ると日が当たらなくて、山の香りが良くて涼しくて心地良い。近くから見るとうっとうしいけど、遠くから見ると心地良い。

（良い所）良い所なんだけど、逃げ出したくなることもある。前は日が当たらないところにいたかった。でも、今では日が当たるところにいたいと思う。

Th は、心配して迎えに来ているのは Th 像と考えた。家は良い所だが「逃げ出したくなる」とも言っており、まだ家庭や彼女の内的な「家」がしっかり来ていないことが感じられる。日の当たる場所へ出てきた B 子であるが、葛藤を抱えているようであった。

現実場面では、「次男がトイレに行くかどうかで泣き出し、カッとなって叩いたらよけ

いに泣いたので、4、5 回叩き、風呂に連れて行って服のまま水をかぶせた」と話し、子どもとのかかわりに自信がなくなると涙をこぼす。

過去の想起では、「私は保育園も幼稚園も行ってない。母も家にいて行かなくて良いと。小 1 で保健室へ逃げることを覚えて、偏食で給食も食べられなかった。学校から早く帰ってきたりすると、父が殴って行かせた」と語り、自殺しようと思った時期もあったという。

〈調子が良くないので Th が提案して面接を 1/2 w に戻す。カッとなって子どもに暴力を振るい、涙を流すことが増えるが、徐々に減少〉

B 子は昔のことを想起するものの、思い出は断片的で記憶に感情が伴わないと言うので、Th は生々しい感情が隔離されている印象を持つ。

【第Ⅲ期】揺り据う期（#56 ～ 72）（注 1）

Th の勤務が非常勤に移行するため、回数を 1/2w から 1/m に変更する。LMT-Hole ②を実施すると、まだこれからの課題があると思われた。職場で適応しようとがんばっている B 子だが、「予測しないことがあるとダメ」とのこと。子どもへの遠慮がなくなり、親近感を抱くようになってくる。

B 子は毎日楽ですっきりしている日をすごせるようになる。「長男を産んで 2 年ぐらい感情が全くなかったが、Th に『感情はいつか戻って来るから急がないで』と言われたので私もそう思うようにした。

〈Th が非常勤になるのに伴って、面接は 1/m で継続〉

自発的に「夢」の報告がある。

〈夢 1〉『親戚とケンカしていて、おばさんを怒鳴っている』大きな声で叫んでたと夫が言っていたとのこと。

彼女は女性の多い職場で働いており、しだいに頼りにされる存在になってくる。職場も大変だが、必要以上に重荷を背負わないように心がけているとのこと。「おばさんを怒鳴っている」というのは、職場での重圧かと思われた。実際に「職場で主任ともめて 10 分の 1 ぐらいしか話せず反動でカッとなった。しゃべるといろんな感情が出てきそうになって、自分はこんなに頑張っているのと思ってつらい」と涙を流す。

予測しないことがあると調子を崩すという B 子であり、面接回数も 1/m で頻度が少ないこともあり、深めるための補助として LMT-Hole ②に導入する（図 5-2）。

（注 1：「揺り据う」は動きながらも次第に落ち着いていく様。西行（山家集）に“夕立の 晴るれば月ぞ宿りける 玉揺り据うる 蓮の浮き葉に”とある。）



図 5 - 2 . LMT-Hole ②

〔LMT-Hole ②〕

（説明）緑がすごくいっぱいある。水が澄んだとても大きな川で川辺には田んぼがあって、穂が実ってる。とてもどかな村で、とてもお天気の良い日。季節は稲が実ってるけど春っていうか、秋というよりは春。（春なのにもう実ってる？）はい。

（人？）近所にいるっていうか、ここにこの絵の中に住んでる。特別知った人でもなく。50～60代の人で、男性、女性2人で川岸をのんびり散歩してる。

（家？）家は古い町並み。（色が塗ってないのは？）明るい色でもなく、暗い色でもない。塗ると家のイメージが崩れるのでやめた。

（穴？）穴は川のそばにあるんですけど、とにかく縦に大きくて深ーい。井戸よりも大きくて、覗いても底が見えない。のどかだけどそこだけとても危険。

（石？）岩に囲まれた感じで、岩に乗ってみるとすごく深くて冷たい。真っ暗な。

（不安な感じは何か連想することがある？）ふだんはない。先週何気に子どものアルバム見て3ページめくったら心が痛くてめくれなくなって、何ともしれないポカーンと心に真っ暗い空洞ができた。涙が止まらなくなった。気がついたら上の子しか見てなくて、2歳ぐらいの時、こんなかわいい時期もあったよねと思ったら涙が出て、写真が見れなくてビックリした。（まあ、写真見なきゃ良いしね）ハハハ。

#70 子どもとの間で遠慮がなくなった。下の子は抱きしめられるけど、上の子は恥ずかしかった。それをやめてみようと思った。

#71 原因もなく夜までずっと食事せずに寝込んだ。夜になって夫にどうしたと聞かれて、しゃべったらふっと我に返ったけど、「もっと早く聞いてくれてたらこんなに落ち込まなかった！」とワーッと言ったら、倒れて気を失ってしまった。

【第Ⅳ期】新生期（#73～91）

落ち込む日が多く、なぜだかわからないということから LMT-Hole ③（図 5-3）を施行する。穴から大量の水が流れ出すような川に愕然とする Th だが、「川も実は浅いんですね？」と言うと、笑顔になる B 子である。家庭の中は落ち着いてきて、子どもとも自然に接するようになり、居場所が安定してくる。職場では異動などがあって、どのように自分が動くかを模索しながら軟着陸を試みる展開である。Th の退職を伝え、面接も終了と

なる。最後に LMT-Hole ④（図 5-4）を実施する。

#73 では、仕事は多すぎて終わらないと訴え、頑張りすぎないように帰ろうと思うが、次の日にはまた仕事が溜まってるとのことである。「4 月に入って子どもの生活が変わっているのに話ができない」と涙を流し、仕事も辞めようと考え、無力感に苛まれていく。小学校の時のことを思い出し、「夕食をお腹いっぱい食べて夜中に戻っていたことがあって、自分で手を入れて吐いていた」とのエピソードが語られる。

気分が沈むことも多く、無性に悲しい日があったり「ポッカリ穴があいた状態でやる気が湧かない」と語り、原因がよくわからないとのことである。Th は言語以外のコミュニケーションを図る目的で LMT-Hole ③を実施する。

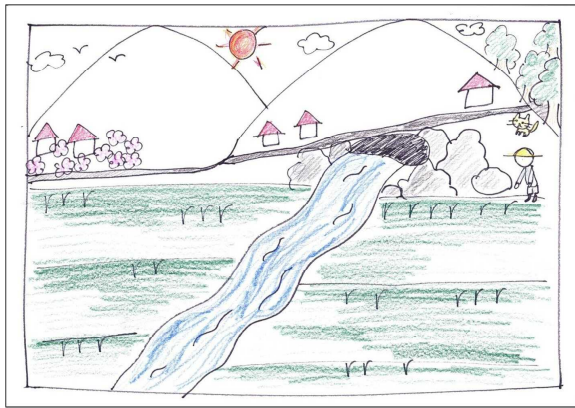


図 5 - 3 . LMT-Hole ③

〔LMT-Hole ③〕

（説明）川はどこから流れ始めるのか見えない。浅いんだけど、水がとても濃くて深いように見える。どこまでも田んぼが続いてとても広い。その向こうの山は色はない。だけれども空はとても青くて良い天気、山の奥はとても深い森になっていて、昼間でも暗い感じのところ。川の向こうに大きな穴があり、周りに岩がゴツゴツしてる。お伽話に出そうな家がいくつか並んでる。人は熱心に田んぼの仕事をしているおじいさんで、とても年季の入った感じ。（動物？）ネコ。森からおじいさんの様子を見てる。

（穴の大きさ？）かなり大きい。この部屋＜面接室＞の 1/3 ぐらいで、底が見えない。

（穴は危なっかしい？）そうでもない。自分だったら平気で行っちゃいそうな。人が危ないよって止めるような岩なんだけど、自分ではそうでもない。（描いてみて？）暗い色が使いたいというか。（日が照ってるけど？）はい、空は晴れ渡ってる。普段の視線が暗い。

（川は浅いし、穴は人からそれほど危険じゃない。下を向くと暗いけどちょっと見上げれば青空。視点を変えれば良いのか。そんなことを感じた）＜笑顔になる B 子＞

#85 では同じ夢を 3 回見たと報告する。

＜夢 2＞『家を新築中で青い芝生が光る実家みたい。家が完成してみんなが「良かったね」と言う。私は死ぬけど「ごめんね、寂しい思いをさせた」と 2 歳の長男に言う。長男も夫も周りの人も「良いよ」って。新しい家ができて、ウエディングドレスも着て、もう一度結婚式をしましょうってことで死んでいく。何か自分でも幸せ』

この夢を見て「その後ふっと吹っ切れた。やっとあの頃の長男に会えたと思ってうれしかった。長男が寝てるのも見ると『かわいい』と思う」と語る。

#90 で Th の退職を伝え、「寂しくて涙が出たが、どこかではじめをつけて Th や病院とも離れないといけないと思う」と言うので終了の方向とし、最終回に LMT-Hole ④を実施する。



図 5 - 4 . LMT-Hole ④

〔LMT-Hole ④〕

〔説明〕4 月か 5 月、青々とした葉っぱがある方向に、大きくて浅い川がある。澄んで石ころが見える。田んぼは稲を植えたばかりで水がいっぱい張ってる。向こうにまっすぐな道路が走ってて民家がいっぱいあって、その向こうには新緑のなだらかな山があって、木がいっぱい生えてる。庭にも山にもお花がいっぱい咲いて子どもたちが散歩に行ってる。とても天気が良い。（穴？）田んぼの横が砂利になって、ポコッと足が引っかかる程度の穴（描いて？）ちょっと楽しかったですね、フフフ…。この間から日記をつける。今まで振り返ったりするのが怖かったけど、こんなことで悩んでとか自分を見直せる。

子どもが学校で、生まれてからのことをお母さんに聞いてくるという宿題を出されて、「お父さんお母さん大変だったけど、今は元気で良かったです」と書いていた。親が思ってるほど根に持っていないんだと思った。長男とうまくやっていけるようになって、今まで私も悪いことをしたとずっと思ってたけど、ふっと抜けた。長い暗闇があったけど、自分がこの先楽に生きていけるステップで、暗闇も無駄じゃなかったと思う。

3) 考察

I. 心理療法の経過から

面接経過において、第Ⅰ期では B 子の状態が不安定で、パニックに陥ったり子どもとの関係を巡って言い争いが続いたため、Th は夫や義父母との関係調整を含め、彼女が子どもとうまくやっていくための方策を考え、情緒的に安定できることを目標とした。彼女は暴力的になると記憶が途絶し、解離の防衛を持っていたと考えられるが、解離性障害の精神療法について木村(2007)は、「環境に働きかけて患者の負担を軽減する」ことを提唱しており、B 子にもまずそれが必要と考えられた。

その後しだいに安定してきたので、第Ⅱ期には彼女の内的な課題に歩を進め、子どもと

の関係を探りながら、幼少期から劣等感を感じていた姉に子育てについて意見することができ、関係が逆転する。

第Ⅲ期では「自分の病気のルーツが知りたい」と過去を探索し、父母に認めてほしいと思いながら認めてもらえなかったこと、厳しい父のことなどが語られる。現実場面では新しい職場に慣れ、つい無理してしまう自分をコントロールしながら、周囲にいかに関心してもらおうかについて腐心する。自分の父母との関係も、彼女が父母の老後の面倒をみることになったことを喜び、満たされなかった愛着感が埋められ、内的な折り合いがつく。

第Ⅳ期になると、子どもや夫との関係も落ち着き、B子は新しい職場でも人間関係の難しいなかで前向きに努力している。夢では「死と再生」のテーマが演じられ、最後の夢では、自分が死ぬものの「目覚めの良い夢」だったという。家族の中で自分が許されて和解が成立し、平安の中で内的な生まれ変わりを示唆する夢であり、まだThの異動を知らせていないにもかかわらず、Thはその進展と時期を同じくして展開していくさまを「共時的」に感じていた。この心理療法過程では当初から1/2wの面接であったが、B子が自ら1/mにしたり、Thが非常勤になった時に1/mになり、最後にThの異動に伴って終了している。いわばThとの別離を内包するかかわりであり、彼女の自己愛的な愛着感が転移された治療関係も、ある程度満たされて終了することになったといえる。

Ⅱ. ロ・法の心理療法的意義

ロ・法は2回行っており、1回目は面接2回目、2回目は面接33回目である。1回目は病態水準や人格の把握などのアセスメントを行うという意味合いもあったが、情緒的影響を受けやすい人であったため、ロ・法の影響も強かったと考えられる。秋谷(1984)は「ロ・法導入が心理療法への陽性転移を導いていくことがある」と指摘しており、死にたいと思って来院してきたB子が、ロ・法を受けてポカンとしていた状態がなくなったと述べており、かなり影響を受けたのは間違いない。

初期はB子の精神的な混乱が強く、家族もそれに振り回されていていて、どうしたら良いかわからなかったもので、方針を立ててB子と家族に方向づけをする必要があった。彼女に対しては検査結果を伝える中で、「抑うつ感やつらい気持ちなどネガティブな感情が心の中を占めていて、我慢していると溜まってしまって爆発するので、うまく解消する方法を考えましょう」とオリエンテーションした。ロ・法でも子どもとの葛藤の問題が明らかに示唆されており、面接では子どものしつけを巡って夫とぶつかってしまい、きちんと厳しくしつけをするべきという彼女と、厳しくしたくない夫とのあつれきがさらに対立を激しくしてしまうという悪循環に陥っているのを整理し、まず心を落ち着けて今の精神的な病気を良くすることが大事であることをThの方から述べている。

この後、陽性の感情転移を背景に、彼女は「今までこんなに笑ったことがなかった」と言うようになるが、この経過の変化と今後の方向を考えるとともに、彼女の心の課題について考えてみたいというThの意図で、2回目のロ・法を実施する。その結果について、Thは変化した点を彼女に伝え、子どもへの気持ちが葛藤状況から肯定的に変化したことも話した。ここでは明確に自分の子どもに対する気持ちが表現された反応があり、これはThに向けられた転移感情の表れであったと考えられよう。恣意的な思考様式も目立つので、「これらの変化が地に足をつけたものになるかどうかは今後の課題か」と伝えた。これら

の話し合いは直面化としての意味合いを持ち、これを機に B 子の状態はむしろ悪化し、転移性の治癒であったことが明確になる。ロ・法はこれらの問題をあぶり出しているといえる。この後の面接では、子どもに対してうまくやれないとの話題や、自分が中学校の頃信頼していた友達に裏切られたり、いじめられたりした過去を想起しており、治療的転移関係を基盤にしてロ・法が抑圧を緩和し、過去の体験を振り返るきっかけを作ったと考えられよう。

III. LMT-Hole の心理療法的意義

ロ・法の流れを継いで、Th は LMT-Hole の導入を意図した。B 子の病態は神経症水準と考えられ、言語のみでの心理療法も可能と思われたが、この場合セッションが現実的な問題で隔週になっていて密度が低いこと、解離などにみられるように問題を症状化して内省しにくい面が伺われたので、それを表現する手段が有用であると考えたことによる。またこのような目に見える表現手段は彼女に対する理解を深め、Th を安心させる効果もあり、象徴レベルや問題を客観化しての対話が行なわれて治療的に働いたと考えられる。

以下にその流れをみていきたい。

i) LMT-Hole ①

絵は「自分の家の近所」である。「父が田んぼを始めたイメージ」で、「家」は「表側は明るいけど裏は日が当たらない」、「のんびりした心地良い景色」とのこと、Th が「良いところですね？」と聞くと、「良いところなんですけど、逃げ出したくなることもある」とのこと。「穴」は「暗いので危険」、「自分が立って見渡せるぐらい。でも奥もそんなに深くもない」、「行くには陰しい感じ」で、「深みに行く隠れ家のように。自分の家がまさにそんな感じ」という。「草原で楽しく遊んでる子ども」を「犬が心配で迎えに来てる」のであり、季節は初夏で「水を張って田植えをしたばかり」である。B 子からの Th へのメッセージは、表向きは良くなってきて心地良くなってきたが、家庭の問題や彼女自身の裏の問題があり、逃げ出したくなることがある。暗い危険な無意識に向かうのは陰しい感じだが、中に入ると自分が見渡せる程度でもある。「犬」は Th 像と考えられ、彼女に関心を向けている存在である。ロ・法からの流れがあり、良性的転移関係の上で心の深い部分にある課題に取り組んでいこうという彼女の現状がみてとれる。

ii) LMT-Hole ②

「季節は稲が実ってるけど春っていうか、暖かい。秋というよりは春」と言う。家の色が塗られていないことについて聞いてみると、「明るい色でもなく暗い色でもない。塗ると家のイメージが崩れるのでやめた」と答える。まだ家族についての位置づけが不明瞭であることを推測させる。穴は「縦に大きくて深く、井戸よりも大きくて、覗いても底が見えない。のどかだけどそこだけとても危険」と話す。「岩も真っ暗」というので、「不安な感じで連想することは？」と問うと、昔のアルバムを見て涙が出てきたとの話題に話が移っていく。

描画からの連想をもとに、抑制されていた子どもとの葛藤を再燃させ、関係を考えさせるきっかけになっている。穴の部分だけ「とても危険」というのは、まだ内的な課題を内

包しており、無意識的な葛藤に近づくのは危険なことでもありながら、深めていくべき課題でもあることが示唆されている。

iii) LMT-Hole ③

「川はどこから流れ始めるのか見えない。深くないけど水がとても濃くて、浅いけど深いように見える」、「空は晴れ渡って見上げると快晴。普段の視線が暗い」とのこと。「川の向こうに大きな穴があり、回りに岩がゴツゴツしてる」そして穴は「かなり大きい。この部屋〈面接室〉の 1/3 ぐらいで底が見えない」、「人が危ないよって止めるような岩なんだけど、自分ではそうでもない」と言う。

Th は「川の音を聞けば浅い、穴は人から言われるほど危険じゃない、田は仕事がやっぱり気になってるのかな。下を向くと暗いけど、ちょっと見上げれば青空。視点を変えれば良いんでしょかね。そんなことを感じました」と彼女からのメッセージを感想として伝えたところ、彼女は笑顔を見せた。

田んぼの面積が広く、Th には苦心して仕事に適応しようとする姿勢がみてとれ、一見して無意識から穴を通してエネルギーが溢れ出てくるようであり、「小学校の時に手を入れて吐いていた」というエピソードも Th には思い起こされた。他方、心理療法の中で抑圧が緩み、それはむしろ田んぼを豊かにするエネルギーでもあったと考えられる。この両者のせめぎ合いが穴から溢れ出るエネルギーという形になったのかもしれない。

iv) LMT-Hole ④

季節は 4 月か 5 月で、「お花の時期。庭にも山にもお花がいっぱい咲いて子どもたちが散歩に行ってる。とても天気が良い」と言う。穴は「ポコッと足が引っかかる程度の穴」となっている。彩色されなかった家が、LMT-Hole ③ではすべて赤い色になったが、ここではすべて違うカラフルな色になり、全体的に筆圧が強くなって、人の数も多くなっている。ポジティブな感情や情緒的エネルギーが感じられる絵である。前回まで強調された穴は、邪魔にならない場所に小さく置かれている。家の問題も陰日向がなくなって力強い安定した情緒を取り戻し、“もう穴を通して無意識の課題に取り組まなくても良くなりました”というのが、Th に対する B 子からのメッセージであると考えられた。現実場面でも子どもとの葛藤が解消されて、「暗闇も無駄じゃなかった」と、そのことを示している。

IV. 心理療法的バッテリー

この面接過程では、面接の間隔が広くて内的事象の流れが捉えにくいと Th が感じていたこともあり、投映法は B 子を理解するための大事な手段であった。ロ・法は全体的な把握と方針の決定に関与し、セラピスト・クライアント関係を内包していて、LMT-Hole はそれを受け継いだ。そして経過の中での内的状況のあぶり出しと、心理療法的関与に有効であった。また、「穴」の Item は内的課題の象徴的存在であった。

心理検査は単独で対象者のすべてがわかってしまうというようなものは存在せず、対象者と必要性に応じ、また検査者の手中にあるものをバッテリーを組んで実施するのが妥当である。今回、Th は最初のロ・法以外は単に検査としてのみならず、心理療法的にみていった。それは簡潔に言えば、ロ・法の結果や LMT-Hole について話し合い、感想やそこ

からの指摘であり、Th がそのイメージを保持しながら心理療法を進めることである。

それらを導入する理由は、①ロ・法は心理療法的な関係の中で実施する時、一緒にクライアントの状況を眺めるという付置ができ、メッセージ性が高まってそれを受け取ることが治療的であること、②面接回数が 1/2 週に 1 回、または 1/4 週で、頻度が少なく、その補助手段とすること、③症状に解離があるクライアントであり、内的な表現が苦手なので非言語的媒体が有利と思われたこと、④特に LMT-Hole は無意識領域との繋がりが理解しやすい技法であることなどである。

B 子は 3 人姉妹の中、自分だけが他の姉妹より劣っていて、両親にも愛されずに育ってきたと感じており、小学生の頃から摂食障害を患っていたが、その後いじめにも遭い、自己評価が低いままに成長してきた。特に父親からは厳しく統制され、独身時代に現在の夫と付き合っていたことが知れて、厳しく咎められたことが解離症状が出現するきっかけになっている。彼女は父から逃れて結婚するものの、夫から十分な愛情を受けられなくなり、攻撃性を長男に向けることになる。夫の母親が古くから不貞を働いてきたということも知って夫の両親に対する不信感も増し、彼女の厳格な超自我を刺激してもいた。父親へのエディプス葛藤が婚家の家族関係の中で再燃し、症状化したものと思われる。

彼女は #3 で「先週死にたいと思ってここに来た」と話しており、これはロ・法を施行した週である。さらに「今は死にたい気持ちもない。何となくポカンと穴があいたような状態」と言う。ロ・法の結果を伝えた次の週では「この間心理検査の話聞いてポカンとしてると言ったのが、この部屋を出た時にハッとわかった」と述べ、「子どもの運動会の姿を夫にも伝えたいと思ってたことに気づいて夫に言ったらポカンというのがなくなった。うれしくなって涙が出た」のように、情緒刺激に敏感に反応して意識がしつかりすることがわかる。

そのためロ・法②では、転移関係が内容に反映されていると考えられる。だが、この後むしろ症状が悪化するようになるのは、ロ・法での子どもに対する過度なポジティブイメージが躁的防衛を表しており、それに対する反動と考えられよう。恣意的な思考様式もそれを助長している。これはまだ治療継続の必要性を感じさせるものであり、Th はこのような投映を引き受ける次の媒体として LMT-Hole を選択した。“死んで落ちる小鳥”、“産み落とされた子ども”（ロ・法①）は“天使が 2 人寄り添って飛んでいる”（ロ・法②）になったが、地上に足をつけて歩くためにはまだ内界の探索が必要であった。ロ・法においては、クライアントの人格や病態水準、心理療法の適応や予後を考えるなどの通常のアセスメントをした上で、それを超えて心理療法の表れとしてその結果を読むことができる。彼女の満たされなかった原家族との愛情関係の整理という課題はまだ残されており、LMT-Hole に受け継がれて、いわば「穴」の奥を覗かなければならなかったのである。

彼女は言語による面接が可能であり、描画が心理療法の主技法になっているわけではない。滝川(1984)は LMT を実施するタイミングについて、「インキュベーションの中でなにか大事な反応を行わせているような感覚で」と述べているが、そろそろその蓋を開ける感じが、1 年前後の実施間隔になっている。内的な変化が起こっている器の中を時々見て確かめることは Th にも安心感を与え、軌道修正を促されたりする。その間隔感というものは、言語による面接と併行して用いるのに適当と考えられる。また、Th の考案した穴を付加する変法は、情緒的な影響性の高い B 子の無意識的な部分をはかるメルクマールと

しても適当かと思われた。実際の Th と B 子との LMT-Hole を巡っての会話は、LMT-Hole ②では彼女の内的な課題を巡ってであり、LMT-Hole ③では現状の認識と今後の方向についてのやりとりである。これは実際行われている面接と密接な関連があり、それらについて B 子も自分自身を客観的に眺めてみることを促されているといえる。

皆藤(1996)は LMT が「『見える世界』と『見えない世界』を繋ぐことによって生じる葛藤を『意味が付与される世界』の体験としてクリエイトしてゆく」ものであるとしている。わからない体験に意味を付与することは、心理療法の要諦部分でもあろう。そして、LMT はロ・法と比べて、その時々を意識的な部分と重ね合わせ、繋ぐことがしやすい技法でもある。なぜならばロ・法は情緒刺激があらかじめ決定されており、クライアントは受動的立場に立たされるのであり、LMT は Item を積極的に作り出し、構成する過程で能動的、意識的に課題にかかわることができるからである。これが治療的な技法としての LMT の使用法に繋がると考えられる。ロ・法の方が、自我と繋がっていない部分も含めて全体的なクライアントの把握ができ、同じ投映法でも、より繰り返しの施行が可能で、より介入しやすい LMT に繋げていくことが、言語的な心理療法を補強し、Th がその時々メルクマールを得ながら対処していくのに有用であると考えられる。これは時間軸に沿った経過をも含むクライアント理解であり、通常のテストバッテリーと区別して、「心理療法的バッテリー」と呼ぶことができよう。

2. 両技法の連関と心の物語

ここでは第2章1で述べた解離性同一性障害の事例D子を取り上げ、心理療法の経過とともにロ・法とLMT-Holeの関連を考えていく。彼女は前節のB子とは異なる世界を持っていて、両技法に表現されたものにも大きな相違がある。

精神的な病気を持つクライアントの心理療法を考えていく際には、そのクライアントの言葉や症状、生育歴などが明確であればあるほど了解しやすく、方針も立てやすいし、病態が軽いほど治療もしやすいと考えられる。反対にそれらの情報量が少なく不明瞭であるほど理解が難しく治療方針も立てにくく、そうした時に投映法を導入することは多くあると考えられる。その際には、心理療法の中に投映法を持ち込んだThの構えや捉える視点が患者にも影響を与え、そのことをめぐる展開が想定される。量子物理学において観測者が実験結果に影響を与えるという“観測者問題”は、完璧に客観的な視点などはないことを示している。畢竟Thはクライアントの心のすべてを扱うことはできず、それぞれの立場や治療法の中で心理療法を展開していくものである。投映法はそうした場合のひとつの軸になることがあろう。

1) 事例の概要 D子 女性 初診時 30代前半

D子は4人きょうだいの末子として生まれた。しかしD子の母親は子の父とは再婚であり、前夫の連れ子3人とともに再婚したために、D子ときょうだいとは血縁がなかった。母親は唯一血縁のあるD子にことの他つらく当たり、心理的虐待に近い養育を受ける。父親は彼女に優しくしたが、母親には逆らわなかったため、彼女を守ってくれる存在ではなかった。彼女はつらいことがあると外出して気持ちを落ち着かせていたという。

彼女は小、中学校ではおとなしい性格で家でも寡黙であり、暇があると漫画の本を読んだり1人で過ごしていた。小学校高学年から彼女は両親と離れて祖母と2人暮らしになったが、中2の時に祖母が引っ越し、D子は1人暮らしになる。高校時にはむしろ活発で、姉御肌の性格になったものの、この頃すでに結婚していた母の連れ子が離婚して同居するようになり、彼女はやりたいことも我慢していた。

このような境遇にもめげず、勉学にも力を注いだD子は学業を終えて就職をする。数ヶ月から数年間仕事をすると強迫的にやり過ぎて続かなくなり、いくつかの仕事を転々とする。仕事先で知り合った最初の夫と20代前半で結婚して子どもももうけるが、夫の性的暴力に耐えかねて結婚5年後には離婚する。双方の話し合いでD子は子どもを引き取ることができなかった。この間に身体的不調で病院に受診したこともある。日常生活においても朝から晩まで動きっ放しだったり、常に家のことをしているなど強迫的なところがあった。

その後再婚して子どもも生まれるものの、一家が同居する生活は長くは続かず、夫に借金があったために別居することになる。D子は常勤職で働き始めたが、しだいにきつくなってきた折り、上司に「がんばれば誰でもできる仕事なのに」と言われる。次の日に彼女はまったく声が出なくなって心療内科に来院する。主治医より心理療法の依頼がなされ、筆者が週1回の面接を始める。

2) 面接経過と投映法

【第Ⅰ期】失声への対処（X年6月～X年12月）

初めて会った D 子は、身体は比較的大柄で地味な服装をしていた。声がまったく出ないために筆談でコミュニケーションをとり、彼女は複雑な家庭に育ち、いつも母は怒っており、祖母に育てられたが、非常に几帳面で厳しかったことを語る。父はいろいろな事業を興して失敗した人であるという。彼女は人見知りが強く、人の陰に隠れていて、学校では声も出さなかったとのことである。小学校中学年になると学校でいじめに遭い、担任の先生が先頭に立っていたと話す。

Th は、筆談のみではコミュニケーションがとりにくく理解も不十分ではないかと考え、#3 で言語が使えなくても可能な描画法である LMT-Hole ①を実施した（図 5-5）。

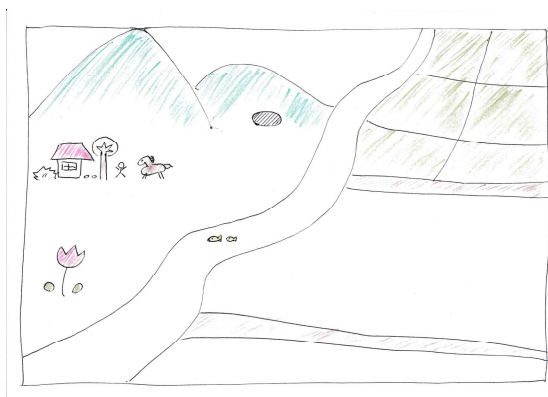


図 5 - 5 . LMT-Hole ①

< 筆談による説明 >

人・・・山のおもとでのんびり暮らしている父、70 歳。季節は秋でもうすぐ稲刈り。

動物・・・父が馬が好きでよく乗っていた。

川・・・せせらぎ

穴・・・防空壕の跡。昔祖母の里にあってよく遊んだ。

田・・・もうすぐ稲刈り

この Inquiry をしながら彼女は筆談で昔の思い出を語り、ここではその前の筆談がネガティブな思い出であったのに比べると、良い思い出であったのが印象的であった。そして字を書いていると手が震えるが、絵を描くのは大丈夫という。

図 5-5 を見ると、川が画面を二分割していて、道も川で行き止まりである。構成は不自然な部分があり、田んぼが天に達している。左半分の内界では郷愁的な世界が広がり、こじんまりとしながらも楽しい思い出のある歴史へと繋がっている。だが、右側では何も描いてない空間と、田んぼが大きく上の方に広がり、この田んぼは現実世界の「豊かな生産性」ではなく、むしろ立ちどかる強迫性とその圧力のようなものである。これに耐えられず、彼女は左側の内的な世界に逃避しているのであろうと考えられた。動物は「馬」で彼女の祖父が飼っていたことがあり、父親が好きだったという。彼女は父親が好きだったが、母親が父親をとられるとって嫌がるので父親に近づくのを遠慮していたという。

Th はこの二分割された画面を統合させることが課題であると考えた。後から考えると

この分割は人格の分裂と関連していたのかもしれないが、当時は思い至らなかった。郷愁に遊びながらも父母に対する問題があり、心理的に父親に親和的だが母親からじゃまされるような葛藤を持っていることが伺われた。しかし人の姿は小さく、対人的な距離の遠さを感じられた。Th は解釈のようなものは伝えず、D 子話を聞いてそのあり方を理解しようと努め、「絵は手が震えない」というので、彼女にとっての大事な自己表現であると受け止めた。

#6 では初めて肉声でしゃべり、「仕事を覚えるまでは楽しいけど、2 ～ 3 年たつて覚えてしまうとやる気なくなる。するとほんとに熱が出て調子が悪くなって仕事を休みがちになって行けなくなる。身体がついていかず、しまいには食べられなくなって水も飲めなくなる」と語った。

Th は LMT-Hole での画面の二分割が身体と心の分割かと考え、「声が出なくなるのもそうだが、身体のコントロールが利かなくなるようで、それも問題点として一緒に考えていきましょう」と伝える。身体症状は続き、#8 では「何かしようと思うと後頭部が締め付けられる感じ。家事をしようと思うと、息切れと動悸がする」と言う。家事をすると止まらなくなり、よく模様替えをして家具なども1年に何回も移動する。この強迫性は、LMT でみられた田んぼ表現の表れではないかと Th は連想した。

さらに#10 では、食べたものなど記憶がないことが多くあり、自分の年齢がわからなくなったり、来院も忘れてしまうという。Th は治療に対する抵抗かと考えたが、治療への抵抗を扱っても D 子には全く思い当たることがなく、Th にも原因がよくわからなかった。彼女は「精神的にも身体的にも自然なものが押さえ込まれている感じ」と語った。

この頃から日常生活では両親と同居するという話があるが、義父は DV 傾向があり、同居を迷っている D 子である。面接場面では気を使っているか聞くと、「そういう感じはしないけど脈打ってる。しゃべり続けて自分の気持ちを落ち着かせている」と言う。

【第Ⅱ期】交代人格の表明 (X+1 年 1 月～ X+1 年 5 月)

(#19) 彼女は自ら「言うか言うまいかずっと悩んでたけど、自分の中に他の人がいるみたい。記憶がとんでる」と知らないうちに交代人格が出現していることを打ち明ける。小さい子どもがよく出現するようで、虐待されていたことをしゃべり、通院でもし治ったら自分がいない子だったということになるんと不安を感じているらしい。その人格は夫が目撃しており、Th は思ってもみなかった告白に驚かされた。解離性同一性障害の疑いが出てきたが、どの程度のものなのかを探る必要を感じた。夫が呼ぶと交代人格が出てくるというので、#21 では、夫に同席してもらう。夫に呼ばれて出てきたのは V 子と呼ばれる子どもの人格で、初めて会った Th にはにかみながらソファの上で足を上げて座り、D 子は普段決してそういう座り方はしない、質問に答えてくれる。

すると、① W 子：思うように行動する積極的な性格、② V 子：10 歳、虐待されていた自分、③ X 子：性的虐待を受けていた自分、④ 短大生：楽しかった時の自分、⑤ 怖い人：破壊的で自殺念慮のある自分、などの人格が存在することがわかる。

アンカバーな形でそれらの症状が悪化しないようにと考えながらも、どの程度交代人格と付き合っていくのか良いのか見極めが必要と考え、V 子に話を聞きながら LMT-Hole ② (図 5-6) を実施した。

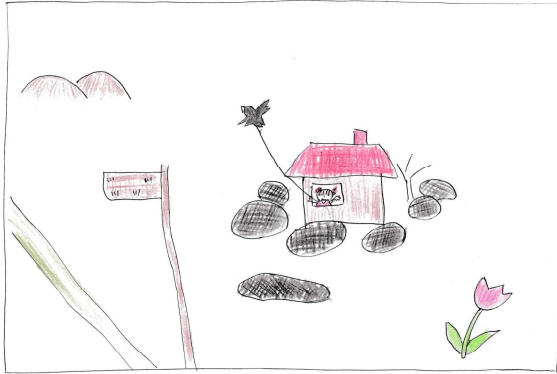


図 5 - 6 . LMT-Hole ②

(説明) 田舎、うーんとカラスと遊んでる。(ひも?) うーんとね。カラスが飛んで行きたいけど、飛んで行けない・・・うーんとね、出て行きたいけど出て行けないから、一生おりたいって。(その子が?) うん。(カラスが好き?) うん。いつも飛んでね。自由で楽しそうだから。(石が周りのある?) 出たら怖いからね。出られないから。(どうして出られないの?) うーんとね、うーん、叩かれるかもしれん(誰に?) うーん、お母さん。

(どんなおうち?) 屋根があって、煙突があってサンタさんが来てくれる。煙突がないとサンタさんが来んからね、クリスマスに。(田) 枯れて何も無い。

(穴?) 家から落ちる穴。嘘をついたら地獄に落ちるの。舌を抜かれる。

主人格が描いたのとはかなり様相が違い、同一人物とは思えない絵であった。筆触や彩色の仕方、色の濃さなども違っている。ただ、チューリップの描き方は似ている。年齢的にも幼く未熟な印象を与え、内容も暗いストーリーになっている。母は「叩かれるかもしれん」という厳しい親であり、実際の体験を表している。D子は外へは出られず、自由に飛んでいくカラスを羨んでいるが、このカラスも縛られていて自由ではない。そしてもし外へ出ると、地獄に堕ちる穴が待っているという。「嘘をついたら舌を抜かれる」というのは自己処罰的な失声の症状として顕現していたのであろう。

この中での救いは「クリスマスに屋根からサンタさんが来てくれる」という望みであり、救世主願望である。実際の経験の中では、彼女が小さい時、他の家ではサンタがクリスマスにはプレゼントを持ってきてくれたのに、自分のもとへは一度も来なかった寂しい体験と結びついている。このようなX子はかつてのD子の内的な姿であると考えられ、かつて(#12)「自然なものが押さえ込まれている感じ」と述べていた彼女の姿が見事に表現されていると思われた。

一方でクリスマスの話は本人格が述べていた思い出と同じものであり、この絵もそれなりに一つの人格としてのまとまりを表しているが、記憶が繋がっていることは、人格の繋がりがある程度見込めるのではないかとThに期待を抱かせた。Thは全体像の把握のためと、その問題に対する方向を提示する必要も感じたので、その旨を伝えて、ロ・法①を施行した(#28)(結果は後述、表1)。

次の面接で人格的には現実吟味力、反応性などしっかりしていると伝えたうえで、表面的な部分での対処や反応が多く、X子の描いたLMT-Holeのような情緒的な表現や苦

しさ、子どもっぽい傾向は表れておらず、本来はそういうものが D 子の中にあり、それらが自分の中でまとまってくると良いのではないかと伝える。

【第Ⅲ期】家族の問題へ（X+1 年 6 月～X+3 年 7 月）

(#34)では D 子が妊娠したことを報告し、話はしだいに家族問題が中心となってくる。夫が抱えていた借金のために籍を抜いて影響が D 子に及ばないようにしていたのだが、出産を機にやはり再入籍した方が良いということになる。出産が近づいて面接は一時中断となる。

(#47)年が明け、3 月に出産後初の面接となり、明るい表情を見せる D 子である。交代人格も出現が少なくなり、「記憶がとんでるところがない。何かあると自分で解決するんじゃないかって他の人格に頼っちゃうのかなと思う」と言う。体調も良く「自分でも不思議。赤ちゃんにおっぱいをあげるのが休憩になっているのが自分でも不思議。気楽で誰からも束縛されず、自分のペースで何でもできる」と、ゆったりしてくる。しかし「生活は苦しいけど完璧主義なので働くのが難しいと思う」と話すので、Th は「その発想自体が完璧にやろうとしている感じ」と伝える。

(#51)『ビルが爆破されてよける』という夢を報告する。母親と一緒にいて、自分は助かったけど母はどうだったか心配になる。「母が亡くなった方が自分のために良いと思っていたけど、やっぱり大事だと思った」と語り、母親から嫌われていない子だと思っていた幼児期の思い出から少し自由になれた印象を受けた。

(#52)『急性盲腸炎になって手術をしてもらっており、チューブがお腹から出ていて手に当たっている。血が流れていっているのがわかり、気持ち悪い。このまま死ぬのかなと思う。しかし、恐怖感はなく医者信頼している』という夢を報告する。その医者は 30 代くらいの男の人で、清潔そうな優しそうな感じだったという。Th はカウンセリングが彼女の心の手術をしているイメージであり、医者は Th 像かと思いながらその夢の報告を聞き、「心の手術かもしれない。変化する時には死ぬこともありますからね」と指摘し、夢からそれほど不安にならなくても良いと伝えた。

(#53)X 子が出てきてアイスを食べていたという。「他の人格は心のサインのよう」と Th がいうと、「自分を守ってくれる感じ」と応える D 子である。

その後来院が途絶え、#55 は 4 ヶ月ぶりの面接となる。引っ越しや子どもの病気、保育園入園などばたばたして、ふと病院に来ていないことに気がついたという。夫が呼んでも交代人格は出てこなくなっている。パートの仕事に行き始めたことも明るい表情で報告するがこの後また来院せず、1 カ月半ぶりにまたやって来る。来院を忘れてしまい、母親との約束もすぐ忘れていたと想起する。Th は「お母さんに対する時と同じように、甘えきれずに自分で罰してしまうのかも」と指摘する。すると次の面接では、携帯電話のアラームを自分で鳴らすようにしたら来院を思い出せるようになったとのことで以後はきちんと来院する。

【第Ⅳ期】振り返り（X + 3 年 8 月～X + 4 年 7 月）

(#63) <ロ・法②、LMT-Hole ③>

交代人格はあまり問題にならなくなっており、パートの仕事をしながら日常生活もやれ

るようになってきたので、Th はどこまで心理療法を続けるか見通しを持つために、「一度見直しをしましょうか」と話してロ・法②、LMT-Hole ③（図5-7）に導入する。

<Add.>太陽、雲、海（説明）私が子どもの頃で、道路が舗装されてない頃、向こう側に海が見えて家の側に防空壕があって遊び場になっていた。（遊び場？）1人の秘密基地みたいな。（季節？）4月、田植えの前。（山？）田んぼの近所に腐葉土を作るための山。

（家？）小さい頃に家でクリスマスをしたことがなくて、サンタさんが1度も来たことがないので煙突のないせいと思っていた。友だちのところへは来る。煙突のある家に住みたいと思っていた。（住みたい家を描いた？）はい（友だちの家には煙突があった？）なかったですね、ハハハハ。（人？）私を描いた。外の空気を吸っているところ。

図 5-7 を見ると、子どものころの家の近所がモデルになっており、LMT-Hole ①と同じような場所である。今回は画面が分割されておらず、構成も比較的良好になっている。海も見えていて瑞々しいエネルギーが感じられる。人は幼児ではなくて現在の自分であり、ありのままの自分を表現している。家はクリスマスにサンタが来てくれるはずの、憧れの「煙突のある家」である。彼女のところにも幸せがやってくるようになったのかもしれない。

「煙突掃除」も心理療法の中で行われ、カタルシスができた部分もあろう。しかしまだ海の部分が手前側より高くなっており、無意識のエネルギー過多の可能性も感じられた。しかしまたこのエネルギーは川を通じて流れを作っており、橋をまたいで水路付けができているともいえる。

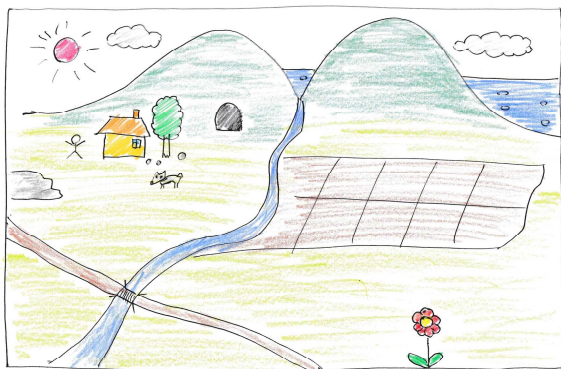


図 5 - 7 . LMT-Hole ③

次回（#64）、検査結果について話そうとするが、D 子自身がずっと過去の想起をしている。彼女は陸上で大会に出た話しをし、中学では運動が得意なことが原因で苛められたこともあったという。学校と家では全く違う性格で。学校ではどうしてしゃべらないのかと言われて、おかしいことに気がついたという。苛められることを親に言うと言親にも見捨てられる恐れがあり、それを今まで忘れていたという。この頃から「忘れる」という解離の防衛を使っていたようであった。Th は LMT-Hole にみられた「煙突」の、掃除のエネルギーのように感じながら聞いていた。Th の方からロ・法②（結果は後述、表 2）について次のように取り上げた。

<ロ・法②について>

Th が「気持ちがリラックスしてきていますか？」と聞くと、「そうですね。前はムキになってしてたけど、家事などサボるようになってる。前は倒れる寸前までやってた。わがままだと思ってたけど、今はやめとこうかと思うようになった」と答える。「前は不安を他の人格で防いでいたんでしょうか？」とさらに聞くと、「このごろまた出てくるのが増えてるみたい。身体がきつい時に出てきているかもしれない」とのこと。「X 子（子ども人格）が出てくる時は甘えたい時かな」と尋ねると「自分ではよくわからない」と答える。さらに幼児期について語り、「小さい時に息を止めてたら死ねるかなと思って、止めてたことがある。地獄に行くと思ひと思った。当時は不幸だったと思うけど、今は死にたくない」と言う。結果に関してはあまり詳しく触れないままに過ぎた。現実吟味力が低下し、恣意的思考も増加したようで、自我境界が脆弱になったように見えるのは、心理療法の中での事象であると考えられた。無意識との境界が緩やかになったことで、彼女が昔の出来事について振り返り、過去の整理をするのにはむしろ役立ったと思われた。「地獄に行くと思ひ」というのは LMT-Hole ②の「地獄の穴」を想起させるものであり、死や地獄への恐れを語っていること自体が、それを受け入れていることを示すと考えられた。

(#69)「鼻に痛みが出たので心身症かと思っていたが、蓄膿で病院に行ったら楽になった」と話し、以前は痛みがわからなかったとのことである。小さい頃に腹痛と吐き気で病院へ行くと、「これは仮病で親が甘やかしている」と言われた。今は家族も体調が悪い時には「寝てなさい」と言われ、その気持ちがうれしいという。

X+4 年 (#82) では、「私は小さい時からキレて止まらなくなったりした。父にもそういうところがあって、苛められて泣いて帰ってきた時に私を殴り続けて止まらなくなった。父は D 子が苛められたと思ってショックだった」という。次の回では子どもの頃よく扁桃腺を腫らして高熱を出し、母親は普通知らん顔してるのにすごく心配して世話してくれた。うれしかったけど落ち着かなかったと、身体の不調を訴えることができなかった母親との問題を語った。

それから 2 ヶ月程経つと、別のパートの仕事もやり始める。大きな声を出してしゃべることが必要な仕事であり、もともと彼女は失声の症状で来院し、ロ・法 2 回目での「ロボットの息苦しさ」もなくなったことが意義深く感じられた。さらに数回後には「だいぶ調子良い。仕事のペースがわかってきて人とのネットワークで助け合っている」と生き生き話しており、ロ・法 1 回目で問題とした“人形に血が通い”、“牛に顔ができること”が達成されたかと思われた。「忙しくなってきたのでしばらく来られないかもしれない」と言い、来院は途絶える。

3) 考察

I. 面接経過について

I 期において、D 子が来院した頃はまったく声が出ず、Th は筆談でコミュニケーションを図っている。断片的に昔の話が出てきて、幼少期から虐待を受けているに近い状況であったことが推測されたが、家族関係は複雑でコミュニケーションもとりにくい状況であったので、Th は彼女の生育歴が掴みにくいと感じている。また後からわかったことであったが、彼女は昔から病院に行くと「仮病ではないか」などと疑われ、病院に対しての不信感もあって自由に心を開けないところもあった。Th は支持的に面接を進め、それによ

って失声の症状は消失するが、まだ内的な変化は十分ではないと考えられた。

Ⅱ期には、D 子の方から自分の中に他の人格が存在するという告白がなされ、Th は驚かされる。そのための治療を Th も考えて心理検査を実施したり、呼び出した交代人格と話すが、当面破壊的な人格は表面化していないことも併せ、よけいに交代人格の出現を増加させたりしないように考慮しつつかわっていくことにし、本人格が自由な自己表現ができるように考えた。彼女が来院を忘れてしまうことも再三あり、解離性の健忘のように思われたが、これは D 子が自分の携帯電話のアラームを鳴らして来院時間を知ることによって解決された。Th は交代人格出現の話しを中立的に聞いていた。彼女は交代人格が存在に対する違和感と不安も持っていたが、交代人格が出現しても、ひどい逸脱行動はしないことを理解し、むしろ「自分を守ってくれる」面があることを認識して、受け入れるようになっていった。そして交代人格の出現は次第に減少していく。

第Ⅲ期では D 子が妊娠し、家族の異同も含めて現実的な問題が面接の中でも多くなってくる。これは彼女が“現実的”な子ども人格を創造したということでもあり、心理療法が新しい段階に進んだことを感じさせた。そこでこの時期は現実的な問題について共に考えていくという面接となり、Th は現実の枠組みを支えていった。またこれは同時に、交代人格が出現する必要のない環境を作ることもあった。

Ⅳ期ではもう一度内界に目を向けて過去を振り返り、解離されていた心の世界を問い直し、統合させていった。ロ・法と LMT-Hole はそのような D 子自身を表現していたと考えられる。それを以下に考えてみたい。

Ⅱ．ロ・法 1 回目の結果より

ロ・法①の結果では（表 5-4）、テストへの入り込みは良いが、F 型で affection が乏しく、時に形態水準が落ちることがあるが、著しい混乱はない。Content Range=6 と狭く、固い人格が伺われた。筆者は転換タイプのヒステリーと判断し、彼女の訴えからは解離性同一性障害と考えられたが、それを示すプロトコールとは思われなかった。

内的な世界が反映されていないという印象を受け、交代人格があるにしても本人格からはかなり遠い存在なのだろうと考えた。すべての人格の統合が必ずしも必要なのかわからないが、少なくとも彼女の陰の部分を探るよりはこれらのテストで見せた固い人格を柔軟に情緒的に豊かにしていく方が良いのではないかと思われた。

交代人格が描いた LMT-Hole ②を彼女に見せると、「描いた覚えがない」と言う。そこに表れた情緒的な部分はロ・法には表れておらず、「そういう情緒的な部分もあなたの中にあるのだと思うので、ぼちぼち考えていきましょう」と伝える。双方とも D 子の内的な部分であることは確かであり、これらの間の橋渡しが必要であった。

表 5-4. ロ・法①のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I .				
6"	ハ	①コウモリ	①全体的にこの羽がコウモリに見える。（どこ？）こういう感じで	W F+ A P N
20"	ハ	②鬼	②これが角で、目でキバに見えて	Wse F+ Hd/ Athr・Hh

		-28"-		definiteness (real)
II.	10"	△ ①うーん、子どもだけ -19"-	①こっちが半分が双子みたいに、人が向き合ってるように見えた。 (他に?) これ手で足がこう	W B M p + H Pch affective elaboration definiteness (age)
III.	4" 14"	△ ①うんと、リボン △ ②カマキリだけ -23"-	①これが真ん中のこれが、リボンに見える。(?) 形が、色、形 ② (?) 目のところと口のところが	D4 FC+ Orn Porn D6 F+ A N
IV.	4"	△ ①アクマだけ -11"-	①全体的に牛のようなアクマっていう感じでこれが角。(らしさ) 角があるところと、何かかぶっているような感じ	W F+ A/ ・ cg Athr ・ Hh
V.	2"	△ ①ガだけ -9 "-	①この触角のところと羽のところがガに見えた。	W F+ A P N W F+ Bot N
VI.	12" 25"	△ ①うーん、葉っぱ △ ②クマ -31"-	①これが茎のところで、あとこういう感じで、葉っぱに見えた ②うーんと、ここらへんがクマに見えてこれが手に見える (?) ここからこれが手、足で	W F+ A N
VII.	4" 18"	△ ①人形 △ ②牛 -22"-	①これも対してて、これが頭で髪の毛で身体と手とドレス ②牛は・・・これが角がふたつに見えてこれが顔に見えた。(どこ?) これ全部が角でその下に顔があると思った。(顔はない?) はい	D5+5 F+ H' ・ Toy ・ Cg N ・ definiteness (i)animation) W F- Ad Hh
VIII.	14" 20" 25" 31"	△ ①トカゲ △ ②カエル △ ③エビ △ ④カニです -35"-	①この両端の部分がトカゲ (?) このしっぽが長いところと頭 ②この、下のところに 2 匹 (?) この足が曲がったところ ③ここが 2 匹、エビ (?) ここの触角みたいなのと目としっぽ ④ここが甲羅に見えた。ここが口のところに	D1+1 F+ A P N D2 F+ A N D5 F- A N D6 F+ A Adef
IX.				

18"	ハ	①カブト虫だけ -27"-	①ここのところがカブト虫の背中、 肩のところに见えて、これが角に 见えた（？）これが足	Dd F- A Hh
X. 4"	ハ	①ヒヨコ	①これが 2 匹。ヒヨコがいるよう に見えた。（？）色が黄色いところ とくちばしがある	D7+7 FC+ A N
9"	ハ	②海藻	②これが海藻に見えた（らしさ？） いっぱいこう、飛び出るところ	D1+1 F+ Bot N
13"	ハ	③ザリガニ	③これがこういう形で	D 1+3+5 F- A Hh
27"	ハ	④血 -32"-	④この色が血に見えた。あとこの 部分とか（？）色	D5+5+9+9 C Bl Hhat

思考・言語カテゴリーにチェックされたのは7個である。しかもそれはカードⅠ②「鬼」(W) < definiteness (real) >、カードⅡ①「子ども」(W) < definiteness (age) >などであり、知的に合理化しようとするような反応が多く、情緒的なものは感じられない。カードⅦでも①「人形」(D 5+5) < definiteness (imanimatton) >と反応して「これも相対してて、これが頭で髪の毛で身体と手とドレス」と形態だけ指摘している。このカードの反応は2個であり、②は「牛（角が2つあって顔に見えた。《どこにある？》これ全部が角でその下に顔があると思った《顔はない？》はい）」(W) < overdefiniteness >と答えている。カード全体が角であり、牛の顔は実際には見えておらず、ここだけ恣意的な見方がなされている。またこのカードは Self Image Card であり、「人形みたいで感情が表に出ない感じ」とその理由を述べている。動物反応が多く、A % = 65 %あるが動物運動反応 F M = 0 である。このように動きのない固いあり方が自分であるということであり、“人形”のような命のない自分、あるいは「角」だけの「顔のない牛」が Self Image である。そのためにここだけが恣意的であり、“私はこのように固く閉ざされ、角だけ持っていて人に見せる顔がない”という彼女の内的な物語を主張しているのであると解釈できる。

この反応に類似したものを挙げると、カードⅠにおいての②「鬼（牙）」、カードⅢ②「カマキリ」、カードⅣ①「悪魔（牛のような悪魔で角）」、カードⅧ（表9）③「エビ」、④「カニ（甲羅）」、カードⅩ③「ザリガニ」などがある。これらは反応全体の中で 35 % を占めており、カマキリ、エビ、カニ、ザリガニなどの反応は、ハサミやカマなど指摘していないものも、甲羅で覆われたりハサミを持っているような小動物である<名大法の「感情カテゴリー」では不安防衛反応(Adef)、間接敵意反応(Hha)反応とチェックされる>。「悪魔」や「鬼」は直接怖いもの(Athr)である上に、牙と角も付加されている。防衛的で直接的、間接的な攻撃性を内包していて、“私に近づかないで、近づくと危ないわよ”というメッセージを発信しているようであり、それは彼女自身が不安を抱えているからでもある。このロ・法実施の後、記憶がなくなるために面接を忘れて来院しないということが増加するが、彼女の心の琴線に触れたからであろうか。

そのような彼女の反応のありようから心理療法の道行きを考えると、次のことが大事になる。

①限定づけ(definiteness)や構えが緩むこと

知的防衛や「角」、「牙」などという、かまえた受動的な攻撃性のあり方が緩むことが大事であろう。実際のD子は一日中休まず家事をしているなど強迫的な傾向があったが、そのような固い構えはとてもしんどいものである。彼女が心理療法を終了する時には「物を全部片づけなくても、人が来れば隠せば良いのだと思って気が楽になった」と語っていたのは、それが改善されたことを示すものだろう。ただ、definiteness というスコアは健常人にもよくみられるもので、このスコアの存在が直接的にその人の主防衛を示すわけではない。他のスコアとのバランスが問題であり、この場合には他のスコアが極めて乏しいので目立つし、重要となっている。

②人形に血が通って動き出すこと

「人形」はF反応である。生命のない形だけの「人形」から「人間」運動反応になり、それが増加することが望まれよう。共感性が増して対人的な関心が高まり、情緒的に豊かになることといえる。M反応は、カードⅡ「子ども（双子みたいに人が向き合ってる。目が笑ってるような感じが子どもらしい）」の1個だけであり、唯一 affective elaboration がチェックされ、「子どもが好き」ということで Most Liked Card に選ばれている。つまりここにはポジティブな感情が動いており、子どもへの関心もみてとれる。この後に彼女は実際に妊娠、出産することになり、血の通った「人間」が現実にも増えた。ロ・法上に表れた転移の行動化という見方もできようが、この赤ちゃんが彼女の生きがいを高めたのは確かである。

③牛に顔ができること

形がない空白部分に「顔」を反応しているが、形態を押さえて顔が見られるようになること。これは社会的な顔、ペルソナが形成されることでもある。彼女の最初の主訴は「失声」であり、「誰でもできる仕事なのに」と会社の上司に言われて世間に“顔向け”ができなくなってしまったのであった。

固く縮こまったD子のありようが上記のように動いていくとしたら、そのストーリーを「心の物語」と呼ぶことができ、そのような物語の展開に寄り添うのが心理療法の道行きであるといえよう。この物語は1人では編まれず、Th とクライアントの双方の関係の中で生成されるのだが、この物語を知っているのはThであり、クライアントは知らない。

「深層心理を知っているのは、自己ではなく、他者、つまりは分析者の側である」という内海(2012)の指摘は当を得ている。

さらにこのロ・法で筆者はD子に反応から連想されることを聞いている。渡辺(1995)は限界検査の一環として、特に重要と思われる反応についての連想を最後に聞いておくことを勧めている。筆者はそれぞれの反応ごとに連想を聞いており、彼女はテスト状況であり感情が表出しないと想着て、一つの工夫として行った。以下に例を挙げてみよう。

I. コウモリ・・・蚊を食べてくれるので助かる。鳴声がかわいい

鬼・・・人間と仲良し。

IV. アクマ・・・自分が悪い人間だから迎えに来るような感じ

Ⅶ. 人形・・・ショーウインドウに飾ってある人形っていう感じ
牛・・・のんびりしていてゆっくり時間が流れてる感じ

この連想内容を鑑みるとロールシャッハ反応は一変し、感情豊かな装いをみせる。「コウモリ」は「鳴き声がかわいい」とポジティブな印象になり、「鬼」という異形の怖いものも仲良しになっているのは反動形成であろうか。「自分が悪い人間」という自己不全感も感じられる。先にも指摘した顔のない「牛」は、“ゆっくり時間が流れてる感じ”となり、彼女が目指すべき目標はすでに彼女の中に内包されている。

ここでのロ・法は「認知」の側面より「イメージ」を重んじる扱いをしており、心理療法はイメージが貧困であるより豊かな方が好ましいと考えたことによる工夫である。ここにはとても D 子らしい部分が表れており、聞かなかった場合に比べて理解が深くなると感じられ、前意識水準の投射も表出された感があった。これには Th との関係も影響していると考えられる。この技法について、連想を聞くことが Inquiry に影響を及ぼす可能性も当然考えられるが、彼女の場合、Inquiry で連想を聞き始めてから自分からそのような連想やイメージを語ったり感情表現をすることはなく、その影響は比較的限定的であった。さらにこのロ・法は心理療法開始から半年以上経っており、その影響のもとでの施行であることは注意する必要がある。

そしてその前の LMT-Hole ①では左右の画面の分割が気になったところであるが、体と心の分割、内的世界の分割が郷愁に添えて伺われ、ロ・法では断片的な反応の羅列が断片化された世界を表象している。

Ⅲ. 2回目のロールシャッハ法と LMT-Hole

表 5-5 を見ると、ロ・法②はむしろ病態が悪化したように思われる結果であった。この時期はたびたび出現していた交代人格も目立たなくなっており、仕事をして現実適応的になっていた。検査後の面接において、D 子が過去の想起をしていて結果の話が次の回に延びたことなどを考えると、転移性の退行が生じていると考えられる。これは D 子の自我が柔軟性を獲得するために必要な退行であったと思われる。「ロボットの周りにガスか何かがまとわりついて息苦しくなってくる」(カードⅨ)という反応は、この後の面接時に「息を止めてたら死ぬかなと思って止めてたことがある」という幼児期の記憶と結びついているのは明らかであり、「今は死にたくない」という現在の気持ちの表明は、それを乗り越えた証しである。これは否認、抑圧されていた心的な深層の内容が緩まって露呈されてきたと考えられる。「昔水墨画を習っていたのでそう見えたのかも」(カードⅥ・utilization for illustration) という反応も過去の想起と結びついている。

この場合はロ・法が本人格の内面に「穴」を開けているともいえる。逆に LMT-Hole の「穴」は①、③とも「防空壕」であり、隠れて遊ぶ子どもっぽい守りの空間である。②のみ「地獄に通じる」恐ろしい穴となり、解離された暗黒の空間への通路となっている。意識的に統制できる表現としての絵画では解離された深層が表現されず、懐かしいポジティブな過去の思い出と結びついているが、ロ・法では心の暗闇に沈む虐待やいじめに絡むネガティブな感情体験を表出させている。しかもロ・法においても 1 回目での施行ではそれが明らかになっておらず、ある程度意識下近くまで浮かび上がってきて、抑圧の隔壁が弱

まる必要があったと考えられよう。LMT-Hole ②において交代人格という意識から隔離された自我状態において「穴」は意識と無意識を結ぶ橋渡し機能を持っているといえる。

ロ・法②に表れた形態水準の低下や情緒刺激に対する混乱(カードとの距離の喪失など)は、それ自体好ましいものとはいえないが、情緒的なものが浮かび上がってきたことは、心理療法の影響であると共に、内的な問題が扱いやすくなってきたことを示していると考えられる。多重人格者のロ・法結果はそれぞれの交代人格によって異なるとされるが、そのような場合、解離の壁に阻まれて治療的には扱いにくいと考えられる。

表 5-5. ロ・法②のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I.				
4"	ハ	①コウモリ、はい (他には?)	①全体がコウモリ (どこ?) 羽のあたりが。それとこら辺が頭	W F+ A P N
17"	ハ	②鬼、です -31-	②全体的に鬼。顔に見えた (?) 目とキバと、角と。で、舌を出してる感じ	Wse Mi+ Hd/ Athr Hh definiteness(reality)
II.				
29"	ハ	①宇宙人、あとはわからない -44-	①こら辺が宇宙人に見える。こら辺が目で、頭が大きくて	D d s e F+ H/ N definiteness(reality)
III.				
17"	ハ	①うーん・・・喫茶店	①全体的、この二人がウェイターみたいな感じ (?) 黒い制服を着て、喫茶店のマークみたいに見えるっていうか (?) 普通なら 1 人だけど、2 人いて、ここ蝶ネクタイに見えて (人?) ここに頭があって体があって、手があって、足があるって感じで	D4 FC'+ H Art Cg (P) P r e c · H d e h overfiniteness
27"	ハ	②うーん、トンボ	②ここだけ、トンボの顔に見える (?) 目のところと口のところ	D6 F+ Ad N
36"	ハ	③チョウ -44-	③ここだけ (?) 羽を広げてる	D4 FMi+ A N
IV.				
4"	ハ	①アクマ	①全体的で、これがアクマの帽子の垂れてきてる角みたいな感じで、これが目で (顔?) 顔っていうか、帽子と顔 (?) 色の感じが不気味	W FC'+ Hd' Cg Athr Hh affective elaboration
8"	ハ	②長靴、です -18-	②こことここ、両方 (?) この辺が破れかけた長靴みたいな感じ	D3+3 F+ Cg Agl affective elaboration
V.				

2"	ハ	①ガ	①全体的にガ、ここが頭の触覚と、羽と羽の下の方	W F+ A P N
8"	ハ	②イモ虫	②ここら辺（？）こことここはちょっと抜けるけど＜頭と足＞（？）何かクネクネした感じ	Wcut F- A N
16"	ハ	③カニ、です -21"-	③カニの爪に、ここが見えた（？）爪の両端挟んである	d1+1 F+ A/ Hh
VI.				
4"	ハ	①バイオリン	①ここがこう真っすぐに弦があるみたいな感じで。ここら辺は＜輪郭＞ははっきりした感じじゃない（？）ここら辺がまず中心で、あとははっきりした形になってない	D6+7 F- Mu N
25"	ハ	②山	②こういう感じのところだけ（？）水墨画で描いた山みたいな感じかなと（水墨画？）昔水墨画を習ってたからそう思ったのかも	Dd F- Nat Art N utilization for illustration
23"	ハ	③ネズミ、それだけ -31"-	③ネズミはここだけ（？）ヒゲがあって、目があって頭が小さい	D1 F+ Ad N
VII.				
4"	ハ	①ダンス	①2人で踊ってるような感じに見える（？）えーと、これがスカートで、女の子が手を後ろに反ってるって感じで。これが口で髪の毛がこういうふうになってる	WB Ma+ Rec Cg Prec definiteness (sex)
13"	ハ	②ツボ 少女、それだけ -26"-	②この中になるんだけど、白くなってるところ（？）何か陶磁器の白い感じが浮き出てる感じ（少女？）さっきと同じ、人に見えるから	Ds6(so) FC'+ Orn definiteness (age)
VIII.				
8"	ハ	①トカゲ うーん・・・	①トカゲがこの2匹に見える（？）ここが目で、こう足があって、しっぽに見える	D1+1 F+ A P N
26"	ハ	②エビ、それだけ -33"-	②エビがここ、両方、触覚、ギザギザのところと手と足というか	D3 F+ A N
IX.				
8"	ハ	①ロボット	①えーと、この辺がロボット（？）ここら辺がマスク、ここら辺が服っていうか、機械で作ってある服	WB Mi- Hd' Cg Sm Adif Adis arbitrary combination

15"	△	②カメレオン、それだけ	<p>みたいな（？）ここら辺がロボットで(Ds4+5)バイ菌か、ガスか何かが(D1+3)まとわりついてくるような感じ</p> <p>(バイ菌かガス?)よくわかんないけど見てると息苦しくなってくる。特にこの辺がマスク(Ds4 下部)をしていて呼吸がしにくい感じに見える</p> <p>②全体的に色が色々変わってるので、何か色が変わるって感じで(色だけで?)はい、で形がここら辺が手と頭の方に似ている</p>	W CF- A Mi content-symbol fusion
-29"-				
X. 7"	△	①ピエロ	①これも全体的に色んな色が使ってあるんで、色的なのと、足が曲がった感じが(D8)ピエロの靴に見える。これがピエロの目(D7+7)	DW CF- H Rec Cg Prec confabulation
15"	△	②花火	②花火はこんな感じで(D1)、こう散ってる感じと色んな色がある。	WA ma C Fire Rec Prec
24"	△	③ザリガニ	③ザリガニはここの赤い部分(D5+5)、ここが爪で(D11+11)足(D10)、これが目(D3+3)	D3+3+5+5+11+11 F+ A Hh
-31"-				

表 5 - 6 . ロ ・ 法① ・ ②のスコア

	1 回目	2 回目
Total Response	20	23
Time / ach	5.6"	3.6"
Time / c	10"	13.8"
Av. Time	7.8"	8.7"
F %	80%	56.5%
F +%	75%	61.5%
W : M	8 : 1	10 : 3
M : FM	1 : 0	3 : 1
M : Σ C	1 : 2.5	3 : 3.5
F C : CF+C	2 : 1	0 : 3
VIII ・ IX ・ X/R %	45%	30.4%
A %	65%	52.2%

P	3	3 (1)
Content Range	6	10
AFFECT		
Hostility	54.5%	26.7%
Anxiety	27.3%	40%
Bodily Preoccup.	0	0
Tot. Unpleasant	81.8%	66.7%
Dependency	9.1%	0
Positive Feeling	9.1%	26.7%
Miscellaneous	0	6.7%
Neutral	50%	44.4%

表 5－7. ロ・法①・②の思考・言語カテゴリー

*	Category	1 回目	2 回目 (* : 大カテゴリーの番号)
5)	Fabulization Response	6	7
	definiteness	4	4
	affective elaboration	1	2
	overdefiniteness	1	1
8)	Arbitrary Thinkng	1	1
	arbitrary combination	1	1
9)	Autistic Thinking	0	2
	confabulation		1
	content-symbol fusion		1
10)	Personal Response and Ego-Boundary Disturbance	7	1
	utilization for illustration		1
	Total	7	11

そして、ロ・法②の思考・言語カテゴリーでは overdefiniteness、utilization for illustration、overdue relationship verbalization、content-symbol fusion、confabulation など FABULIZATION から AUTISTIC THINKING に属するものまでが出現している。DEFENSIVE ATTITUDE や、FABULIZATION の中でも、比較的レベルの落ちるものが多くなっているといえる。それらが前述したように悪化したようにみえる点であるが、抑圧、解離の隔壁が弱まった時に情緒的刺激を受けると、内的な弱さが露呈してくると思われよう。心理療法においても注意が肝要であり、Th の方針として交代人格を暴露的に刺激することはしないようにしていた。また見ないようにしていた情緒刺激が入ってくるようになったので、刺激が強くて「全体的に色が色々変わってる」(IX) のようにとまどっているあり様がみてとれる。外部からの刺激に誘発されるロ・法らしいところであり、LMT-Hole では表現されにくい部分である。しかし、前述したように海の水平線の高さはエネルギーが溢れてくるようであり、ロ・法での思考・言語カテゴリーのスコアが多くなり、内的なものが溢れていることと関連があると考えられよう。さらに、ロ・法で「ガスがまとわりついて息苦しくなっ

くる」(IX)という反応を出しているが、LMT-Hole ③では「私が外へ出て空気を吸っているところ」と語っている。ここでは対照的に呼吸について LMT-Hole ではポジティブなイメージを、ロ・法ではネガティブなイメージを付与している。ロ・法という外部からの刺激によって“息苦しさ”を賦活されてしまうものの、LMT-Hole では海の水を川によって流し、外で空気を吸って外気を取り入れることができているといえる。

LMT-Hole は 1 枚目と 3 枚目で表面上穏やかな風景を描いており、彼女にとって懐かしい思い出を賦活されるような情景である。ここでは刺激の元になる Item は具体的に景色を形成するものであり、それがポジティブな思い出と繋がっていることが景色のポジティブな表現と繋がっている。つまり具体的な記憶が想起され、過去とのポジティブな繋がりを示し、ロ・法では息の詰まるようなネガティブな体験が投射されているということになる。このような相違が多層な内的世界を反映し、2 つの技法を用いることでネガティブなものとのポジティブなものとの統合を図ることができることを示唆している。

両技法の流れをみてみると下記のようになる。

LMT-Hole ① 画面の分裂と郷愁的な思い出の風景

LMT-Hole ② 子ども人格の束縛された苦しい世界

ロ・法① 固い防衛的な自己

LMT-Hole ③ 過去の寂しい思い出と外の空気を吸う自分

ロ・法② ガスがまとわりつき、色に戸惑う

LMT-Hole ①において画面が分裂しており、ここには郷愁的な良い思い出が付与されていたが、LMT-Hole ②での子ども人格は、虐待されていた幼児期の思い出を引き受け、地獄に落ちそうな苦しさを抱えていて、それを固い防衛的な自己が守っている(ロ・法①)。LMT-Hole ③において、寂しい思い出が意識化され、自我に受け入れられるようになると、それは重苦しくもあり、色に惑い、身にまとわりついてくる。彼女はこのような退行的なありさまをみせながら、現実世界では適応的に振る舞えるようになる。

両技法は彼女の心の物語を語り、心理療法の中では記憶の途絶と交代人格、虐待された過去とネガティブな思い出の整理が行われ、強迫的な傾向が緩和されて楽に生きられるようになっていった。ロ・法と LMT-Hole は固い彼女のあり方を明示し、「風穴」を開けていったといえる。そのために交代人格も次第に表面化する必要がなくなったと考えられる。情緒的な刺激には侵襲されて未分化な反応を出し、感想では「前は楽しいなと思ったけど、今はどちらかというと苦痛になる」と語った D 子であるが、LMT-Hole ではクリスマスの寂しい思い出を語り、Th の言葉に笑っている。この思い出は面接の中でも語られていて、言語、LMT-Hole、ロ・法の間の疎通性もよくなっている。

彼女の心の物語は言語的に見え隠れしていて、現実と過去の思い出を行きつ戻りつしていくが、ロ・法と LMT-Hole からうかがえるあり方は通底奏音のように経時的に流れており、両技法からみえる物語は入れ子のように組み合わせられている。そしてそれをみているのは Th であり、その視点も交えることの重要性を含めてこのようなアセスメントを「心理療法的バッテリー」と呼びたい。

そして LMT-Hole ではロ・法には表れていない情緒的な側面、交代人格の表現などがある

り、フィードバックとして現実吟味力や基本的な部分はしっかりしていること、情緒的な部分はほとんど表現されていないようであるが、LMT-Hole ではそれらが感じられ、本来彼女の中には情緒的な豊かな部分を持っているが、それが表には出てきていないようであることを伝えた。彼女は返事はしたが、感情的な部分というのは体感的にはよくわかっていないようであった。それは当然のことであり、もしそれがわかれば心理療法の目的は達せられたのだといえる。しかし、その時にわからないことも伝えておくことには意味がある。そのように伝えたテスターが Th として継続的にかかわっていくのであり、心理療法の途中でまたその話ができ、「ここまで来ましたね」と振り返ることができよう。心理療法終了時に D 子は人に声をかける仕事をするようになり、「夢中で声を上げていた」と報告していた。「失声」の主訴で来院した人が“私の言うことを聞いて！”と人にアピールする仕事を選んだのは、筆者には意義深いと感じられた。

IV. 反応の組み合わせを物語として読むこと

事例 B 子と D 子ではずいぶん様相が違い、事例 X では「思考・言語カテゴリー」にチェックされた心の物語がロ・法上に展開していたが、事例 D 子では鉄壁の守りによって隠されていた。このカテゴリーにスコアされないことも 1 つのメッセージであり、情緒的なコミュニケーションが取りにくいことはあるが、彼女なりの物語を表現しているといえる。具体的な事例を検討する際には総合的に考える必要があるが、本カテゴリーは重要な視点を提供する。

ロールシャッハ反応が物語っているものはある一つのストーリーであり、唯一のものではないかもしれない。筆者はかつて自分が箱庭制作をするのを自我心理学派の先生に週に 1 回、3 ヶ月間（12 回）にわたって見ていただいたことがあった。その先生は筆者の作品を見て「こういうのを見てるとユング的な解釈をしたくなるね」と言われた。精神分析家が父母のストーリーなしに作られた箱庭の独自の表現に物語をみているのであり、そのような物語はロ・法にもあると考えられる。渡辺（2006）は内容分析によるシークエンス・アナリシスを試み、ロ・法を物語として捉えようとしているのも興味深い。

ここでロ・法独自の特徴は基盤が形式分析にあることである。心の物語は地に足がついておらず、浮動的で健常人からどのような病態水準の人にも存在するので、その深度やもろさ、レベルを図ることは重要である。形式分析のスコアには認知や基本的な人格のあり方が示され、現実吟味力がどの程度あり、知的レベル、情緒的統制などはどうかという多くの指標によって基本的な部分を測ることができる利点がある。その理解の上で心の物語を考えていくことが必要であり、そうでなければクライアントとともに悪夢の世界に落ち込んでしまう可能性もあろう。また一つの物語がその時に突出していれば、その時点での重要な物語である可能性があるし、後に変化すれば、人格や考え方についてのリフレイミングがなされたかもしれないのである。

だが、ロ・法の反応の一部だけ取り出して心の物語として Th が受け取る方法は、独断に基づく誤った解釈に陥る危険性もある。すべての反応の中にはカード刺激をより現実に近いものとして知覚しているものと¹⁾、より内面の感情や無意識的な問題を投射しているものがある。もともとカードは現実にあるものではないので、それは程度の差かもしれないが、どの程度のものかを見極める必要がある。客観的にカードを認知しながらも、それ

を色づけていく反応も存在し、内的な物語を構成する要素を含んでいる。中でも特に意味深いものは“自己彩り反応 (Response with Self Image)”と呼ぶことができよう。馬場ら (1983) は「内的対象表象が直接的に現われるのは反応内容だといえる」と述べており、内的対象表象の動きと心の物語の形成は関連していると思われる。その意味についてはクライアントがある程度意識化していることもあるし、Self Image Card への投映と重なる部分もある。さらに馬場らがそれに頼りすぎることへの問題を挙げているのはもっともであり、常に全体性を考慮すべきである。

名大法ではその彩りを、感情テグリーと思考・言語カテゴリーですくい上げている。病的なものも含めてその人らしさが表れているものであり、病態水準が重いクライアントならば、悪夢のような物語が終了すればロ・法も変化し、精神病的な状態からも回復するということもあるだろう。

また人間の心は多層なので、投映もさまざまなレベルからなされていると考えなければならない。クライアントの語る内的な物語を見いだすためには慎重な吟味が必要である。Th の読みが的確ならば、ロ・法の結果は心理療法へのベクトルを明示し、時々に行く先を指し示すことになるだろう。

(注 1) 中村 (2010) はカードⅧの P 反応である「四足動物」は、世界で 90 % の人が見える現実的な形であることを紹介している。

3. 変化の乏しい事例をめぐるバッテリーの在り方

慢性化した精神科クライアントとの個人心理療法では、面接でも言語量が乏しくて話題が続かず、感情表現も乏しいことが多い。それは統合失調症を病む人に多いが、慢性うつ病や薬物中毒、混合性精神病などさまざまに診断されている人たちの中にもみられる。そして陽性症状が活発な状態とは違った意味でセラピストがエネルギーを使うことも多いので、セラピストの方が消耗してしまわないで、継続的に彼らと向き合っていけるかどうか、かかわる上での大きな課題となる。それらの人たちは個人心理療法ではなく、集団療法や、外来においてはデイケアなどに導入されるケースも多い。実際に筆者自身もそれらにかかわり、実践してきた立場でもある（高橋、1982、2000）。

しかし個人的なかかわりと集団療法とは相補的なものでもあり、個人心理療法ではそこでしか扱えない部分がある。また一方で彼らと向き合うためには忍耐強さも必要であり、滝川（1984）が慢性患者との面接において「一種抗しがたい力でおぞなりの問答へ引き込まれてしまう」ことがあり、「一枚の画用紙は時として数少ない梃子となってくれる」と語るのもよく理解できる。中井（1976）もまた芸術療法の有益性について「治療者の退屈を救う」面があるといっており、これも臨床実践の中で領けるところである。かかわる側が表現されたものから何を受け取るのか、クライアントをどう理解するかが重要であり、深い理解があればそれだけかかわる側がコミットしていけることも多いであろう。

一見人格が荒廃して慢性化したようにみえ、常同的な存在様式を示していた事例にロ・法を実施し、心理療法に LMT-Hole と相互なぐり描き法（Mutual Scribble Technique：以下 MST と略）を導入した事例を挙げて、それらの関係と意義について検討していく。

1) 事例の概要 M 男 男性 40 代後半

両親は自営業で、同胞は 2 人おり、母親は子どもたちには優しい人であった。父親は M 男が小さい頃はよく多量飲酒をして暴れることがあり、怖い父だったが何でも買ってくれる人でもあったという。

M 男はおとなしい子どもで、成績は中ぐらいであった。中学校・高校では独学で専門職の資格を取ったりしている。高卒後は民間会社に就職したり、水商売の仕事に移ったりするが、この頃から飲酒が習慣化する。その後中堅の企業に勤め、景気が良い時代で仕事も順調に軌道に乗っており。M 男はのびのびとした時期を過ごすことになる。30 代に入ると結婚するが、飲酒問題のためにケンカが絶えず、1 年で離婚となる。その後すぐに「虫が這っている」「入り口に人がいる」などと幻覚が見えるようになって、精神科病院に入院となる。症状が軽快して退院すると治療は中断され、実家で仕事をせずに飲酒を続ける生活になる。40 代になると「不眠」の主訴で再び精神科病院を受診し、睡眠薬の投与を主な目的に通院している。45 歳時には幻聴が出現し、1 ヶ月後に肝炎の診断で内科病院に入院する。この治療開始後、不眠と幻聴が憎悪する。「耳から蛇が飛び出してくる」などの体感幻覚様の訴えをし、幻聴も持続するというので、40 代後半には精神科病院（Th の勤務するクリニックの本院）に入院となる。この時の診断は薬物性精神病と

されるが、診断的には統合失調症、アルコール依存症、依存性人格障害、うつ病などとされたこともあった。入院4ヶ月後に主治医より心理療法の依頼がなされ、Thが週1回30分の面接を開始する。

2) 面接経過と描画

【第Ⅰ期】前描画期（X年6月～X+1年1月）

初めて会ったM男は、小柄でボーっとした印象を与え、服装も入院中ということもあるが、ジャージなどの古いものを着ていた。入院理由を問うと、幻聴が聞こえてきて入院となり、まだ続いているのでそれを治したいと語る。こちらの問いかけには答えるが、自発的な発言はなく、彼は見たところ荒廃した印象を与え、Thは内心どの程度かかわっていくことができるのか疑問に感じた。

それから毎週面接を行うようになるが、Thが何か聞くとごく短く答えるのみで一問一答形式になるのが常であった。内容は病棟での生活や体調、幻聴が気になっていてなかなか治らないと述べ、それ以外には話しが広がらない。ロ・法を施行すると、生産性は低く情緒的にもきわめて乏しい反応であった。強い緊張感のある運動反応が気にかかり、「マスク」などの防衛や「赤ちゃん」という反応からは退行的な傾向も感じられた。主治医には「幻聴が治らないので薬を変更してほしい」と、向精神薬変更の訴えを頻繁にしており、薬物に対する心理的依存も感じられる。Thは言語による接近には無理があると考え、描画法を面接に取り入れようと考えた。

最初にLMT-Hole ①を実施したのが図5-8である。この絵は春に10歳ぐらいの子が遊んでいて、穴は「大きな洞窟」という。画面の左側に小さく描かれ、断片的で構成もできていない。10歳ぐらいの子どもはステイックフィギュアで、足もなく人ということも明確にはわからない。内界が狭く、萎縮していて消え入りそうである。右列下に付加Itemとして描かれているのは薬が4粒である。「今まで飲んでた薬です」と説明し、薬物に対する関心の高さをうかがわせた。「全体ではまとまっていないのですか？」と聞くと「全体ではまとまってません」と答える。Thは絵が統合されていないことに対する自覚は彼が持っていると感じた。

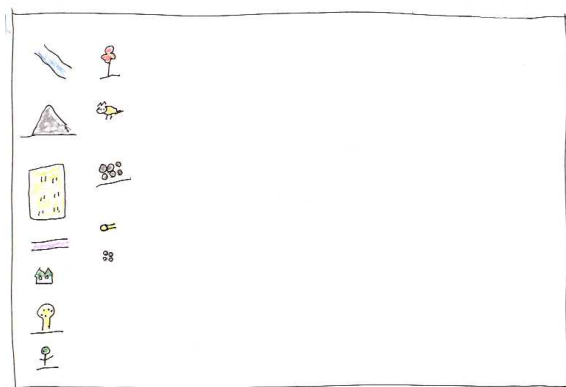


図5-8. LMT-Hole ①

【第Ⅱ期】MST 導入期 (X+1 年 2 月～ X+2 年 4 月)

その後も言語だけの面接では日常的な同じ話を繰り返すに止まり、話題も広がらないので、MST を導入する。これは、A 4 版の画用紙に Th が枠付けをした後になぐり描きをしてもらい、Th が 2 枚目に枠付けとなぐり描きをする。画用紙を交換して、見えてきたものを 24 色の色鉛筆で彩色してもらおう。Th も同じようにして投映を行い、お互いできたものを一往復見せ合って話し合うという形で行った (Winnicott の squiggle (1977) の技法を修正している)。

図 5-9 は初回の M 男のなぐり描きであり、直線と両端に小さい円が何本か描かれ、それらは繋がっていない。左側に寄っており、画面全体を広く使わずに萎縮している。Th はそれを繋いで (左右の垂直線) ハシゴを投映し、「ばらばらの心が繋がってほしいな」という思いをこめた。M 男はこの時比較的短時間赤い風船とフットボールを投映した。



図 5-9. M 男のなぐり描き①

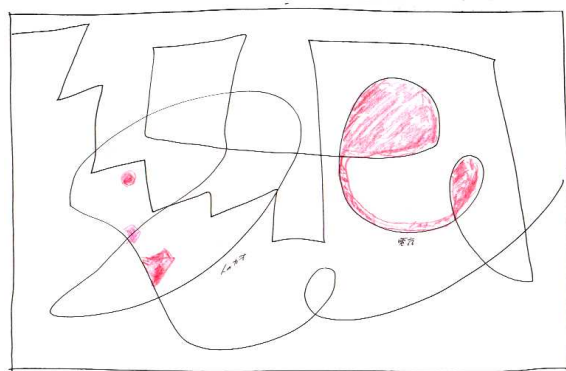


図 5-10. M 男の投映①

これ以後はほぼ毎回 MST を行う。

図 5-10 は 3 ヶ月後のもの。M 男は電話と人の顔を投映している。人の顔は目、鼻、口とも赤であり、不自然である (ヘテロクロマティズム)。この時の彩色やなぐり描きのタッチ (図 5-11) もぎごちない印象を与える。

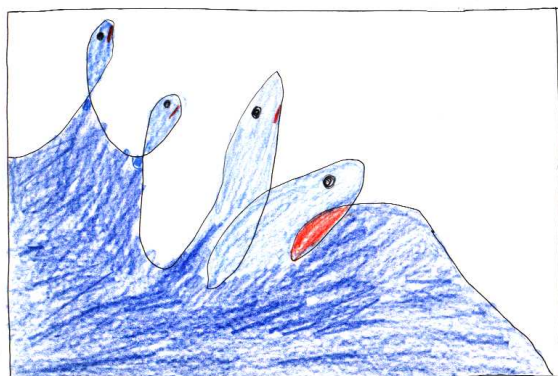


図 5-11. M 男のなぐり描き②

彼が投映する内容は、「赤い風船」「赤電話」「小山」「人の顔」などが多かった。その後はあまり会話が続き、Th は同じようなものが投映されても、そのたびごとに新鮮な反応をしようと心がけていたものである。淡々と誘いに応じる M 男であったが、毎回素直に応じて比較的短時間になぐり描きをして描画をしているのを見ると、彼なりの精一杯の表現であることが伺われた。また、同じものを描いていてもしだいに描写が細かく、丁寧に描かれるようになっていった。

現実場面での彼は入院生活には支障がなかったが、活動性は低く、幻聴の訴えは常にあった。外泊してもあまり動かない彼の様子に、母親は退院に対して消極的であったが、M 男の希望も強くなってきたので、X+1 年 5 月には退院して通院に切り替える。そして家業の手伝いを細々とするが、母親から見るとあまり頼りにはならないようであった。

10 月になると、『昔のように頑張って仕事をしている夢』『ビール缶を開けて流しに捨てている夢』を報告する。Th には昔社会適応していた頃のあり方に戻った自分を夢見るような活動性が出てきたのかと思われた。また実際に飲酒はしていなかったが、アルコールを捨てて自分の行動を改めるような新しい気持ちになってきているのかと感じた。

この頃からパチンコ店によく行くようになり、週に 1 回、休みの日だけ朝早くから並んで入り、結構上手に儲けている様子である。Th が「僕もやろうかな」というと「先生は止めておいた方が良いでしょうよ」を笑ってたしなめたりする場面もある。

図 5-12 は X+2 年 1 月に描かれた LMT-Hole ②である。画面いっぱいに Item が広がり、心的エネルギーが増加してきた印象を与える。田、家、人、花などは同じものが縦に並んでいて保続傾向が見られる。「穴」は「小さな洞窟」で、直径 1 メートルぐらいの浅い穴である。山の中腹にあり、下に並んだ「石」3 個も山の中に描かれていて、これらはばらばらではなく有意味な繋がりがある。また「道」と川」を彩色の段階で塗り間違えており、自発的に「逆になりましたけど」と説明している。これは山中（1996）が「無意識優位」のサインとしているが、M 男は逆になったことを自覚はしている。また無意識に通じる「穴」は、前回よりも小さくなっている。「花」と「人」の顔、「犬」の顔はいずれも赤色で不自然である。しかし、Th は彼がこれだけ豊かな絵を描いたことに驚かされた。

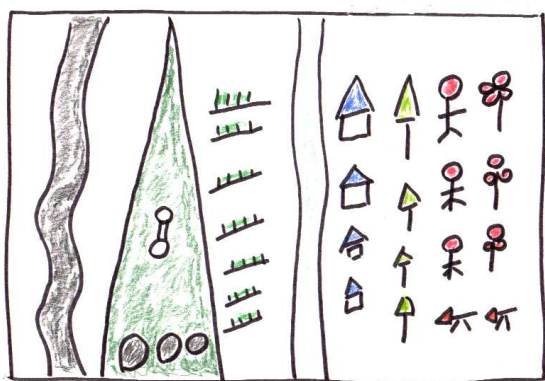


図 5 - 1 2 . LMT-Hole ②

【第Ⅲ期】展開期（X+2年5月～X+4年6月）

5月には『幻聴が治った夢』を報告する。表情は明るくなっており、天候などについて「今日は暑いですね」などと言及したり、ユーモアのある話をよくしている。人なつこい感じで、帰りには必ず「いつもありがとうございます」と挨拶する姿に、Thは陽性の転移を感じ、彼との面接に居心地の良さを覚えている。彼の方も面接から面接までの間、「この1週間は早かったですね」など、面接を意識している様子が感じられ、関係が深まってきていると思われた。

図5-13の投映は「優しい高校生の顔」である。「今日は下手ですよ。いつも下手だけど」と笑いながら説明している。「優しい人」の投映が多くなり、色彩も丁寧に塗られる。情緒的に細やかな感情がみられ、色も以前と比べて自然な感じである。

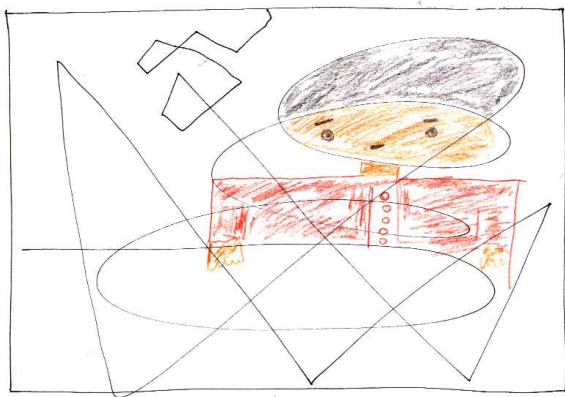


図5-13. M男の投映②

X+3年には「今面接中話しているうちに幻聴が消えた」と言うこともある。「先生と会ってどのくらいでしょう。早いもんですね」などと以前をしみじみと振り返り、情緒的な深さが感じられる。「今日起きたら幻聴が消えていた。久しぶりに自分の耳に戻ってうれしい」ということも出てきた。

図5-14のLMT-Hole③はこの頃である。下半分が空白になり、Itemにも小さくなったものが多くて構成がなされず、羅列的な描き方に戻っている。だが人物はスティックフィギュアではなく、表情や服、指まで描かれていて色彩も自然であり、「16歳の学生」だという。対人的共感性なども感じられる。穴は直径50cmの大きな土管で、向こう側が見えるものになっている。人工物としての穴であり、少し見通しが良くなったのかと思われた。家は「窓」が描き込まれ、「新築の家」で「家族3人で住んでいる。うちと一緒にですね」と語り、ThにはM男が心の中を“新築”して新しくやり直そうとしているように感じられた。

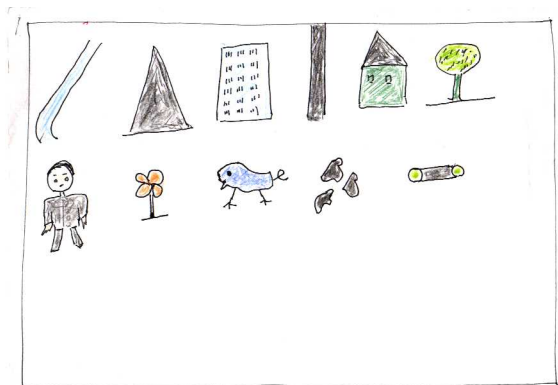


図 5 - 1 4 . LMT-Hole ③

【第Ⅳ期】安定期（X+4 年 7 月～ X+6 年 5 月）

現実的な生活にはあまり変化が認められず、彼は家業を手伝いながら通院している。気分的にも落ち着いており、耳鳴りについて「あまり気にならない程度」と言い、精神薬変更の訴えもなくなって「どの薬も同じようなもので」と笑っている。精神薬への依存も減少してきたかと思われた。

面接場面では、Th が「話題は何かないですか？」と振ると「昔の話しをしましょうか？」と言い、昔の会社に勤めていた時の思い出や、かつて自分が歌の勉強をしたり、電気関係の資格を取ったりして多才であった頃の話しをよくしている。また父親が病気で入院し、見舞いに行く話題になることも多くなる。

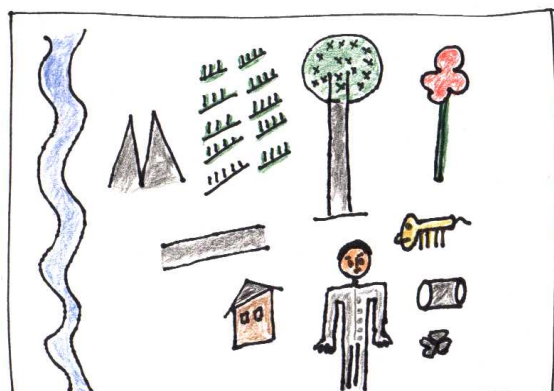


図 5 - 1 5 . LMT-Hole ④

図 5-15 はこの頃の LMT-Hole ④である。それぞれの Item は、提示順序に同じ間隔では並んでおらず、構成への方向性がみてとれ、若干の柔軟性が感じられる。穴はドラム缶ぐらいの大きさの洞窟。人は「16 歳で、これから学校へ行くところ」という。顔が肌色に塗られていて、自然な感じになっている。社会的な顔ができてきたところであろうか。保続傾向はみられず、描いた後に「ちょっと難しかったですね」と言っているのは構成することの難しさかと思われた。

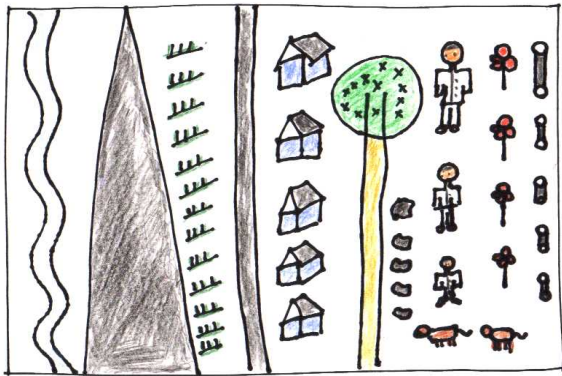


図 5 - 1 6 . LMT-Hole ⑤

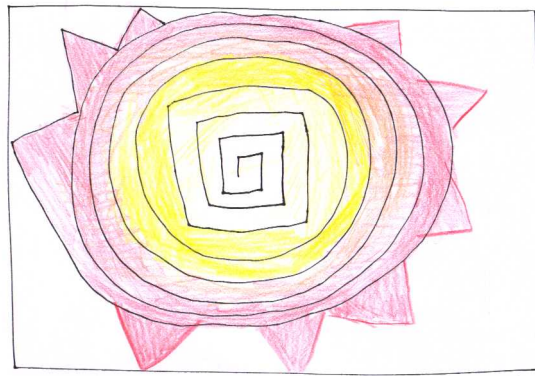


図 5 - 1 7 . M 男のなぐり描き③

さらに 4 ヶ月後の LMT-Hole ⑤が図 5-16 である。かなり時間をかけて描いており、再び画面いっぱい描かれているが、同じものが縦に 4 ～ 5 個並んでいる。保続傾向があるが、色彩も塗り分けられていてそれなりにバラエティがある。

説明を求めると「田舎の町に川があって山があって田んぼがあって道があって・・・」と次々にしゃべり、羅列的に言葉が続く。山はやはり「小山」だということで、「家の近くにもあったんですね」と話しかけると「あります。うちの近くにあって思い出があります」と過去を語る。穴は「戦後時代の洞窟で 5 つあります」と言う。人は「中学生が 3 人立っている」とのことで、目と髪の毛、服のボタンが明細化されている。

いくつも同じものが並んでいることについて、Th が「どうしていくつも描いたんですか？」と聞くと、「家が周りにたくさんあるので」と答えるので、「では人は？」と聞くと、「人はたくさんいるので」と応じる。中学生時代は M 男がその頃まだ珍しかった中学生で電気関係の資格を取った彼にとっての良い時代であった。Th はそれなりの意味づけがあることに感心し、保続やステレオタイプという言葉で括るのは不十分な気がした。

X+5 年夏には入院中の父の話しをして「重湯を食べていて点滴を受けてるけど、目がギラギラしとるから 100 歳まで生きるかわからんですね」と笑い、父に「お前の耳がよくなるか、俺が参るか競争やなあ」と言われたとのことである。直後に描いたのが図 5-17 の MST で、彼が描いたなぐり描きに Th が投射したもののだが、マンダラ模様を思わせる描線に Th は太陽表現を促された。

図 5-18 は 2 ヶ月後に描いた MST である。彼の描線は紙面をくまなく走っており、途中の転折や渦巻き型を挟み込むなど自由にペンが動いている様子がうかがえる。Th の投射も野原を飛ぶチョウであり、自然と自由で明るい雰囲気になっている。

X+5 年 11 月には、M 男が『自分のベッドで先生と一緒に絵を描いている』という夢を見たと報告する。ゆったりとくつろげる彼の居場所でともに絵を描いているというのは、まさに面接場面を表しており、なるほどそんな感じなのだなあと Th は素直にうれしい気がした。



図 5-18. M 男のなぐり描き④

そして X+6 年、1 月にロ・法を行う。3 月に主治医が交代したことを機に M 男は本院に転院することを希望し、面接は終了になる。ロ・法は 1 回目と比較してもかなり poor なプロトコルであり、その後最後に描いてもらったのが図 5-19 の LMT-Hole ⑥である。これを見ると、それぞれ 6 個から 7 個の Item が規則正しく並んで描かれている。彩色し終わった後に、家の窓と人間の顔を細かく描き加えている。絵は平板で保続傾向が強い。説明を促すと「広々とした景色」であり、田は今から苗を植えるところで、季節は春であるという。15～16 歳くらいの男の子がみんなで集まって遊んでいて、家は「昔の住宅」だという。「もうさびれてしまっているのでは？」と聞くと、「みんな瓦を換えるなりして改造してる」とのことである。

Th はロ・法とともにこの風景を見た時、正直なところショックであった。彼はまったく平板で常同的な動きのない世界に引きこもってしまったのではないか。今まで変化してきたと思っていたものも退行して元の本阿弥になってしまったのではないかと不安になった。しかし彼は、この絵を描くのに今までで最高の 50 分近く時間をかけて丁寧に描いていた。それぞれの Item は小さいながらきちんと並び、家には窓があり、人間には顔が丁寧に描き込まれている。形式的には常同的で、こうした固い生き方を選び取った絵だが、一方では Th への丁寧な贈り物であるとも思われた。風景に彩色しながらも、彼が「先生とは長い間いろいろありましたねえ」といい、最後に「このことは一生忘れません」と筆者に告げたことがその思いを強くさせた。M 男の治療自体がこれで終結したわけではないが、彼の LMT-Hole はそれなりにまとまりを告げていると感じ、面接は終了とした。

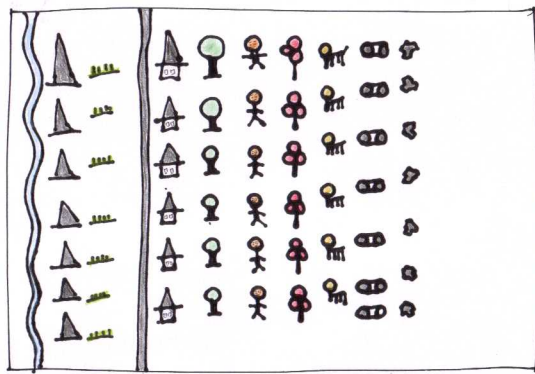


図 5 - 1 9 . M 男の LMT-Hole ⑥

3) 描画の変化と常同性

I. 描画とセラピストとの関係

初期の言語のみによる面接での印象や、ロ・法の結果、描画などからみると、M 男の内界はかなり貧困で常同的なあり方を示していて、言語的な心理療法の進展は困難と考えられた。第 I 期においては、Th は面接中も何を話したら良いかわからず、彼が話し出すのを待っていても沈黙は永遠に続くように感じられた。荒廃したクライアントであると感じられ、Th は描画を導入しようと考えた。

それでも初めのうちは何の変化もないように見受けられたが、第 II 期の終わりから、同じような内容が投映されながらも Th の中で展開への期待が生まれた。しだいに投映された「人の顔」がより自然になり、なぐり描きの線がよりダイナミックになり、毎回のよう投映の際に「難しいですね」と微笑みながら考えている彼の様子に、楽しみながら取り組んでいる姿勢が感じられた。LMT-Hole にもよりエネルギーが出てきて、Item や描かれた人間も明細化されるようになったことが伺われた。これらの自由さは手の運動機能の自由さでもあり、心の柔軟性を示すものでもあろう。その説明も詳しくなっていて、対人的共感性の増加も感じられた。

Th が一貫して M 男の表現に目を向け、関心を持ち続けたことで、彼の中に埋もれていた内的な力が発揮されるようになったと考えられた。LMT-Hole において、大きな変化を Th が感じたことも M 男に関心を向けられた理由のひとつである。また、Th が描線や色彩の塗り方、人物の表情など、細かな変化の“味わい”を感じることが Th のポジティブな逆転移を引き起こし、面接の継続と彼のあり方を支えていくことができたと考えられる。

彼に対するアセスメントも変化してきたといえる。彼の方も面接中の会話で Th の着ている服や、住んでいる場所を聞くなどして Th に関心を向けるようになり、良い循環を促した。また自分の過去を振り返るようになって言語量も増え、話しが繋がらないということがなくなってきた。田中（2003）は絵画療法において、安心して自己表現ができることが彼らの語りを回復させると指摘しており、M 男の場合にもそうであったろう。MST はこの媒介になり、Th と彼の関係を紡ぎ出していったと考えられる。全体として描画による表現の場を用意したことが、彼の内的なエネルギーを賦活させ、変化を促したものと考えられる。第 IV 期の後半において「自分のベッドで Th と一緒に絵を描いている」と

いう夢は、本当にリラックスして彼のテリトリーの中に Th が受け入れられており、絵を描くということが自然な振る舞いになっている印象を受けた。

ただ、LMT-Hole に関しては、2 回目に構成がややできるかもしれないという予感を感じさせたものの、3 回目の実施では保続傾向の強い構成に戻り、4 回目にはまたやや柔軟な面がみられる。Th は柔軟な構成ができることを期待しながら眺めていたが、そうはなかった。この間彼は揺れていたと考えられるが、4 回目の感想に「わりと簡単でした」と述べており、無理に構成するより安心できるパターンを選んだのであろう。またそのような生き方を選び取ったともいえる。いずれにしても、風景構成法はもともと統合失調症者への適用が考えられてきたが（中井，1971．皆藤，1998．角野，2004）、彼のように慢性的で器質障害の疑いのある固い人格に対しても、適用は可能であると考えられる。

II. 描線の筆触

M 男とのかかわりで MST は毎回行い、LMT-Hole については 1 年に 1 回程度としていた。もともと描画法を取り入れたのは言語的な接近に困難を感じたからであるが、課題画である LMT-Hole は毎回行うのに無理があるので、少し遊びのある MST は便利であった。彼の場合には投映される内容は比較的範囲が狭いので、前述したような「優しい人」という情緒を伴った内容はもとより、なぐり描きの描線がより自由に活発に動くようになったことに Th は注意を喚起された。

書家の石川（1994）は、毛筆の運筆から、起筆、送筆、収筆の様相について述べている。描画に用いているフェルトペンでは毛筆の描写の多彩さには及ぶべくもないが、線質に関しては同様の部分があると考えられ、なぐり描きのペン運びをそのような観点から眺めることができる。

まず、彼の 1 回目のなぐり描き（図 5-9）は力を入れるポイントがなく、最初から最後まで「スー」と線を引く「一折法」で描かれている。そして左右に小さい丸が付けられたこの線が 9 本並んでいる。力がこもらず、余白も多い。これが回を追うにしたがって複雑になり、半年後にはペンの戻りを含み、また線をいったん途中で切って第 2 画として 10 回の転折（10 個の角）を含む描線となっている。

図 5-17 のなぐり描きでは、勢いのある壮大な円形表現に、Th は思わず太陽を投映して、マンダラや太陽表現（宮本，1974）を感じさせるが、これも Th が意図的に描いたというより、この描線の力に促されて描かされたといった方が良い。

終了間近の図 5-18 では、左上角から入ったペンは 25 回の転折を繰り返し、渦巻きや三角形、円、長円などさまざまな図形を含み、画面の上から下までをまんべんなく遊びながら、きっちりと右下の角に収筆している。先ほどの言い方でいえば「多折法」で描かれており、起筆から収筆まで時間的な展望と見通しを持って描かれていることがうかがえる。この筆触には自由なリズムと紙面とのやりとりが感じられ、「生理的・心理的統整」（高村，1999）の働きの伺われる。Th はそのリズムに乗ってチョウや花などを投映しているのである。

描線の量が増加することは心のエネルギーが増加していることを意味しており、「スクィグルには衝動的な動きが含まれている」（Winnicott，1998）のであり、描線に力が入る

ことは内的な運動性や生命的な力が感じられる。まっすぐの線がふと柔らかに弧を描くのは、柔軟性や情緒の変化を感じさせる。これが球形になったりするのには、余裕や遊びが加わっているのだろう。それらに触発されて Th の投映もよりコミットしたものになり、楽しく描くことができたといえよう。

それに比して、LMT-Hole では固い線が多い。描くものや順番が決まっていって画面を構成されることが強いられるので不自由であり、彼にとってはある意味でよそ行きの改まった姿を見せているといえる。最初の構成を放棄した羅列型の構成から、何回か揺らいだ末に、結局最後には彼なりの秩序を選び取ったのであろう。石川（2005）は「文字を書こうとした瞬間に紙には重力が働き、上方が天、下方が地になる」という。彼は紙に文字を書くように順番に上から同じものを並べていった。書道でいえば、行草の滑らかな構成を捨てて、きちっとして平らかな三折法¹⁾による楷書の様相を呈している。

そして内発的な表現と、外界からの刺激に対する受動的な秩序への性向を浮かび上がらせた点で、2つの描画法は相補的に働いたと考えられる。Th にとっては毎回の MST で遊びながら、面接を続けていて変化には気づきにくくなるところを、時々彼の新しい姿を見せてもらうような面持ちで LMT-Hole に臨んでいた。後半期に至っては、それが過去の想起へと結びついていき、分断された現在のみに生きていた彼が、歴史とプライドを持った存在としての彼のアイデンティティを確認するために有効に働いたと考えられる。

（注 1）入筆から収筆まで「トン、スー、トン」と繋ぐ運筆を指す。ここでの彼の運筆は「トン」の部分で描線のインクが滲みでいて、力点が見える。

Ⅲ．豊かな常同性

ステレオタイプで Item を順番に並べていくような LMT-Hole を描くのは、慢性の統合失調症者やうつ病者（高桑，2005）、薬物依存症者などにもみられる。中井（1971）は心的エネルギーの乏しさにより、構成を放棄してしまっているとしている。

これに加えて、彼らは見通しを持って全体を見渡すことができず、時間系列で提示されることに耐えられない面があると考えられるのではないか。過去から未来に続く通過点としての今を同定できることが、時間系列的に提示される Item を有機的に構成できる力になるのではないかと考えられよう。それが欠けている結果、時間はただの物理的な区切りに過ぎず、ばらばらの Item が時間系列的に並ぶことになり、彼らは現在の中に取り残されてしまう。M 男の場合、LMT-Hole ①はこのようなものであった。2回目以降は同じ Item がいくつも並び、「保続」傾向を強く示すようになっている。高江洲（2003）は彼のこのあり方を、器質障害によるものと指摘している。そしてこの傾向は基本的に一貫していてあまり変化が見られない。高江洲・大森（1984）は統合失調症者の風景構成法を「間合い」の観点から「離反型」「近接型」「固着型」に分類している。M 男の1回目の LMT-Hole は「離反型」であるが、2回目以降は「固着型」になっている。この型では「もはや私とまわりとの繋がりや放棄され、離反・近接などの力動も読みとれぬままに、世界は砂漠のような荒涼さの中に沈みこむ」としている。

しかし、彼の描画から受ける印象は2回目以降ずいぶん違ったものになっており、たくさん同じものを描いたことについて、「家が周りにたくさんある」とか「人がたくさん

いるので」など彼なりに理屈を付けている。これは合理化という面があるにせよ、それだけの意味づけを付与することができるだけ知的、情緒的に豊かになってきたことを示すものと考えられる。ここでは彼なりのあり方で世界が意味づけられており、以前のよ
うな現在だけの世界、「荒涼とした砂漠の世界」ではないことが示唆されよう。そして彼は昔の思い出をよく語るようになり、連続した歴史の中での自分を確
認している。あるセッションで彼が中学生の時に取得したという専門的な電気関係のライセンスを持って来て、Thに見せたことがある。Thにはにこやかに見せる彼の表情に自己肯定感を取り戻したことを感じさせた。保続型のパターンは継続し、厳しい部分は残存するが、その背景にイメージとしてItemに繋がりを持たせ、世界を連続したものとして把握するようになったのかもしれない。これも豊かさやエネルギーが感じられ、“豊かな常同性”ともいえる様相を呈している。山の数についてThが質問すると、「家の周りには山がたくさんありますからね」と答え、彼なりの世界への意味づけをしている。

これは、最後には図 5-19 にあるような LMT-Hole になる。一見すれば良いとは思えない絵であるが、Item が規則正しく並び、時間をかけて丁寧に描かれていて彼なりの几帳面さの反映でもあると考えられる。最後に人の顔や家の窓が細かく描かれているのを見ると、彼が対人的関心を持ち、人に向かって開かれてきたことを感じさせる。面接の感想を問うと「人との付き合いですごく参考になりました」と答えていて、限られた付き合いであるにせよ、そのことを彼自身も意識していたと考えられよう。

発達的に考えると、LMT-Hole の好ましい変化は、高石（1996）が指摘するような羅列型の構成からしだいに個々のItemに有機的な繋がりでき、立体的な構成ができることが本来は望まれるのかもしれない。しかしM男の場合、器質的な問題や加齢による問題もあり、決まったパターンを踏襲し、常同性というあり方は保ち、行動レベルではそんなに著しい変化を来さないものの、限られた環境の中での適応と情緒的にかかわりができるようになった。それらをThとの間で橋渡しをしたという意味で、MSTは治療的に有効であったと考えられる。このような一定した不変化と変化の併存的あり方は、慢性化したり、器質障害の固い防衛を持つクライアントの、一つの変化方向性を示すものであると考えられる。

4) ロ・法と描画法のバッテリー

I. ロ・法で示されたもの

ロ・法は心理療法開始時と終了間近の2回施行しており、その意味するものを検討していく。2回のロ・法の結果をまとめたものが表 5-5、表 5-6 であり、形式分析のスコアが表 5-7 である。

表5-5. ロ・法①のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I. 6" 35"	△	① コウモリ（他？）コ ウモリしか見えない -35"-	ここからここまで（？）翼があっ て黒くて、それだけです	W FC' A P N
II.	△	①わかりません・・・ -27"-	Add.（今見て？スペースシャトルに 見えます（？）白い部分、これこ こが羽でしょ。これが頭でしょ。 これが炎を上げてから発射する （？）真っ赤に燃えて	Ds5+D4 Fma/ FC+ Sc・Tr Hhat Rej
III. 7"	△	①人ですね。人が餅つ いてるみたい。それだ けです -35"-	①これ臼ですね。杵持って二人で 餅ついてるみたい（？）人。これ が顔、胴体、これが手、足	D1+1B Ma+ H Imp
IV. 3"	△	①木ですね。大きな木 です。それ以上見えま せん -30"-	①これが木ですね。それ以上見え ません（どこ？）ここが、木の葉 に見えます	W F+ Bot N definiteness (size)
V. 4"	△	①やっぱりコウモリで すね。コウモリしか見 えませんが -30"-	①ここが翼ですね。ここが顔、こ こが足	W F+ A P
VI. 20"	△	①木が逆さまになって る。以上ですね -53"-	①ここが葉っぱですね。ここが木 の根っこ	W F- Bot Abal definiteness (position)
VII. 7"	△	①赤ちゃんが2人いま す。それしか見えませ ん・・・それ以上見え ません -38"-	①これが顔ですね。これが胴体、2 人います（赤ちゃん？）顔が小さ いから	D1+1 F+ H N definiteness (size) D3+6 F- Hd
VIII. 17"	△	①仮面をかぶった男が 見えます。それ以上見 えませんが-51"-	①ここが仮面ですね。ここがコー ト(D3?)ここ帽子かぶってる	Mask Cg Adef
IX. 7"	△	①火事ですね。それ以 上見えませんが -36"-	①ここが火ですね（火？） 赤く燃えている感じ	D1+1 C Fi Hhat
X. 12"	△	①スペースシャトルが 発進してる。それ以上 見えませんが -44"-	①ここは炎ですね。ここがスペー スシャトル（？）ここが胴体ここ が赤く燃えている炎	D2+2+5 Fma FC+ Tr Sc Hhat

表 5-6. ロ・法②のプロトコール

T	P	Response	Inquiry	Score
I. 11"	△	① コウモリ（他？）コ ウモリ、他にない -33"-	これ羽ですね。こっちも羽（他 に？）これが真ん中の線で、これ が羽で飛んでるっていう感じ	W FMa+ A P N
II.	◎	これはパスですね -50"-	Add.（今見て？）うーん、何か血の ような・・・何だろうなあ、わかり ません（血？）赤いのが、血に見 えますね	D3+3+4 C Bl Hhat Rej
III. 5"	△	① 人が 2 人ですね -26"-	①これが頭です。これが胴体です。 これが足です。これが何かを持っ てる	D1+1 Ma+ H P N
IV. 32"	△	①これもコウモリ -52"-	①これも羽ですね。これが胴体で すね・・・今にも飛びそう	W FMi+ A Pst
V. 4"	△	①これもコウモリです ね。 -30"-	①これが羽ですね。これは胴体で すね。これが頭。ここが足	W F+A P
VI.	△	何かパスですね -34"-	①（今見て）うーん、ちょっとわ かんない	Rej
VII. 10"	△	①これは子どもが 2 人 ですね -22"-	①これが女の子ですね。これも女 の子ですね。これが顔、髪の毛で すね。頭、胴体	D1+1 F+ H N definiteness (sex)
VIII.	△	これはパスですね -19"-	Add.（今見て？）うーん、何か押し てるようなこれが胴体で、これが 手でこれが物体でこれも物体で、 何か手で押してる	D1+1+6 FMa AMi Rej
IX.	△	うーん、パスですね -34"-	Add.（今見て？）何か炎みたいな感 じがしますね。何か焼いてる。（ど こ？）ここが炎ですね。こっちも 火。（火？）メラメラしてる感じで、 あとは浮かばん	D1+1 ma Fi Hhat Rej
X.	△	何か気持ちの悪い絵で すね。これパスですね -21"-	Add.（今見て？）うーん、何か幽霊 っぽい。（どこ？）ここが幽霊ここ も幽霊。ここが頭、これも頭、足。 その他は浮かばん。（らしさ？）ふ わっと浮かんでる感じのこの世に いないもの	D5+5 Mi+ H Athr direct affective response

表 5-7. ロ・法①・②形式分析のスコア

	ロ・法①	ロ・法②	ロ・法②修正 *注3
Total Response	9 (1) *注2	5	9
Card of Reject	II	II・VI・VIII・IX・X	/
VIII・IX・X/R %	33.3%	0 %	33.3 %
P	3	3	3
F%	55.6% (50 %)	40 %	22.2 %
F+%	60%	100 %	100 %
W:FM	1 : 0	3 : 2	3 : 3
M:ΣC	1 : 2 (1 : 2.5)	1 : 0	2 : 1.5
FC:CF+C	0 : 2 (1 : 2)	0 : 0	0 : 1
A%	33.3%	60 %	44.4 %
Content Range	7	2	5
Add.Res.	1	4	/

(*注2: Add.を含めた数値、注3: ② Add.を含めた修正)

まず心理療法を始める時点での 1 回目の結果を見てみると、反応性は持っている人であるが、反応数は少なく生産性は乏しい。現実検討能力はあまり高いとはいえない。全体的に poor なプロトコルであるといつて良い。

P 反応は 3 個あって、第 1 反応が「コウモリ」であり、常識的な反応をまずは産出することができる人である。人間反応も 3 個出ていて 1 個は M であり、対人的な関心も持っていることがわかる。ただそのうち 2 個は「赤ちゃん」(VII)、「仮面をかぶった男」で、人と十全にかかわることができる成熟した人間ではない。色彩に関しては「翼があって黒くて」(I) で白黒反応が 1 個、あとは「赤く燃えている炎」(I、IX、X) が 3 個ある。外的な統制は若干形態によるコントロールが効きにくいところがあるが、これは無生物運動反応 (m) も伴うものであり、運動反応は他に「人が餅をついてる」(III) の 1 個だけである。内的な統制は崩れておらず、数量的には運動反応は乏しいが、強い緊張を伴った内的運動感覚があり、情緒的な強い刺激とこの運動感覚は密接に結びついていることがわかる。これはまずカード II で付加反応として表れており、自由反応段階では抑制されていたが、あとになって出てきたものである。「スペースシャトル」いう形で科学的に加工されているが、未分化で爆発的で大きなエネルギーであることは間違いない。この時には「ジージーという耳鳴りが止まらない」と訴え、内科疾患のの治療を始めてから続いているとのことで、器質的な問題も含み、幻聴様の症状が継続的に続いている。

LMT-Hole ①では非常に萎縮して画面左側に寄った断片的な風景を描いており、運動性などは感じられないが、ロ・法では Most Liked Card にカード X を選択して「スペースシャトルが発進しているところ、これは好き」と述べ、かつては趣味で無線の飛行機を飛ばしていたことを語っている。このような世界を抱えていることがわかったのはロ・法の外界からの情緒刺激というカード特性によるものである。LMT-Hole で付加 Item として自ら表現したのは「薬が 4 粒」であり、現在彼が囚われている内容である。つまり意識に

近い能動的な想像性のもとでは「薬」を連想するが、外界からの働きかけによる刺激によって、より深いレベルにおいて賦活させられる過去の記憶と内的な運動性を有していることがわかる。それで一方では Most Disliked Card でカード I を選択して、「コウモリが襲ってくるような感じ」と言うのである。思考・言語カテゴリーでは personal berief とスコアされる言辞であり、カードとの適切な距離がとれず、自我が侵襲される恐れも存在するということなのである。LMT-Hole でみられた常同性は、そのような恐れから身を守る役割もあると考えられる。ゆえに①現在の症状へのこだわり、②情緒刺激に対する弱さと常同性の守り、③内に秘めた運動性と過去の記憶、これらが心理療法過程で重要視する観点となり、展開において注意する視点ともなろう。そして MST や LMT-Hole において展開されていったことは前述した通りである。

2 回目のロ・法はその後、5 年半を経て心理療法が終了する時点で行われている。ここでは反応数が半減して rejection カードが 1 枚から 4 枚になり、思考・言語カテゴリーでも rejection とスコアされる。また additional response が 1 個から 4 個になり、これもスコアされる。Content Range が 7 から 2 になり、萎縮した在り方はよけいに増幅されているようである。LMT-Hole においても、いったん自由になった風景が最後で再びステレオタイプになったことと呼応しているようである。この間 5 年半が経過して、彼の年齢は 40 代後半から 50 代前半になっており、加齢の影響も考えられよう。

しかし、この施行において additional response を考慮する必要がある。rejection とその後の付加反応は自由反応段階で萎縮した態度で臨み、その後自由に内的なものを投射できたと考えられよう。付加反応は 4 個あり、「血」(I)・「手でものを押している」(VIII)・「メラメラ燃えている」(IX)・「幽霊がフワッと浮いている」(X) である。血を除いて内的な運動性が感じられる反応といえる。自由反応段階での「コウモリ」(I)も“飛んでる”であり、「コウモリ」(IV)は“今にも飛びそう”と言う。最初 Reject で応じたのは防衛的な態度であるが、相互スクリブルなどで生じた運動性は内側に存在しており、付加反応としておずおずと示されている。これは未分化な緊張感や「血」(I)、「何か気持ちの悪い絵」(X、direct affective response)などの情緒的刺激に対する脆弱さを抱えているためにそのようにせざるを得なかったと考えられよう。彼の社会復帰は自営業を手伝うという比較的安全な場所での生活に戻ることであり、彼は今後もこのようにきわめて用心深く外界とかわかっていくに違いない。彼は Most Liked Card で「人が遊んでる。男女がいて遊んでいる感じがするから好き」(III)と語っている。これは arbitrary discrimination で恣意的なものの見方を示しているが、彼はこのような見方が苦手な人であり、そのためにカードを何かに見立てるという課題ができないからであるので、これはむしろ好ましいと考えられる。

思考・言語カテゴリーでは Constrictive Attitude という大カテゴリーに rejection があり、Difensive Attitude の中に additional response が含まれている。それ自体は名大法に限った特殊なスコアではないが、ここには大きな意味があり、現在の M 男の存在様式と、これからの彼の生きざまが示されている。それを感得し、理解すること自体が治療的価値を持つと考えるものである。

Ⅱ．ロ・法・LMT-Hole・MST のバッテリー

この事例についてロ・法、LMT-Hole、MST の三種の特徴を考えていきたい。ロ・法の特徴は、模様が決まっていることでカードの特徴が決定されており、形質が曖昧なところを生かして対象者の投映を促すものである。対象者は過去の記憶痕跡の中からカードに即した反応を作り出していく。それは主体的になされることもあれば、そのように見えてしまうという受動的なものもある。そこで内的なエネルギーが賦活されれば豊富な反応と言辞が浮かび上がってくるが、賦活されなければ内容は **poor** なものになるだろう。カード刺激に対する「まあまあ似ている」という柔軟な思考が必要であり、それできなければ反応はインクのシミ以外にはなくなってしまう。いずれにしてもそれは頭の内部で作られる。色彩や運動は利用しようと思えばできるが、気がつかなければ使用されずに終わる。

LMT-Hole では時間軸に沿って各 Item を構成していくことが求められ、山や川など、自分が明らかに知っているものをどのように表現するかとともに、見通しを持ってどこにどのように配置するかを考えなければならない。どのように表現するかの中に内的な投映も含まれてくる。構成しながら投映をし、投映しながら構成するという循環の末 1 枚の風景画ができあがる。この後の彩色もまた投映的側面を持っている。そして構成と彩色には書写道具を動かす筋肉運動が発動される。これはロ・法にはない側面であり、ロ・法では時々反応の説明のためにコウモリの羽の説明のために手を動かしたりする程度のものである。

次になぐり描き法では最初から運動発散が伴うペンの動きがあり、これは前述したようにエネルギーの発露が伴うものである。M 男の場合、セラピーの経過に伴って動きが大きく自由になっていくが、これは 2 回目のロ・法の中で運動反応が増加する形で反映されていたと考えられ、内的に動かされる体験は運動性に対する感受性を高める可能性がある。もちろんこれは MST 単体の影響ではなく、心理療法関係も含めた影響と考えるべきであろう。

LMT-Hole では Item が決まっていることによって形が決まってしまう、M 男の場合、常同的で固いままになっていることも前述した通りである。現実から自由になれない縛りがこのような様相を作っている。そしてロ・法で反応数の乏しさやステレオタイプな在り方が同様の傾向を示している。

アルコール依存や C 型肝炎の治療など器質的な影響も免れない M 男は、同じパターンを持ちながらもより豊かな働きかけを促していくことが描画による心理療法的バッテリーで推進されようと考えられよう。ロ・法はそれに連動した在り方と変化を表している。LMT-Hole でも保続傾向が表われているが、この固定化された「線」を、なぐり描きの「線」は自由に運動することで突破している。それがまた LMT-Hole の説明部分に反映され、固定化した描き方の中にも自由な意味づけがされるようになったのであろう。三種の技法は内的な投映をそれぞれ反映させながらもクライアントの幅広い世界に働きかけ、揺さぶっているといえる。

一見荒廃したように見え、内的にもきわめて貧困で情緒も乏しい精神科クライアントの心理療法の中で、LMT-Hole と MST を導入することによって彼は改善を示した。言語を

用いた面接は困難であったため、Th が絵画療法を導入すると熱心に取り組むようになり、しだいに情緒的にも豊かになり、心的エネルギーも増加して対人的な交流も可能になってきた。描画は治療的媒介として重要な役割を果たし、その変化は Th の治療への動機付けを高めた。またここから固い存在様式を残しながらも独自の変化が読み取れ、ロ・法でもその影響性が感じられた。これは慢性精神科クライアントの変化の一つの方向を指し示していると考えられる。従来のテストバッテリーという考え方の中では横断的な見方から検査が施行されていたが、かかわりの全過程を通して見立てと働きかけを継続していく姿勢がかかわる側に必要である。描画法は心理療法そのものであるのも承知しているが、ロ・法と描画のテストバッテリーは働きかけという観点も含めたものであり、心理療法的なバッテリーと呼ぶことができよう。

第6章 心理療法的バッテリーの総合的検討

1. 心理療法的バッテリーの意義

1) かかわりのためのアセスメント

心理検査のテストバッテリーという言葉は、今までさまざまな場面で使われ、診断的にせよ治療目的にせよ、客観的にクライアントを判断するために時間的に横断面を測定する際の複数の心理検査という意味で用いられてきた。目的としては、主治医から依頼されて診断の補助として用いられたり、治療方針の参考にされたり、復職や退院の是非を問う判断材料として用いられたり、病態水準や予後の判定に用いられたりしてきた。加えて、パーソナリティや自我構造の理解、発達水準、家族関係、精神力動的な視点からの見立てなども重要となる。近年では発達障害の問題がクローズアップされてきて、心理検査のテストバッテリーは臨床家の大きな関心事になってきている。

筆者が考える「心理療法的バッテリー」は、心理療法に付随する心理アセスメントであり、診断的意味合いはあるにせよ、投映法を「心の物語」として読み、クライアントとともに歩むことを目指している。道行きに里程標として再テストをすることがあるが、それは前の結果と繋がりがあるという認識を持つ。心理検査には知能検査や質問紙検査などさまざまなものがあるが、それらは意味的に時間的な繋がりを持つとはいえないので、投映法を特に選択するものである。もっともロ・法は認知的側面が重要であり、形式的な分析が欠かせない。LMTにおいても形式的な側面を無視することはできない。それを基礎とした臨床応用の分野において生かされるべきである。村上（1995）はロ・法について「もはや従来の形式分析にとどまらず、系列分析、内容分析を含めて、臨床実践の場でさまざまな障害を生きる、総合的・力動的な、個々の人間そのものへのなまの接近を重視する」と述べており、ここにクライアントとかかわるための投映法のある場があると考えられる。複数の心理検査、生育歴、言語面接はいずれもクライアントを違った側面から映し出したものであり、繋がりがあってどれも重要である。それぞれの情報がネットワークを作って一体となった形が、クライアントの立体的な人格画像といえよう。

そして実際に私たちが心理療法的にクライアントにかかわろうとする時、心理アセスメントの結果を基に治療戦略を考え、心理療法中に生起してくる出来事の可能性を想像しながらどのように進めていくかについて考えを巡らせるに違いない。そこでは心理療法的なかかわりのためにテストバッテリーを組むことが必要であり、セラピストがそれを抱えて継続的にかかわっていくために、従来の診断的側面の強いテストバッテリーと区別するために「心理療法的バッテリー」と名付けたい。それは医師などから依頼されて行うアセスメントではなく、セラピストが自分とクライアントのために行い、クライアントとかかわるためのアセスメントといえる。

2) 経時的なアセスメント

心理検査は横断的にクライアントのその時点でのあり方をとらえようとしてきた。テストバッテリーも同様であり、いくつか実施する検査はすべて同時点での違った側面からの

クライアントの情報である。ここには治療の可能性や予後を推測したり、治療的な展開を予測する事柄も含まれているので、その部分では時間的に未来の方向を向いているが、あくまでも一時点での判断である。もし治療過程での問題があったり、途中経過を知りたいと思ったり、変化があったと思われた時に心理検査を実施することもあるが、それは実施時の横断的な結果を知り、前時点での結果と比較するなどとなる。心理療法的バッテリーではそれらが繋がっているものとみなし、心理療法経過中もアセスメント結果は継続していると考え。もっとも心理療法での1回ごとの面接自体にアセスメントは含まれている。神田橋（1994）は、面接においてクライアントが過去の告白をする時、それが持っている迫力が、here and nowで起こっているテーマを話し合うことによって減っていくと述べ、これは部分が全体を含むフラクタル構造をなしているからであると述べている。投映法におけるアセスメント結果も、クライアントの重要な人生上のテーマが反映されているとすれば、同じようにフラクタル構造をなしていると考えられる。それゆえに、時間が経っても前の検査結果と何らかの繋がりと持続がある。特に LMT は元来心理療法として用いられることの多い技法であり、クライアント自ら「前はああいうふうに描いたが、今回は・・・」と繋がりを意識していることがあるし、ロ・法でも同じようにいうことがある。

ただ、必ずそういえる客観的な根拠があるわけではなく、セラピスト側がそのようにみなしているのであり、クライアントが人として一貫性を持ち、セラピストとの関係に一貫性があり、時間の流れに沿ってともにクライアントの人生の一部を共有する時に有用な思考であると考え。

田中（2013）はなぐり描き法への投映との関連で、セラピストとクライアント関係の深まりを線で描いている。それによると最初は関係が浅く、途中で深まって最後はまた浅くなることになる。筆者は LMT-Hole を通して、その経過に起承転結を感じたり、第4章1の事例のように、こちら側の覚悟を促されるなど、関係の中に引き込まれるような事もあり、治療関係のサインとして経時的に考える必要を強く感じる場所である。そして最後は穴が小さくなり、画面の端に描かれるなど、意識の中心から周辺に移っていくと心理療法も終了かと考えられる。

3) セラピストの逆転移と技法の工夫

クライアントが来談して初期に心理検査を実施した場合、その結果からセラピストはさまざまな印象や感想を抱く。検査結果が強い行動化の可能性を示したり、強い攻撃性を持っていることがわかれば、それに対する構えも必要なことがある。病態水準が重ければ心理療法は長引きそうだと感じるし、抑圧が強くてあまり深まらない面接が続きそうだったり、さまざまなことが予想されるのでそこからセラピストが感じることは多い。自分にはそのクライアントとかかわるのは無理だと考えることもあろう。

逆に検査結果からみてクライアントに興味を持ち、自分がかかわりたいとか自分が助けたいとか、あまり興味を持てないので検査だけで終わりたいと思うこともあるかもしれない。実際にそれが客観的で正しい場合もあり、適切に他のセラピストに心理療法を依頼したり、時には他の医療施設にリファーすることもあるかもしれない。必要以上に不安や思い入れが強くなることもあろう。

つまり心理検査の実施前から生じる逆転移がある。これは検査者が心理療法的にかかわ

る際には注意する必要がある、重要な情報でもある。単に医師から依頼されて結果のみが伝えられるアセスメントとは違う側面であり、従来それらは区別されておらず、それに注意を向けることには意義がある。そして多分、これは質問紙などより投映法の方が強く働く可能性がある。

さらに心理療法を行えば、そこで生じる転移や逆転移は当然考えなければならないところであり、検査結果に及ぼす影響は考慮に入れる必要がある。筆者は本論において、①ロ・法で名大式思考・言語カテゴリーを活用すること、② LMT に「穴」の Item を付加すること、③投映法にクライアントの物語を読むこと、などを提案してきた。ロ・法においては渡辺(2006)に従って反応についての連想を聞くことと、反応を心の物語として考えることがあり、LMT-Hole、ロ・法をそれぞれの心の物語として読むことも含まれてくる。

それらは心理検査を心理療法的に活用するための工夫である。心理検査という媒介物を従来よりも自由に使うことになり、必然的にここには不純物が混ざり、客観性が失われるという批判は避けられないだろう。どちらの場合でも、基本的に心理検査を実施するのは心理療法を始める時であり、ここでは従来の実施法と変わらない。だが初回到ロ・法を実施してもまったく白紙状態というわけではなく、クライアントからの転移は存在するし、検査者が男性か女性かによっても反応に影響を及ぼす可能性を考慮すれば、まったく客観的に投映法を施行でき、完全に客観的な結果を出すことはあり得ない。セラピストと検査者を分けることで検査の客観性を担保することもあり得るが、筆者などは臨床心理士が 1 人しかいないという状況で長くかかわってきたので、そもそも他の検査者に心理検査を実施してもらうことができなかった。そのような状況でもクライアントにできるだけ有効なかかわりをしていくのが実践的な臨床の場であり、その意味では実践場面での“工夫”ということは大事な問題である。田嶋(2003)は「心理臨床は優れて創造的過程である」とし、臨床的な知恵や工夫について「かたくなさが道を開き、しなやかさが発展させる」と語っていることは重要である。

たとえば、第 4 章 2 のうつ病事例の LMT-Hole ①において、大きな工事中の穴が描かれた時には、Th は少なからず驚いた。J 子があのような大変な裂け目と外傷的な問題を持っていることを突きつけられたからである。それがなければ、あの時ほど実感を持ってその大きさと大変さが感得できなかったのではないかと思われる。それは彼女との道行きをもにす筆者の覚悟を促した。

また、第 5 章 1 で挙げた B 子の LMT-Hole ③では、ここまで心理療法が経過してから穴から川が流れ出し、無意識のエネルギーが溢れてきたかと思ったり、第 5 章 2 の D 子の事例で、子ども人格の描いた LMT-Hole ②では、やはり彼女の抱えている闇の大きさを知った。他方、第 4 章 2 の K 子の事例では、内界探索への意欲を示す彼女にエールを送りたくなっていた。心理検査結果からこうしたいろいろな印象を受けることは「穴」の Item に限ったことではないが、今まで述べてきたような技法における工夫は、セラピストに対して、理論よりも実感を持たせることに有用なものであると考える。皆藤(2002)の「心理療法のトポスに導入される技法は、導入する心理療法家の心理療法感を映し出す鏡である」との言も頷けるところである。

筆者が考える「心理療法的バッテリー」という用語には、心理療法に含まれるセラピスト-クライアント関係がロ・法と LMT-Hole にも反映される。そのゆえに技法の工夫、たと

えば検査結果から物語を作ることに、セラピストの逆転移による恣意性が入り込む恐れがあるので、常に注意を向けるよう心しておかなければならない。

2. ロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の導入

1) 導入の時と場合

心理療法の中に心理検査を導入する場合、いかなる時でもなぜ導入するのか、それが実施可能かどうかはいつも問われることであろう。ロ・法と LMT-Hole の二つの技法を両方とも実施しない例も存在するし、病態水準だけで導入の有無が決まるわけでもない。私たちがクライアントの「理解」のために有用であることが大事である。

そもそも、心理アセスメントという言葉は“評価する”という意味が大きいのではなかろうか。WAIS-IIIなどの知能検査では下位項目別に点数が表示され、IQ も当然のように客観的に数値で表されるので、一見客観的な「査定」ができるように思われるが、それが実際に役に立つかどうかは別の問題である。知能がどのように活用されるのかは生育歴や性格、周囲の環境も考慮しなければわからないのであり、IQ を計測するだけでは臨床的に知能検査は実施できても、知的なプロフィールがどのような構造を持ち、どのように動いていき、どのように発達していくのかは臨床的な理解がなければ役には立たない。

精神医療においても、「診断」という言葉は病名や病理の面を重んじており、精神分析的な精神療法を実施する上では精神力動的な側面を把握することも含まれていて、それを表すために「見立て」という言葉を提唱したのは土居（1996）であった。セラピストとしての私たちも、クライアントとかかわる上では全人的な理解が重要であることを認識しなければならない。それを前提とした上で、ロ・法と LMT-Hole の導入を考えてみよう。

①ロ・法への導入

ロ・法は、ある程度言語が理解できて言語的な表現力があり、検査からの逸脱の幅がある程度までに収まっていることが導入の条件であろう。精神病的な急性期、極端に躁的な状態は困難であり、その時期には必要がないし実施すべきでもない。

ともあれ、統合失調症や知的問題の大きいクライアントの場合には、検査としてはともかく、治療的には用いられにくい。知的問題が大きい場合、言語面での表現力や創造性、想像性などが乏しくなるために検査としても導入しにくいこともある。そのために筆者は第4章3でのMR事例にはロ・法を実施していない。

しかしM男の事例のように、知的レベルが低下している事例でも施行できないわけではなく、クライアント側の要因とともに、セラピスト側の受け取り方や理解のレベルが問われることになる。いずれにしても、クライアントの全体像に近いものを理解できるので治療初期には有利であり、再検査では変化、不変の度合いや現状の位置、さらには生き方の変化を知ることができる。

②LMT-Hole への導入

言語理解や言語表現力がロ・法よりも低いレベルでも実施でき、各Itemの概念を理解していればLMT-Holeが実施可能である。精神病的な急性期、極端に躁的な状態はロ・法

と同じように心理検査自体必要がない。絵を描くことはできても、構成が崩れたり枠からはみ出してしまう場合は困難だが、導入時期の問題もあり、心理療法的にかかわる場合には途中から実施可能になることもある。

比較的導入しやすい技法であるが、検査としても心理療法としても用いられやすいために、臨床的に使用する際には、クライアントがどのように自己投入しているのか、なぜそのように描かれるのかがセラピストによって問われなければならない。筆者は以前、ある精神科病院でルティーン検査として、あるクライアントにバウムテストの教示を告げた。すると彼は気楽に「ああ、実のなる木ですね、はいはい」と言って描いてくれた。彼は何人かのテスターにより、何回も描いていて慣れていたが、筆者はこのように身の入らない木もあるのかと愕然とした。投映の度合いが低いことが明らかであった。検査者やセラピストが如何に使用し、画用紙を差し出していくか、簡単なものほど注意が必要である。

また中井（1984）は、LMT の使用頻度について「レントゲンを取りたくなる時」としており、滝川（1984）は「インキューベーションの中でなにか大事な反応を行なわせているような感覚」と述べ、皆藤（2004）は「『何か』が風景構成法のときを告げる」という。治療関係の把握と臨床感覚が問われると考えられよう。

さらに LMT-Hole では、すでに表現された心象風景を穴によって貫通させてしまう力もあることから、セラピストは対象者の自我強度との関連を常に考慮する必要がある。穴は必須の Item でもなく、ある種の緊張感を持って導入する項目であろう。

2) 両技法の導入

クライアントの「時」に応じて、その人の持っている能力やチャンネルに合わせることで、そして柔軟な導入や使用が肝要である。ロ・法上では変化がみられなくとも、心の動きやクライアントのメッセージは言語のみでなく存在し、それをすくい上げることには意義がある。その意味で両技法の導入時期はクライアントとの関係の中に存在する。

皆藤（2004）は「LMT をやる時期は自ずからやってくる」と述べているが、ロ・法とともに、外的な事象と内的な事象が交差して「自然にやれる時」であるということもできよう。自然でない時は、①外的に大変な時にはその話題に注意が向かう、②逆転移が作用してセラピストの行動化として実施する、③セラピストの容量を超える時にはできない（1日にロ・法を何例もできない）、④他に緊急のケースがある場合には実施しにくいなどである。③、④などはアカデミックな話ではなく、臨床現場の事情によるものであり、ロ・法施行の時間を確保することも時には大変なことがある。臨床現場に浸かっていると、セラピスト側の能力を十分に活かせる枠組みを準備することも大事なことである。双方落ち着いて、クライアントの内面がどうなっているのか呈示してもらい、今一度来し方行く末を確認する時期であろう。言語は拡散して空に消えるが、絵は定着する。

しかし LMT は心象風景であり、対象者の全体像を表すことができないので、ロ・法が役に立つ。そしてどんな表現形態にせよ、クライアントが開かれている面とそうでない部分とでは、大きな差異が生じる。クライアントがその技法に乗ってくれたり、興味を持って入り込んでやれるかどうか、特に描画などでは大きいと考えられよう。ここでロ・法への投映と構成的技法である LMT との差が表面化する。

夢を見ない人が夢分析を始めると夢を見るようになるのと同じように、絵を描かない人

が描画してもらおうと興味を持つことがあり、チャンネルが合えば表現が開かれる。ロ・法ではクライエントは見知らぬ世界に投げ入れられて情緒刺激を与えられ、受け身的な構えを強いられる。まず重要なのは「認知」であり現実認識であるが、認知自体に個人差があり、情緒的に賦活されると反応に多く影響を及ぼす。反応性が高くなれば、情緒的なエネルギーが多く投入されるが、情緒過多になるとセラピスト・クライエント関係の共通の舞台からはみ出すこともある。あるいは、あまりにも自我のコントロールが利かない表現になると、セラピストの受容限度を超える。逆に第 5 章 3 における M 男の事例のように、外部刺激にあまり動かされにくい人も心理療法は困難になることが多いだろう。つまりはクライエントの反応性と表現は、ある範囲に収まる時に治療に有効であり、セラピストの受け入れられる容量と治療関係によっても相違が生じる。範囲外にはみ出す時には心理検査もできないことがある。

3. ロ・法と LMT-Hole の関連と相補性

ロ・法は決まった形態に内的なものを投射する手法であり、LMT は何もないところから創造して構成していく手法である。これらは中井(1985)がいうように相互補完的なものであり、さらに「すでにあるものに対する投影と、ないところに何か作ってゆく構成とは車の両輪のようにして人間が時間の中を生きていく時にとともに必要なものであると思った」(中井, 1990) と述べている。“時間の中を生きていく” のは、まさに心理療法の道程であり、継続的なアセスメントとも繋がる。

両者を比べればロ・法は心理検査の意味合いが強く、LMT は心理療法的要素が強い。双方をうまく使っていくことができれば、より治療的に有効であると考えられる。クライエントの全体像をロ・法で把握し、セラピストがそれを把持すること、LMT ではその時々課題や転移をうかがうことができ、どちらも心理療法には重要である。その関連と相補性について述べていきたい。

1) 刺激特徴の相違

ロ・法の反応は刺激を受けた時点から始まるが、まずはそこから受ける意識的、無意識的な印象から始まる。それは言語化されない時もあるが、「これは気持ち悪いですね」などと言語化される場合もある。そして何に似ているかという過去の既知のものと照合が始まり、適切と判断され、かつその場で言語化できるものが反応として出される。その後刺激に受けた影響を引きずりながら 1 枚目から 10 枚目までのカードを体験していくことになる。

一方 LMT-Hole は「川を描いて」から始まり（実際はロ・法とともに教示から始まる）、その Item を紙面のどこかに定着させながら、自分が描いた部分と余白のバランスを考え、次の Item を想像しながら構成を練り、その Item に自分の気持ちや人格を投射していく。ここではロ・法と違ってそれぞれの Item は既知のものであり、知らないものはない。ただ Item の中では親しみやすいものや距離があるもの、描きたくないものなどが含まれよう。ロ・法においても見にくいものや刺激が強すぎて拒否的になるものなどがあるのと同様である。しかし、ロ・法は未知の刺激であり、LMT-Hole では既知のもので自分が好き

なように構成できるので意識的な投映もしやすく、したがって自分の内的物語が語りやすいという特徴がある。この部分では言語的な心理療法との相性が良いといえる。

ロ・法では過去の痕跡が表れ、LMT は未来志向的であることや、ロ・法は状態像が変化しても変わりにくい（山中，1993）ということとも関連していよう。ロ・法と LMT-Hole を併用すれば、過去から現在を通過して未来までも考える材料になると考えられる。

またロ・法での反応はクライアントの意識からは遠い無意識的なものも多い。ロ・法では「悪魔が襲ってくる」という反応を出した人が、LMT-Hole では穏やかな風景を描いていることもまれではない。また LMT-Hole では風景を描けた人が、ロ・法ではほとんど何も見えないということもある。しかし同じ人が双方に結果を出しているわけだから、同じ人の違う側面が表現されているのは間違いない。

転移が比較的理解しやすいのは LMT-Hole であり、さまざまな Item に表現されるが、「穴」の Item は心理療法への構造転移と考えることもできる。臨床例では、心理療法的にかかわっている人の方が「穴」の意味合いが深いという印象を受け、心理検査的に実施した人の方が、水たまりやゴミの穴のような小さいものであったりする印象がある。内界に入っていくかわりが影響したり、セラピストがそれに関心を寄せることが意味を深めていくことがあるのだろう。

そして当然のことながら、ロ・法と LMT-Hole は同じものが投映されるわけではない。第5章2に挙げた事例D子の場合には、最初の LMT-Hole では川や山や田んぼを描くうちに自分の幼いころを思い出し、かつての家や父親の思い出へと記憶をたどっていったに違いない。呼び覚まされる記憶痕跡は、風景から連想される部分から繋がっていくことになる。この場合、LMT-Hole の刺激は記憶のポジティブな部分を引き出して、彼女が解離されていない良い部分を持っていることを示している。穴は防空壕を描いており、防空壕というものは元来危険から身を守るために作られたものだが、遊びの Item としてポジティブなものになっている。良い情緒を引き出すのは描画法一般の良いところであり、LMT に限らず、絵を描いた感想として「楽しかった」というクライアントは珍しくない。描くものも日常的な Item であることもロ・法と比較して安心感を誘うし、ネガティブな感情や記憶を持ちながらも、それを抑制できるのは健康度がある程度高い面がある。もっとも LMT においても特定の Item は描けないとか、描きたくないということがあるし、境界性パーソナリティ障害などのクライアントでは構成が崩れず、比較的まとまった形で穏やかな風景を描く人がロ・法ではかなり質の悪い反応を出すこともある。LMT がロ・法に比べてやや明確な構造を有しているためにそのようなことがあると考えられる。その結果、内的な問題を露呈させないような防衛が機能し、非常にネガティブな記憶と結びついてそれが直接的に表現されることはそう多くはない。もっとも花を描いていても花びらだけしか描かれずに奇妙な感じがしたり、家は半分しか描かれないとか、完璧にはできていないこともよくある。

一方でロ・法の場合には、まったく外部からのあいまいな刺激であるために、産出するものは意識的に統制しにくい。認知面からの反応もあるが、それ以外にもさまざまな反応が産出される。記憶から想起されたものを反応として出さずにおくこともあるが、その選択はクライアントに任されており、何のためにそのようなことが要求されるのかわからないために、必ずしも出された反応は良いものとはならない。プロットがネガティブなイメ

ージと結びつくこともまれではなく、直接的な記憶ではなくて自分のありようを表すような物語や象徴的な反応を投射して現出されることもある。これは刺激自体が現実的なものではないために、非現実的な物語になることも多い。LMTの方が現実根ざしているItemを要求されているので、現実的な風景とそれに付随する現実的な話になることが多い。ただもちろん例外もある。

これらの物語はロ・法の場合には1枚ずつのカードに投射され、形態は決まっているので物語は短時間に決まるが、LMTではItem呈示の進展に伴って徐々に形作られる。ロ・法も10枚の順序と時間的な流れが生じて影響を受けることもあるが、通常は10枚で同じ物語が作られることは少ない。これと比べると、LMTでは最終的に1つの風景に統合されなければならないので、構成、統合する力は意識的な部分がかなり試されることになる。

2) 対称性と相補性

伊集院と中井(1988)は「なぐり描き法と風景構成法の対称性は、相補的立体鏡的に内的世界を開示する」としている。構成しながら投射していくという点で中間の位置にあることを指摘しているのは興味深い。ここでは自由な運動が描線によって表現されるのが特徴であり、その変化については筆者が第5章3のM男の事例において述べた。色彩はLMTもなぐり描きも、クライアントが自発的に決めることができ、あえて彩色されない場合もあるが、ロ・法では色彩は決定されており、その刺激を対象者は受動的に受け取り、それを意識化して指摘するかどうかはクライアントに任される。色彩は情緒と関連すると考えられるところから、広田ら(1990)はロ・法とLMTの色彩の使用を比較しているが、LMTにおいて色彩が豊かであれば、ロ・法で色彩反応が多く産出される訳ではないとの結果をみている。そこには色彩を見て使用することと、色彩を形成することの差が感じられる。色彩ショックで反応が忌避されることも含めて、ロ・法では色彩は受動的に見させられ、反応させられてしまう。それが外部からの情緒的刺激と考えられるゆえんでもある。ロ・法ではカードが「血」に見えることがあるが、LMTでそれを描く人はいない。ロ・法ではカードが「きれい」とか「気持ち悪い」と言えるが、LMTでは言えない。つまり、LMTでは色彩は作られていくのであり、そのためのエネルギーが必要である。「色を塗って下さい」と言われた時に、クライアントにチャンネルが合えば、そのエネルギーがより賦活されるし、合わなければ面倒くさいと感じたり、「全部塗るんですか？」と消極的な質問が投げかけられることもある。ロ・法と違ってLMTでは実際に線描の時から筋肉運動系が働き、投射のみでなくエネルギーの発露が義務づけられている。衝動的なエネルギーを持っている人は、筆圧が強い描線になったり、彩色が乱雑になったりするだろう。バウムテストではKoch(1952)が最初から筆跡学を意識しており、岸本(2005)もKochにはJungと並んで「筆跡学というもう一つの大きな柱がある」と述べている。LMTでは描き直しが利かず、あまり筆圧や描線が目立たないフェルトペンを利用し、彩色はクレヨンの柔らかさによる退行促進性に注意が向けられてきた。その筆致と彩色の筆触は、ロ・法の材質反応(T)を実際に体験させる。

そして、色彩を自分で作っていく運動はカタルシス効果もあって治療的要因の一つであると考えられるし、完成すれば達成感も味わえるという生産的な活動でもある。そのために一方では情動を統制しなければならないことも生じ、皆藤(2002)はロ・法のような「色

彩ショック」ではなく、「彩色ショック」が生じて、能動性と受動性の循環運動に自我が関与しきれなくなると、彩色の拒否や中断という事態が起こるという。

彩色過程について松井（2009）は「どこまでが『山』でどこからが『山』でないのか」という差異化をすることによって「構成過程の延長として、構成をより明確にするという働きを含んだ過程」であるとしている。それを含みながら“自分の色”を表現するのであり、木の Item では、葉は緑、幹は茶色などとある程度の物の常識的な色という範疇の中から選ばれながら、完成した全体を見ると、彩色した描線を含めてきわめて個性的な“自分の色”になっていることがわかる。ロ・法では自分で色を作ることはできず、記憶と関連づけて与えられた色と反応をマッチングしていく。ゆえに反応がカードとそぐわない時には、色を無視しなければならない。たとえば、カードⅧの P 反応「四足動物」は世界の 90 % の人が見える反応だというのが（中村，2010）、このプロットは赤色であり、赤色の動物はめったにないので、四足動物という反応を出す時には色を無視しなければならない。せいぜい色が変化する「カメレオン」と言えるぐらいであり、もし「赤いシロクマ」などと反応すると、強制色彩反応（F/C）とチェックされ、病理的な範疇に入ってしまう。他の部分にしても実際に反応内容にぴったりの色彩とはいえるものは少ない。それを想像力や見立てる力によって埋めるために、刺激に触発されすぎて現実吟味が十分働かなくなると、形態とともに非現実的な方向に踏み込んでしまうことにもなる。

つまり、色彩に関してロ・法では外的刺激に対する守りがまずは問題であり、LMT では表現しようというエネルギーが問題になる点で方向は逆になる。意欲という観点からみると、LMT を描く意欲は生産性の高さとも関連する。Item を描くのは一つずつでも良いが、生産性の高い人はそれぞれの Item を複数描き、それに色をつけるとたくさんの Item に彩色されて、結果的にとてもカラフルになる。賦活された情緒的な動きや活動性が表現されたものであり、塗られない部分や薄い彩色、色の数が非常に多いもの、筆圧が濃いものなどが印象を左右する。一般に描画が危険なのは、それらの情動のエネルギーが統制できないほど過多になることである。知覚、認知機能がロ・法では過多へのブレーキをかけ、LMT では現実的な Item や、それによって規制される色彩によってある程度統制がかかる。ロ・法の色彩は外部から侵入し、不安や恐怖を与えたり、華やかな色彩は楽しい気分を賦活させたりすることもある。もともとは不安喚起的なカードが多いし、クライアントの課題はたいていネガティブな心の問題なので、それを突きつけられることの方が多いだろう。ロールシャッハ反応からみれば楽しくはなかったはずなのに、感想を聞くと「楽しかったです」と不安を否認するクライアントもいる。LMT においては、楽しくなければあまり熱心には描かれないのが普通である。「穴」の Item の場合、普通は色がない。黒か無彩色のことが多く、不安喚起的と考えられよう。第 4 章 2 の摂食障害事例のように、黄色に塗られるのには特別な意味があることがわかる。

ロ・法では似たものの中から一つを選ぶ「パラディグマ的選択」を中核とし、LMT では各要素の配置を重要する「シンタグマ的選択」をその特徴とするのは、主に形態と構成の部分であり、色彩はここからはみ出して投映を引き受けている。LMT では時間の経過とともに風景を作り上げていく中で自分の心象風景を形作っていく。たとえば第 5 章 2 で挙げた事例 D 子は、LMT-Hole ①で思い出の風景を作り、「懐かしい」という感情を賦活させた。この意味づけは山中（1984）がいうように「今、考えて下さっても良い」のであ

り、Inquiry の時に付け加えられることもあろう。また中里（1984）は、LMT において画面を構成する作業はシンタグマティックな過程であるが、風景画は誰でも描いたことのある慣れ親しんだ構成空間なので、素白の空間は風景という網が影を落としているすでに構造化された空間であると説明する。つまり「風景の絵を」と教示した段階で画面は構造化されるのであり、対象者に安心感を生むことにもなる。この構えは、全く新しい刺激で「一方的に与えられ、強制されたもの」（市橋，1984）というニュアンスのあるロ・法のカードとは相違がある。もちろん「絵は描けません」と言う人もおり、表現への抵抗感を持つ人もあるが、先に述べたように外からの刺激への守りと、表現することへの抵抗感の内から外へと方向が逆になっている。

ともあれ事例 D 子はロ・法①では守りに徹して知覚、認知の領域から出ないように反応する中で防衛的なあり方を示した。そして LMT-Hole では意識的にはポジティブな思い出の風景を描いた。つまり両技法は反対側からクライアントを照らし、立体的な姿を作り上げる。中井（1984）も、実際には「ロールシャッハ・テスト、『なぐり描き法』、箱庭療法、『風景構成法』などはいずれも複合的な過程である」と述べており、投映的空間と構成的空間の中でパラディグマティックな選択とシンタグマティックな選択が交叉する舞台となる。これを図にしたのが図 6-1 である。

まずセラピストとの関係が土台になり、ほぼ同数のカード、Item が順番に呈示される。山中（2003）は LMT の Item とロ・法のカード 10 枚はパラレルであると指摘している。ロ・法ではカードの模様は決定されており、それは“与えられる”が、あいまいなものである。対象者はカードが何に見えるかを答えていくが、コウモリかチョウか鳥か悪魔かなどパラディグマティックな選択をし、そこではより認知的に正確かどうかという面とともに、対象者自身のパーソナリティーや情動面での投映もなされ、それが強大になり過ぎると、現実からズレて恣意的になったりする。10 枚のカードに対する反応がなされると、次にもう一度最初に戻って Inquiry がなされる。対象者はそのようなことが聞かれるとは思っていないので、教示を受けてから反応の理由を跡づけていく。言語学での選択（パロール）ではそのような問いはなく、相手とのやりとりの中でコミュニケーションが確認されるが、ロ・法において対象者は一定の自由を与えられて、内界にあるものが反応上に定着される。この後の限界検査は検査者の確認となり、対象者は若干の無理を強いられる。たとえば「父親のカードは？」などと聞かれるが、もともとカードは「父親」のようではなく、父親が対象者にとってどのような人であるかとともに、比喻を用いる力や共感性があるかどうかなどが試される。いずれにしても、もう一度振り返ることでパラディグマティックな選択についての吟味がなされる。ここではシンタグマティックに論理的に言語化する必要もあり、反応に統合的な整理がなされる。

一方、LMT-Hole においては、セラピストによって枠が描かれ、風景の絵を描くこと、Item が順に呈示されることなどを聞いて、緩やかに課題場面が構造化される。画用紙には何も描かれていないが、風景は誰もが知っているイメージで、項目も誰もがよく知っているものである。Item が呈示されると、どのように描くかを考え、次の項目の場所を推測しながら配置していく。画用紙が埋まってくるごとに空いたスペースは少なくなり、対象者は項目ごとの連関も考えながら進んでいく。これがシンタグマティックな選択であり、「山」は通常「山」しか描きようがないが、「穴」は単独では存在できない Item なので、トンネ

ル、ゴミの穴、洞窟などパラディグマティックな選択がかなり働くといえる。付加項目も、描かれる際にはその風景に似合うものになるだろうが、これも選択の幅は広く、構成を補強したり投映がより許されて自分を投入しやすい項目となっている。

そして Item が呈示された後に、彩色してから説明することになる。中里（1984）によると、「彩色は投映的だが、Item 間の空白を彩色して描画をまとめていく段階では彩色もまた構成的」である。ここで Item 間の境界が明確化される。情緒的な問題から彩色されなかったり、部分的に彩色されることもあるが、描かれた段階ではどんな風景かはっきりと思考されていないこともあり、Inquiry 段階では合理的な説明が要求され、意識によって統合される必要がある。これもロ・法での Inquiry と平行である。ロ・法、LMT-Hole とともに付加反応（項目）もあり、その形態も似ている。セラピストとの関係が反映されることもあり、これは繰り返しのきく LMT-Hole の方が大きくなる可能性が高いが、ロ・法にもある。

いずれにしても、両者は技法的には大きな相違があるのだが、中井が風景に「構成」という概念を取り入れたことで、鮮やかな対称構造をなしていることがわかる。対象者に対して、それぞれ反対の側から光を当てるような相補性を持っていると考えられよう。

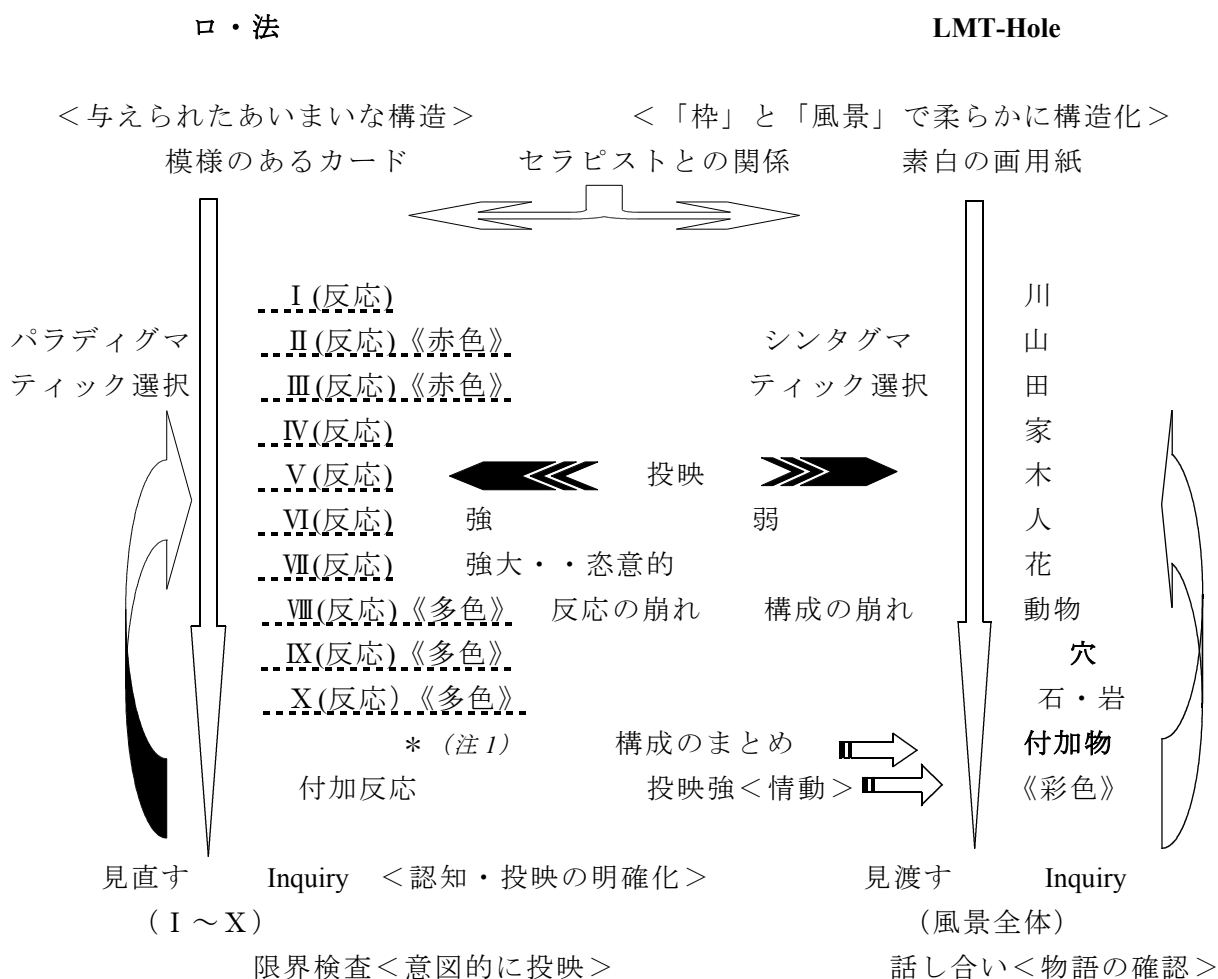


図 6 - 1 . ロ・法と LMT-Hole の対比

(注 1) 破線はカードの各刺激が独立していて、基本的には前カードが次のカード反応に影響を及ぼさないものの、実際には影響があることを示しており、この影響は継列分析で扱われることになる。もっと厳密には、同じカード内でも反応が複数出される時には、前反応が後の反応に影響を及ぼすことがある。逆に投映が過多になれば、カードは違っても同じ反応を繰り返すなどの事も起こり、名大式技法では思考・言語カテゴリーで扱われる。

LMT-Hole での生産性は、描かれたそれぞれの Item の数の多さに表れたりする。しっかり描いたことに充実感が感じられこともあるし、描かれた絵を大事なものとして自分の手元に置きたいクライアントもいる。一方ロ・法の生産性は反応数の多さなどに表れるが、方向性を持たないのでクライアントには達成感が感じられないのが普通であり、ましてプロトコールを持って帰りたい人はいない。運動反応は動いていないカードに動きを見る能動的なものであるが、エネルギーは外には発散されず、内部に留まったままである。以前、ある臨床心理士が精神科病院に入院中の統合失調症者にロ・法を実施し、終了後そのクライアントが検査室から出たとたんに看護師を殴ったことがあったが、これなどはエネルギーが発散された悪い例かもしれない。描画はそれ自体、筆致と彩色にエネルギーを使うものであり、筋肉運動系の手応えがあり、第 5 章 3 の M 男の事例で述べた通りである。

ロ・法と LMT-Hole はさまざまなレベルで対象者の内的な世界をすくい上げるものであり、刺激や課題が対称的で入れ子構造になっており、アセスメントとしても心理療法的にも相補的に機能することがわかる。もちろん、これは臨床例に応じて換えることもでき、実際に第 4 章 3 で挙げた事例 L 子では LMT-Hole と自由画を使用し、第 5 章 3 で挙げた事例 M 男ではロ・法、LMT-Hole に加えて相互スクリブル法を用いて心理療法を進めた。それぞれの特徴を生かしてクライアントに合った技法を用いるのは、臨床現場では重要なことである。ここであえてロ・法と LMT-Hole に焦点を当てたのは、両技法の対称性のゆえであり、ともに豊かで奥深いものを内包しているからに他ならない。

第7章 総括と今後の課題

1. 総括

心理アセスメントを行う場合に、テストバッテリーとしていくつかの種類心理検査を組み合わせることはよく行われる。馬場（1997）は投射水準からみた質問紙、SCT、TAT、ロ・法の比較し、「対社会的態度」と「精神内界」の深さを対比的に捉えている。本論では、同種の投射法に属するロ法と LMT-Hole を比較検討しており、人格全体のアセスメントからすれば、いささか偏っていることになる。筆者自身も TEG や SCT などには実際に用いることがあるが、本論では心理療法的に適用できるバッテリーとして両技法を挙げて検討した。

心理検査にはそれぞれ測定できる範囲に相違があり、ロ・法と LMT にも違いがある。投射的な技法であるロ・法と構成的な技法である LMT は、表現される世界も異なっていて、補完的に適用できると考えられる。心理臨床家が個人心理療法を行っていく場合、クライアントが時間軸に沿って変化する在り方を縦断的に関与しながら観察していくことは当然であり、テストバッテリーもこれに沿っていくのが自然な流れである。横断的にバッテリーを組んでいくのが従来の考え方だが、筆者は LMT とロ・法の組み合わせにより縦断的に心理療法過程全般にわたって対象者に対する理解と深め、治療的価値を高めようと考えた。LMT はもともと箱庭療法への適用を調べる心理検査として開発されたが、心理検査としての側面だけでなく、箱庭療法と同様の、心理療法そのものとしての価値が認められて実践されているものである。一方ロ・法は心理検査技法として用いられているのは当然であるが、深い投射を引き受けることから生じる心理療法的な価値があると考えられる。よって両技法を心理検査から心理療法までの軸上に位置づけ、対象者に応じて、あるいは心理療法の時間経過の流れに沿って施行していくことが可能になると考えた。

そのために、第2章においてロ・法についての工夫として、名大式「思考・言語カテゴリー」を活用することによる付加価値を高めようとした。本カテゴリーは植元（1974）によってまとめられたものの、名大式ロールシャッハ技法を使用している研究者や臨床家においても、臨床的に活かしている者はほとんどおらず、筆者らが共同研究者とともに臨床実践に活用しようとしてきたのであり、本カテゴリーを生き返らせようとする試みでもあった。

まず解離性障害者4事例のロールシャッハ特徴を検討し、4事例ともに思考・言語カテゴリーにチェックされたのは *Fabulization Response* と *Arbitrary Thinking* であった。*Fabulization Response* は個人的な感情を容易に表出しやすい人格を表すと考えられる。彼らは知性化や想像性は豊かだが、作話傾向が強くなり、自分独自の感情的世界に入り込む恐れがある。さらに *Arbitrary Thinking* も重なり、恣意的に思いこみで判断する傾向がそれらを強化すると考えられる。A、B、Cの3事例にみられたのが、*Abstraction and Card Impression* の *direct affective response*、*Defensive Attitude*、*Personal Response and Ego-Boundary Disturbance* の中の *personal experience* である。彼らは情緒的刺激に敏感であり、*Defensive Attitude* では神経症的な防衛が働いていることを示した。しかし、同じ診断部類に入っている個別

には特有の差異があることが示唆された。

次に境界性パーソナリティ障害者への適用を試みたところ、1) Defensive Attitude、2) Fabulization Response、3) Arbitrary Thinking が多出が特徴的と考えられ、これら三種の組み合わせが彼らの病態の在り方をよく示していることが明らかになった。次節では境界性パーソナリティ障害の1事例を挙げ、思考・言語カテゴリーの特徴を検討した上で、心理療法中に“here and now”で取り上げることが有効であることを例証した。

第3章においては、風景構成法についての工夫として、中井（1969）が考案した原法に「穴」というItemを付け加えた「穴」のある風景構成法（LMT-Hole）を創案し、穴のItemがどのように表現されるか、どのような意味があるのかについて、「健常短大生」と神経症から境界例を含む「臨床群」に施行して比較検討した。そして、そこには心の深層に通じる次のような意味と意義があることが明らかになった。1) 想像性の刺激、2) 無意識への通路、3) 保護的空間、4) 上下方向へのベクトル、5) 穴の大きさの問題、6) 葛藤の存在、7) 穴が描けない場合などがそれであり、他Itemとは異質の項目呈示によってさまざまな内的世界が表現されることがわかった。

第4章はLMT-Holeを臨床事例に用いて、その有用性を探った。まずLMT-Holeの意義を心理療法的なかわりをもったクライアントを通して例証するため、最初にうつ病と診断された女性の事例を挙げた。父親からの虐待を受けた過去の想起と整理が必要なクライアントであり、そこではLMT-Holeの穴は、過去と無意識への入り口としての意味とともに、心理療法における内界の深層への探索を示していることが明らかになった。

次に父母との関係が問題になった摂食障害の女性事例を挙げ、心が発展して変化していく「可能性」としての穴の意義や、ここにクライアントが期待をかけ、意欲の表れとして考えられることを見いだした。そしてこれはセラピストを支える側面もある。さらに、簡単な言語は解するが、言葉による心理療法が困難なMR事例を挙げた。これはLMT-Holeと自由画を心理療法的に用いた事例であり、ここでは1) 描画自体がコミュニケーションツールとして機能すること、2) 彼女の在り方を如実に表していること、3) 三種の描画が心理療法的バッテリーとして意味があることを示した。投映法の心理療法的バッテリーは、必ずしもロ・法とLMT-Holeに限ったことでなく、クライアントの要因やセラピスト-クライアント関係によっても柔軟に変更がきくと考えられる。

第5章では、臨床実践でのロ・法とLMT-Holeの心理療法の中での併用について、事例を挙げて意義を明らかにした。ここでは第2章で呈示した解離性障害の4事例において、同じ診断分類にあっても個々の内的な様相には相違があることを受け、内的な世界の相違が大きい2事例について個別に詳説した。

はじめに子どもを虐待するという主訴を持つ女性事例を挙げ、ロ・法でアセスメントをしたが、LMT-Holeでは転移関係の中でのその時々状況が示され、セラピストはそれを理解しつつ心理療法を進めることが肝要であることを示した。

次に失声で来院した解離性同一性障害の女性事例を挙げ、その多重人格の障害はロ・法上明らかではなく、LMT-Hole上で交代人格が明確になり、その表明がクライアントの全体像を理解する上で重要であった。ロ・法では彼女の内的な「苦」の世界がみてとれ、LMT-Holeとの関連が伺われたが、そのイメージをセラピストが抱え続けて面接することが肝要であった。そしてセラピストがクライアントのロ・法とLMT-Holeの結果から、“

心の物語”を読むことが心理療法のストーリーを紡いでいく縁となることを示した。

さらに、変化の乏しい慢性化した男性のクライアントとのかかわりを挙げた。彼のロ・法は内容が poor で、変化と情緒に乏しい紋切り型のプロトコールであった。描画では変化する面と常同的で変化しない面が併存し、ロ・法では不明確な部分が LMT-Hole では表現され、並行して行った相互スクリブル法もポジティブな転移と逆転移を醸成する舞台として機能したことを明らかにした。

第6章では、ロ・法と LMT-Hole の「心理療法的バッテリー」について述べ、1) かかわりのためのアセスメント、2) 継続的なアセスメント、3) セラピストの逆転移と技法の工夫、などの面から考察した。2つの技法はクライアントに応じて、その人の持っている能力やチャンネルに合わせて使用することが可能である。面接での言語表現、ロ・法への投映、LMT-Hole の描画が対象者により、また“時”によって重心を移動することになり、それらの重要度はシフトする。これが“心理療法的”という所以でもある。

そして、ロ・法上では変化がみられなくとも、心の動きやクライアントのメッセージは存在し、LMT-Hole はそれをすくい上げることに意義を持つ。両技法の導入時期はクライアントとの関係の中に存在することが明らかになり、外的な事象と内的な事象が交差して「自然にやれる時」が導入時期となることを示した。

どんな表現形態にせよ、クライアントが開かれている面とそうでない部分とでは、大きな差異が生じ、対象者が技法に乗ってくれるかどうか大きい要因である。投映的技法であるロ・法と、構成的技法である LMT-Hole との差は、対象者の反応性・表現性によって表れるものには相違がみられる。よって、ロ・法と LMT-Hole の関連と相補性について、1) 刺激特性の相違、2) 対称性と相補性の観点から述べ、パラディグマティックな選択を要求するロ・法とシンタグマティックな選択が求められる LMT-Hole が、時間経過の中で複雑な入れ子構造をなしていることを示した。そして、この両技法をうまく活用していくことが心理療法に有効であることを述べた。クライアントの全体像をロ・法で把握し、セラピストがそれを継続的に把持することが大事であり、LMT-Hole では「穴」Item に転移と心理療法経過を含んだありさまが投映され、その時々課題を把握できることが利点である。両技法を経時的に組み合わせて実施し、その中に心理療法が含まれているという観点から「心理療法的バッテリー」という用語を提唱した。

当然ながら、テストバッテリーは対象者に応じて考慮されるべきであり、本論で挙げた病態以外にも、たとえば発達障害や認知症ではそれぞれのテストバッテリーを考えられなければならないし、年齢によっても相違がある。本論では投映法を用いることができる対象者にかかわってきたが、それにも多くの種類がある。本論のような視点を呈示することで、今後幅を広げていけると考えている。

2. 今後の課題

さまざまな病態のクライアントに対するロ・法と LMT-Hole 導入と適用を巡って、臨床的な工夫とともに、事例を挙げて関連を探ってきた。そして両技法を経時的に併用することで、対象者への理解とともに心理療法を支え、セラピストも支えられることを考察した。今後の課題としては次のようなことが挙げられる。

1) ロ・法の心理療法的適用をさらに考え、両技法の心理療法への良い橋渡しのあり方を模索し、実施法について考察すること

ロ・法の心理療法的な使用法はまだ試みが始まったばかりであるといえる。このような見方は、すでに河合（1969）や村瀬（1970）の時代にヒントが与えられており、重要なのは対象者とのやりとりを巡って、ロールシャッハ反応からクライアントが自分のあり方についての洞察を得ることであった。一方 LMT-Hole では、風景を巡ってのイメージを通してのやりとりが、クライアントの世界をセラピストが共有することで、内的世界の物語を紡いでいくことが治療機序として大事である。この両者はそれぞれ相容れないものではない。なぜならば、ロ・法には反応から生じるイメージがあって、それを膨らませてクライアントと一緒に共有することができる。また LMT-Hole には、イメージから生じて繋がった実際の家族やクライアント自身のあり方に思いを馳せ、そこから洞察に至ることがあるからである。この両技法から発せられる刺激は、シンタグマティックな選択とパラディグマティックな選択の入れ子構造によって、対象者の意識から無意識までを含めた幅広い、奥深い内面をあぶり出し、言語も含めたありようは複雑である。このような側面についての論考は未だ不十分である。そしてロ・法が如何に心理療法たり得るか、単に技法のみに留まらず理論的な思考も必要である。

加えて、心理療法関係の中での転移と逆転移の問題は詳しく述べられなかった。この概念自体非常に大きな問題であり、これだけで本が何冊かできるほどの重要な概念でもある。ロ・法や LMT-Hole にどのようにそれが表現され、心理療法的に扱っていくことができるのか、今後の課題としたい。

2) LMT-Hole の「穴」という Item への理解を深めること

LMT に対するこの Item の付加は LMT 施行中の偶然から生まれ、筆者の興味と関心によって修正技法となった。筆者はこの項目について少しずつ考えて調べていくうちに、古来から人は穴というものに親しみ、さまざまにそれとかかわり、いろいろなイメージを投げかけ、利用してきたことを知った。光と闇の対立から影の部分を作り、これこそ“投影”を引きうけるにふさわしい項目ではないかと考えるようになった。しかし、影の部分を引き受ければ、無意識の危うさを鑑みることが必要となる。慎重に見極めるためには臨床的な経験値を増やし、理解を深めながら功罪を考え、効用を高めていくことが必要である。

3) 他の心理アセスメントとの関連を考えること

本研究ではロ・法と LMT-Hole の関連をみてきたが、臨床事例に対しては自由画や相互スクリブル法を併用している。当然のことながら、投映法はロ・法と LMT-Hole の他にも多く存在するし、質問紙法や知能検査などもテストバッテリーとして臨床現場では使用されている。原点に立ち返れば、臨床現場でクライアントに沿って必要なことが施されるのが大事なのである。筆者が注目したのは、両者が心理療法と極めて緊切な場所を占め、対称的な位置にある中心的な存在と考えたからである。中井（1984）はすでにその慧眼をもってさまざまな投映技法の分析を行っているが、筆者がその理解とともに、多種の技法を使いこなして臨床実践に生かしていくにはまだ時間がかかるのである。

さらに「穴」というものを考えると、ロ・法でもトンネルや洞窟という反応がみられるし、

箱庭療法にも穴を掘ったり埋めたりする遊びはクライアントの大事な内的表現である。夢にもそれと類した内容が盛り込まれることも多い。そうしてみると、それらの表現の相違も興味あるところであり、改めてその意味について考えたいところである。

4) LMT-Hole の対象者の人数を増やし、病態の幅を広げること

対象者と実施人数を増やすことも課題である。「穴」Item の実施については慎重に進めてきたが、ここでは述べられなかったこととして、統合失調症者に対しての施行がある。急性期はさまざまな心理検査が禁忌になるが、寛解期になれば抵抗なく導入でき、LMT-Hole も経験上はそれほど危険な印象を抱かせないものであると感じている。ただ、それが心理療法的に有用かどうかは難しい。個人心理療法をするにしても、カバーリングが必要になる対象者の内界に踏み込んでいくような Item が必要かどうかわからないし、その危険性を鑑みて筆者も活用してこなかった。ただ、他にも子どもや老年期などの年齢の問題や、他の病態のクライアントなど、対象者の幅を広げていくことが必要であると考えている。

LMT はそれ自体、極めて優れた心理アセスメントであり、心理療法の媒体であって、そのみで非常に価値がある存在である。筆者が本研究で提出した「穴」Item を付加するアイディアは、それほど大きなことではない。しかし、臨床的に使用しているうちにそれに大きな広がりや深さがあると感じ、まだまだ研究の余地があると感じさせられている。

たかが穴、されど穴というところであろうか。

【初出一覧】

第 2 章 1

The Thinking Process and Communicating Styles Categories in Rorschach Test (Nagoya University Edition) and Its Clinical Application. XVII International Congress of Rorschach and Projective Methods. 2002

第 2 章 2

境界人格障害者のロールシャッハテスト名大式「思考・言語カテゴリー」による検討. 心理臨床学研究 12 巻 4 号. 1995

第 2 章 3

名大式思考・言語カテゴリーの臨床的適用—ある境界性人格障害者の事例を通して. 心理臨床学研究 19 巻 4 号. 2001

第 3 章

穴のある風景構成法 (LMT-Hole) についての検討—短大生の結果と臨床群への適用. 第33回日本芸術療法学会. 2001

穴のある風景構成法 (LMT-Hole) の創案について. 人間環境大学紀要臨床心理研究第 8 号. 2014

第 4 章 2

父母との葛藤を抱えた摂食障害患者とのかかわり—背景で支えるものとしての LMT-Hole. 日本芸術療法学会第 40 回全国大会. 2008

第 4 章 3

知的障害を持った適応障害患者の描画療法—風景構成法と自由画を用いて. 第 39 回日本日本芸術療法学会大会. 2007

第 5 章 1

ロールシャッハ法と風景構成法の心理療法的バッテリー—子どもを虐待する女性の事例を通して. 人間環境大学紀要臨床心理研究第 4 号. 2010

第 5 章 2

解離症状を示した事例のロールシャッハ反応—名大式「思考・言語カテゴリー」を用いて. 日本ロールシャッハ学会第 8 回大会. 2004

第 5 章 3

慢性患者の描画の変化と常同性—相互なぐり描き法と風景構成法を用いて. 心理臨床学研究 24 巻 5 号. 2006

第 6 章 1

穴のある風景構成法 (LMT-Hole) についての検討 (Ⅱ) —被虐待経験のある女性の心理療法より.
第 34 回日本芸術療法学会大会. 2002

(いずれも加筆修正を行っている)

引用文献

秋谷たつ子 (1984). ロールシャッハ・テストと心理療法との関連—臨床的ならびに理論的観点から—. ロールシャッハ研究. XXVI, 3-11.

秋谷たつ子監修 (1988). ロールシャッハ法を学ぶ. 金剛出版.

安西二郎 (1995). 茶道の心理学. 淡交社.

青木佐奈枝 (2003). 解離性同一性障害者の症状推移とそのロールシャッハ交代人格状態の変容を中心に. ロールシャッハ法研究, 7, 74-88.

青木佐奈枝 (2005). ロールシャッハに見られる解離の諸特徴—長期間にわたる全生活史健忘を呈した 2 事例をもとに. 心理臨床学研究, 23, (2), 137-148.

青木佐奈枝 (2007). 解離性障害者のロールシャッハ特徴—下位障害の特徴. ロールシャッハ研究, 11, 13-23.

青木佐奈枝 (2009). ロールシャッハに見られる心的外傷性の解離. 心理臨床学研究, 27, (2), 129-139.

青木佐奈枝 (2010). 偽解離性障害者のロールシャッハ事例. ロールシャッハ研究, 14, 10-17.

馬場禮子編著 (1997). 【改訂】境界例—ロールシャッハテストと心理療法. 岩崎学術出版社.

馬場禮子 (1997). 心理療法と心理検査. 日本評論社.

Bachelard,G. (1957). La Poétique de l'espace. Press Universitaires de France. 岩村行雄 (訳)
(1969). 空間の詩学. 思潮社.

David Lewis-Williams (2002). The Mind in the Cave, Thames & Hudson Ltd, London. 港千尋 (訳)

- (2012). 洞窟のなかの心. 講談社.
- 土居健郎 (1969). 「見立て」について. 精神医学, 11, (12), 2-3.
- 土居健郎 (1996). 「見立て」の問題性. 特集 精神療法による見立て. 精神療法, 22, (2), 金剛出版, 118-124.
- 江口重幸 (2007). ジャネと解離. 精神科治療学, 22, (4), 415-421.
- Ende, M. (1982). *Das Gauklermärchen*. K.Thienemanns Verlag, Stuttgart. 矢川澄子 (訳) (1984). サーカス物語. 岩波書店.
- Exner, J.E. (1978). *The Rorschach : A Comprehensive System II*. New York : John Wiley.
- Exner, J.E. 1986 *The Rorschach : A Comprehensive System. vol.1* (2nd ed.). New York: John Wiley&Sons. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫 (監訳) (1991). 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上). 金剛出版.
- Ferdinand de Saussure (1949). *Cours de linguistique générale*. 小林英夫 (訳) 一般言語学講義 (改版) (1972). 岩波書店.
- Finn, E.S. (2007). *In Our Clients' Shoes — Theory and Techniques of Therapeutic Assessment*. Psychology Press, Taylor & Francis Group.
- 後藤佳珠 (1984). 風景構成法 (中井、1970 年) と「イメージ造形技法」を主とする心理療法過程への適用. 山中康裕 (編). 中井久夫著作集別巻 1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 189-223.
- Gribbin, J. (1984). *Search of Schrodinger's Cat* Murray Pollinger, London: Tuttle-Mori Agency. 坂本憲一・山崎和夫 (訳) (1989). シュレジンガーの猫 (下). 地人書館.
- 長谷川裕美子・庄野伸幸 (1995). ロールシャッハ・テストと心理療法の対照—抑うつ状態の 1 症例から—. 特集: うつ病及びその周辺領域. ロールシャッハ研究, 37, 41-54.
- 東田直樹 (2010). 続・自閉症の僕が飛びはねる理由. エスコアール出版部.
- 弘田洋二・三船直子・原志津・岩堂美智子 (1990). 「風景構成法」に関する研究 (その 2) —ロールシャッハテストとの関連—. 大阪市立大学生生活科学部紀要, 38, 181-189.
- Holt, R.R. & Havael, J. (1960). A method for assessing primary and secondary process in the

Rorschach. In Rickers-Ovsiankina, M.A. (Ed.), Rorschach Psychology. New York : John Wiley, 263-315.

堀内（杉村）和美・星野和実・森田美弥子・池田博和・吉井賢治・城野（高橋）靖恵・石川雅健（1991）．自己愛人格障害のロールシャッハ反応．日本心理臨床学会第 10 回大会発表論文集，344-345．

星野和実・長野郁也・高橋昇・森田美弥子・城野（高橋）靖恵・杉村和美（1995）．名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討（Ⅲ）．大学生を対象として．日本心理臨床学会第 14 回大会発表論文集，374-375．

福岡伸一（2009）．動的平衡－生命はなぜそこに宿るのか－．木楽舎．

市橋秀夫（1984）．他技法との比較．中井久夫著作集 別巻 1 H・NAKAI 風景構成法．岩崎学術出版社，139-161．

池畑雅行（2001）．ロールシャッハテストと風景構成法による性格分析の整合性についての実証－二つの投影法の共通度合いについて．日本性格心理学会大会発表論文集，10，52-53．

井上昌子（1984）．ロールシャッハ・テストからロールシャッハ面接へ．ロールシャッハ研究，X X VI，13-26．

石上文正（2008）．「窪地」について．「こころとことば」人間環境大学人間環境学部紀要 21，（7），1-25．

石上文正（2009）．宮崎アニメに見る「窪地」の意味．「こころとことば」人間環境大学人間環境学部紀要 22，（8），1-26．

石川九楊（1994）．書とはどういう芸術か．中公新書．

石川九楊（2005）．書－筆蝕の宇宙を読み解く．中央公論新社．

伊集院清一・中井久夫（1998）．＜第三部＞画像表現による診断．3．風景構成法－その未来と方向性．臨床精神医学，17，（6），957-968

Janet, P. (1910). Les Névroses. Paris: Ernest Flammarion. 高橋徹（訳）（1974）．神経症．医学書院．

Jung,C.G. (1963). Memories,Dreams,Reflections. Recorded and Edited by Aniela Jaffe. Pantheon

Books,Newyork. ヤッフエ（編）河合隼雄・藤縄昭・出井淑子（訳）（1972）. ユング自伝 1
みすず書房.

Jung,C.G. (1968). Analytical psychology : Its Theory and Practice. Routledge & Kegan Paul,Ltd.,
London. 小川捷之（訳）（1976）. ユング 分析心理学. みすず書房.

柏葉幸子（2006）. 地下室からのふしぎな旅. 講談社青い鳥文庫.

角野善宏（2004）. 描画療法から見たところの世界－統合失調症の事例を中心に. 日本評論社.

皆藤章（1994）. 風景構成法－その基礎と実践. 誠信書房.

皆藤章（1996）. 心理療法と風景構成法. 山中康裕（編）. 風景構成法その後の発展. 岩崎
学術出版社, 45-64.

皆藤章（1998）. 風景構成法から見た心理療法過程－事例を中心に. 芸術療法, 19,
15-21.

皆藤章（2002）. 風景構成法の実践. 皆藤章・川寄克哲（編）. 風景構成法の事例と展開－
心理臨床の体験知. 誠信書房, 1-16.

皆藤章（2004）. 風景構成法の＜方法＞に向けて. 皆藤章（編）風景構成法のときと語り
13-24, 誠信書房.

加賀野井秀一（2004）. 知の教科書 ソシユール. 講談社.

片口安史（1961）. 臨床精神医学におけるロールシャッハ法の適用について. 精神衛生研
究, 9, 1-23.

加藤大樹・原口友和・森田美弥子（2008）. 芸術療法の諸技法における体験過程に関する
研究－コラージュ技法・風景構成法・ブロック技法の比較－. 日本芸術療法学会誌, 39
51-59.

河合隼雄（1967）. ユング心理学入門. 培風館.

河合隼雄（1969）. 臨床場面におけるロールシャッハ法. 岩崎学術出版社.

河合隼雄（1976）. 影の現象学. 思索社.

河合隼雄（1982）．昔話と日本人の心．岩波書店．

河合隼雄（1984）．風景構成法について．山中康裕（編）．中井久夫著作集別巻1　H・NAKAI
風景構成法．岩崎学術出版社，245-259．

Kernberg, O. (1976)．Object Relations Theory and Clinical Psychoanalysis. New York: Jason Aronson.
前田重治（監訳）（1983）．対象関係論とその臨床．岩崎学術出版社．

菊池清美（2004）．ある解離性同一性障害女性の人格統合のプロセス—心理面接経過と3
回のロールシャッハ・テスト．心理臨床学研究，21，（6），553-562．

木村宏之（2007）．解離性障害の精神療法．精神科治療学，22，（3），星和書店，9-15．

岸本寛史（2005）．「バウムテスト第三版」におけるコッホの精神．山中康裕・皆藤章・角
野善宏（編）．京大心理臨床シリーズ1　バウムの心理臨床．創元社．

北川太一（1999）．高村光太郎　書の深淵．二玄社．

Klopfer, B. & Spiegelman, M. (1953)．Differential Diagnosis. In Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G., & Holt, R.R., (Eds.). Developments in the Rorschach Technique, volume II. Fields of Application Harcourt Brace. Jovanovich, Publishers.

Koch, C. (1952)．The Tree Test—The Tree-Drawing Test as an aid in psychodiagnosis. Verlag Hans Huber, Bern. 林勝造・国吉正一・一谷壇（訳）（1970）．バウム・テスト—樹木画による人格診断法．日本文化科学社．

Lerner, P.M. (1991)．Psychoanalytic Theory and the Rorschach. New York : The Analytic Press.

Leaner, P. (1998)．Psychoanalytic Perspectives on the Rorschach. Analytic Press, Inc. Hillsdale, New Jersey, U.S.A. 溝口純二・菊池道子（監訳）（2003）．ロールシャッハ法と精神分析的視点（下）臨床研究編．金剛出版．

増井起代子・上別府圭子（2010）．7．治療的検査（バウムテスト・HTP・家族画・風景構成法・スクリブルとスクィグル・箱庭療法）．臨床精神医学，39，483-492．

松井華子（2009）．風景構成法における彩色過程．現代のエスプリ　風景構成法の臨床．ぎょうせい，120-128．

松岡正剛・茂木健一郎（2007）．脳と日本人．文藝春秋社．

松岡正剛 (2009). 侘び・数寄・余白ーアートにひそむ負の想像力. 春秋社.

松瀬喜治 (1990). ロールシャッハ・テストの治療的適用についての一考察ー抑うつ感・劣等感・強迫症状を主訴とする男子大学生の心理治療を通してーロールシャッハ研究 32, 1-20.

宮本忠雄 (1974). 太陽と分裂病ームンクの太陽壁画によせて. 木村敏(編). 分裂病の精神病理 3. 東京大学出版会, 233-263.

森田美弥子・長野郁也・杉村和美・高橋靖恵・高橋昇・中原睦美・星野和実 (1996). 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討 (IV)ー反応の限定づけ・修飾のあり方に着目して. 日本心理臨床学会第 15 回大会発表論文集, 68-69.

森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・中原睦美 (2010). 実践ロールシャッハ法ー思考・言語カテゴリーの臨床的適用. ナカニシヤ出版.

村瀬孝夫 (1970). 1 被検者が自己解釈を行なった一症例ー診断的解釈と共感的理解の統合についての一考察. 片口安史・星野命・岡部祥平 (編). ロールシャッハ法による事例研究. 誠信書房, 101-119.

長野郁也・森田美弥子・高橋靖恵・高橋昇・杉村和美・中原睦美・星野和実 (1997). 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討 (V). 作話・恣意的反応の再検討. 日本心理臨床学会第 16 回大会発表論文集, 218-219.

長坂五郎・松岡昭子 (1955). 精神分裂病におけるロールシャッハ・テストの pathological thinking について. 日本心理学会第 19 回大会発表論文集, 107.

名古屋ロールシャッハ研究会 (2011). ロールシャッハ法解説ー名古屋大学式技法ー 2011 改訂版. (発行所)名古屋ロールシャッハ研究会.

中原睦美・高橋昇・長野郁也・杉村和美・高橋靖恵・森田美弥子 (1997). 名大式ロールシャッハ技法における思考・言語カテゴリーの臨床的適用ーコミュニケーションスタイルの検討. 日本ロールシャッハ学会第 1 回大会抄録集. 22-23.

中井久夫 (1971). 描画をとおしてみた精神障害者ーとくに精神分裂病者における心理的空間の構造. 芸術療法, 3, 37-51.

中井久夫 (1976). “芸術療法”の有益性と要注意点. 芸術療法, 7, 55-61.

中井久夫 (1977). ウィニコットの squiggle. 芸術療法, 8, 129-130.

- 中井久夫 (1984). 風景構成法と私. 山中康裕 (編). 風景構成法. 岩崎学術出版社, 261-271.
- 中井久夫 (1984). 描画をとおしてみた精神障害者—とくに精神分裂病者における心理的空間の構造. 中井久夫著作集 精神医学の経験 1 巻, 分裂病. 岩崎学術出版社, 47-82.
- 中井久夫 (1990). 構成と投影とそれ以外のもの. 家族描画研究会 (編). 臨床描画研究 Annex2 —私の表現病理学—. 金剛出版, 38-51. <投影「と」の下に \rightarrow の記号が入る>
- 中井久夫 (1996). 風景構成法. 山中康裕 (編). 風景構成法その後の発展. 岩崎学術出版社, 3-26.
- 中井久夫 (2004). 徴候・記憶・外傷. みすず書房.
- 中村紀子 (2010). ロールシャッハ・テスト講義〈1〉基礎篇. 金剛出版.
- 中里均 (1984). 急性分裂病状態の寛解過程における風景構成法の縦断的考察. 中井久夫著作集 別巻 1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 225-224.
- 能登路雅子 (1990). ディズニーランドという聖地. 岩波新書.
- 岡野憲一郎 (2007). 解離性障害—多重人格の理解と治療. 岩崎学術出版社.
- Patnum, F.W. (1997). Dissociation in Children and Adolescents -A Developmental Perspective. The Guilford Press. 中井久夫 (訳) (2001). 解離—青年期における病理と治療. みすず書房.
- Rapaport,D. et al. (1945 ~ 1946). Diagnostic Psychological Testing.2vols.5th ed. Chicago. The Year Book Publishers.
- Rapaport,D.,Gill,M.M.,& Schafer,R. (1968). Diagnostic Psychological Testing. (revised ed.) NewYork, International Universities Press.
- Rubin,J.A. (1987). Approaches to Art Therapy : Theory and Technique. Mark Paterson and Associates, Wivenhoe, Essex, U.K. 徳田良仁 (監訳) (2001). 芸術療法の理論と技法. 誠信書房.
- 佐伯喜和子 (1984). ロールシャッハテストと精神療法の照合について. ロールシャッハ研究, XXVI, 27-38.
- 斎藤環 (2004). 解離のポップ・スキル. 勁草書房.

Salvador Dali (1961). The Secret Life of Salvador Dali. translated by Haakon M. Chevalier . The Dial Press. 足立康 (訳), 滝口修造 (監修) (1981). わが秘められた生涯. 新潮社.

佐々木裕子 (2006). 投影法バッテリーによる治療効果のアセスメントーロールシャッハ法とハンドテストによるテストバッテリーー. ロールシャッハ法研究, 13, 1-9.

佐々木玲仁 (2006). 風景構成法研究の文献展望. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 52, 187-199.

Schachtel,E.G. (1966). Experiencial Foundations of Rorschach's Test. 空井健三・上芝功博(共訳) (1975). ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房.

城野 (高橋) 靖恵・長野郁也・森田美弥子・高橋 昇・杉村和美・星野和実 (1993). 名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討 (II): 外来分裂病者の特徴. 日本心理臨床学会第 12 回大会発表論文集, 294-295.

Singer,M. T.& Larson, D.G. (1981). Borderline personality and the Rorschach test. Archives of General Psychiatry, 38, 693-698.

白川静 (2005). 新訂 字訓. 平凡社.

杉浦京子・金丸隆太 (2012). 投映描画法テストバッテリーー星と波描画テスト・ワルテック描画テスト・バウムテスト. 川島書店.

杉山崇 (2012). 抑うつ心理臨床に向けたロールシャッハ法、TAT、SCT と各種質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察. 山梨英和大学紀要, 6, 19-39.

高江洲義英・大森健一 (1984). 風景と分裂病心性ー風景構成法の空間的検討. 中井久夫 著作集別巻 1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 119-137.

高江州義英 (2003). 高橋昇口頭発表「一見 poor な描画の「味わい」についてー慢性患者の相互 scribble 法と LMT-Hole ー」におけるコメント. 日本芸術療法学会第 35 回大会.

高橋昇 (1982). 共にありたいと願う心ーデイ・ケアへの取り組みを通して. 村上英治 (編). 心理臨床家. 誠信書房, 201-224.

高橋昇・城野 (高橋) 靖恵・森田美弥子・長野拓也・堀内 (杉村) 和美 (1992). 境界人格障害者のロールシャッハテストー名大式感情・思考言語カテゴリーによる検討. 日本心理臨床学会第 11 回大会発表論文集, 472-473.

- 高橋昇・城野（高橋）靖恵・杉村和美・星野和実・森田美弥子・長野郁也（1995）．境界人格障害者のロールシャッハテスト：名大式「思考・言語カテゴリー」による検討，心理臨床学研究，12，（4），368-377.
- 高橋昇・森田美弥子・杉村和美・高橋靖恵・長野郁也・中原睦美（1998）．名大式ロールシャッハ法における思考・言語カテゴリーの検討（VI）：境界例の特徴と心理療法上での現れをめぐって．日本心理臨床学会第17回大会発表論文集，256-257.
- 高橋昇（2000）．病院臨床-5 デイケア．氏原寛・成田善弘（共編）．臨床心理学③コミュニティ心理学とコンサルテーション・リエゾン．培風館，144-153.
- 高橋昇（2006）．慢性患者の描画の変化と常同性－相互なぐり描き法と風景構成法を用いて－．心理臨床学研究，24，（5），525-536.
- 高橋靖恵（2012）．コンセンサスロールシャッハ法．金子書房．
- 田嶋誠一（2003）．特集 臨床の知恵（工夫）が生まれるとき 臨床の知恵（工夫）が生まれるとき－総論と綿費の臨床実践．臨床心理学，3，（5），金剛出版，601-614.
- 高石恭子（1996）．風景構成法における構成型の検討－自我発達との関連から．山中康裕（編）．風景構成法その後の発展．岩崎学術出版社，239-264.
- 高桑洋介（2005）．風景構成法とロールシャッハ法との関連－「羅列型」を示した3事例の検討から－．ロールシャッハ研究，9，38-47.
- 滝川一広（1984）．日常臨床の中の「風景構成法」．山中康裕編 中井久夫著作集別巻1 H.NAKAI 風景構成法．岩崎学術出版社，37-72.
- 田中みどり（2003）．語りを回復させる描画．臨床描画研究，18，80-95.
- 田中慶江（2013）．心理臨床におけるまなざし体験の生成．日本評論社．
- 寺沢英理子（2010）．絵画療法の実践－事例を通してみる橋渡し機能．遠見書房．
- Thorn, K.S. (1994)．Black Holes and Time Warps. c/o Harold Ober Associates Inc., New York.
- 林一・塚原周信訳（1997）．ブラックホールと時空の歪み．白揚社．
- 植元行男（1974）．ロールシャッハテストを媒介として、思考、言語表現、反応態度をとらえる分析枠の考察とその精神病理研究上の意義．ロールシャッハ研究，X V・X VI，281-343.

上芝功博(1995). ロールシャッハ法からみた多重人格. 精神療法, 21, (6), 533-540.

牛島定信 (1991). 境界例の臨床. 金剛出版.

内海健 (2012). 解離性障害の背景. 柴山雅俊 (編). 解離の病理－自己・世界・時代. 岩崎学術出版社, 93-118.

渡邊俊之 (2007). なぜフロイトは解離ではなく転換を選んだか. 精神科治療学, 22, (4), 409-413.

渡辺雄三 (1995). ロールシャッハ法解釈(4)解釈. 池田豊應 (編). 臨床投映法入門. ナカニシヤ出版. 148-164.

渡辺雄三 (2007). 物語として見たロールシャッハ法－内容分析による「シークエンス・アナリシス」－. 人間環境大学附属臨床心理相談室紀要, 1, 3-13.

Watkins,J. G. & Stauffacher,J.C.(1952). An index of pathological thinking in the Rorschach. Journal of Projective Techniques, 16, 276-286.

Winnicott,D.W. (1989). Psycho-Analytic Explorations, London: Karnac books. 牛島定信 (監訳) 倉ひろ子 (訳) (1998). ウィニコット著作集 8 巻 精神分析的探求 3 子どもと青年期の治療相談. 岩崎学術出版社.

やまだようこ (2010). この世とあの世のイメージ描画のフォーク心理学. 新曜社.

山中康裕 (1984). 「風景構成法」事始め: 山中康裕 (編). 中井久夫著作集別巻 1 H・NAKAI 風景構成法. 岩崎学術出版社, 1-36.

山中康裕 (1993). 精神科医から望まれる臨床心理士. 特集 臨床心理士と精神科医の協調を探る. 精神療法, 25, (1), 417-421.

山中康裕 (1996). 風景構成法に関する二、三の興味ある知見. 山中康裕 (編). 風景構成法 その後の発展. 岩崎学術出版社, 333-346.

山中康裕 (1999). 心理臨床と表現療法. 金剛出版.

山中康裕 (2002). 高橋昇口頭発表「穴のある風景構成法 (LMT-HOLE) についての検討 (Ⅱ)－被虐待経験のある女性の心理療法より」におけるコメント 日本芸術療法学会第 34 回大会.

山中康裕（2003）．表現療法．ミネルヴァ書房．

山中康裕（2003）．特集 臨床の知恵（工夫）が生まれるとき「MSSM+C 法」の誕生まで．
臨床心理学，3，（5），金剛出版．627-630．

付記

筆者が学部を卒業して精神科の病院に飛び込み、はや 35 年が過ぎた。統合失調症者の世界に魅せられ、心の深層の不思議さに引き寄せられた。本研究において健常群の 1 人が LMT-Hole で描いた、「不思議そうに穴を覗き込む」少年の姿がそれにかぶってくる。当時折しも臨床心理士の国家資格化が叫ばれ、筆者らも真剣に議論した。そこでは臨床心理士の資格は大学院修士卒業が必要であるとの意見が多く、筆者ももう一度大学院に戻った方が良いかと考えて、恩師で名古屋大学教授であった故村上英治先生に相談に行ったものであった。すると、村上先生は「今君が大学に戻っても、得るものは何もないよ」と言われた。筆者は結局 26 年間、精神科と心療内科で常勤臨床心理士として働き、その間さまざまなことがあった。

大学卒業後 35 年が経ち、再び名古屋大学の門をくぐり、博士後期課程に入学して学位論文を執筆することになったことは感慨深いものがある。まず、公私ともに数々の恩があり、私を心理臨床の道に導いて頂いた村上先生の御霊前に報告し、深い感謝を申し上げたい。私は先生の間くさいところが大好きだったし、人と人とのかわり合いは十全にという教えは私の臨床の原点である。

精神科臨床の中でも、最初に就職した南豊田病院の故鈴木和磨院長は、臨床心理士の存在を高く買って下さり、精神科病院に私たちは必要だと感じさせてくれた。次にお世話になった医療法人八事病院では故水谷孝文先生が臨床経験を支えて下さった。現在では水谷浩明先生が理事長として後を継がれ、今またお世話になっている。

筆者はその後九州に赴くことになり、医療法人社団豊永会心のクリニック・飯塚では理事長である豊永武盛先生に豊かな人間性と幅広い臨床について勉強させて頂いた。前院長の山田宗良先生（現こころこころクリニック院長）は筆者が本当に自由に臨床活動をするのを見守って頂き、カウンセラーとして充実した時を過ごさせて頂いた。現院長の豊永武一郎先生も筆者を真に尊重して頂いた方であった。また子どもセンター所長の白石潔先生には、いつも数々の疑問に適切に答えて頂いた。心のクリニック・飯塚の事務長であり、PSW でもある川口直宏事務長とスタッフの方たちは筆者を支えてくれた信頼できる同僚であり、ここでの臨床は周囲に支えられることが私たちの仕事に如何に重要かということを感じさせてくれた。厚く御礼を申し上げたい。

そしてこれまでの年月を通して、病院臨床の先達であり、筆者が大学を卒業した頃からずっと後ろ姿を追っていた人間環境大学の渡辺雄三先生に深謝したい。後を追っていたら同じ大学に在職することになり、今だに自立できないでいることを鑑みれば、少々遅すぎるが、筆者も先生の裾を引っ張ることを止める年頃である。同時期から同じように臨床の先輩であった名古屋大学教授の森田美弥子先生にも公私ともにお世話になっている。本研究のもとになった名大式思考・言語カテゴリー研究と一緒に長年にわたって続けてきた仲間でもあり、筆者にとっては姉貴のような頼れる存在である。今回も論文の副査をお願いし、またお世話になってしまった。いつもありがとうございます。副査をお願いした平石賢二先生は、昔々筆者の勤め先に実習生として来られていたことがあり、今回は私のために労を取って下さって誠に恐縮している。

名大式技法の研究に関しては、もう 20 数年にわたって鹿児島大学の中原睦美先生や広島大学の杉村和美先生にもお世話になっている。その研究グループが筆者の研究上の大きな支えになっていることは間違いない。

臨床の仲間では、八事病院におられる三和啓二先生は筆者が病院に勤め始めた頃からの先輩であり、MY ケース研究会でも今だにお世話になっている。愛知淑徳大学の後藤秀爾先生もその研究会でご一緒させて頂いているが、後藤先生は筆者が大学 3 年生の時に大学院におられ、お世話になっている方々の中では最も年月が長い。病院臨床の中で右も左もわからない筆者に、心理検査やカウンセリングについて教えて頂いた良きスーパーヴァイザーであり、とてもありがたく思っている。

古くからの恩師といえば、名古屋大学名誉教授の田畑治先生は、やはり学部時代からご指導を受けたが、今回は筆者の論文執筆を知って、ご自分から指導を申し出て添削を下された。誠にありがたく恐縮している。奥様の田畑洋子先生も現在私と同じ大学におられ、授業や事例検討会などでお世話になり、勉強させてもらっている。ご夫婦とも円満な方であり、人生の師としても見習いたいと思っている。

人間環境大学では同僚である坪井裕子先生、三後美紀先生、臨床心理相談室のスタッフの先生方には日頃からお世話になっており、米澤由美子先生には文献検索を手伝って頂いた。記して感謝したい。

そして本論を執筆する上で、一番お世話になったのが、筆者の指導教員で主査を務めて下さった名古屋大学の本城秀次先生であり、先生のご指導のお陰でこのような形で論文がまとまったのだと思う。なかなか筆が進まない筆者に、「タイムキーパーになります」と言って頂いたお陰で、わずかばかりの不十分な原稿を毎月先生の研究室に持参することができた。心より御礼申し上げたい。

中でも一番筆者を支え、心理臨床家として鍛え、人生の永きにわたってともにあった多くのクライアントの方々に御礼を申し上げたい。その人たちを支え、苦しみを分かち、一緒に喜べるようにとかかわってきたが、本当は彼らから支えられ、人生の伴侶者として付き添ってもらっていた。本論の完成はもちろん、彼らがいなかったら私の人生は全く違ったものになっていたに違いない。糸賀一雄の“この子らを世の光に”という言葉は、そのままクライアントからの光に筆者自身が照らされていたということである。彼らを対象化して研究としてまとめようとする今回の論文は、筆者が彼らからようやく自立しようとする試みである。本研究への掲載はプライバシーには留意させて頂いているが、その方たちはもちろん、私の脳裏に浮かぶすべてのクライアントの方々に感謝を捧げたい。

最後に家族に深謝したい。剛生、祐人、公紀、3 人の子どもに筆者は“父親”として育てられた。彼らは今や筆者の人生の同僚としてあり、少々偉そうではあるが、信頼できる大人になってきている。彼らの手助けをしていたつもりが、いつの間にか助けられるようになっていく。これからはもっと頼れるかもしれない……。そして、もう長い付き合いであり、これからも長く付き合いたい高橋靖恵氏に深甚の感謝を捧げたい。彼女がいなければ今の私は、やはりない。すでに彼女は筆者の人格に深く入り込み、自我境界が曖昧になっているようである。少し離れてかしこまって言おう。心よりありがとうございます。